

## キリスト教会史 概論

担当 水草修治(日本同盟基督教団小海キリスト教会牧師)

### はじめに

本講は、初代教会から古代と中世の教会史をおもな内容としており、宗教改革から現代については簡潔に概観するにとどめている。宗教改革以降の教会史の詳細については、「宗教改革史」「世界宣教史」「日本基督教史」の講義に期待されたい。

本来教会史はその性格上、ひとりの人が教えるべきなのだが、専門分化された今日、専門家であればあるほど2000年にわたる膨大な教会史を論じることができないという現状である。だが幸い筆者は歴史の専門家でないので、大胆不敵にも、無謀にも、全体を見通したいと願っている。基本的なアウトラインはフスト・ゴンサレス『キリスト教史』上・下によるが、資料はさまざまである。中世のあたりは簡単に入手し読むことのできる資料がないので、実力があっても学問の世界では認められないといわれる Wikipedia によっている部分が多い。

もとより正確でありたく願っているが、それ以上に筆写が願うことは、宣教の最前線に立つ者として必要な、伝道と牧会の実践のために歴史神学的洞察力と伝道者精神を養うことである。

\*毎回持参すべきもの。聖書、H.ベッテンソン『キリスト教文書資料集』(いのちのこ  
とば社)、英語版 Henry Bettenson ,Documents of the Christian Church,Oxford  
University Press,London,1943

### 第1回 序論 教会史とは

1. キリスト教信仰は歴史の事実に根ざしている
2. 歴史観が史料の選択と解釈に影響する
3. 歴史観が歴史をつくる
4. 鏡としての歴史
5. 自分の歴史観を自覚する
6. 聖書的歴史観を目指して

## 第一部 古代教会史

### <古代教会>——古カトリック教会前期

#### I. 時満ちて

1. ローマ帝国による政治的統一と福音宣教
2. ディアスポラのユダヤ教と七十人訳聖書 (LXX)
3. ユダヤ主義
4. 異教 (混合宗教 シンクレティズム)

5. 皇帝礼拝

## 第2回 II. エルサレム教会の営みと組織化とその衰退

1. エルサレム教会の誕生
2. 教会の組織化
3. 初代エルサレム教会の信徒たちの信仰生活と、衰退

### III. 異邦人教会誕生とその担い手

1. 世界宣教命令
2. エルサレム教会の弾圧と宣教の拡大
3. エルサレム会議 49AD

## 第3回 IV. 1世紀の迫害

1. 教会と国家の問題
2. 最初の迫害

### V. 2世紀から3世紀前半の迫害

1. 五賢帝の時代・・・・・・組織的迫害へ
2. トラヤヌス帝による迫害
3. マルクス・アウレリウス帝(161年-180年)による迫害
4. 3世紀の迫害①セプティミウス・セウェルス帝の迫害
5. 3世紀の迫害②デキウス帝(249年-251年)による迫害
6. 棄教者とその教会復帰と 教会観——キプリアヌス
7. 「殉教伝」
8. 俗権についての新約聖書の教えのまとめ

## 第4回 VI. 2世紀の護教家たち

1. キリスト教への非難と主な護教家たち
2. エルサレムとアテネの関係——信仰と理性  
ユスティノス「信仰と理性の調和、真の哲学としてのキリスト教」  
タティアノス「真の哲学はキリスト教のみ」

### VII. 反グノーシス教師たち

1. グノーシス主義
2. 牧会者リヨンのエイレナイオス(西)
3. 法学・修辞学者カルタゴのテルトゥリアヌス(西)
4. 哲学者アレクサンドリアのクレメンス(東)
5. 哲学者アレクサンドリアのオリゲネス(東)

### VIII. 異端と信条・正典

1. マルキオン主義
2. モンタノス主義

3. 正典と信条と職制の成立

## ＜帝国の教会＞——古カトリック教会後期

### 第5回 IX. 最後の迫害とコンスタンティヌス大帝

1. 最後の大迫害とコンスタンティヌス大帝
2. コンスタンティヌス大帝の回心と統治
3. コンスタンティヌス大帝の影響
4. 平和主義から義戦論へ

### X. 公神学の出現、修道院の始まり

1. エウセビオスの公神学
2. 修道院の始まり
3. 牧会者・神学者たち

### 第6回 XI. 三位一体論論争

1. 三位一体の教理
2. アレイオスとアタナシオス
3. ニカイア公会議

### XII. キリスト論論争

1. 東西の教会
2. カルケドン会議まで
3. 東方のキリスト教

### 第7回

### XIII.. ヒッポのアウグスティヌス

1. 生涯
2. ドナティスト論争・・・教会論
3. ペラギウス論争・・・救済論
4. 『神の国 de civitate Dei』の歴史哲学
5. アウグスティヌスの死とラテン的アフリカの終焉

### 第8回

## 第二部 中世教会史

### 第9回 XIV. 古代の終焉・中世の始まり

1. 西ローマ帝国の滅亡
  - (1) ゲルマン民族の移動
  - (2) 西ローマ帝国の滅亡
  - (3) 西ローマ帝国衰退の気候の寒冷化
2. 中世とは西ヨーロッパの形成期である
  - (1) 中世の見直しとプロテスタント的歴史観

- (2) 中世とはヨーロッパの形成期である
- (3) アンブロシウスと「教会と国家」の伝統
- (4) 古ゲルマン民族の姿

## 第10回 XV. ユスティニアヌス大帝と西方教会

- 1. 帝国の弱体化とローマ総主教(教皇)の活躍——レオ1世
- 2. ユスティニアヌス大帝と東ローマ帝国の歴史的役割
  - (1) ユスティニアヌス大帝
  - (2) 東ローマ帝国の歴史的役割

## XVI. グレゴリウス大教皇とベネディクト修道院

- 1. グレゴリウス大教皇
  - (1) 人物
  - (2) 歴史的状況
  - (3) 半ペラギウス主義と煉獄と免罪符
  - (4) 煉獄の教えと免償状(免罪符)
- 2. ベネディクト修道院とヨーロッパの改宗
  - (1) 背景
  - (2) ベネディクトゥス
  - (3) ベネディクトゥスの戒律
  - (4) イギリス宣教

## 第11回 XVII. イスラムの侵入と聖画像破壊論争

- 1. イスラムとは
- 2. イスラムの進出とヨーロッパ史への影響
  - (1) イスラムの進出のすさまじさ
  - (2) イスラム進出と地中海世界の分裂
- 3. 聖画像破壊論争と西欧の成立
  - (1) 聖画像論争
  - (2) フィリオクエ論争と教会の東西分裂

## XVIII. ヨーロッパの成立と叙任権闘争

- 1. ピピンの寄進
- 2. コンスタンティヌスの寄進状
- 3. 西ローマ帝国の復興
- 4. 叙任権闘争
  - (1) 背景
  - (2) カノッサの屈辱
  - (3) ヴォルムス協約(1122年)とヨーロッパの確立

## 第12回 XIX. 十字軍

1. 十字軍遠征までの経緯
2. 十字軍の実態
3. イスラム側の認識
4. 十字軍の影響

## XX. 異端運動と托鉢修道会

1. 背景
2. 福音の自由説教者とカタリ派・ワルド派
5. 新しい時代に新しい托鉢修道会

## 第13回 XXI. スコラ哲学

1. 概括 12世紀ルネサンス・普遍論争
2. カンタベリーのアンセルムス・・・知解を求める信仰
3. アベラール・・・・・・・・・・最初の近代人
4. サン・ヴィクトールのフーゴ
5. ペトルス・ロンバルドゥス・・・命題集の父
6. トマス・アキナス・・・・・・・・恩寵は自然を破壊せず完成する
7. ボナヴェントゥーラ・・・・・・・・神学と霊性
8. ドゥンス・スコートゥス・・・・・・・・精妙博士
9. ウィリアム・オブ・オッカム・・・唯名論の確立

## 第14回 XXII. 中世の崩壊・教皇庁の捕囚と大分裂

1. 経済的・政治的背景：近代諸国家出現と百年戦争と教権弱体化
2. ペスト大流行 1347-1350AD
  - (1) 交易と農業革命の結果
  - (2) 社会的影響
3. 教皇庁のバビロン捕囚と大分裂——政争の道具と墮した教皇庁
  - (1) アナーニ事件(1302)
  - (2) 事件・・・犠牲者となったテンプル騎士団→その影響と教皇庁の大分裂（シスマ）

## 第三部 宗教改革から現代までの概観

## 第15回 XXIII. 宗教改革の先駆者

1. ドイツ神秘主義
2. ルネサンスの人文主義

3.ウィクリフとフス

第16回 XXIV. 宗教改革の時代——16世紀

1. ルター：聖書のみ、信仰のみ
  - (1) 聖書のみ
  - (2) 信仰のみ
  - (3) 教会観・国家観
  - (4) 改革者の職業召命観

第17回 2. 改革派教会 Soli Deo gloria

- (1) ツヴィングリ、カルヴァン
  - (2) 神の主権を・・・改革派教会の教理的特徴
  - (3) 教会観・国家観
3. アナバプテスト（再洗礼派）——聖く傷なき教会を求めて
  4. イングランドにおける宗教改革

第18回 XXV. 正統主義の時代——17世紀

1. ドイツ：宗教戦争から宗教寛容政策へ
2. フランスで：「荒野の教会」プロテスタント弾圧
3. イギリス：ピューリタン革命と名誉革命<sup>1</sup>
4. ルター派正統主義
5. 改革派正統主義の予定論論争（TULIP論争）
6. 死せる正統主義か黄金時代か？

第19回 XXVI. 啓蒙主義と敬虔主義——18世紀 理性を信じて

1. 啓蒙主義とフランス革命
  - (1) 啓蒙とは何か
  - (2) フランス革命の精神・・・デカルトとルソー
  - (3) 啓蒙主義キリスト教
2. 大陸の敬虔主義運動と米英の信仰覚醒運動と世界宣教
  - (1) シュペーナー、フランケ、ツィンツェンドルフ
  - (2) ジョン・ウェスレー
  - (3) 世界宣教 ウィリアム・ケアリ

XXVII. 進歩の夢と自由主義神学——19世紀 進歩の夢

1. 頭は科学、心は信仰
  - (1) 自由主義神学

---

<sup>1</sup>中央公論社『世界の歴史 8』参照

- (2) 哲学と聖書高等批評
- (3) カント認識論の問題
- (4) 「自由」とは

## 第 20 回 **XXIIX. 近代から現代へ**—————20 世紀 夢破れて

1. 自由主義神学のつまずきと実存主義神学
2. その後のエキュメニズム派
  - (1) 神の死の神学
  - (2) 宗教的多元主義
  - (3) 解放の神学

### **XXIX. 福音派とは**

- (1) エキュメニズム派と区別して
- (2) 福音派の多様性と一致点
- (3) 福音派のルーツ
- (4) 福音派の課題

<付録> 世界教会信条

<注>

## 序論 教会史とは

### 1. キリスト教は歴史の事実に根ざしている

キリスト教は最初から歴史に根ざしている。格別ルカは「歴史家ルカ」と呼ばれる。

#### \*ルカ 1:5

「ユダヤの王ヘロデの時に、アビヤの組の者でザカリヤという祭司がいた。彼の妻はアロンの子孫で、名をエリサベツといった。」

#### \*ルカ 2:1,2

「そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストから出た。これは、クレニオがシリアの総督であったときの最初の住民登録であった。」

#### \*ルカ 3:1-2

「皇帝テベリオの治世の第十五年、ポンテオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの国主、その兄弟ピリポがイツリヤとテラコニテ地方の国主、ルサニヤがアビレネの国主であり、アンナスとカヤパが大祭司であったころ、神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに下った。」

また、マタイ伝はイエスの系図からスタートして、イスラエルの歴史のなかにイエスの

誕生を位置づけている。そして、イエスが誕生した時の記述をヘロデ大王の時代に起ったと告げている。

ちなみに、ヘロデ大王は前 73 生まれ前 37 年から後 4 年まで在位。アウグスト Augustus とは、初代皇帝カイザル・オクタヴィアヌスに元老院が与えた称号。前 63 年生まれ後 14 年に死去。クレニオは前 12 年にローマでコンスルに選ばれ、前 3 年アジア州総督、前 6 年から後 9 年までシリア・キリキヤ州総督を務め、その後ローマに戻り 21 年に死去。みな歴史上の實在の人々である。

皇帝テベリオ (Tibellius) の第 15 年とは紀元後 28-29 年にあたる。ポンテオ・ピラトがユダヤの総督だったのは 26-36 年、ヘロデがガリラヤ・ペレヤの国主だったのは前 4-後 39 年、兄弟ピリポ、ルサニヤ、大祭司アンナスとカヤパ……。という具合に、バプテスマのヨハネの登場について歴史的にはっきりと時と場所を確定することができる。

さらに、ルカは主イエスの働きを継ぐ、聖霊の、教会における働きを「使徒の働き」という歴史的文書に記した。その使徒の働きの末尾は、終結していないことを示す尻切れトンボ的な表現がとられている。使徒 28:30-31「こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」この聖霊の働きとしての教会の歴史は、主の再臨まで続く。

キリスト教が歴史に根ざしているという意味は、時間と空間の中において起った具体的な事実に根ざしているということである。格別、キリスト教の救いというのは、時間と空間のなかに出現したイエス・キリストという生ける神に結びついている。諸宗教は必ずしも歴史に根ざす必要はない。原始仏教においては、必ずしもゴータマ・シッダールタという人物が實在しなかったとしても仏教は意義がある。なぜなら、彼は道を教えたが彼自身が道だったわけではないからだ。ゴータマが死ぬ時に、「自己灯明」と弟子たちに告げた。「自分自身を灯明として、修行せよ」という意味である。教えを实践することそれによって、自分を救うというのが仏教の道である。仏教に於いては、教えた人が誰であろうとかまわない。ただその教えダルマが永遠であればよいのである。

しかし、キリスト教は歴史の中に受肉されたイエス・キリストである。イエス・キリストは「わたしが道であり、真理であり、いのちである」とおっしゃった。キリスト教にあって救う主体はキリストであって、人は救われる側である。したがって、もしイエス・キリストが神話であって歴史の事実でないならば、キリストの救いはありえないのである。ゼウスやアポロンや天照大神といった架空の存在が、あなたを救えないように。

## 2. 歴史観が史料の選択と解釈に影響する

### (1) 史料の選択

「歴史とは事実そのものを記述することだ」というのは、素朴すぎる。歴史記述にあたっては、まず史料の選別が行なわれる。もろもろの文献的史料がある場合、どの史料を重要と考えて選択するかにおいて、すでに歴史家の歴史観が働く。たとえば、マルクス主義

者は経済における諸関係(共同狩猟と食糧採取・封建領主と農奴・資本家と労働者の関係)こそが歴史の発展要因であると考え(下部構造=経済が上部構造=政治・文化・宗教を決定する)ので、経済的関係を記述する資料をおもに採用するというふうに。

## (2) 史料の解釈

次に、採用された史料をどのように解釈するかにおいても、当然、歴史家の哲学・歴史観が働く。その歴史観を裏付けるために好都合な史料を採用し、不都合な史料は無視するということがありがちである。あるいは(あってはならないことだが)、自分の歴史観に都合よいように歴史資料を改竄するということも起こる。

新約聖書聖書の本文批評学におけるテュービンゲン学派の高層批評仮説も、歴史観が史料解釈に影響を及ぼして誤謬を犯した一つの典型である。聖書本文の扱いについては、本来的な学問的手続きとしては第一に低部本文批評で本文を確定し、第二にその本文の解釈をするということである。ところが高層批評においては、それを逆転させてしまう。古代キリスト教の成立にかんするヘーゲル弁証法にのっとった仮説の枠組みがあって、その枠に都合がよいものはパウロの真筆とし、不都合なものは偽作とする。

ヘーゲルの弁証法によれば「一般に有限なものは自己自身のなかで自己と矛盾し、それによって自己を止揚し、反対物に移行する」。「これを<現実の世界の一切の運動、一切の生命、一切の活動の原理>と見なした<sup>2</sup>。彼の体系はこの立場から自然・歴史・精神の全世界が不断の運動・変化・発展のうちにあることを示し、それらの運動・発展の内的な連関を明らかにすることを試みた<sup>3</sup>」。

「ヘーゲル哲学の影響の下、F・C・バウアとテュービンゲン学派は、\*パウロの主要な手紙から\*ペテロに代表されるパレスチナの教会とパウロに率いられた異邦人教会の対立を推論し、大半の新約文書は、対立が和らいだ70年以降の状況を反映していると論じた。特に「使徒の働き」は2世紀半ばの成立とされた。しかし「対立」は誇張であり、福音書や使徒の働きの成立はそれほど遅くないことを、J・B・ライトフットやW・ラムゼイらが立証した。それでも原始教会内の対立や新約文書の傾向性といった見方は今日の批評家の多くに受け継がれている。<sup>4</sup>」

<sup>2</sup> 岩波哲学小事典「弁証法」

<sup>3</sup> 岩波哲学小辞典

<sup>4</sup> 朴愛仙 <http://www.jtw.zaq.ne.jp/cfauk709/nt0111.html>

「ある命題(テーゼ=正)と、それと矛盾する、もしくはそれを否定する反対の命題(アンチテーゼ=反対命題)、そして、それらを本質的に統合した命題(ジンテーゼ=合)の3つである。全てのものは己のうちに矛盾を含んでおり、それによって必然的に己と対立するものを生み出す。生み出したものと生み出されたものは互いに対立しあうが(ここに優劣関係はない)、同時にまさにその対立によって互いに結びついている(相互媒介)。最後には二つが[アウフヘーベン](#)(aufheben, 止揚, 揚棄)される。このアウフヘーベンは「否定の否定」であり、一見すると単なる二重否定すなわち肯定=正のようである。しかしアウフヘーベンにおいては、正のみならず、正に対立していた反もまた保存されているのである。ドイツ語のアウフヘーベンは「捨てる」(否定する)と「持ち上げる」(高める)という、互いに相反する二つの意味をもちあわせている。なおカトリックでは aufheben は上へあげること(例: 聖体の奉挙 Elevation)の意。」

Wikipedia2009.4.8

「1830年代、ドイツ・チュービンゲン学派の研究者たちは新約聖書が3世紀後半に書かれたという説をとらえたが、現代までに発見された最古の写本の断片は125年までさかのぼれる上、95年に書かれたローマのクレメンスの書簡には新約聖書に含まれる10の書物から引用していることで否定された。さらに120年にポリュカルポスは聖書の16の書物から引用している。」<sup>5</sup>。

また、進化論的史観は旧約聖書本文批評に影響した。小原克弘（同志社大学教員）によれば「一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて、一神教の成立をめぐる、主として二つの学説が対峙していた。宗教進化論と原始一神教説である。前者の立場の代表的人物である宗教学者F・M・ミュラーは、自然崇拜→単一神教→多神教→唯一神教といった道筋を考えた。その影響を受けた旧約聖書学者のJ・ウェルハウゼンは唯一神教に至る途上に「拝一神教」という言葉を考案した。宗教進化論的な理解は、用語法や考え方は様々であるが、唯一神教がある種の完成段階に位置づけられている点で共通している。他方、原始一神教説では、A・ラングやW・シュミットらが、人類学的な報告に基づいて、社会が原始的であればあるほど、至高神崇拜が顕著であり、文化の発展と共に、こうした原初状態から多神教へと退行していったという主張を展開した。したがって、この説は見方を変えれば、宗教退化論であるとも言える。」

以上のようなわけで、「どういう歴史観を持つか」という前提が、「どういう歴史を書き上げるか」ということに決定的な枠を提供していることになる。歴史家にとってその前提を自覚することが、大切である。自分が無前提で客観的な歴史を編んでいるなどと思っているのは最悪である。では、歴史は主観でしかないというべきだろうか。歴史には主観的要素がかなり強いが、一定限度の客観性が保たれるのだとして研究するのが今日の一般的な考え方である<sup>6</sup>。

### 3. 歴史観が歴史をつくる

---

<sup>5</sup> リベラルの見解：第2パウロ書簡から区分する基準として、①年代的・時代史的基準(第2パウロ書簡の中に前提された状況がパウロの生存中に収め切れないことなど)、②言語学的基準(第2パウロ書簡の表現方法が明らかに一貫してより古い真性のパウロ書簡の言語と文体から逸れていること)、③神学的基準(神学的内容上の差異がみられ、またほとんど真性のパウロ書簡の言表によっては要約されず、別種の言語で内容も伝達される)がある。そこで、この3つの基準が適用される時、第2パウロ書簡として次のものが挙げられることになる。①牧会書簡(テモテへの手紙Ⅰ、Ⅱ、テトスへの手紙)。エフェソの信徒への手紙。コロサイの信徒への手紙。④テサロニケの信徒への手紙二の真正性もまた論争されている。パウロの真筆とされるのは、テサロニケの信徒への手紙Ⅰ、コリントの信徒への手紙Ⅰ、Ⅱ、フィリピの信徒への手紙、フィレモンへの手紙、ガラテヤの信徒への手紙、ローマの信徒への手紙の7つの手紙が受けとめられ、それに場合によってはコロサイの信徒への手紙とテサロニケの信徒への手紙Ⅱの各手紙が加えられる。これらの文書はすべて、エルサレムの使徒会議(後48年)後の使徒の活動期間に属し、しかも6年から8年の間に順次執筆されたと思われる。木田献一、荒井 献 「現代聖書講座」第2巻聖書学の方法と諸問題 pp.323-347、日本基督教団出版局) 著者 朴憲郁(パクホンウク)

どういう歴史観を持つかということは、その人、その民族や国家の生き方を大きく左右することになる。抽象的な哲学理念が庶民を動かすのは難しいが、歴史観は容易に民族を突き動かす力を持つ。歴史観は扱いによっては危険な物でさえある。権力者はそれをよく知っている。たとえば古事記、日本書紀は大和朝廷の正統性を裏付けるために造られた歴史である。戦前行なわれた「皇国史観」もそうである。皇国史観では古代に朝鮮半島南部に任那という日本領土があったと誇張して教えるが、これは半島侵略を正当化するためである。他方、韓国では任那の扱いを無視するかごく小さくする<sup>6</sup>。戦前教科書で十六世紀末の秀吉の朝鮮侵略（文禄＝壬辰倭乱・慶長の役＝丁酉倭乱）が「朝鮮征伐」と表記されたのも同じ。

古代大和朝廷が記紀編纂において意図したこと、また戦前の国定教科書の意図したことは、「天皇を中心とする神の国」としての日本という概念を国民に刻み込むことである。戦後の家永三郎の[教科書裁判]も歴史をめぐっての戦いであった。また、ここ数年、「新しい歴史教科書を作る会」の歴史教科書の意図も明白。

これは日本の歴史教科書だけに見られる現象でない。韓国国定歴史教科書<sup>7</sup>では古代史において韓王朝の始祖とされる檀君王儉が神の子孫であるという神話が記されている<sup>8</sup>。また、元（モンゴル）軍に動員されて高麗軍が日本を侵略したいわゆる元寇について、これを「日本征伐」と記述している<sup>9</sup>。日本征服計画をフビライに持ちかけたのは趙彝（チョー・イ）という高麗人であり、元寇の主力は高麗軍だった<sup>10</sup>。この戦役で戦場となった対馬と壱岐

<sup>6</sup> <任那と任那日本府>かつての皇国史観においては、記紀の記述をもとに、任那日本府は倭国の属領もしくは貢納国であり、倭国は任那地域に權益（おそらく製鉄の重要な産地があった）を有していたと考えられていた。しかし、1960年代頃から韓国や北朝鮮において従来の日本の歴史観に対する反発が起こり、また日本でも1970年代頃より新たな視点から再検討が行われた結果、記紀に記されているヤマト朝廷の直截的な任那支配は誇張されたものと認識されるようになった。しかし、1983年に慶尚南道の松鶴洞一号墳が前方後円墳であるとして紹介されて以来、朝鮮半島南西部で前方後円墳の発見が相次いでおり（その後の調査により、松鶴洞一号墳は築成時期の異なる3基の円墳が重なり合ったものであり、前方後円墳ではないことが明らかになった）、これまでのところ全羅南道に11基、全羅北道に2基の前方後円墳が確認されている。また朝鮮半島の前方後円墳はいずれも5世紀後半から6世紀中葉という極めて限られた時期に成立したもので、百済の国境沿いに近い伽耶の地のみに存在し、円筒埴輪や南島産貝製品、内部をベンガラで塗った石室といった倭系遺物を伴うことが知られている。そのため、ヤマト王権と関連する集団（倭臣、倭人集団）が伽耶地域において一定の軍事的影響力および経済的利権を有していたことについてはほぼ確実視されるようになった。またヤマト王権による伽耶地域の直截的な支配があったという説も再び現実味を帯びており、ヤマト王権と任那の関係については更なる見直しの必要が迫られ、定説が流動化しているのが実情である。（Wikipedia より）

<sup>7</sup>『韓国国定歴史教科書』明石書店、2000年 [http://members.tripod.com/textbook\\_korea/fr\\_2.htm](http://members.tripod.com/textbook_korea/fr_2.htm)

<sup>8</sup> 「神の息子である桓雄と、熊が変身して人間になった熊女の間にも生まれた檀君王儉はこの土地に最初の国家である古朝鮮をたてた。（中略）トンウクは、わが国の歴史が深く、最初の国家である古朝鮮をたてた檀君王儉が神の孫であると言う事実を、大変誇らしく感じた。」

<sup>9</sup> 「高麗は蒙古との講和以後自主性を著しく損なうに至った。講和後、高麗が最初にうけた試練は日本征伐に動員されたことであった。高麗は、国号を元と変えた蒙古の強要によって日本征伐のための軍隊をはじめ多くの人的・物的資源を徴発された。したがって長い戦乱で国家経済が破綻に直面していた高麗としては、苦痛をより深くなめるようになった。しかし2次にわたる高麗・元連合軍の日本遠征は、台風によってすべて失敗に帰した。」

<sup>10</sup>戦費全額を高麗が負担、軍船900余隻の建造。艦隊の発進基地・兵士約6000人・水夫約6700人・兵糧を提供した（文永の役）。弘安の役の際にも、軍船900隻・兵士1万人・水夫1万5千人・兵糧を提供し、高麗人・金方慶を将とする「東路軍」4万の兵を編成、元によって征服された南宋の残存艦隊によって編

では、「男は殺害、女は集められて手の平に穴を開けられて縄を通され船縁に吊るされた。200人の少年少女が「強制連行」され、高麗王とその妃に献上された<sup>11</sup>。また、ベトナム戦争への参戦については、韓国国定教科書はただ、一言「共産侵略を受けているベトナムを支援するために国軍を派兵した。」と触れるのみである。ベトナムにおける韓国軍の残虐行為については、日本の教科書が南京虐殺にふれないか、ふれてもわずかにすませているのと同様に沈黙している<sup>12</sup>。

どの国でも、国家権力は歴史教育を通して国民の戦意高揚を図るために、自国の歴史の恥部は隠し、栄光のみを記述する傾向がある。そして、国民がどういう歴史観を持つかということが、戦争まで引き起こし、民族の運命を左右することがある。歴史観が歴史をつくることなのである。これを教会に適用すれば、いかなる教会史観を持つかということは、いかなる教会の歴史を形成していくかということに大きな影響がある。

#### 4. 鏡としての歴史

日本の古典文学のうちに「鏡物」と呼ばれるジャンルがある。大鏡、今鏡、水鏡、増鏡といういわゆる四鏡と呼ばれる作品がある。歴史物である。歴史物が鏡物とよばれるのはなぜか？過去の出来事に現代を映して反省し、今日を、明日を生きるための糧とするからである。あまりにも有名なドイツ大統領ヴァイツゼッカーの演説「荒野の40年」のことば。

「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも目を閉ざすことになります。」

だから、鏡はゆがんでいてはいけないし、曇っていてもいけない。

#### 5. 自分の歴史観を自覚する

しばしば「そういう考え方は古いよ」と言って人の意見を一蹴してしまう若者が多い。なぜ「古い」というと、相手を否定できると考えるのであろうか。それは、その人が意識しないでも「進歩史観」に染まっているからである。進歩史観というのは19世紀の西洋に流行した考え方である。「昨日より今日のほうがよりよく、今日より明日の方がよりよい」という価値観であり。それゆえ、古いものは新しいものよりも価値がないと考えるので、「古いよ」といえば、相手を否定し去ることができると思うのである。

しかし、もし「退歩史観」に立てばどうなるであろうか。退歩史観とは「昨日は今日よりもよく、今日は明日よりもよい」という歴史観である。古代は黄金時代であり、その次は銀の時代、青銅の時代・・・という考え方である。ルネサンスはこのような退歩史観であった。ルネサンスとは、古典古代の再生を意味している。ギリシャ・ローマの時代の古典を再生しようというのである。中国古代の歴史観においても、堯舜の時代は理想的な統治が行なわれていたが、段々と悪くなってきたという考え方がある。だから退歩史観によれば復古主義が良いこととなる。このように歴史観をどのように持つかということは、価値観や生き方ときわめて密接な関係がある。

---

成された「江南軍」10万の兵と共に、再び日本へと軍事侵攻した。

<sup>11</sup> <http://haniwa82.hp.infoseek.co.jp/k-textbook/genkou.html> 下條正男『日韓・歴史克服への道』

<sup>12</sup> 韓国のハンギョレ新聞。 <http://www.altasia.org/hangyore/hangyore99278.htm>

そういうわけで、我々がどのような教会史を学び、教会史観を身に付けるかということは、その人の生き方、また牧師となる方たちにとっては教会形成にはなほ大きな影響を及ぼすことになる。また、有名な聖書学者が書いているからといって、その仮説を鵜呑みにすべきではない。歴史観の前提がちがっているかもしれないのである。

日本で小学校以来習ってきた世界史は基本的に啓蒙主義的な歴史観である。古代—中世—近代という基本的三分がその典型。近代を<近世と狭義の近代>として古代—中世—近世—近代としたり、さらに、近代の後に現代を持ってきて五区分することもあるが、基本三分は同じ。これは、古代には光があったが、中世はその光を闇が覆ってしまった。しかし、近代になってもう一度光の時代が来たという。光とは自然的理性のことである。

他に次のようなもろもろの歴史観がある。進歩史観としてはヘーゲルの理想主義的歴史観があり、コントは実証主義の進歩史観を唱え、マルクスは経済的要因を歴史の支配的要素とした唯物主義史観を唱えた。

## 6. 聖書の歴史観を目指して

聖書を神のことばと信じるキリスト者として、私たちが持つべき歴史観というものがあるとすれば、それは聖書の歴史観に他なるまい。では聖書の歴史観とはなんだろうか？

### (1) 歴史は神の主権的摂理の作品である

<歴史とは、神の永遠の聖定の、時間における摂理による展開である>その概要は<創造—墮落—贖い—完成>ということになる。

「神の摂理のわざとは、神の全被造物とそのすべての行動の、最もきよい、賢い、力強い保持と統治である。」(WSC 1 1) 歴史は人格的な神の作品であるからこそ意味がある<sup>13</sup>。だから解釈する甲斐がある。もし知恵ある摂理者がおらず、さまざまな出来事が偶発的に起こっているだけだとすれば、これを解釈することは、ただのゴミの山を著名な芸術家の作品だと思いついて解釈し、意味付けをしようとするくらい無意味なことである。

### (2) 時は螺旋構造をなす

創世記によれば、神は天体の運行によって時を刻むこととされた。

「神は仰せられた。『光る物が天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のためにあれ。また天の大空で光る物となり、地上を照らせ。』そのようになった。」(創世記 1:14-15)

地球の自転一回が一日、地球の公転一回が一年となって、これが繰り返される。聖書の時は異教世界とちがって、一直線であるというのは一面的な見方であって、聖書における時の構造は、創造から終末にいたる一直線という側面と同時に、繰り返すという側面を持っている。すなわち、聖書的な時の構造とは螺旋的なものであるということが出来る。それはレビ記に定められた暦についての記述にも現れている。

レビ記 23 章から 25 章を読むならば、時は循環しつつ前進するというという構造、つま

---

<sup>13</sup> R.J.Rushdoony, The Biblical Philosophy of History の強調点。

り螺旋構造をしていることがわかる。一日は夜が来て朝があったという繰り返しであり、安息日から安息日へと一週間はめぐりつつ、一年が経ち、一年を七回繰り返して安息の年が訪れる。そして安息の年を七回繰り返して、ヨベルの年が訪れる。ヨベルの年を五十年ごとに繰り返し替えしながら、時は創造から終末へと向かって行く。

歴史は繰り返すという側面と、歴史はひたすら創造から最後の審判に向かって突き進んでいるという側面との両方を悟ることが大切である。ときは一直線であるからこそ、一日一日が貴重であり、意味がある。しかし、まったく新しいわけではなく繰り返すからこそ過去を反省をしてやりなおすチャンスがある。

### (3) 歴史は「神の国」と「地の国」の抗争の展開である

聖書に拠れば、神の歴史に対する主権的摂理というのは、決して単純なものではない。神の支配を嫌うサタンの働きがあり、サタンは「この世を支配する者」といわれ、罪に陥った人間は神に反逆して神のみこころに背いている。そして、ヨブ記を見ればわかるように、それは計り知れない神のみこころによって、ある程度許容されており、一見すると義人が苦しみ、悪者が栄えるという状況もある。しかし、サタンと罪人の反抗にもかかわらず、究極的に神はいつさいを統治して、御心を成し遂げられる。かように聖書における神の歴史支配は単純な予定調和ではなく複雑であるから、その解釈は容易ではない。自己の立場を正当化するために、歴史を解釈するならば、ヒトラー政権を擁護した「ドイツキリスト者」と同じ過ちを犯すことになるであろう。

アウグスティヌスは『神の国 de Civitate Dei』において、カインに始まる「地の国」とアベルに始まる「神の国」の対立抗争の展開としての歴史観を描いている。神の国とは神を愛する愛を原理とする国であり、地の国とは自己愛を原理とする国である。現実の歴史は、この両者の抗争の展開である。アウグスティヌスがこのような歴史観を聖書から読み取りえたのは、彼が若い日から悪の問題ないし罪の問題について悩み、善悪二元論のマニ教、新プラトン派の哲学、そして聖書にたどり着いたこと、そして、司牧生活をしたことと関連している。

### (4) 聖書はあらゆる人間、民族を決して美化しないで、罪の現実を直視している。

これは驚くべき特徴である。ダビデ王、ソロモン王といった稀代の英雄さえも。

最近の「新しい教科書をつくる会」の歴史教科書の歴史観はまったくちがう。現在の自分たちの国家にとって、好都合な事実のみを強調し、くさいものにはふたをすべきであるというのが、彼らの歴史観であり、過去の自民族や国家の歴史の汚点を正確に記すことを自虐史観であると非難する。

### (5) 物質的・政治的繁栄は、その時代や王朝にかんする評価の規準とはされていない。

肝心なことは、その繁栄が神からの祝福としてのものなのか、それとも悪魔からのものなのか。たとえばアハブ王は実は政治的には業績があったが、評価されていない。

だから、いわゆる「勝利主義的史観」ではない。ダニエル書 7 章を見ても、軍事帝国の

興亡は悪魔的なものとされている。

それゆえ、たとえばコンスタンティヌス帝の回心とその後のキリスト教の国教化を手放しに評価はしないし、中世ローマ教会の十字軍についても、近代植民地主義の波に乗った世界宣教のありかたについても、安易な評価はすべきでないを考える。

#### (6) 教会史には逆転・皮肉がある

これは丸山忠孝先生がしばしば指摘なさるところ。エルサレム教会に対する迫害が、世界宣教の実行を促したといった例がある。

また「後の者が先になり、先の者があとになる。」ということもしばしば起こる。「キリスト教国」がもっとも悪魔的になるということも起こるのである。教会の歴史には、一見、大いなる成功と見えたことが失敗であり、失敗と見えたことが実は成功であったということがしばしばある。

#### (7) 「教会と国家」という課題

旧新約聖書において、そして2000年にわたる新約の教会史において、教会と世俗権力の問題は常に問題的な問題であった。この視点を落としては、教会史は見えてこないし、教会形成もできない。国家権力の背後には悪魔がいる。

国家に関しては、二つの13章をしっかりと把握することが重要である。

神の僕としての国家観・・・ローマ13章

サタンのしもべとしての帝国観・・・黙示録13章

#### (8) 神の民の祝福と滅亡についての摂理

申命記28章には、神の民イスラエルに対して、契約への服従には祝福が、契約への不服従にはのろいがもたらされることが記されている。呪いとは疫病、旱魃、水枯れ、作物の病虫害そして、異民族の軍事的な侵入である。実際に、イスラエルの歴史を見るならば、神はこの契約に基づいてイスラエルの民を取り扱われたことがわかる。

これがどの程度、新約の時代の歴史、教会の歴史を解釈する上で有効になるかはわからないが、留意しておきたい。

これらの点を意識しながら、教会史を学んでいきたい。

## I. 時満ちて

「しかし、時の満ちるに及んで、神は御子を女から生まれさせ、律法の下に生まれさせて、お遣わしになった。」ガラテヤ4：4(口語訳)

### 1. ローマ帝国による政治的統一

#### a. 初代皇帝アウグストゥス Augustus

イタリア半島チベル河畔のパラチヌスの丘に始まったローマは、やがてイタリア半島を統一し、さらに、カルタゴの制覇していた地中海世界と、かつてアレクサンドロス大王（356-323BC）の作ったヘレニズム世界（マケドニア 146・ギリシャ 146・小アジア 133・シリア 64）を包括し、ローマ帝国は広大な地域を政治的に統一した。

<年譜>

ローマ建国 753BC

共和制成立 509BC

イタリア半島統一 272BC

ポエニ戦争(対カルタゴ)264-146BC(カルタゴ滅亡)・・・以後急速に版図拡大する

第1回三頭政治 BC53：ポンペイウス、クラッスス、カエサル

カエサル暗殺 44BC

第二回三頭政治 43-36BC オクタヴィアヌス、アントニウス、レピドゥス

ローマ帝政開始 27BC

オクタヴィアヌス 27BC-14AD

ティベリウス 14-37

カリグラ 37-41

クラウディウス 41-54

ネロ 54-68

四皇帝

ヴェスパシアヌス

ティトス

ドミティアヌス

ネルヴァ 96-98

トラヤヌス 98-117

ハドリアヌス 117-138

アントニヌス・ピウス 138-161

マルクス・アウレリウス・アントニヌス 161-180

コンモドゥス 180-192

セプティミウス・セウェルス 193-211

カラカラ

主イエスが人としてこの世に生まれた時、帝国を支配していたのは、初代皇帝アウグストゥス。彼は、「木でできたローマを黄金のローマにした」と賞賛される。ローマにはもともと元老院を指導集団とする共和制の伝統があった。その版図がイタリア半島の中にとどまっている間は、共和制はうまく機能した。しかし、ポエニ戦争後、版図が急速に拡大すると、共和制はもはや十分に機能しなくなっていた。

カルタゴはもともと BC9C にフェニキアのティルス市がアフリカ北岸に建設した植民市であり、BC6C から交易で繁栄した。BC4C 本国衰退後は地中海全域を制覇していた。寡頭政治の海上国であった。ローマはカルタゴを亡ぼすことによって、地中海世界を手に入れ

た。

ところが版図が急激に拡大したとき、困難が生じた。「規模の限界」が共和制にはあった。それは効率の悪さ、スピードの遅さである。たとえば辺境で叛乱が起きたとき、そこに派遣軍を出すかどうかを元老院 600 人が議論をしていたのでは、戦線は拡大し手遅れになる。共和制は維持機能に優れているが、スピードが遅く仕事機能が劣っている。

それを見抜いたのはカエサルであった。彼は中央集権化することによって政治のスピードアップを図ったのであるが、それはローマの伝統に反するとした人々によって暗殺されてしまった。ちなみに、三つの政治形態の長短

<維持機能><仕事機能><参加意識>

長老政（共和制、寡頭政治）	☆	△	△
監督制（君主制）	△	☆	○
会衆制（直接民主制）	△	○	☆

カエサルの甥にあたるのがオクタヴィアヌスである。彼はカエサルの志とねらいを熟知していた。ただ、伝統主義者たちを怒らせないで、カエサルの計画を達成したのである。彼は、たいへん巧妙に立ち振る舞い、その功績を元老院に称えられてアウグストゥスの称号を贈られ、さらに初代ローマ皇帝に就任する。塩野七生は彼を「ローマ史上最大の名優」と呼んでいる。「何しろ、この人物は元老院議員たちすべてを満足させつつ、元老院と共和制を否定する帝政を打ち立てるといふ離れ業を成し遂げたのですから」<sup>14</sup>

彼はローマ帝国を拡大路線から、安定路線に転換させた。そのためには「平和」の確立をしなければならない。いわゆる *pax romana* パックス・ロマーナである。オクタヴィアヌスから五賢帝の終わりまでの 200 年間は、それ。

アウグストゥスは平和の確立のために軍隊を整備した。道路網の整備はその一つ。また、アウグストゥスは安定した税制を確立した。ルカ福音書の主イエス降誕の記事に出てくる「住民登録」は、徴税台帳作成のためである。ルカ 2:1-3

「そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストから出た。

これは、クレニオがシリアの総督であったときの最初の住民登録であった。

それで、人々はみな、登録のために、それぞれ自分の町に向かって行った。」

## b. 「すべての道はローマに通ず」

陸路が整備された。<sup>15</sup>ローマの公道の延べキロ数。3 世紀末のディオクレティアヌス帝の時代の者で、総数 372 本。延べキロ数は 85000 キロメートル。現代アメリカとローマの帝国を比較してみよう。

ローマ帝国の最大版図面積は 720 万平方キロ：米国の面積は 936 万平方キロ。

ローマ帝国の公道は 8 万 5 千キロ：米国の公道は 8 万 8 千キロ

つまり、現代米国の 9 分の 7 の面積なのに、道路はほぼ同じ長さである。これらの道路

<sup>14</sup>塩野七生『痛快 ローマ学』集英社 p148

<sup>15</sup>弓削達『ローマはなぜ滅んだか』講談社現代新書 p38-

はほとんどが一義的には軍用に造られたのであり、この軍用道路こそ、ローマが広大な領土を数百年にわたって統一的に支配できた理由の一つである。反乱がどこかでおこれば、ただちにこの軍用道路を通して軍隊が派遣された。武田信玄が棒道を造り、ヒトラーがアウトバーンを整備したのと同じ。ヒトラーはローマ帝国に倣ったといわれる。

陸路ばかりでなく、海路も整備された。ポンペイウスによる地中海の海賊退治によって海路も安全になった。「使徒の働き」にパウロのローマへの航海が記されているが、それを読めば当時の船旅において危険なことはすでに海賊ではなく、嵐であったことを見ることができる。

陸路・海路の整備のおかげで古代のキリスト教徒たちは旅行することができた。パウロが行く前にすでにローマには福音が伝わり、キリストの教会が始まっていることがわかる（ローマ1章）。誰が「異邦人への使徒」パウロが行く前に福音をローマに伝えていたのであろうか？キリストの福音は旅の商人や奴隷その他の一般信徒によってはるかに速やかに広く伝わったのである。ここには、世界宣教のかぎのひとつがある。新約時代の特徴の一つはすべての信徒にキリストの証人たるべく聖霊が注がれるということである。使徒 1:8

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

使徒 2:16-18

「これは、預言者ヨエルによって語られた事です。

『神は言われる。

終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。

すると、あなたがたの息子や娘は預言し、

青年は幻を見、

老人は夢を見る。

その日、わたしのしもべにも、はしためにも、

わたしの霊を注ぐ。

すると、彼らは預言する。」

## 2. ディアスポラのユダヤ教とLXX聖書

ペルシャ、メソポタミア、エジプトには多数のユダヤ人が在住し、エジプトではBC7C、5Cにはユダヤ教の神殿まで建設されている。イエスの時代までには、ローマ帝国内の主要都市にはユダヤ人共同体が出来ていた。

ディアスポラのユダヤ教は、キリスト教がローマ帝国に広がっていくための主要な通路の一つとなった(使徒 13:5, 14, 17:17)。パウロの伝道方法を使徒の働きを見ると、彼はまずその町のユダヤ教の集会に出かけて伝道している。そこにはユダヤ人と回心した異邦人であるがまだ割礼は受けていない「敬虔な人々」がいた。彼らに旧約聖書から、預言されていたメシヤがナザレのイエスとして到来したと論じたのである。

この時用いられていた旧約聖書が 70 人訳聖書 (LXX、Septuagint) である。このユダヤ教は、ヘレニズム世界共通語となっていたコイナーに翻訳された LXX 聖書を提供する。とはいえ、コイナーが通じたのは東方のヘレニズム世界であって、西方はラテン語圏だった。たとえば、ヒッポのアウグスティヌスはギリシャ語が苦手で、ラテン訳の聖書を用いていた。ラテン語圏でギリシャ語が使えるのは教養の高い人々だけだった。

70 人訳聖書と呼ばれるのは 72 人のユダヤ人学者がヘブライ語聖書をそれぞれ別々に訳を完成させて持ち寄ると、それが逐語的に一致していたという伝説による。つまり、神の靈感による翻訳だと言いたいわけ。律法の翻訳が紀元前 3 世紀中ごろで、そのあと百年ほどかけて訳されたという。ではなぜ 72 人訳と叫ぶのかは知らない。

七十人訳には旧新約聖書を一貫した神学を形成する上で意義があった。新約聖書のほとんどの著者は七十人訳を聖書として引用した。古代キリスト教徒たちが教会で用いる用語の多くは七十人訳に由来している。七十人訳は旧約聖書の用語と新約聖書の用語のブリッジをなしている。たとえば、ヘブル語のメシヤが、ギリシャ語のクリストスにあたり、ヘブル語のツァデク・ツァドクはギリシャ語のディカイオー (パウロの「義と認める」は、「義と判決をください」という意味) にあたる (申命 25:1, 箴言 17:5, イザヤ 5:23)。

<http://www.spindleworks.com/septuagint/septuagint.htm> をみよ。

### 3. ユダヤ主義

次に、初代キリスト教会が直面した宗教的問題について、まとめてみよう。

#### (1) 外からの迫害

キリスト教は当初、ローマ帝国からはユダヤ教の一派であるとみなされていたので、ローマ帝国からは迫害を受けることがなかった。当時、ユダヤ教はローマにおける公認宗教の一つとされていて、ユダヤ教徒にはエルサレム神殿への献金の自由、集会の自由、兵役免除など特権が与えられ保護されていた。70 年にユダヤ戦争でエルサレムが破壊されるまで、こうした状況は続いた。

この初代教会時代にキリスト教会を迫害したのは、ローマ帝国政府ではなくユダヤ当局である。使徒の働きには、ユダヤ当局から執拗な迫害を受ける使徒たちの姿が記されている。新約の教会で最初の殉教者ステパノは、ユダヤ教徒によって迫害されたのであって、ローマの手にかかったのではない。パウロも迫害されて殺されかけた。

「ところが、アンテオケとイコニオムからユダヤ人たちが来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した。」 使徒 14:19

むしろ、ローマの方は宣教師パウロを守った。パウロはローマ市民権を活用して、伝道を展開していった。

#### (2) 内憂としてのユダヤ主義の異端

一つはユダヤ主義の問題である。ガラテヤ書、使徒 15 章のエルサレム会議に取り上げ

られている。ユダヤ主義的キリスト教というのは、異邦人キリスト者ももろもろの儀式律法を行なわなければならないというものであった。ガラテヤ教会の人々は、ユダヤ教的律法主義に惑わされてしまった。詳細は他のクラスで。

#### 4. 異教（混合宗教 シンクレティズム）

もう一つはヘレニズム世界におけるシンクレティズムである。これは当時の流行であった。ローマのパンテオン神殿つまりすべての神々の神殿には、諸国の多くの神々が加えられていた。ローマ当局は帝国支配下にある各民族の神々が、異なった名前をしていても究極は同じ神々であると信じさせようとした。本地垂迹説である。

たとえばコリントのアクロポリスに祭られていたのはギリシャの恋愛の女神アフロディテであったが、その礼拝の形態は、シリアの女神アシュタロテつまり旧約聖書のアシュタロテ礼拝のヘレニズム化したかたちであった。その上、コリントのアフロディテには連れ合いがいて、それは海の神メリケルテスである。メリケルテスとは、ツロの町の主神バアルつまりメルカルトの名をギリシャ風に発音したにすぎない。バアル礼拝はBC 9 Cにイゼベルがイスラエルに持ち込んだものである<sup>16</sup>。（FFブルース『初代キリスト教の歴史』）

エジプトのイシスやオシリスの神話、インド・イランからはミトラ神礼拝、また、セム系の大地母神礼拝も流行していた。また、ギリシャからは古代からアテネ周辺で行なわれていた密儀宗教がはやっていた。これらの宗教は混交されていて区別が出来ない。

古代日本で、仏教が取り入れられたとき、本地垂迹説が行なわれたのとも重なる。仏教が興隆した時代に現われた神仏習合思想の一つであって、日本の八百万の神々は、実はさまざまな仏が化身として日本の地に現われた権現であるとする考えである。権とは「仮に」という意味。たとえば天照大御神は大日如来の権現であり、八幡神や熊野権現は阿弥陀如来の権現であり、大国主は大黒天の権現だとされる。現代でも日本では真光や真如苑といった新宗教の教え、幸福の科学など新新宗教、『ダビンチ・コード』にも影を落としているニューエイジの教えは、シンクレティズムである。

こういう世界では、ユダヤ教徒、キリスト教徒は唯一の神にこだわる頑固で、時に社会にとって変わり者であり、有害な連中とされていた。

新約聖書の書簡執筆の背景にも、こうした異教が見られる。たとえば、ヨハネの手紙第一 4 章の背景には、キリストの受肉を否定するグノーシス主義が瞥見される。また、コロサイ 2 : 20 - 23 に見える、人間の好き勝手な礼拝、謙遜、肉体の苦行をとまなう「この世の幼稚な教え」というのもギリシャ・オリエント的背景をもつ異教主義を意味している。

<資料>

「シリア女神の祭り                      アプレイウス『変身の物語』 8 : 27 (原典新約時代史所収)

彼らは自分たちの腕を肩のところまで剥き出しにして、手には大きな剣や己を振り上げ、笛のかなでる調べに駆り立てられて、狂ったようにわめきながら踊っていくのでした。

<sup>16</sup> FFブルース『初代キリスト教の歴史』 pp10,11

こうして、私たちはかなり多くの家々を過ぎて来ましたが、たまたまとある裕福な資産家の屋敷にやってきました。そして、その屋敷に一步足を踏み入れるやいなや、すぐさま彼らは調子はずれな叫び声を挙げて、狂ったように飛び回り始めましたが、やがて頭をうなだれ、目もくらむような速さで首をねじ回し、その動きで垂れ下がった髪の毛を輪のようにして振り回しながら、幾度もおのがからだにまで噛み付くのでした。ついには、身に帯びていた諸刃の鉄具で思い思いに腕を切りつけ始めました。その間に、かれらのうちで最も激しく狂いまわっていたひとりが、心の奥底から息も絶え絶えに何度もあえぎながら、あたかも神霊で魂がいっぱい満たされたかのごとくに、陶酔して錯乱状態に陥りました。その様子はいかにも、神々の臨在することで、人間は元来の状態よりも良くされるのではなくて、むしろ虚弱なあるいはやめるものにされるのが常であるかのようでした。(中略)

彼らが剣で切ったり、鞭で打ったりしたため、これらの女じみた男たちの流す血で地面が汚くぬれたありさまをみなさんも想像することができるでしょう。……するとこれを見ていた人たちは先を競って、銅貨を、いやそればかりか銀貨をさえもおふせとして提供したのです。彼らはそれを大きく開いた懐の中に受け取りました。(後略)

## 5. 皇帝礼拝 Imperial Cult, Emperor worship

古代教会が直面しなければならなかったもう一つの異教は、皇帝礼拝である。ヘレニズム諸国で行なわれていた君主礼拝の影響がローマ帝国に取り入れられ、利用された者であるから、これも一種のシンクレティズムといえよう。「支配者(王)は神なりという東方思想と、ギリシャの人間神化の思想とが、アレクサンドロス礼拝において結合し、これらローマに至って皇帝礼拝の形をとった。」(大事典)

初代皇帝アウグストゥスは生前すでに東方属州では神的礼拝の対象とされたが、共和制の伝統あるローマの西方では受け入れられない。しかし、その死後、元老院がその神格化を宣言し、西方にもアウグストゥス礼拝が広がる。以後、皇帝はみな神格化される。

しかし、この問題は、教会と国家にかかわることであり、コンスタンティヌス帝の回心にいたるまで延々と続くテーマなので、これから徐々に詳しく学ぶであろう。ここでは、ただ新約聖書に若干見える皇帝礼拝にかかわる本文を紹介しておこう。

さて、ピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々は人の子をだれだと言っていますか。」彼らは言った。「バプテスマのヨハネだと言う人もあり、エリヤだと言う人もあります。またほかの人たちはエレミヤだとか、また預言者のひとりだとも言っています。」イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」**マタイ 16:13-16**

「ギリシャ時代のパネアス、現在のシリアのパニアスである。古くからギリシャの森や牧童の神パンの祭壇があった。紀元前20年、ヘロデ大王は皇帝アウグストからこの地を拝領し、町を興し、パン神の祭壇の近くに皇帝の像を安置した大理石の神殿を建てて敬意を表した。彼の息子ピリポはこの町を拡張補修し、カイザルに敬意を表して、パネアスをカイ

ザリヤと改めた。これに自分の名を加えてピリポ・カイザリヤとし、父ヘロデ大王がサマリヤに建てたカイザリヤと区別した。この自然崇拜、人間崇拜の場で、イエスはペテロの信仰告白を引き出し、異教の神々と皇帝礼拝に死を宣告する。(後略) (新聖書注解マタイ 増田誉雄)

## II. エルサレム教会の営みと組織化と衰退

### 1. エルサレム教会の誕生

#### (1) 聖霊によって (使徒 1 章)

新約の時代の新しさとはなにか? 旧約の時代からの一貫性と新しさの両方を把握することが大事である。

旧約からの一貫性・・・①創造主を崇める、②贖罪の信仰 (影)、③みことばの重視  
新約の新しさ・・・・①受肉・贖罪の完成 (本体の出現) ②御霊の普遍的注ぎ  
③世界宣教開始

注がれた御霊は子とする御霊であり、宣教の御霊だった。

「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土。および地の果てにまで。」

#### (2) エルサレム教会の営み---教会の必要十分な「しるし」とは?

ペンテコステに誕生したエルサレム教会の営みを確認しておくことは大切なこと。教会の刷新や改革が志されるとき、ここを原点とすることになるからである。

ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、あかしをし、「この曲がった時代から救われなさい。」と言って彼らに勧めた。そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。

そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。

そして、一同の心に恐れが生じ、使徒たちによって、多くの不思議なわざとあかしの奇蹟が行なわれた。(使徒 2:40-43)

<適用>

ところで時代は1500年ほどくだるが、宗教改革において、「真の教会のしるし」ということが課題となった。ローマ教会から結果的にプロテスタント教会という別の群れができてしまった時に、それは「分派の罪」を犯したのではないことを確認しなければならなかったからである。ローマ教会が真の教会でなくなったから、真の教会の復興のためにプロテスタント教会がうまれなければならなかったということを立証しなければならなかった。

改革者たちがそこで見いだした真の教会として最少限備えていなければならないしるし

とは二つ。すなわち、「福音が純粹に教えられ、聖礼典が福音に従って正しく執行されている」ということである（アウグスブルク信仰告白7、第一スイス信条21）。そして、正しい説教と聖礼典が行われるために、正しい戒規の執行がなされなければならないということになる（スコットランド信条18、ベルギー信条29）。そこで福音の説教、聖礼典、戒規ということが三つのしるしと呼ばれる場合もあるが、肝心なことは二つで福音の説教と聖礼典であり、これらが正しくなされるための手段として戒規がある。戒規とは、信徒が礼拝、格別、聖礼典において祝福を得られるためになされる。もし罪を赦されないままで聖餐にあずかるならば、その人はそれによって主のからだと血に対して罪を犯し、かえって呪いを受けることになってしまうから（1コリント11：27－32）。

このように宗教改革において、この二つないし三つのしるしを備えていないならば、教会は真の教会ではないということになった。中世ローマ教会では一般に福音の説教はなされていなかった。聖書は開かれず、会衆にはまるでちんぷんかんぷんのラテン語で礼拝は進められていた。さらに聖書が翻訳されることも、一般信徒に読まれることも禁じられていた。儀式といえはやたらと人為的に増やされていた。人々は魔術的なものとしてミサのパンに与かっていた。こういうわけで、プロテスタントとしては真の教会のしるしを当時のローマ教会は備えていないのだから、我々が新たに別の群れを造ったのは真の教会を復興のためであり、分派の罪にはあたらないと自己確認した。

### （3）さらに使徒時代の原点に帰って――すべての造られたものに福音を

改革者の功績の一つは、こうして教会の中心を明示したことといえよう。我々も教会が何を見失ってはいけないかということ、教会のしるし論から知るべきである。こういうわけで宗教改革の伝統を重視する教会は、これら二点ないし三点に集中して教会形成をしようとしてきた。

しかし、よく考えてみれば福音の説教、聖礼典というのは、それが偽りの教会ではなく真の教会であるためのいわば必要最少限のしるしにすぎない。これらをなしていれば、たしかに偽教会ではないであろうが、それで十分だとはいえない。宗教改革の神学と、そのまとめとしての17世紀の正統主義神学の限界はこのあたりにあろう。

17世紀末になるとドイツではルター派正統主義が宗教的生命に枯渇したことに対する反動として敬虔主義運動が起こる。敬虔主義運動は新しい教派を造りはしなかった。彼らは、真に改心した信徒（今でいうボン・アゲイナー）の集会を教会内に形成し、交わりと祈りをした。そうして教義よりも敬虔な実践が重んじられた。また、敬虔主義の指導者の一人フランケによってルター派として最初の海外伝道も始められる。

海外宣教については、当時プロテスタント正統主義の教会はずっとローマ教会に遅れをとっていた。ローマ教会はヨーロッパでの失地回復の分を取り戻そうとして世界宣教へと乗り出していき、そのなかで日本にもバテレンたちが訪れたが、プロテスタント教会は世界宣教には活躍しなかった。プロテスタント教会が本格的に世界宣教に乗り出すのは、18世紀の末から19世紀になってから。夜は靴修理、昼は学校に学んで説教に励んでいた信徒伝道者ウィリアム・ケアリが未伝道伝道を始めようと提唱したときに、教会の指導者

たちはこれをあざ笑った。しかしケアリの提唱に立ち上がった人々は世界宣教をスタートし、ケアリは最初のインド宣教師となる。信徒伝道運動が近代の世界宣教のもとである。

キリストがこの時代の教会にたくされた最大の任務はこの大宣教命令である。これはマタイ28：18－20、(マルコ16：15)、ルカ24：46－47、使徒1：7、8に記録されている。復活されたキリストが地上を去って父なる神の右にのぼられる直前に語られた最重要の命令が、この大宣教命令である。

真の教会のしるしというばあいには、消極的にほんものの教会は最少限何をそなえていないと教会とはいえないかということが問われたが、我々が目指すのは最少限の教会ではなく、十分に主の負託に答えたいということではないか。

福音を宣べ伝えるということならば、純粹な福音の説教という教会のしるしの一つに含まれているのではないと言われるかもしれないが、実は違う。聖書では、宣教(伝道)と教えとは区別されている。ディダケーとは教えであって、イエスをすでに受け入れた教会内の人々に対して主の弟子として歩む道を教えることである。他方ケーリュグマとは、まだ主の福音を知らない人々すなわち教会外の人々に宣べ伝えること(1コリ2：4、ロマ16：25、マタイ11：1、マルコ1：38など)。だから、福音は口に関連して語られるのではなく、足に関連して語られる。

「良いこのとの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱなことでしょう。」(ローマ10：15)

「足には平和の福音の備えをはきなさい。」(エペソ6：15)

教会堂の説教壇で信者を相手に教えているディダケーだけで、伝道をしたことには実はない。未信者に福音の宣べ伝えてこそケーリュグマを伝えたと言える。

原点に立ち返って、そもそも初代キリスト教会の姿はどうだったか。使徒2：38－42を開こう。彼らは①伝道をし、②バプテスマを授け、③使徒たちの教えを堅く守り、④交わりをし、⑤パンを裂き(聖餐式)、⑥祈りをしていた。つまり、

伝道(ケーリュグマ)、

教え(ディダケー)の実践、

聖礼典、

交わり、

祈り

16世紀の宗教改革は真の教会の最少限としてのディダケーと聖礼典の回復をしたのだが、18－19世紀敬虔主義運動は、そこに欠けていた伝道・みことばの実践・交わり・祈りを回復したのである。

私たちとしては、宗教改革者たちに正しい礼拝という教会の必要最小限を学び、かつ、敬虔主義運動に伝道・みことばの実践・交わり・祈りを学んで、必要十分なるしをもつて主にお仕えする教会を建てあげていきたい。

## 2. 教会の組織化

### (1) 執事の選任 (使徒 6 : 1 -)

ヘレニスタイ(ギリシャ語を話すユダヤ人)とヘブライオイが共存していた。使徒たちはヘブライオイであったが、両者の問題が生じてきたときに、ヘレニスタイから執事を選出したのだった。バランスをとろうとしたのであろう。

このあと、ヘレニスタイの執事ステパノが殉教する。ヘレニスタイは異邦人伝道のための掛け橋となっていくことが、ここに示唆されている。伝道者ピリポもまたヘレニスタイである。ヘブライ語しか話さないような人々は、実際的に異邦人伝道をすることは不可能だった。しかも、彼らは信徒である。

### (2) 使徒 15 章エルサレム会議 (使徒 15 章)

異邦人教会であるアンテオケ教会における異邦人キリスト者にとっての割礼をはじめとする律法遵守義務うんぬんという教理的問題は、アンテオケという一地域教会で解決できる、あるいは解決すべき種類の問題ではないとされて、エルサレム会議に提出され検討された。このことを見るならば、すでに当時の初代キリスト教会にあって、一地域教会にすべての教会政治上の権威が属するという単立主義的な教会運営は取られていなかった。地域教会の上に上級会議が存在していたことがわかる。この一点だけ確認しておきたい。

### (3) 牧会書簡

監督、長老、執事といった職名が出てくるので、教会の組織化が進んでいることに気づく。監督エписコポスと長老プレスビュテロスと同義。前者はギリシャ風の呼び名。後者はユダヤ風の呼び名で内容的には同義である。

今日のリベラルの見解では一般に、これらの書簡は 2 世紀前半のものであり、パウロの真筆ではないとされる<sup>17</sup>。しかし、そのような主張の根拠は、教会組織の確立、異端への警戒、正統的な教えの用語などの強調は、2 世紀前半になってはじめて教会が直面した問題であろうというあいまいな推測にすぎない。リベラルな聖書学者たちは、一般に歴史家が史料にむかうよりはるかに聖書に対して懐疑的である。

F. F. ブルースの見解は、これらの牧会書簡は紀元 63-63 年に使徒パウロによってマケドニアで書かれたものであるということである<sup>18</sup>。95 年に書かれたクレメンスの「コリントのキリスト者への手紙 I」にはテトス書、テモテ書 I の引用がある事実は<sup>19</sup>、著作年代を 2 世紀以降に置くりベラル派の見解を打ち砕くのに十分である。

内容が教会組織の確立、正統的な教えの強調は、初代教会発足 30 年から 40 年も経てば起こってくるのは当然のことと見るべきである。そもそもエルサレム教会で初日に三千人ほどが洗礼を受け、日々新しく救われる人々が加えられたことを考えれば、組織が確立していなければ、到底これを治めることなどできはしない。教会がわずか 50 人になっても、

<sup>17</sup> 新教出版社『聖書辞典』

<sup>18</sup> F. F. ブルース『新約聖書は信頼できるか』 p 20

<sup>19</sup> クレメンスのコリント書 I 59:3,61:1

そこには組織化が必要である。しかも、66年ころになれば福音はすでに地中海世界に広がっており、各地に集会が生まれていたのであるから、組織化は必然であった。

また、異端に警戒し、正統的な教えが強調されるのも当然のことである。たとえば、現在、中国家の教会が直面している深刻な問題の一つは異端問題である。中国古来の諸宗教と混じってさまざまな異端が生じており、危急の課題は正統的な神学教育なのである。家の教会の急激な成長がはじまって、わずか30年内外であると思われる。このことを鑑みても、2世紀半ばまで異端問題に教会が困ったはずがないなどというリベラルな見解は、教会の歴史の現実をわきまえない愚かな議論である。リベラルの誤謬論には、19世紀前半のテュービンゲン学派のヘーゲル弁証法を前提とした古代キリスト教成立の枠が実はまだ影響していて、根拠もなく新約聖書の性質を遅らせようとする傾向が残っているのである。

組織化の目的は、正しい教理をいかに継承し、伝えるかということのために必須のことであった。正しい教理を伝える資格ある者の認定が必要となったのである。

「4:11 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。

4:12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、

4:13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

4:14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、

4:15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。」(エペソ4：11-15)

### 3. 初代エルサレム教会の信徒たちの信仰生活と衰退

初代教会の信徒たちは、自分たちは新しい宗教の信徒となったという意識をもっていなかった。彼らは安息日には神殿礼拝に行き、それに加えて主の復活を記念して週の第一日にも集いを持っていた。彼らはユダヤ人であり、旧約の成就として今の時代があるという認識で一致していた。

しかし、イエスをキリストと信じるものたちに対するユダヤ当局の迫害が激しくなってくると、彼らはもはやユダヤ教の会堂・神殿から出るようになっていく。ヘロデ・アグリッパは、ヨハネの兄弟ヤコブ(エルサレム教会の指導者、主の兄弟ヤコブとは別人)の処刑した。またペテロも逮捕されたが、主の使いによって救出された。62 ADには主の兄弟ヤコブが大祭司の命令で処刑される。迫害が激しくなり、エルサレム教会の指導者たちは、ヨルダンの向こうの町ペラに移住した。その直後、66年にイスラエルはローマ帝国に対して反乱を起こし、70年にエルサレムはローマ帝国軍に滅ぼされてしまう。彼らは祖国を失った。

古代ユダヤ人のキリスト教会は 135 年ころまでに相当数エルサレムに帰還するが、他の教会と交流を持つことはなく、キリスト教の主導権は異邦人キリスト教会へと移っていく。数世紀後に、異邦人のキリスト教作家はユダヤ人キリスト教会は古い律法の慣習を守りつづけていたので、異端的な団体と見たようであるが、異邦人 5 世紀ころには記録からも消えていく。今でいう、メシアニック・ジューみたいな存在か？

かつて世界の教会のセンターであったエルサレム教会が、このように消えていったのには、不思議を感じる。主イエスがサマリヤの女に対して言われたことばを思い出す。

#### ヨハネ 4:21

イエスは彼女に言われた。「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。」

#### まとめ

##### 1. エルサレム教会の営み・・・教会にとっての必要十分なしるし

これは特別に重要。というのは、改革をめざす教会にとって、新約の時代の姿は一つの基準となるからである。宗教改革は、一面、新約聖書的な教会の復興であるから。

##### 2. 新約時代の教会の旧約以来の一貫性と「新しさ」

両方が大事。新約の新しさのみをいうと、後に学ぶグノーシス主義、マルキオン主義の異端に陥る。改革派神学は旧新約の一貫性を強調するあまり、新約の新しさを見落としていく嫌いがある。

##### 3. 教会政治の組織化

ペンテコステに一気に 3000 人の信徒を得、その後も急速に人数が増えていった教会である。組織化は必要不可欠であった。

第一回エルサレム会議にみるように、地方地方に生み出される教会は単立主義ではなく、「公同の教会」の一族であるという自己認識を持っていた。我々も使徒信条において「聖なる公同の教会を信ず」と告白するならば、その実を見せよと主から言われるであろう。

## Ⅲ. 異邦人教会誕生とその担い手

### 1. 世界宣教命令

世界のあらゆる民族への宣教は、復活した主イエスが使徒たちに最後にお与えになったたいへん重要な命令であった。それゆえ四つの福音書と使徒の働きに記録されている。復活後、昇天まで主イエスは 40 日あるが、この間、主イエスがなされたことはご自分が確かに復活したことを弟子たちに明らかになされたことと、世界宣教命令を何度もお与えになることだった。実際に世界宣教の命令を読んでみよう。

#### マタイ 28:19-20

それゆえ、あなたがたは行って poreuthentes、あらゆる国の人々を弟子としなさい matheutsate(impv)。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け baptizontes、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい didaskontes。

#### マルコ 16:15

それから、イエスは彼らにこう言われた。「全世界に出て行き poreuthentes、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい keruxate。

#### ルカ 24:47-48

その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらのことの証人です。

#### ヨハネ 20:22-23

そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦され、あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、それはそのまま残ります。」

#### 使徒 1:8

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

大宣教命令のポイントは、

#### ① 「行って、すべての民族に福音を伝えよ。」

Cf. Mt24:14 [この御国の福音は全世界に述べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから終わりの日がきます。]

ケーリュグマ…福音は足と関係する Rom10:15。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」、Eph6:15「足には平和の福音の備えをはきなさい。」

つまり、福音を聞かせる相手は基本的に教会の外にいる未信者すべてである。むろん、折り折りすでに新生した信徒もキリストの福音のケーリュグマを聞き、確認することは必要であるが、基本的に未信者を再生させるのがケーリュグマであるのだから、当然のこと。

#### ② 弟子とせよ。(教会形成)

これはみことばのうちで「教え ディダケー」にあたる。すでにキリストを信じて再生した人々を成長させるためのみことばである。

教会は、この二つのことを実行しなければならない。

使徒 2 : 4 1, 4 2を見よ。ペテロのことは logos (これがケーリュグマにあたる) を受け入れた人々はバプテスマを受け、そのあとは教え didake を堅く守った。

宣教の歴史を振り返るとき、教会はこの二つのうちのどちらかのみ偏る傾向がある。戦後の日本における宣教では、最初、宣教師たちはすべての人に福音を語ることにエネルギーを注いだが、教会形成を軽視した。その後、日本人牧師は反動も手伝ってか教会形成・教会成長にエネルギーを注いだ。結果として、教会は内向きになってしまって、社会への影響力を失った。

## 2. ステパノの殉教・エルサレム教会弾圧と宣教の拡大

### (1) ユダヤ当局による教会弾圧と異邦人宣教

教会弾圧というと、ローマ初期の教会への弾圧は、ローマ帝国によるのではなく、ユダヤ当局による弾圧であった。弾圧の結果、教会はようやく世界宣教へと拡大していった。歴史の皮肉・逆転である。サタンによる教会弾圧は、福音宣教の前進という結果を生む。こうしたことは、歴史において時に繰り返される。また、これは神の計画であり、主の命令でもあった。①迫害されたら、原則として逃げて次の町で伝道せよというのが主の命じられたことであり、②殉教に召された人は殉教すること。殉教は賜物である。

「彼らがこの町であなたがたを迫害するなら、次の町にのがれなさい。というわけは、確かなことをあなたがたに告げるのですが、人の子が来るときまでに、あなたがたは決してイスラエルの町々を巡り尽くせないからです。」マタイ 10:23

「サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた。敬虔な人たちはステパノを葬り、彼のために非常に悲しんだ。サウロは教会を荒らし、家々にはいつて、男も女も引きずり出し、次々に牢に入れた。他方、散らされた人たちは、みことばを宣べながら、巡り歩いた。」使徒 8:1-4

「ピリポはサマリヤの町に下って行き、人々にキリストを宣べ伝えた。」(使徒 8:5) さらにピリポはエチオピアの宦官に福音を伝えた。(使徒 8 : 2 6 - 3 9)これが教会による異邦人伝道の嚆矢である。

「こうして教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行った。」(使徒 9:31)

使徒 10 章にはペテロとコルネリウスの逸話が記されている。この出来事を通してエルサレム教会は「使徒 11:18 人々はこれを聞いて沈黙し、「それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ。」と言って、神をほめたたえた。」という経験をす

る。「さて、ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キ

プロス、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の者にはだれにも、みことばを語らなかつた。ところがその中にキプロス人とクレネ人が幾人かいて、アンテオケにきてからはギリシャ人にも語りかけ、主イエスのことを宣べ伝えた。そして主の御手が彼らとともにあったので、大勢の人が信じて主にたちかえつた。」使徒 11:19-21

このように異邦人宣教は、エルサレム弾圧から逃げてきたヘレニズム文化を受け入れたユダヤ人キリスト者が担い手であった。異邦人宣教の命令とビジョンは、すでに主イエスによって明確に与えられていたにもかかわらず、初代のエルサレム教会はただちに異邦人伝道に出て行こうとはしなかつた。異邦人に神のことばを語ることは、豚に真珠、ネコに小判、馬耳東風であるという観念にとらわれていたのであろう。

しかし、エルサレム教会に対する弾圧があつて、やむなく異邦人伝道へと進んでいった。迫害というマイナスを、主はプラスに変えられた。教会の歴史において、このようなことはしばしば起つてゐる。近年の例でいえば、かつての共産圏における福音の前進に、もつとも効果があつたのは共産主義による弾圧であつたという歴史の逆説。

## (2) 家の教会が宣教の担い手

パウロの地中海世界の伝道については、使徒の働きに記され、彼の活躍はめざましいが、初代教会における世界宣教をパウロの働きであるという理解は事実には即してはいない。彼は世界宣教に立った異邦人への使徒であつたが、その一人であつたというべきである。たとえばローマ書を読むならばはっきりとわかるように、彼がローマに行く前にすでにそこに信徒たちがいたのである。

新約の教会最初の殉教者はステパノという信徒であつた。また、エルサレムから「散らされた人々」も信徒であり、彼らが福音をあかしして歩いたのである。ピリポも信徒である。特にヘレニスタイと呼ばれたギリシャ語を話すユダヤ人たちである。聖霊がすべての信徒に下つたことにより、すべての信徒がキリストの証人となつた(使徒2章)。ここに世界宣教の原動力がある。

むしろ、パウロが後の教会に残した最大のことは、新約聖書のローマ書からピレモン書までの多くの書簡である。

### <宣教の方法>フスト・ゴンサレス p 114

「最初の三世紀の間に、教会は人数的に非常な成長を遂げた。キリスト教はいつたほどのような伝道方法でそれほどの成長を達成したのであろうか。・・・古代教会は『伝道集会』や『リバイバル集会』などとは無縁であつた。それどころか、初期の教会の礼拝の中心は聖餐であり、洗礼を受けたキリスト教徒だけがこの祝いの儀式に参加することができたのである。したがつて伝道は、教会の礼拝の場で行なわれたのではなく、ケルソスによると、台所や店先、市場などで行なわれた。・・・しかし大多数の改宗者は、無名のキリスト教徒たちによる信仰の証によって導かれたのである。そのような証の中でも、もっとも劇的なものは、殉教による死であつた。」

新約聖書以後、かつてのパウロやバルナバが行なつたような、伝道のために各地を巡回する宣教者についての言及が驚くほど少ない。最初の数世紀における福音の広がり、宣

教の専従者によってではなく、奴隷や承認、炭鉱などで強制労働に従事させられている者など、さまざまな理由で旅した大勢のキリスト教徒たちによってなされたのである。」

文脈化研究会の福田充男氏は注目すべきことを語っている。HPのMTGを参照。

「家庭は神の国のショーウィンドー」

「1世紀の初め、最初のキリスト教会の誕生以来200年ぐらいの間は、礼拝堂が1つも建設されなかったことが発掘調査でわかっています。と言うことは、ざっと10世代近くの間、クリスチャンたちは礼拝専用の建物なしで教会増殖を繰り返したことになります。」

初代教会では、もっぱら信者の家で礼拝をしていました。たしかに、ステパノの迫害までの短い期間は、エルサレムの神殿に集まっていたこともありました。しかし、その期間でさえ、家を中心とした普段の生活が、神の国の価値観を実践する場であったのです。だから、教職者が礼拝堂で教えたり儀式をしたりすることが教会活動だと理解している多くの現代のクリスチャンが、もしその時代にタイムスリップしたなら、相当なカルチャーショックを経験すると思われま

当時の一般的な家の大きさを考えると、10～15人の人々を収容することができる家は稀だったことがわかります。そうすると、1つひとつの教会がどのくらいのサイズだったかが想像できるでしょう。たとえばピリピに、500人規模の教会が1つあったという考え方は成り立ちません。ルディアの家の教会、看守の家の教会、ユウオデアの家の教会、クレメンスの家の教会等のハウスチャーチのネットワークがあったのです。

家で教会活動をすることの利点は、クリスチャンの生き様が伝わりやすいことです。たとえば、週に1度数時間の講演会型の礼拝なら、たとえ夫婦げんかをした後でも礼拝堂でここにこして挨拶することができなくはありません。しかし、自分の家が教会になるなら、そういうごまかしは通用しません。そこは生活の場なので、夫婦は本当に仲が良いのか、子どものしつけは健全に行なわれているかどうか等、家人のライフスタイルがそこを訪れる人々の前に明らかにされてしまいます。

初代教会の強さはそこにありました。「主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい」（詩篇127篇1節）という言葉の通り、だれも自分の力や知恵で「神に仕える家庭」（ヨシュア記24章15節）や、「祝福された家庭」（詩篇128篇3節）を築くことはできません。だからこそ、復活の主によって守られ祝された家庭生活があるなら、ジムソンさんが言うように、その存在自体が、隣人に対する神の国のショーウィンドーの役割を果たすのです。」

### 3. エルサレム会議

FF. ブルース『初代キリスト教の歴史』 p 204、使徒の働き 15 章

### (1) 律法問題

異邦人伝道はすでにピリポによってエチオピアの宦官に対してなされ、また、シモン・ペテロもコルネリウスの回心という事件を目の当たりにしていた。アンテオケ教会とその派遣したパウロ、バルナバの開拓した異邦人教会に全面的に異邦人がはいることになったので、問題はむずかしくなってきた。

エルサレムの律法に格別熱心な伝統主義者、ユダヤ主義者たちの主張は、異邦人伝道をするのはよい。しかし、回心した彼らは割礼を受けてモーセの律法の全体を守るように要求すべきであるというものであった。

エルサレム以外のキリスト者たちはこの立場に固執しなかった。使徒ペテロもコルネリウスのとき示された啓示から、異邦人を汚れたものと呼んではならない学んでいた。神は信じる異邦人を受け入れたまうと頭で知っていた。

しかし、エルサレム教会からアンテオケ教会に派遣された人々が伝統主義者であり、彼らは割礼を受けモーセの律法を全面的に守ることが救いの必要な条件であると主張し、異邦人と交わることを拒否した。愛餐会も聖餐も拒否した。当時、聖餐式は愛餐会のなかで行なわれていた。

このエルサレムのユダヤ人たちが来たときペテロは中途半端な態度をとった。最初は異邦人と交わっていたのに、ユダヤ主義者の手前、彼らと交わるのをやめるようになったのである。使徒パウロはこれは福音の危機として公然と使徒ペテロを非難した。この事情はガラテヤ書にくわしい。

事柄の重大性に鑑みて、これはアンテオケ教会一個だけで解決できるものではないとされた。そこで、エルサレム会議での使徒たちの会議が開かれることになる。ここを見ると、初代教会において、すでに諸教会は各個教会主義(単立主義・会衆主義)で教会政治を行なってはいなかったことは明白である。もっと大事なことは、「公同の教会」という意識が明確にあったということである。教会は一つだという意識があった。

監督制的な政治と見る立場と、長老主義的な政治と見る立場があるが、いずれにしてもすべての決定が一地域教会の自律において行なわれるという会衆政治的な教会政治がなされていなかったことは事実である。アンテオケからはパウロ、バルナバがエルサレムに派遣され、これを論じることになった。49ADのことである。

結論としては、割礼派(ユダヤ主義者)の主張は否定された。使徒ペテロもまた、コルネリオの回心にあたって、いかに神が異邦人に愛をあらわし、また聖霊が異邦人に差別なく注がれたかを思い起こさせた。神はユダヤ人と同様に異邦人をもお選びになった。

原理的なことは明確にされた。異邦人キリスト者は、救いの条件として割礼を初めとする旧約の儀式・慣習を守る義務はないということである。

ただ実際的な問題は残っていた。食物に関する律法をまもり、異邦人との交際を避けるように育てられてきたユダヤ人キリスト者たちが現実には教会の交わりの中に大勢いるということである。原理的には、確かに異邦人が割礼を受け、祭儀律法を守ることは求められ

ないが、しかし、異邦人キリスト者とユダヤ人キリスト者が、健全な交わりを持つためには、とりあえずルールが必要だった。特に良心の敏感な「弱い」ユダヤ人のために暫定法が定められた。偶像礼拝はいうまでもなく共通して罪であるが、偶像にささげられた食物からも離れよということ、また性的慣習をユダヤの婚姻のおきてにあわせることであった。

## (2) 律法理解の原理的なことを整理しておく

律法について WCF は三つに区分する。19 : 3-5

「3 普通に道德律法と呼ばれるこの律法(=十戒)のほかに、神は、未成年の教会としてのイスラエルの民に対して、儀式律法を与えることをよしとされた。……この儀式律法はみな、今の新約のもとでは廃棄されている。

4 一政治体としての彼らに対してもまた、神は多くの司法的律法を与えられた。これは、その民の国家とともに終わり、その一般的原則適用が求める以上には、今はどのような事をも義務付けていない。

5 道德的律法は、義と認められた者にも他の人にもすべての者に、永久に、それへの服従を義務付けている。そのことは、そのうちに含まれている事柄のゆえだけでなく、それを与えられた創造者である神の權威のゆえにもそうである。キリストは福音において、この義務をいささかも廃棄せず、それを大いに強化しておられる。」

つまり、儀式律法・司法的律法は廃止されたが、道德律法は新約の時代も有効であり、これに服従する義務がある。福音の恵みにおいて与えられたキリストのみたまによって、自由に喜んでこれを行なうように意志が変えられ力が与えられる。

## (3) アディアフォラ<sup>20</sup>問題 ローマ 14 章、1 コリント 10:19-33

微妙な暫定的定めにかかわることとしてアディアフォラ問題を扱っておく。

「偶像にささげられた肉」問題についての使徒パウロの教えをここで整理しておこう。

①まず、偶像礼拝は罪であり、悪霊と交わることである。1 コリ 10 : 19-21

②次に、では偶像にささげられた肉を食べることは罪にあたるだろうか？

a. 客観的に言えば、それは罪ではない。ローマ 14 : 14、I コリ 10 : 25, 26

b. しかし、良心に呵責を感じながら食べるとすれば、それは罪である。ロマ 14:14

c. だから、基本的にたがいの立場を重んじてさばきあってはいけない(ローマ 14 : 1-12)。ただ、どうしても良心に呵責を感じる兄弟がそこにいるとすれば、自分は呵責を感じないとしても、兄弟をつまずかせないために兄弟愛のために、偶像にささげられた肉を食べることは避けるべきである (ローマ 14 : 13)。

何が偶像礼拝とその類似行為については、グレーゾーンがある。たとえば、ダニエル 1 章を見ると、ダニエルの友人たちはバビロンで偶像にささげた肉を食べることには抵抗感を覚えて食べようとしなかったが、ことによっては絶対拒否ということでもなかった。彼

<sup>20</sup> アディアフォラが神学的に取り上げられるのはルター派正統主義内での論争をめぐって、宗教改革者メランヒトン『ロキ・コンムーネス』においてである。

らに新しい異教の神々にちなんだ名がつけられることはあえて拒まなかった。しかし、3章で金の像を拝めという命令は命を賭けて拒絶した。

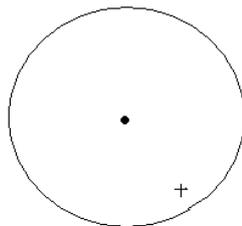
主イエスの時代、伝統主義的なユダヤ人たちはカイザルの肖像がはいったデナリ硬貨を使うことは偶像礼拝であるという感覚をもっていた。「神なる皇帝」という東方的な観念がすでに入り込んでいたからである。主イエスは、「カイザルのものはカイザルに、そして、神のものは神に」といった。主イエスは、かつてに自分を神と称しているようなローマ人の土俵にあがってうんぬんする価値など認めなかったのである。カイザルはあくまでも世俗的権力者である。彼が欲しいのは税金である。それなら税金を払ってやれ、税金を彼の肖像の入った金で払うのは偶像崇拝ではないというのが主イエスの見解である。

しかし、偶像に香を焚く、礼拝するといったあからさまな皇帝崇拝に対しては、古代教会ははっきりとした拒否の態度を取ったので、迫害を受け殉教者を出した。

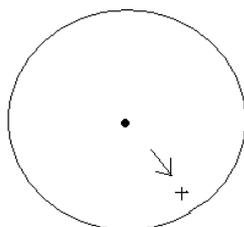
## IV. 1世紀の迫害（教会と国家）

### 1. 教会と国家の問題として

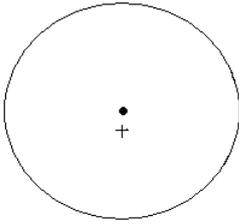
教会史を学ぶということは、「教会と国家」にかんする歴史を学ぶといっても過言ではない。教会と国家とが、具体的にどのような関係を持ってきたかという歴史である。これを図解。



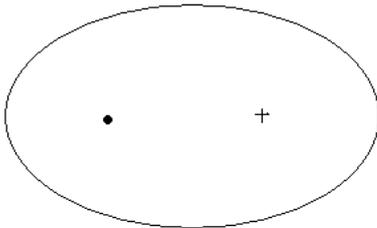
国家権力が中心にあって、教会はその片隅にあるが、格別の注目はされていないという状況である。新約教会誕生当初のローマ帝国にとってのキリスト教会はこういう状態だった。



教会の存在が国家にとって、うるさいほどの力を持ち始めるとき、国家は教会を迫害する。ネロに始まりデキウス帝にいたる迫害の時代の「教会と国家」。



国家が教会を利用して、国民の精神的統合の道具としようとする状況。国家と教会が癒着した状態になる。すると、教会は真理を語る事が困難になる。313年ミラノ勅令以降。カエサルパピズム(皇帝教皇主義)の問題。



教会と国家の力関係が拮抗しているような状況。中世ローマ教会の状況。

「教会と国家」という課題は、旧約時代、新約時代を通じて、一貫する問題である。

#### <旧約時代>

世俗権力(剣の権能)の始まりは、創世記9章ノアの箱舟後とされる。権力というのは、墮落した世界において、最低の秩序を維持するための必要悪である。

イスラエルが国家を形成し始めた、預言者サムエルが活躍した時代に、すでに王と預言者の役割に関するトラブルが生じている。Iサムエル8-15章を熟読せよ。8章には王を持つことへの民の憧れと、その問題点。サウル王が祭祀職を犯すことによって、神からの処罰を受け倒されていく過程が記されている(1サム13:8-14)。

王国が確立すると、王と祭司の関係があり、そこに癒着が生じる。神殿礼拝を維持するためには、王からの経済的・物理的な保護・サポートが必要となったからである。祭司たちは、ただしくみことばを語るべきであったが、必ずしもそうはできなくなってしまう。王にへつらい、王のために「平和だ」と告げる祭司たちとなった(Jer6:14;14:13)。

北イスラエル王国のヤロブアム1世は、エルサレム神殿の礼拝に対抗して、国家神道を作る。1列王記12:25-33

王権と祭司が癒着した時代に、神は預言者を起こされた。イザヤ書、エレミヤ書そして多くの小預言書には、その時代の問題が語られている。

また、バビロン捕囚の先では異教国の王に仕える神の民の生き方がダニエル書には現れている。

#### <新約聖書時代>

新約聖書においても、ローマ帝国支配下のイスラエル国家の問題と、ローマ帝国における福音宣教という課題。主イエスの「カイザルのものはカイザルに。そして神のものは神

に。」(Mk12:17) それから、ローマ書 13 章、黙示録 13 章が代表的テキスト。さらに使徒の働きにおける国家と教会にかんするもろもろの出来事にも注目。

教会と国家の問題は、宣教の現場に出ても常に意識しつづけなければならない、またせざるを得ない問題となる。国家の問題を意識しないで教会形成をしたとしたら、すべてをむなしくしてしまうだろう。

参考>HP「教会と国家」水草修治で検索されよ。

推薦図書>ブルーダー『嵐の中の教会』、辻宣道『嵐の中の牧師たち』

## 2. 最初の迫害

### (1) ユダヤ当局からの迫害

教会の迫害というと、すぐにローマ帝国による迫害が念頭に浮かぶ人が多いであろうが、歴史の中で初代教会が国家からの迫害を受けたのは、ユダヤ当局からのものであり、ステパノ、ヤコブが殉教した。教会はこれにどのように対応したであろうか。

使徒 4:16-20、使徒 5:29-32

ユダヤ最高議会は、キリスト教会の伝道に対して禁止命令を出した。しかし、彼らは伝道を続けたのである。それゆえさらに迫害されていく。

ときに「イスラム圏では法律で禁止されているから伝道はしてはいけない」などという寝ぼけたことをいうやからがいるが、それはとんでもない間違いである。確認すべきことは、教会は、たとえ国法で禁じられたとしても、福音の宣教をやめてはならない。法律を破ってでも伝道すべきなのである。

キリスト者は、基本的に国家の権威を尊重すべきであることはローマ書 13 章にも語られていることである。「カイザルのものはカイザルに返しなさい」と主イエスも教えてください。神は、国家に対して治安維持のための警察権と、富の再分配のための徴税権をお与えになっている。けれども、国家は礼拝のこと、宣教のことに口出しをしてはならない。それは神が教会にたくされた分である。

WCF23 章また 20 章を参照。

したがって、教会は国家の偶像崇拜命令に従ってはならないし、伝道禁止命令にも従ってはならない。

「神のみが良心の主であり、神は信仰または礼拝の事柄において、何事であれ御言葉に反するまたは御言葉の外にある人間の教えと戒めから良心を自由にされた。それで、良心を離れてこのような教えを信じまたは戒めに服従することは、良心の真の自由を裏切ることである。また盲従的信仰や絶対的・盲目的服従を要求することは、良心の自由と理性とを破壊することである。」WCF20:2

### (2) ユダヤ人の新しい分派

初期のキリスト教徒は自分たちは新しい宗教の信者であるとは考えていなかった。彼らは旧約聖書に預言されていたメシヤが来たと信じたのが自分たちであり、まだ来ていない

と思いついでいるにすぎないと考えていたのである。また、事実そのとおり。イエス自身、旧約聖書とは異なる新しい宗教を信じよと教えたのではない。旧約聖書の成就として新約があるのであるが、旧約聖書との連続性があり、新約の信徒はアブラハムの霊的な子孫だと自覚していたし、実際そうなのである。

しかし、ユダヤ当局は、キリスト教会を異端であると見た。彼らはナザレのイエスをメシヤであるとは認めなかったからである。

ローマ帝国からは、キリスト教会は当初ユダヤ教の新しい異端的分派にすぎないと見られていた。しかも、ユダヤ教はローマ帝国の保護政策の下にあったので、教会は守られ、キリスト教会の宣教もゆるされていた。当時、ユダヤ教はローマにおける公認宗教の一つとされていて、ユダヤ教徒にはエルサレム神殿への献金の自由、集会の自由、兵役免除など特権が与えられ保護されていた。70年にユダヤ戦争でエルサレムが破壊されるまで、こうした状況は続いた。

ローマ政府は、ユダヤ教当局と教会との問題をユダヤ教内部の問題であるとみなしていた。帝国内の秩序が乱されないかぎりには、こうした宗教問題には関与しないというのがローマ帝国の基本的姿勢だった。ローマ総督ピラトもイエスの裁判についてそういう態度を示しているし、アカヤの地方総督ガリオも同様の態度を示している。

「パウロが口を開こうとすると、ガリオはユダヤ人に向かってこう言った。「ユダヤ人の諸君。不正事件や悪質な犯罪のことであれば、私は当然、あなたがたの訴えを取り上げもしようが、あなたがたの、ことばや名称や律法に関する問題であるなら、自分たちで始末をつけるのがよかろう。私はそのようなことの裁判官にはなりたくない。」使徒 18:14,15

スエトニウス（スイトニアス）によれば「・・・ユダヤ人たちは、クレストウスの煽動の下にしきりに人心を攪乱したので、彼（クラウドオ）はこの人々をローマから追放した。」（ベッテンソン p 23）とあるが、このクレストウスというのがキリストである。ユダヤ人の間に、イエスをキリストと信じるかどうかということで争いが起こったので、どちらを弾圧するというのでもなく、皇帝は追放したのである。

### （3）皇帝ネロによる迫害 64年AD ベッテンソン史料 pp22,23

ローマ皇帝による教会迫害というと、暴君ネロが頭にすぐに浮かぶであろう。ネロがローマ皇帝として最初の迫害者であったから、印象強いのであろう。また、シェンキエビチの小説『クオ・ヴァディス』の影響であろうか。その迫害の中で、使徒ペテロ、パウロが殉教したと伝えられていることも、印象を深くしている理由であろう。しかし、その迫害はキリスト教徒の信仰を理由にしたとか、皇帝崇拜拒否のためであったとかいうものではなかった。であるから、本格的な＜教会と国家の衝突＞という意味での迫害ではなかったのである。有名な史料を読んでおくべきであろう。

ネロは54ADに皇帝に就任。着任後しばらくは彼はまともな統治者であった。ところが、だんだんと自分が偉大な皇帝であり芸術家であると思いつくようになり、周囲の人々から疎まれるようになる。

64年6月18日夜、ローマに大火が発生。このローマの大火はネロが都ローマを自分の

思い通りに造り直すために引き起こしたものであるという噂が広がった。事実そうであつたらう。その矛先をかわすために、ネロはこの大火の下手人はキリスト教徒であるとし、残虐な扱いをした。その迫害のありさまは、タキトゥス『年代記』15:14（ベッテンソン p 22）、スイトニアス『ネロの生涯』16章

それにしても、なぜキリスト教徒が犯人であるとされたときに、それが「そうだそうだ」と受け入れられる素地があつたのだろう。それは、キリスト教徒の生活のあり方が、当時のローマ市民にとっては異様なものに映っていたからであろう。タキトゥス Cornelius Tacitus(55-120AD)の『年代記』はキリスト教を「この有害な迷信」と呼んでいる。彼は「人類に対する憎しみのゆえに、罪あるものとされた。」という<sup>21</sup>。キリスト教徒は人類を敵視していると思われたらしい。

フスト・ゴンサレスは「当時の社会での普通の活動、演劇や軍隊はもちろん手紙やスポーツに至るまで、それらのすべてが異教の礼拝と分かちがたく結びついていたために、キリスト教徒はそうした社会活動から遠ざからねばならなかったことを考えれば、彼らが反社会的とみなされ、『人類に対する敵視』を抱いていたという告発を受けたことも理解できるであろう。」と解説する。

しかし、ネロによる迫害はローマ市に限られていたらしく、迫害の記録はほかの地域ではいっさい存在しない。単発的な組織化されない迫害であつた。

#### (4) ドミティアヌス帝による迫害

ネロ帝は68年に廃位され自殺。そのあと、ウェスパシアヌス帝、その息子のティトス帝の時代はキリスト教は無視されていた。ティトスの後、皇帝となつたのがドミティアヌス帝(51-96年)である。

迫害の直接の原因は70年エルサレム神殿を失つたユダヤ人の一部が、従来エルサレム神殿への献金がローマ帝国の国庫に納付されることを拒んだことによる。皇帝は激怒し、ユダヤ人を迫害する。当時はまだユダヤ教とキリスト教の区別がローマ帝国政府側からはなされていなかったために、ユダヤ人キリスト教徒も迫害されることになった。

また、遠因としては、ドミティアヌスがローマの伝統をこよなく愛して、その回復を願っていたことにある。ローマの神々を拜むことをこぼみ、伝統を否定しているユダヤ教徒、キリスト教徒は憎むべき者たちだったのである。神々を礼拝しないキリスト教徒は、無神論者とみなされた。

ヨハネは、この迫害の結果、パトモス島に流された。ローマ書においてパウロは国家権力の積極的意義を書いているが、黙示録においてはその国家権力がサタンのコントロール下にはいるとき恐るべき獣と化することが記されている。

とはいえ、ドミティアヌス帝による迫害は、直接的な理由はキリスト教信仰に対するものではなかった。ユダヤ人の納税問題にかんすることであり、間接的にはローマの伝統との衝突だった。そして、その迫害は彼の治世とともに終わった。

<sup>21</sup> ベッテンソン p22の「人類の憎しみゆえに」は誤訳。Odio humani generis は「人類を憎む憎しみゆえに」という対格的属格と解すべき。

## V. 2世紀から3世紀前半の迫害

### 1. 五賢帝の時代・・・組織的迫害

2世紀は「五賢帝時代(96-180 ネルヴァ、トラヤヌス、ハドリアヌス、アントニヌス・ピウス、マルクス・アウレリウス)」と呼ばれ、「人類が経験したもっとも幸せな統治」(E.ギボン)とも言われる。帝国の国力は充実し、政治的安定・経済的安定を経験する。

しかし、五賢帝の時代は教会にとっては迫害の時代であり、丸山忠孝はこの世紀を「十字架を忍ぶ教会」と呼んでいる。なぜならば、1世紀の迫害はひどいものであったといっても、単発的であり思い付き的なものであったが、2世紀の迫害は明確に帝国の政策としての組織的迫害となったからである。

### 2. トラヤヌス帝による迫害

資料「プリニウス・トラヤヌス帝書簡」 ベッテンソン p p 23-24

トラヤヌス以後の帝国の、キリスト教会に対する基本方針となる。

プリニウスのトラヤヌス帝あての手紙(112AD)から読み取れること。

#### a. キリスト教徒の増加のありさま (p25-(9))

ビテニヤ地方では都市・農村を問わずあらゆる年齢・階級を問わず、男女キリスト教徒が増加して、伝統的な神々の宮は閑古鳥が鳴くありさまだった。

#### b. キリスト教徒の生活 (p 24-(7))

定められた日に夜明け前に集まってキリストを讃美し、罪を犯さない誓いをする。そして、普通の食事会をしていた。

#### c. 帝国が求めた偶像礼拝の内容 (5)

神々の彫像と、皇帝の彫像に香を焚き、ぶどう酒をもって礼拝をささげ、キリストをのろわせる。

#### d. 尋問と処刑 (3)

死刑にするぞと脅しながらキリスト教徒であるかを尋ね、あくまで頑なであれば、その強情と頑固さゆえに死刑にする。キリスト教徒であることを否定したものは釈放する。

積極的にわざわざ手間をかけてキリスト教徒を捜し出すことはしないが、もし訴えられて神々と皇帝への礼拝を拒み棄教を拒むならば処刑する。

### 3. 2世紀の迫害 マルクス・アウレリウス帝(161年-180年)による迫害

哲人皇帝マルクス・アウレリウスもまたキリスト教徒を迫害している。この時代の殉教者の中には有名なユスティノスも含まれている。彼はローマに教理学校を開設し、真の哲学と呼んだキリスト教を教えていた。彼は有名な異教徒の哲学者を公開討論会で論破したので、この哲学者に告発されたようである。

2世紀全体をとおして、キリスト教徒は不安定な立場にいた。彼らは絶え間なく迫害されていたのではない。間歇的に各地で起こる迫害に苦しんだ。

帝国の教会に対する一般的政策はトラヤヌス帝が指示した通りである。すなわち、キリスト教徒は積極的に捜し出して迫害する必要はないが、告発されたならば棄教させるか、さもなければ処刑した。

告発するしないは周囲の人々の噂・評判によるところであった。そこで異教徒たちにキリスト教について弁明する必要が生じた。

#### 4. 3世紀の迫害①セプティミウス・セウェルス帝の迫害

3世紀初めセプティミウス・セウェルス帝は、帝国領内に宗教的混交主義でもって、宗教的一致を推進する。帝国領民すべてを「不敗の太陽神」礼拝で一致させ、あらゆる宗教と哲学をこの礼拝の中に包含させようと計画した<sup>22</sup>。

ユダヤ教とキリスト教がこれに反対したので、これらの宗教に改宗することを禁止し、違反者は死刑に定められた。エイレナイオスはこの迫害で殉教した。

#### 5. 3世紀の迫害②デキウス帝(249年—251年)による迫害

皇帝は伝統的ローマ人であった。帝国衰退の原因は、人々が古代の神々への信仰を捨ててしまったことによると考えた。そこで古代ローマの神々にローマを立ち返らせようとした。古代の神々に礼拝しないことは反逆罪に等しいとした。

迫害には「殉教者ではなく、棄教者を作る」という目的がはっきりとあった。迫害されて堂々と殉教するキリスト教徒を目撃した人々がかえって深い感銘を受けて、かえってキリスト教徒が増えてしまったからである。キリスト教徒を殺すのでなく、転ばせることをねらったわけである。

デキウス帝の勅令は、キリスト教徒だからという理由で処刑を命じない。神々への礼拝を、帝国全域にわたって義務付けた。神々の前で香を焚き、神々に犠牲をささげることが要求され、これに参加したものにはその証明書が発行され、証明書を持たない者は、帝国への反逆者とみなされた（あたかも黙示録 13章に出てくる「666」の刻印のようだ）。たいへん組織的な全帝國的な者だった。迫害はキリスト教徒殺害に主眼を置かなかったので、拷問を受けた後になお信仰を守って生き残った「聖証者」が出た。

ヴァレリアヌス帝(253—269AD)は、治世初期はキリスト教に好意的だったが、途中から迫害に転じた。ベッテンソン pp37,38

#### 6. 棄教者の問題と教会観——キプリアヌス

---

<sup>22</sup> 戦前のわが国の神道国教化政策と似ている。

従来の迫害のように死刑にされてしまえば、起こらなかった問題である。棄教させるために拷問が激しくなる中で、一旦は棄教し、迫害が去ると再び教会に復帰することを望む人々が現れるようになった。また、逆にいかなる激しい拷問にも屈せずに生き残った聖証者が出てきた。

棄教した人々を動扱うかについての議論がなされた。

カルタゴ司教キプリアヌスは地域の司教たちの教会会議を招集し、次の決定がなされた。

- ① 犠牲をささげることをしないで証明書を買ったり、べつの方法で入手したりしたものは、ただちに教会の交わりへの復帰を認める。
- ② 犠牲をささげた者については、臨終の時か次の迫害の時に彼らの悔い改めが本物であったことを証明した場合に限って教会への復帰を認める。
- ③ 犠牲をささげ、そのことを悔い改めない者は決して復帰を許されない。
- ④ これらの行為は、聖証者ではなく司教が行なうべきである。

キプリアヌスが教会の交わりに復帰するための条件を規則化したことには、彼の堅固な教会観が背景にある。「教会の外に救いはない」「教会を母として持つのでなければ、だれも神を父として持つことはできない」

## 7. 「殉教伝」

殉教が重んじられ、劇的な「殉教伝」が書かれた。著名な殉教者としては、アンティオキアの司教イグナテオスの殉教 107 年と、スミルナの司教ポリュカルポスの殉教 155 年である。ベッテンソンが資料としている p p 32-35 を参照。

ポリュカルポスの殉教に関しては、彼の苦しみはキリストの苦しみにあずかることとされていることが大切である。すなわち、彼を逮捕して競技場に連れ出したのが、神の定めによってヘロデという名であったこととか、彼の召使が裏切ったことを主がユダに裏切られたことと重ねあわせ、逮捕しに来た人々は「強盗に向かうように」ポリュカルポスに向かったとか、ポリュカルポスが逮捕される時には「神の御旨がなるように」と言ったなどと記されている。

殉教者が出るには、殉教を重んじる神学があるところにおいてなのである。殉教を軽んじるところに殉教者はでない。ポリュカルポスの殉教伝では、殉教とは主イエスの苦しみとわが苦しみとすることとされている。

わが国でもキリシタン時代には多くの殉教者が出た。長崎の十六聖人の殉教は有名。しかし、先の戦前戦中には殉教者は出ていない。この違いは殉教の神学があるかどうかのちがいであろう。殉教者を「お上にたてついてひどい目にあつた要領の悪い愚か者」と見るか、「主のためにいのちをささげた尊い信仰の先輩」と見るかの違い。戦中に転んだ日本の教会は、あきらかに前者の見方をしていた。これを変革しないかぎり同じ罪を犯すであろう。

## 8. 俗権についての新約聖書の教えのまとめ

新約聖書の二つの 13 章は国家権力について、神の僕と悪魔の手下という二つの側面を啓示している。

(1) 神のしもべとしての国家権力(ローマ 13 章)

a. 「上に立つ権威」は神のしもべである。

b. 上に立つ権威には基本的に二つの職務がある。

一つは警察権(剣の権能)である。墮落後の世界の不正を抑制し、社会秩序を維持すること。もう一つは、徴税をして富の再分配・不平等の抑制をはかることである。

国家権力に与えられた職務は、このように世俗的な範囲内にとどまっている。しかし、国家権力はときとして、民の心までも支配することを望む。

(2) 悪魔の手下としての国家権力(黙示録 13 章)…説教参照

黙示録解釈については、歴史主義的立場では当時の歴史のなかの出来事にすべてを当てはめてみようとするものと、未来主義として主イエスの再臨直前の時代に起こることとして解釈する立場と、その両極端の間というか両者をかねてみる立場がある。

歴史主義だけでは黙示録は読み誤るであろう。黙示録自体が、「これはすぐにおこるはずの事をそのしもべたちに示す」(1 : 1)と言っている。

a. 「海からの獣」は悪魔的国家権力

この強大な権力者を歴史主義的解釈者は、ネロとかその再来と言われるドミティアヌスと解釈する。未来主義は、主の再臨前に出現する「不法の人」「滅びの人」とする。

しかし国家が獣化したら、類似の起こるものである。

b. ダニエル書 7 章と照合すれば、獅子とはバビロン帝国、熊とはペルシャ帝国、ヒョウとはアレクサンドロスの帝国。この三大帝国のすべてを兼ねたような強大な軍事帝国を意味している。

c. 帝国主義者は、他国民・多民族を支配し、気に入らない政権は倒して傀儡を建てる。常套手段。

d. また、獣化した国家は自国の文化をグローバルスタンダードとして押し付け、富を収奪する。傲慢と独善がその特質。

e. 悪魔がその権力者に力と位を与えている。

f. 第二の獣は、小羊のような姿をしている。第一の獣に仕える偽預言者。海からの獣は、宗教性を帯びているのである。第二の獣は「海からの獣を拝め」というサタンの教えをする。

事例>大日本帝国<sup>ii</sup>、米帝国

(3) 聖書における迫害・殉教と宣教の原則

①たとえ国法でも、偶像崇拜はしてはいけないし、伝道をやめてはいけない。

②迫害があったら逃げて(地下に潜って)伝道せよ

迫害されたら次の町へ行き、福音をあかしせよ。マタイ 10:23「彼らがこの町であな

たがたを迫害するなら、次の町にのがれなさい。というわけは、確かなことをあなたがたに告げるのですが、人の子が来るときまでに、あなたがたは決してイスラエルの町々を巡り尽くせないからです。」実際、使徒の働きを見るとエルサレム教会に弾圧が起こったとき、「使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた。」「他方散らされた人たちは、みことばを宣べ伝えながら、巡り歩いた。」(使徒 8:1, 4)

③ 殉教すべく召されたならば、殉教をもって神の栄光をあらわせ。

使徒たちがエルサレムにとどまったのは殉教するためであろう。殉教は賜物である。

第一コリント 13:3「また、たとえ私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。」

④ キリスト者にとって迫害を受け殉教することは恥ではない。むしろ大いに喜ぶべきであり栄誉である。

マタイ 5:10-12

義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどきなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのだから。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。

使徒 5:40-42

使徒たちを呼んで、彼らをむちで打ち、イエスの名によって語ってはならないと言い渡したうえで釈放した。そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。そして、毎日、宮や家々で教え、イエスがキリストであることを宣べ伝え続けた。

## VI. 2世紀の護教家たち

<文献・HP 紹介>

**Christian Latin**

<http://www.thelatinlibrary.com/christian.html>

Apostolic Fathers

<http://ccat.sas.upenn.edu/~hummm/Resources/Texts/apFat.html>

**Studia Patristica** 三浦朱門

<http://www8.plala.or.jp/StudiaPatristica/>

教文館 キリスト教教父著作集

教文館 アウグスティヌス著作集

荒井 献 『使徒教父文書』 講談社文芸文庫

序

### (1) 教父 **Ekkhlesiastikoi Pateres** とは

「古代教会の著者のうち、教会によって使徒的信仰の代弁者として承認されている者の

呼称。・・・レランのヴィンケンティウスは、その著 434 年において「公教会の信仰と交わりの中に、清らかに、智恵深く、また変わりなく生き、教え、またとどまって、キリストを信じる信仰をもって死ぬことを得た人々か、またはキリストのために殺される幸いを得た人々か、ただそのような父たちの (patrum) 見解だけが引き合いに出されるべきである」。・・・近世のカトリックの教父学においては、教父として認める基準を教理の正統性 *doctrina orthodoxa*、生活の清浄 *sanctitas vitae*、教会の承認 *approvatio ecclesiae*、古代に属すること *antiquitas* の四点としている。・・・」(キリスト教大事典)

\* **使徒教父 *Patres Apostoloci*(Apostolic Fathers)**とは 1 世紀末から 2 世紀前半の新約正典に収められたもの以外の、異邦キリスト教会における主要文書執筆者たち。

使徒教父文書 (講談社学芸文庫所収)

「クレメンズ第一の手紙」 95—96 年

「クレメンズ第二の手紙」 150 年、

「イグナティオスの手紙」 155 年頃、

「ポリュカルポスの手紙」 135-137 年頃、

「ポリュカルポスの殉教記」 155 年 2 月 23 日の殉教直後、

「十二使徒の教訓 *テイゲケ*」 130-160 年頃、

「バルナバの手紙」 130-131 年?

「ヘルマスの手紙」 140 年頃、

「ディオグネトスへの手紙」 3 C

「パピアス断片」 130 年頃

#### \* 四大ギリシア教父

アタナシオス・・・三位一体論争で有名

カエサレアのバシレイオス

ナジアンゾスのグレゴリオス(329-389 年)

ヨハネス・クリュソストモス(344-407 年)

しかし、矛盾するようだが、東方最大の教父 (異端的教説ゆえに問題視されたが) はオリゲネス。

#### \* 四大ラテン教父

アンブロジウス (340?-397 年) : 教会の国家に対する独立、アウグスティヌスの師

ヒエロニムス (347?-420 年) : ウルガタ

アウグスティヌス(354-430 年) : 西方教会最大の教父

グレゴリオス 1 世 (ローマ教皇) : 中世千年間の土台を作る。

#### (2) 護教家たちの出現の背景

キリスト教会がユダヤ教から分離し、異教世界に宣教をしていくなかで、反対や迫害が起こってきた。これに対してキリスト者たちは、より自覚的に自らの信仰について考え説明するようになり、また攻撃に対しては弁明する必要が生じた。

新約聖書に見える最初のもは、パウロのアレオパゴスの説教(使徒 17 章)。ここで、真

の神は創造主であり、偶像でないこと。神と人間の関係。キリストについて語られた。成功と見るか失敗と見るか、両説あり。

<ゴンサレス以外の参考文献>

- グッドスピード『古代キリスト教文学入門』教文館 1994
- ヤロスラブ・ペリカン『キリスト教の伝統1』教文館 2006
- 上智大学中世思想研究所『中世原典思想集成1, 2』平凡社
- オリゲネス『諸原理に就いて』小高毅訳 創文社

## 1. キリスト教への誤解と低俗な噂

「われわれに対して、無神論、幼児嗜食、母子相姦という、三つのまったく根拠のない非難が言い立てられている。」アテナゴラス *Athenagoras, Legatio pro Christianis*, iii 3 6

アテナゴラス(2C 中ごろ)。アテネの弁証家、哲学者。

キリスト教徒がたがいに兄弟姉妹と呼び、非公開の愛餐に集ったことが、近親相姦をふくむ乱交パーティーだと誤解された。聖餐も、キリスト教徒は人の子を食べ、その血を飲んでいと誤解された。キリスト教徒はロバを拝んでいるという噂もあった。「アレクサメノスの拝む神」という落書きを紹介。

## 2. ケルソス Celsus による知的な非難

「キリスト教徒は無知な下層の民衆であり、教えは知性的であることを装いながら実は矛盾だらけのものである」という非難がされた。これが教養ある貴族たちのキリスト教に対する一般的な印象である。

ケルソスのキリスト教批判文書『真正な教え』は 178 年に書かれた。その本は残っていないが、オリゲネス Origenes が二世代前のケルソスへの詳細な反論している『ケルソス駁論』における引用から、その概要が推測される。オリゲネスはこの書の 4 分の 3 を引用している。ケルソスのキリスト教批判の内容はもっともだと思われる部分も多く、反論の困難なものであったので、長らく反論書も出なかった。アンブロシオスがオリゲネスに依頼して書かれることになった。『ケルソス駁論』(246-248 年) 古代護教文学の頂点とされる。現代日本でも通用する弁証論である。

<文献 >

第 8 巻 オリゲネス 3 ケルソス駁論 I 出村みや子訳  
2908-0 (第 1 回配本 定価 2,940 円) (1987.9)

第 9 巻 オリゲネス 4 ケルソス駁論 II 出村みや子訳  
2909-9 (第 6 回配本 定価 4,935 円) (1997.2)

第 10 巻 オリゲネス 5 ケルソス駁論 III 出村みや子訳

\* 朱門岩夫訳 <http://www8.plala.or.jp/StudiaPatristica/ccpr0.htm>

ケルソスの論点抜粋…オリゲネス『ケルソス駁論』より

「序」において、オリゲネスは、主イエスがもろもろの非難に対して沈黙をなされたことを鑑みて、ケルススに反論することの意義について疑問を呈する。ケルススの非難は信者を神の愛から引き離すことはありえない。ただ、本書は未信者に対してのみいささかの意味があるものとして書かれた。

多くのことが書かれているが、いくつかポイントを拾う。

①キリスト教の教えは未開のユダヤ人から来たものであって、教養あるギリシャ人やローマ人のものではない。聖書になにか良いものがあるとしたら、それはギリシャ人から借用したものにすぎまい。

②ユダヤ人とキリスト教徒が偶像崇拝を否定していることは正しい。しかし、それはギリシャの古代の哲学者ヘラクレイトスもすでに主張している。

③ユダヤ人とキリスト教徒の神観はばかっている。神は全能の唯一者であるといいながら、他方で生活のすみずみにまで関与しているという矛盾あり、と。

・・・これは聖書の啓示する神観の超越性と内在性をしっかりとらえている！

④キリスト教の神礼拝は社会の絆を破壊する。キリスト教徒は共同体の行事に加わることは偽りの神々への礼拝をするに等しいとして不参加。しかし、もし神々が偽りだというならばそれをなぜ恐れるのか、もし信じていないなら教養ある者たちがしているように神々の儀式に参加しないのか。実のところ神々が真実だということを恐れているのではないか。

⑤イエスはローマ当局の手で犯罪者として処刑されたやからにすぎぬ。イエスはマリアとローマ兵との間に生まれた私生児である。もしイエスが真に神の子であるならなぜ十字架にかけられることを許したりしたのか？

#### \*反論

① オリゲネスは、これは神が良心に記した共通観念(ローマ2)による一致であるという。

②ヘラクレイトスよりもモーセのほうが古い。

③神の超越性と内在性をよく観察している。確かに聖書に啓示された神はこのようなお方である。たとえば、創世記1章には神の超越性が表現され、2章、3章には神の内在性が表現されている。ヘルマン・バーヴィンクはこの二面を強調している。そして、超越性と内在性をあわせもつ神であられてこそ、我々は信頼するに足りる。超越的で絶対者であるからこそ、信頼するに足る神である。しかし、超越的であるだけでは、我々は神とかかわりを持つこと祈ることができまい。だが、聖書の神は、いとも近く我々に臨み給うお方である。それゆえ祈りはむなしくならない。

④異教の宗教行事というのは、中身のない形だけのものではない。中身はあるが、それは悪霊という中身である。そういう意味ではケルススの言う通りなのである。ゆえに、キリスト者はかかわらない。1コリント10:19-21

⑤受肉の奇跡を信じることのできないユダヤ人の間でのでまかせにすぎない。また、キリストの十字架における刑死の意義を悟りえないのは、罪深い人間性のせいであり、霊的盲目のせいである。(1コリント1:18)

### 3. エルサレムとアテネ

異教社会に生きるすべてのキリスト教徒に共通していたのは、偶像は避けるべきであるという点である。しかし、非キリスト教古典文化にどのように対処するかという点ではさまざまな立場があった。

(1) 殉教者ユスティノス Ioustinos, Justin Martyr(100 頃から 165 年)・・・ロゴス・スペルマティコス論 *logos spermatikos*

パレスチナ出身だが、ユダヤ人ではない。彼は学問探求のためにギリシャに旅し、ストア派、ピタゴラスは、アリストテレス派などを渡り歩き、どれにも満足できなかったが最後にプラトン派とであって満足する。ところが、エペソでひとりの老人とめぐり合い、ユダヤ教の預言とキリストにおける預言の成就を教わって、彼は満足できる真理を見出した。135 年頃のこと。

数年後彼はキリスト教の教師となって、150 年頃までにはローマに腰を据える。

残っている著作は『ユダヤ人トリュフォンとの対話』155-160 年と『弁明(護教論)』150 年のみ。

彼は 165 年ころローマで殉教した。マルクス・アウレリウス帝統治下のことである。

清水哲郎 (東北大学) のメモ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/~shimizu/medieval/justin.pdf>

S. Justinus Philosophus et Martyr (-c.165) (ラテン語表記による)

a. 自伝的言及 *Dialogus cum Tryphone Judaeor*

150/155

エフェソスあたりで、ストア・アリストテレス・ピュタゴラス各派の門をたたくが満足できず、最後にプラトン派に会って満足する。

「非物的なものの知覚によって圧倒された。アイデアの観想によって私の思考は翼を与えられた。私は知者(sophos) になったと想像した。私は愚かにもただちに神を見ることを期待した——それがプラトン哲学の目標だったから(PLG 6,477)。」

やがて老人に出会う。老人は J が哲学に幸福を求めていること——哲学は幸福をもたらす、哲学は存在者の知識 (エピステーメー)、心理の認識 (エピグノーシス) であり、幸福はかかるエピステーメーやソフィアに伴う特権・報酬である——を確かめ、対話が始まる。

老人はプラトンの魂に関する説の矛盾を指摘する：魂の眼であるヌースが神と類縁的 *syngeneia* ならば、魂は本性的に神的・不死であることになる。しかし魂はそれ自体として不死でない生命であるのではなく、神から生命を受ける限り生命を持つ。魂はそれ自体として神を見ることはできない。神認識の道は聖霊による預言者たちに求めるべきである。老人はこのことを聖書によって知ったと言う。

そこで J は聖書を読む。「すると、炎が私の心に燃え立った。預言者たちとキリストの友である人々たちに対する愛が私を強くとりえた。……この哲学のみが確実で有益であることを悟った。かくして私は哲学者なのである (となったのである)。(PG 6,491)」

以上清水哲郎

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

a. 真の哲学としての「キリスト教哲学」を志す。

キリスト教と異教の哲学に接点、異教哲学にも真理のきらめきを見出す。信仰と理性、キリスト教と哲学の調和を目指した。

たとえば、プラトンは・・・

- ① 万物の存在が由来する至高の存在があると考えた。
- ② 肉体の死を超える生命がある。
- ③ 現実世界を超える実体があるとも教えた。

なぜ、聖書の教えと共通する点があるのか。ユスティノスは、これをプラトン派・ストア派のロゴス論によって考えた。＜キリストは完全な神的ロゴスであるが、彼の受肉前にもすべての人が理性的精神の中に同じロゴスを種として所有している。ロゴス・スペルマティコスという。その意味では誰もが部分的に真理に参加している。参加の度合いは旧約の預言者だけでなく、ギリシャの哲学者たち理性的な人間ほど大きい。彼らはキリスト以前のキリスト者である。だが、キリストの受肉以後、彼を受け入れるものは完全に所有するようになった。＞

だから普遍的なロゴスを人間はみな精神のうちに分かち持っているということになる。ユスティノスの神学的な枠によって、「古典文化の中にある良いものはすべて、それが異教徒から出たものであったとしても、実際にはキリスト教に属するという主張を可能にした」（ゴンサレス）。

ユスティノスの「弁明（護教論）」150年頃第一巻 46章 1-4節 ベッテンソン p 26、27

「(2) キリストは神の長子であると教えられており、また、彼が全人類のあずかる理性(言)であることは前に述べた。(4) そこで、理性にしたがって生きる者は、たとえ無神論者とみなされている人であってもキリスト者なのである。ギリシャ人のなかでは、ソクラテスやヘラクリトス、および彼らのように生きた者たちがそうである・・・。」

同第二巻 13

「(4) だれが、どこで語ったことであっても、正しく語られた事柄はみなわれわれキリスト者に属する。(5) また、これらの著者たちはみな、かれらのうちにまかれた理性の種をとおして、真理をおぼろげに見ることができたからである。」

b. キリスト教への批判とユスティノスの反論

① 神々を礼拝しないキリスト教徒は無神論者である。

反論＞ギリシャ古代のすぐれた著述家も『神々は人間の考え出したものにすぎず、それを礼拝する人間よりももっと悪徳に満ちて邪悪だ』と言っている。

② 復活などというのは不合理だ。

反論＞神がすべての人のからだを無から創造したのであるから、人が死んで撒き散らされても、神は彼を再び創造するというのは合理的だ。

③ キリスト教徒は不道徳だ

反論>むしろ酒盛りや乱交をする教徒のほうが不道德である。

#### ④ キリスト教徒は皇帝礼拝を拒否して社会の絆を破壊する

反論>たしかにキリスト教徒は皇帝礼拝をはじめ被造物礼拝はしないが、帝国に対して忠実な民である。

#### (2) タティアノス Tatianos Tatianos(2世紀の弁証家)

- 生没年…不詳 (120年頃-2世紀末)
- 出身地…アッシリヤ?
- 地位…キリスト教護教家/エンクラト説の伝道者

《略歴》

- 120年頃、メソポタミア——本人曰く「アッシリア」、おそらくはアディヤベネ——で、異教徒の両親の間に生まれた。
- ローマへと旅行したとき、そこで多くの東方出身のキリスト教徒に出会い、キリスト教徒へと改宗して護教家ユスティノスの弟子となった。主著『ギリシア人への言葉』を書いたのは、この頃である。
- 165年頃、マルクス・アウレリウス帝治下で、師である護教家ユスティノスが殉教した。するとタティアノスは過激な禁欲主義へと走り、結婚を禁ずるなどのエンクラト説を標榜した。
- 172年頃、故郷へと帰ったタティアノスは『ディアテッサロン調和福音書』を執筆した。また禁欲主義教団としての「エンクラト派教団」を設立し、東方でのキリスト教の布教に努めた。

キリスト教はギリシャ文化から出ていない。むしろギリシャ文化こそ彼らギリシャ人が未開人と呼ぶ人々から出たものであり、借り物にすぎない。天文学はバビロニア人から、地理学はエジプト人から、文字はフェニキア人からの借り物。モーセの書物はホメロスよりプラトンより古いのだから、宗教や哲学ももらいものにすぎない。ギリシャ人たちは自分たちの文化を誇るが、実際はみなもらいものにすぎない。しかも、それを正確に受け取っていないからまがいものにすぎぬ。

しかも、ギリシャの神々は不倫・近親相姦・幼児殺しなど恥ずべき行為を行なっているゆえ、礼拝に値しない。キリスト教徒は下層階級の低級な人間であるという異教徒こそ、実は道徳的に低級なのである。

#### 『ギリシア人への言葉』

ギリシア文明を悪しきものとして激しく攻撃し、それと同時にキリスト教の歴史と純粹さを弁護した作品。その目的はギリシア人の誤りを論駁することであり、哲学者や宗教、その密儀などを荒々しく批判している。そして、彼の師ユスティノスのような「ギリシア哲学も哲学である」という見解を持つことはなく、「哲学は真の哲学、つまりキリスト教のみである」とした。タティアノスのこうした思想は非常に攻撃的なものであったが、教理の面から見れば異端ではなかった。実際にタティアノスのような傾向は東

シリアで多く見られたタイプであり、後世にエジプトやシリアで発展した修道院制度の中にも残っているのである。

しかし、それはタティアノスが生きた当時のローマの傾向とは相反するものであった。そのため、エイレナイオスのようなローマを代表する教父たちからは異端として反駁された。こうしたローマ教会からの異端宣告は歴史的に根深いものがあり、今なお彼を「グノーシス的である」などと紹介することがあるが、それは妥当なものではない。

### 『調和福音書ディアテッサロン』 ⲉⲓⲁⲓⲁⲓⲛⲓ

4福音書をまとめ、イエスの受難を一続きの物語にしたもの。「聖書物語」と呼ぶべき代物の、最初の一書である。シリア語を話す諸教会で広く使われた。5世紀までは重宝されたが、その後は分離した4福音書の正統性が強く謳われるようになり、典礼などの正式な場では用いられなくなった。

しかし、この手の「聖書物語」が果たした役割は非常に大きい。民衆の間では 聖書4福音書以上に広く親しまれ、これを手本に様々な「聖書物語」が語られた。今なお、書店に行けば「聖書物語」に類する本が並べられている。人物「イエス」を人々に広めたという点に関して言えば、聖書4福音書のそれを遥かに凌駕するものと言えよう。

「聖書物語」の先駆たるタティアノスの『調和福音書』。これがもともとの言語が何であったかは、分からない。完全な原著が存在せず、それに加えてタティアノスは「シリア語」のほかに「ギリシア語」「ラテン語」をよく解したためである。しかし、「シリア語」原著説が最有力である。

現在再構築される『調和福音書』は、大きく分けて次の6つの史料に拠っている。これらは「聖書物語」としての物語配列順序に注目した写本群である。古典シリア語の『調和福音書』写本は、残念ながら存在しない

#### \* 激越な調子について

タティアノスは自分の師ユスティノスが、哲人皇帝と呼ばれるマルクス・アウレリウス帝の下で処刑された。彼の激越な調子でのギリシャ・ローマ思想への容赦のない批判の背景には、このことがある。

## VII. 反グノーシス教師たち

使徒教父文書（イグナティオス、ディダケー、ヘルマスの牧者など）や二世紀後半の護教家たちは、ある特定の問題をめぐって書かれており、キリスト教教理全体は語っていない。

しかし、2世紀末頃からマルキオンやグノーシス主義に対抗する必要が生じてきた。正統教理の全体を語る必要が生じてきた。異端者の思索が包括的であったので、応答も包括的

である必要があった。体系的な著作が生まれてくる。

## 1. グノーシス主義 ベッテンソン pp68-71 エイレナイオス『異端駁論』

「グノーシス主義の特色は、人間の本来的自己がこの世的なものいっさいと本質的に無関係であるという『反この世的』存在理解と、それに即応して、人間の本来的自己が至高者と本質的に一つであるという、同質性の認識による救済である。

そして、このような救済の認識は、それが『反この世的二元論』を前提する限り、この世にある自己の側からは得られず、至高者の側から——多くの場合、彼から『遣わされた者』を通しての——『呼びかけ』によってのみ、啓示されるという特色を持つ。

そして更に、このような存在理解から来る救済への希求が客体化されたとき、グノーシス主義に独特な『神話論』が成立する。それは特定の民族とか国家的伝統に結合した一般的神話ではなく、むしろ、それらの神話から自由に素材を借用して、いつ、どこにでも成立しうる『創作神話』なのである。」

以上、まとめると、グノーシス主義の特色は

- ① 反この世的二元論
- ② 人間の本来的自己と至高者との同質性の認識
- ③ 至高者または彼から遣わされた者による知識の啓示
- ④ 超歴史的「創作神話」
- ⑤ それゆえ、広く地中海世界、インドーイラン世界、中国にまで認められる。

(荒井献 原典新約時代史 pp331-332)

わかりやすく説明すれば、グノーシス主義によれば、

- ① 人間は本来神と同質の存在であり、この世（物質世界）にあるのは仮のありかた、非本来的自己にすぎない。
- ② にもかかわらず、人は自分をこの世のものと思い込んでいるために、この世的なさまざまな苦しみを経験している。
- ③ そこで、この世にかかわる苦しみから逃れるためには、自分が本来神であり霊界に属するものなのだということに気づくことが必要である。
- ④ 自分が本来神なのだ気づくためには、霊界の側からの知識(グノーシス)の啓示が必要である。
- ⑤ 霊界からの啓示者はいろいろいて、ソクラテスもイエスもマホメットも仏陀もみなそうした啓示者であるということで、いろいろな創作神話が造られ、その啓示を受けることを霊媒術、今風に言えばチャネリングという。

## 2. 牧会者 リヨンのエイレナイオス (Eirenaeus, Irenaeus 130/40-200 頃) 西

論敵はグノーシス主義の異端。グノーシス主義は、もともとヘレニズム世界にあった救済観で、キリスト教を理解しようとしたもの。

エイレナイオスは牧師であって、今までに知られていない神秘を探求する哲学者や思想家ではない。彼の目的は教会の群れを健全なキリスト教的な信仰と生活に導くことにある。エイレナイオスは旧新約聖書をルカ的な救済史の観点から統合し、これこそがキリスト教なのだと示した（『使徒たちの使信の説明』）。これは内容的に見れば、今の時代でいう「聖書神学」の嚆矢である。彼は、独創を目指さず、使徒から引き継がれてきた教会の伝統を通して伝えられた使徒たちのメッセージを伝えようとした。彼は牧師であって、哲学的思索や神秘に深入りすることは、自分の仕事とは考えず、教会を健全な信仰生活に導くことを願っていた。

『偽りのグノーシスの暴露と反駁 *Elencos kai anatoph yudonumou gnoseos* (異端駁論 *Advertsus haereses*)』第3巻3章1節 ベッテンソン pp 114-116

「真理を見分けたいと願う者は、全世界のすべての教会の中にあらわされている使徒たちの言い伝えを、よく観察するがよい。」

同3章4節

「彼（ポリュカルポス）は常に自分が使徒たちから学んだ事柄を教えたが、教会はそれを後の人々のために伝えているのであり、またそれのみが真理である。」

同4章1節

「したがって、このように多くの証拠があるのだから、教会から容易に得られる真理を、他のところに求める必要はもはやなわけである。使徒たちは真理に関する事柄を何ひとつ残さずに、大銀行に預金するように教会にあずけたのである。であるから望む者はだれでも、教会から生命を引き出すことができる。・・・後略」『異端駁論』

『使徒たちへの使信の説明 *Epidexis tou apostolikou khrugma*』の梗概<sup>23</sup>

長らく題名のみ知られていたが、1904年、アルメニア語訳が発見された<sup>24</sup>。

1-3章 本書の執筆意図

4-42章 アダムから始まりキリストにいたる救済史全体が神の救いの営みである。

4-8章 創造主なる神、みことばであり御子なるキリスト、預言者を通して語った聖霊

9-15章 天地創造

16-23章 人間の墮落、ノアの契約

24章 アブラハム

25-28章 エジプト脱出、

29章 ダビデとソロモン

30-39章 キリストの受肉、受難と全人類の救い

40-42章 使徒たちの派遣と教会の成立

43-97章 キリスト教の啓示は旧約の預言にもとづき、イエスは救い主である。

43-52章 御子の先在

<sup>23</sup> 中世思想原典集成1 初期ギリシャ教父、所収

<sup>24</sup> 鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』新世社2002年、p15

53-67章 処女降誕と人としてのキリスト

68-85章 受難、復活、昇天

86-97章 キリストのわざに基づく新生、信仰、教会。

結び 98-100章 異端に対する警告

我々が旧新約聖書を通じての聖書神学で学ぶ教えのエッセンスはすでにここにある。ここで「聖書神学」というのは、G.Vosが *Biblical Theology* でいうように、教義学のような論理的体系順序ではなく、神が啓示をお与えになった歴史的(時間的)順序にしたがって、その真理の体系を把握する神学のことである。歴史を通して神の目的が表されていくという壮大な救いの歴史的な理解。

父と子と聖霊による創造と救済である。父は、その「両手」である子と聖霊によって万物を創造し<sup>25</sup>、また、これを救いたまう。救いの歴史とは「神による人間の教育過程<sup>26</sup>」である。創世記1:26「我々のかたちに」というのは父は子と聖霊に語りかけたことを示唆している(異端駁論IV20:1)。神は世界の創造のときに「良し」(創世記1:31)とされたゆえに、世界は善いものである。この点、グノーシス派の反世界的姿勢と反対。

神が人をご自身の似姿にしたがって創造した。そのご自身のかたちとは、受肉前のロゴスである。「似姿とは神の子であり、人間は似姿に造られたのであった。そういうわけで、終わりの時に似姿が彼に似ていることを見せるために現れた(1ペテロ1:20)であった。」

27

神が人を似姿として造った目的は、人を神に似た者として成長させることにある。また、神がイエス・キリストにおいて受肉したことは決して罪の結果ではなく、むしろ、神ははじめから人間と結ばれることを計画していらしたのである。しかし墮落ということが起こったために、目的にいたるために迂回することになった。時が来て神のロゴスは受肉した。アダムとエバは、もし成長と導きの歩みを完了したときには、受肉した神のロゴスに似た存在となるはずであった。実際には墮落してしまったので、受肉の目的の中に罪の治癒とサタンを打ち破る手段の提供が加わった。

完成のアダム

墮落前アダム

墮落後アダム

<宮村武夫先生からの『恵から恵へ』87号より>

I コリント15章50節を論敵は根拠に

---

<sup>25</sup> 駁論IV20-1

<sup>26</sup> 駁論IV37-7

<sup>27</sup> 『使徒たちの・・・』22章

「血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。」(I コリント 15 章 50 節) を口実に、エイレナイオスの論敵たちは主張します。「血肉のからだ」、つまりからだは神の国を相続できない、救いの対象ではない。それゆえからだをどのように用いても救いに関係ないと勝手気ままな生活に走ります。全体から孤立した聖句を口実に、物質を悪と見、からだを蔑視する考えをあたかも聖書の教えであるかのように主張し人々を惑わす論敵にエイレナイオスは鋭く対決します。

エイレナイオスは聖書を貫く三本の柱に注目し聖書全体の雄大な展開を視野入れながら、特定の聖句の意味を深く豊かに汲み取ります。

### (3) 三本の柱

#### ①天地の創造者と天地万物

創世記 1 章 1 節「初めに、神が天と地を創造した。」

目に見えないものも見えるものも、その全体を、創造者なる神が創造し、保持なさっているとエイレナイオスは強調。それゆえ目に見える万物の全体が、神の創造のみ業であり、また救済の歴史にその場を与えられていると雄大な広がり信仰の目を開く。

#### ②御子イエスの受肉の事実、真の神にして真の人

ヨハネ 1 章 14 節「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」

「子は受肉し、人となった時、人類の長い伝統を自分の中にまとめ、総括的に救いを私たちに与えた」(『異端駁論』三・18・1)。

からだをふくむ人間の全体、その意味で真の人となられたのです。それはからだを含む私たちの全存在が救いに与るため。

#### ③からだを含む全人格・全人間

人間をからだと魂、霊を分離してしまうのではない。からだを含む全存在が、聖霊ご自身の導きのもとに導かれ、父なる神の意志を行い、キリストの新しさへと新たにされる。

### (4) 結び

#### ①孤立聖句主義←→聖書全体を視野に入れつつ、その各部分を正しく解釈する。

聖書全体というとき、旧約聖書と新約聖書の両方を視野に入れ、特にその二つの関係に注意する。旧約聖書と新約聖書の一貫性。しかも、一つの有機体として、旧約から新約への美しい進展を見る。特に主イエスの受肉と聖霊降臨を中心として。

#### ②全人類の歴史とのかかわりの中で、神の民の歴史。さらに天地万物を常に意識しつつ、神の民全体の歩みを視野に。

#### ③このような雄大な救いの歴史のなかで、世界宣教の使命の自覚とその遂行。

## 3. 法律家・修辞学者 カルタゴのテルトゥリアヌス **Quintus Septimius Florens Tertullianus (150 頃-220 頃)**・・・西ラテン語で書物を書いた最初の神学者

### (1) <生涯>

(150 頃-220 頃)生涯についてはほとんど知られていない。北アフリカのカルタゴに生まれ、ローマで 40 歳ころに回心。異教徒に対してキリスト教信仰の弁明の強力なチャンピオン。

道徳的な厳格主義。207年頃、モンタノス運動に走る。

## (2) アテネとエルサレム

「(グノーシス主義、マルキオン、エピクロス派、ゼノン、ヘラクレイトス、ヴァレンチヌス、アリストテレスたちを批判した後に……)アテネとエルサレムと何の関係があるか。アカデミアと教会は何の関係があるか。……ストア的、プラトンの、あるいは弁証的キリスト教を生み出そうとするすべてのもくろみを廃棄せよ。キリスト・イエスを知った後には、われわれはもはや、巧妙な学説や、福音についての鋭い詮議立てなどは求めないのである。」(異端者への抗弁1:7) ベッテンソン pp27-28

アカデミアとはアテネ梗概のアカデモスを祀る聖域にプラトンが建てた学園。つまりテルトゥリアヌスは、非キリスト教古典文化と、キリスト教はなにも関係ないとした。こういう立場を、旧来は、アテネを理性の立場とし、エルサレムを啓示の立場として、「理性と啓示は何ら関係ない」という考え方とした。

## (3) 法的な精神

彼は、法律家であり、修辞学にたけていた。その文章には法的な精神がみなぎり、レトリックは強烈。

例>『異端者への抗弁(praescriptio)』

praescriptioとは「異議申し立て」という意味で、訴訟手続きが不適切であるとして訴訟取り下げを求めること。彼は正統主義キリスト教会と異端との間の裁判のごとくに捉えて、praescriptioを論じる。すなわち、異端者は教会と論じる権利がないという。なぜなら、聖書は何世代にも渡って正統な教理を継承してきている教会に帰属するものであるのに対して、先ごろ出てきたばかりの異端者は聖書の所有権を主張する権利がない。今ごろ聖書を横取りして勝って気ままに使うのは、不当である。

テルトゥリアヌスは哲学的思弁を排す。ひとたびキリスト教真理を見出したら、もうそれ以上の探求は放棄すべきである。

「君は真理を見出すまで捜し求めるがよい。しかし、ひとたび真理を見出したならば、それを信じるべきだ。それから先、君がすべきことは、信じたことを保ちつづけることだけだ。」(異端者への抗弁8)

全能の神にとって何が可能かを議論するのは時間の無駄であり、危険なことだ。私たちが尋ねもとめるべきは、神に何が出来たかではなく、神が実際にどのようなことを行なったかである。

## (4) 厳格主義からモンタノス主義へ

207年頃テルトゥリアヌスはモンタノス主義に走る。理由は不明。彼の性分からして、なまぐらに成ったカトリックに愛想が尽きて、モンタノス主義の道徳的厳格主義に魅力を感じ

じたのであろう。

テルトゥリアヌスの最後の三文書「一夫一婦制について」「断食について」「つつしみについて」は、当時のローマ教会に浸透してきた不道德に対する告発である。ここで彼は叫ぶ、「おまえが霊を消してしまったのだ」「おまえが慰め主（パラクレートス）を追い払ってしまったのだ！」（グッドスピード p270）

#### （5）神学的功績

『プラクセアス駁論 Adversus Praxean』

また、テルトゥリアヌスの偉大な功績は、後に正統主義の旗印となる三位一体論、キリスト論に定式を示したこと。

『プラクセアス反駁』プラクセアスはパトリパッショニズムを唱え、様態論を唱えた人らしい。

三位一体を東方の弁証かテオフィロスの trias というギリシャ語から trinitas というラテン語を作り出した。そして、その定式として「una substantia tres personae(一つの実体・三つの位格)」と表現した。

キリストにおける神性と人性については、「utraque substantia in una persona(一つの位格における二つの実体)」として論じた。

「テルトゥリアヌス・・・神の実体においては子と父は同質、人的実体においては完全な人性であり、これら両実体が一人格イエスのうちに並存する。ニカイア・キリスト論の同質論も、カルケドン・キリスト論の二性一人格論も包有される。(キリスト教大事典)」

注：「実体 substantia :さまざまに変化して行く物の根底にある持続的なもの。そうした変化に様態を変えながらも、同一にとどまり、次々に現れる諸性質の担い手として考えられるもの。」(岩波哲学小事典)

## 4. 哲学者 アレクサンドリアのクレメンス Titus Flavius Clemens 150-215AD

### (1) 生涯

彼はエイレナイオスのような司牧者たちとちがって、哲学者・思想家であった。教会の伝統的な信仰をまとめたのではなく、より深い真理を探究しようとするものを助け、異教徒にはキリスト教がおろかな迷信でないことを納得させようとした。彼のあとにオリゲネスが続く。オリゲネスの先生。

おそらく 155-160 年ごろアテネ生まれで異教徒の家庭に育ち、各地で哲学を学ぶが満たされず、ついにキリスト教に回心する。2世紀半ば、アレクサンドリアには史上最初のキリスト教徒による塾ディダスカレイオンが設立され活動していた。クレメンスは、このディダスカレイオンでパンタイノスに学び、その後をついでアレクサンドリア学校の校長となる 190 年頃。洗礼志願者のための教会立の教理カテケーシス学校と、個人教授を中心とする塾ディダスカレイオンははっきりと区別されていた。

## (2) 学都アレクサンドリア——松岡正剛より

「アレクサンドリアは世界最大の人工都市、学芸都市、マケドニア人とギリシア人とユダヤ人が密集していたといっただけよい。70万巻の図書館「ムセイオン」。人口100万。ヘレニズムの牙城というものだった。『旧約聖書』のギリシア語訳（七十人訳聖書）もそのころできあがっている。が、その成果をオリゲネスが受け継いだのではない。アレクサンドリアの学芸は紀元前でいったん衰退している。

（プトレマイオス朝の三代の王たちがここアレクサンドリアを築き、50万とも70万とも言われる東西の蔵書を抱える図書館ムセイオンがあった。しかし、カエサルがプトレマイオス朝を打倒したときに、火をかけてしまったのである。）

ようするにアレクサンドリアの繁栄と過熱はキリスト出現以前のこと、『新約聖書』到達以前のことだったのである。

それが別の容姿をもって復活してくるのは、キリストとほぼ同世代のフィロンが登場したころ、ここにネオプラトニズムとグノーシス主義が芽生えてからのことなのだ。

フィロンはユダヤ人であるが、この"復活アレクサンドリア"の人はユダヤ教というよりも、ネオプラトニズムとグノーシスに通じていた。フィロンだけではない。多くのヘレニックなユダヤ人はそういう趣向をもっていた。つまりは、ここにはまだキリスト教が進出していない時期、すでに異教異端の炎が燃え上がっていたということになる。

2世紀、パンタイノス、クレメンス、オリゲネスを生んだアレクサンドリア教会が産声をあげたのは、こうした背景の中だった。オリゲネスがネオプラトニズムとグノーシス主義の渦中で「原点としてのキリスト教」を確立しようとしたのは、こういう事情と関係している。」

## (3) クレメンスの著書・神学

『ストロマテイス(雑録集)』1:5:28 ベッテンソン p p 28-29

「……ちょうど律法がヘブル人を導いたように、哲学はギリシャ精神をキリストに導く養育係であったからである。このように哲学は、キリストにある完成への道をかためる準備であった。」

『ギリシャ人への勧告』

「わたしはただ神の働きを知るのではなく、神を知ることを探求している。だれが、わたしの探求を手助けしてくれるだろうか。……どうやって、おおプラトンよ、神を尋ねもとめることができるのか。」

とあるように、キリスト教教理のかなりの部分がプラトンの哲学によって支持されると考えた。彼は真理は一つであると確信していたから、プラトンの中に見出される真理は、聖書においても真理と同じだと信じたのである。

<信仰と理性の関係>

フスト・ゴンサレス p 88 「クレメンスによれば、信仰と理性とは相互依存的に深く関連している。理性は、信仰によって受け入れるしかない証明不可能な第一原理に依拠して論理を展開する。知恵ある者にとって、信仰は第一原理であり、その上に理性が築かれるべき出発点である。しかし、信仰だけで満足して、理性を用いて信仰の上に何も築こうとしないキリスト教徒は、ミルクだけで満足している幼児に等しい。」

神とは

「神は、隠喩と否定用語によってしか語るこのできない表現し得ない一である。人間は神について「神は・・・ではない」と語ることしかできない。

いわゆる否定神学ということである。たしかに、有限なわれわれが、無限なお方を語ることはむずかしい。無限という言い方自体、限り無しという否定の表現である。

クレメンスの主張の個々のことがらよりも重大なことは、アレクサンドリアのクレメンスのようなプラトン哲学の影響を受けた神学のありかたは、この後のキリスト教神学の形成に大きな影響を与えることになったということである。その弟子のオリゲネスは、さらにこれを発展させる。

## 5. 大神学者 アレクサンドリアのオリゲネス WRIGENOUS Origenes

キリスト教会教父のうち西方の最大の人アウグスティヌスであり、東方教会ではオリゲネスである。

松岡正剛によるオリゲネス紹介 <http://www.isis.ne.jp/mnn/senya/senya0345.html>

「全ヨーロッパの思想はすべからくプラトンとオリゲネスの注解にすぎない」あるいは「ヨーロッパ 2000 年の哲学史はプラトンの註にすぎないが、ヨーロッパ 2000 年の思想はすべてオリゲネスが用意した」などと、ヨーロッパ思想史のどんな本の冒頭にも書かれているにもかかわらず、[プラトン](#)はともかくも、オリゲネスについては日本ではキリスト教の研究者をのぞくと、あまり語られてこなかった。」

オリゲネスは古代世界最大のキリスト教学者であり、その著作はエピファニオスによると 6000 の文書だという。ヒエロニムスは、「いったい誰が、オリゲネスの著作全部を読むことができようか。」と言った。

### (1) 生涯

オリゲネスは 184-85 年頃アレクサンドリアに生まれた。信仰と愛に満ちた敬虔な父レオニダスはキリスト教教師であり、セプティムス・セウェルス皇帝による 202 年の迫害のとき、殉教した。このとき、オリゲネスはともに殉教することを望んだが、母が彼の着物を隠していたために外出することができず殉教できずに終わった。オリゲネスは生涯、この父を誇りとし自らも順境を望んでいた。ときに 18 歳のオリゲネスは司教デメトリオスによって教理学校（カテーケーシス）の教師に任命され、211 年に迫害が終わり校長となる。昼間は求道者を教え、夜は睡眠を忘れて聖書研究に没頭し、眠るのも寝台を使わずに床に直接寝るといふ清貧の生活をした。オリゲネスの学識とその敬虔な生活は有名になって多くの人々が押し寄せた。

アンブロシオスという金持ちでグノーシス異端からの回心者が、オリゲネスのために七人の速記者を雇い、218年オリゲネスの口述著作を始めた。最初に着手したのが、テトラプトラ（四欄組対訳旧約聖書）とヘクサプラ六欄組対訳旧約。聖書12年間の働きをした。これがアレクサンドリアの第一期。

その後、パレスチナのカイザリヤに転じ、また217年アレクサンドリアに戻り13年再び学校で教えた。これが第二期。

230年から、『諸原理について』問題で、カイザリヤにしばらく移住。ここでも説教、研究、著述。

232年頃カイザリヤで司教テオクティオスから司祭叙階を受ける。翌年デメトリオスは激怒し、これを不当として時のローマ司教に訴え、オリゲネスは「悪魔も救われる」と言ったとのことで異端とされる。本当は「悪魔も救われうる」と言ったのだが。これが理由でアレクサンドリアを永久に去ることに。

249年デキウス帝即位。その迫害のとき、オリゲネスは鎖につながれ、種種の拷問を受け、鉄の上に寝かされ、冷たい泥うに東国され、責め具によって又裂きされ、火で脅かされながら耐え忍んだ。しかし、出獄後まもなく死亡。254年69歳だった。

<参考>小高毅「オリゲネスの生涯」（オリゲネス『諸原理について』小高訳所収）

## P. ノータンによる年譜(新説)

- 185±2    オリゲネス、アレクサンドリアに誕生
- 201±2    オリゲネスの父(レオニダス)が殉教
- 203-205    勉学に専心する
- 206-210    迫害の渦中で幾人かの若者たちのキリスト教教師となり、その内の幾人かが殉教する。
- 211-217    迫害後も文法学を教えながら、キリスト教を教える。
- この頃、世俗の書物売り、キリスト教の教授に専念する。
- 215-221    この頃、ローマに数ヶ月滞在し、アレクサンドリアに帰還後、『テトラプトラ』の編纂に着手する。
- オリゲネスの後援者アンブロシオスが回心する。
- 222-229    アンブロシオスが速記者と写字生を雇って、著述活動を促す。

『詩編注解(I-V)』

『ストローマタ(雑録)』

『本性について』

『復活について』

『カンディドゥスとの対話』

『哀歌注解』

この時期の終わり頃、アラビアに旅行する。

229-230 『創世記注解』の最初の数巻

『諸原理について』、この試論が物議を醸し出し、パレスティナに赴く。オリゲネスはその地で、カイサリアの司教テオクティストスとエルサレムの司教アレクサンドロスの要請に乞われて、説教をする。

231 アレクサンドリアに戻る。

『ヨハネによる福音注解(I-IV)』

231 冬 アンティオキアで、アレキサンデル・セヴェルス帝の母ユリア・マンマイアにキリスト教を  
-232 説く。

232 春 アレクサンドリアに短期間滞在する。

『ヨハネによる福音注解(VI)』の下書き

パレスティナを經由してギリシアに赴く。

カイサリアで、当地の司教テオクティストスから司祭叙階を受ける。しかし、アレクサンドリアの司教デメトリオスがこれに抗議し、ポンティアヌス教皇に上訴する。

233 春 アテネにおいて、エルサレムの司教アレクサンドロスからデメトリオスによる非難を知らされる。かれは自伝的書簡でこれに答えている。

234 カイサリアに戻る。

『ヨハネによる福音注解(VI)』

『創世記注解(後半)』

『祈りについて』

幾つかのスコリア(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)

235-238 キリスト教への迫害が再開する。

『殉教の勧め』

カッパドキアのフィルミリアノス、パレスティナに避難

238-244 『ヨハネによる福音注解(XXII-XXXII)』

238 年後半頃、テオドロス、オリゲネスに師事する。

239-242 エルサレムにて数々の聖書講話を行なう。

詩編、箴言、伝道の書、雅歌、ルカによる福音	コリント前後
ヨブ記、イザヤ書、エレミア書、	
エゼキエル書、創世記、出エジ (ヨハネによる福音?)	ガラテヤ
プト記、レビ記、民数記、申命	
記、ヨシュア記、士師記、サム	マタイによる福音
エル前	テサロニケ
	テトス
	ヘブライ
	使徒行録

この時期(239-244の間)、アラビアにて、司教ヘラクレイデスに対する教会会議に出席。この時の談話が『ヘラクレイデスとの対話』として現存。

243 『使徒行録注解』

244 『イザヤ書注解』 『イザヤ書スコリア』 『エゼキエル書注解(前半)』

245 この頃、論考『過越について』執筆。

テオドロスがオリゲネスのもとを去る際に、『謝辞』を残す。

第二回アテネ旅行

『エゼキエル書注解(後半)』 『雅歌注解(I-IV)』

ニコポリア旅行。この時、五番目の聖書のギリシア語訳本を見出した。

245/246 ギリシアまたはカイサリアにて『十二小預言書注解』

246-247 カイサリアにおいて

『雅歌注解(後半)』 『詩編注解』 『箴言注解』 『伝道の書スコリア』

オリゲネスのかつての助手アレクサンドリアの司教ヘラクラスが、オリゲネスを論難する書簡をローマ教皇ファビアンヌスに送る。この時オリゲネスは、『アレクサンドリアの友人たちへの手紙』を書く。

248 ニコメディアにいるアンブロシオスのもとに滞在する。

『ローマの司教ファビアンヌスへの書簡』『アラビアのフィリポとセヴェラ皇后への書簡』『カッパドキアのフィルミアノスへの書簡』『ヨハネによる福音注解(第32巻)』『ヨハネによる福音スコリア』

249 カイサリア(あるいはツロ?)において

『ケルソスへの反論』

『ルカによる福音注解』

『詩編スコリア』

『マタイによる福音注解』

249-251 投獄されて拷問を受ける。

251年6月 拷問の傷がもとで死去。

月以降

Origene I: Sa vie et son oeuvre, Paris, 1977, pp.409-412 参照

## (2) オリゲネスの著述

本文研究、聖書解釈、神学的考察、護教論、手紙の五分野に分類される。

①本文研究の集大成は『ヘクサプラ六語対照旧約聖書』9000頁の大著。四つの旧約聖書の版を、ヘブル碁盤、ヘブル語のギリシャ文字表記版と並べて段組をして、研究を容易にした。

②聖書解釈。

注釈 scholia、

説教 homilia。60歳まで書き取ることを禁じた。それでも旧約にもとづくものは444、新約に基づくものが130。

注解書 comentarium は旧約177巻、新約114巻に上る。現存するのはわずか5パーセントのみ。その解釈は詳細なもので、たとえばアレクサンドリアで最初に着手しカイサリアで完結した『ヨハネ注解』はに十数年を要している。現在、全体が残ってはいない。1章から13章33節までで32巻あり、第一巻は1章1節 en arch hno logos. の注解である。

③神学

『諸原理について(原理論)PERI ARCWNTOMOI D De principiis LibriIV』 小高毅訳あり 創文社

『復活について』

④護教論

『ケルソス駁論』・・・これは先に紹介したとおり。

(3) 思想

「(中略)

215年前後のこと、カラカラ帝がアレクサンドリアを訪れた。このとき、学生たちがこのローマ皇帝に猛反発をした。怒った皇帝は学校を閉鎖し、学生を虐殺し、教師を追放しようとした。オリゲネスは知人たちの勧めで、このときカッパドキアに落ちのびたのだ。

オリゲネスはカッパドキアで娘に救われ、さらにパレスチナまで赴いている。この逃亡と巡礼がオリゲネスを変えたのである。しかしそれとともに、グノーシスとの全面対決姿勢は融和されていた。グノーシスを探りこみつつも、キリスト教思想を確立しきってしまうこと、それがオリゲネスの目標になったのだ。のちにポルフィリオスが書いたように、その試みはヘタをすれば「外国の寓話にギリシアの理念を導入した」ともとられかねないものだった。

しかし、オリゲネスは聖書に戻ってこれをなしとげた。そしてグノーシスからの摂取はあえて断片におさえ、さらに暗示にとどめるように工夫しきったのである。もっと正確に言えば（キリスト者の側からの言い方をすれば）、オリゲネスはグノーシスを本来の意味における「知識」（もともとグノーシスとは「知識」という意味である）として使える方法をつくりだしたのだった。

もしこのような試みをオリゲネスが確立していなかったならば、その後のキリスト教思想もヨーロッパ思想もどうなっていたかはわからない。だからこそ、オリゲネスの試みは「ヨーロッパ2000年の思想の原点」と言われるにいたったのだった。最初の聖書神学の誕生だった。

オリゲネスはその新たな知的拠点づくりの表現にあたっては3つのスタイルをとっている。スコリア（評注）、ホミリア（講話）、コンメンタリウム（注解）である。

この方法は、グノーシスを捨てないでグノーシスに犯されないためにはすこぶる有効な方法だった。オリゲネス得意の編集術といってもいいだろう。こんなことができるのは、オリゲネスが若い日にプラトンやギリシア語に通じていたせいだとおもわれる。

次に、キリスト教の神学的10原則ともいべきを打ち立てた。小高毅さんの説明を借りつつまとめなおすと、ざっと次のようなものである。

1. 唯一の神が存在し、万物を秩序づけ、それ以前の宇宙の存在を準備していたということ。
2. イエス・キリストはすべての被造物に先立って処女と聖霊から生まれたということ。
3. イエス・キリストは人間の身体と喜怒哀楽をもちえたということ。

4. 聖霊が予言者と使徒たちに靈感を与えつづけたのであるということ。
5. 魂には実体と生命があり、この世を去ったのちには永遠の至福か永遠の罪業をうけるということ。
6. 死者には復活があり、そのときは朽ちない身体をもちうるということ。
7. そもそも理想的な魂というものがあり、それは自由意志と決断をもっているということ。
8. 霊には善なる霊とともに、それに逆らう悪なる霊があるということ。
9. この世はつくられたものであるゆえに、どこかで終末があるということ。
10. 聖書は神の霊によって書かれたものであるのだから、そこには隠された意味が含まれているということ。

たしかにこれだけの 10 原則を打ち立てれば、だいたいの問題が入ってくる。唯一神を戴いたヨーロッパ思想の議論の多くがここから出ていることも見当がつくだろう。とくに 10 がグノーシスを意識したことである。

こうして、オリゲネスはいっさいの神学的原点に屹立する最初の思想者となった。ヒエロニムスもアンブロシウスも、[アウグスティヌス](#)もロレンツォ・ヴァラもエラスムスさえも、すべてはオリゲネスが源流なのである。」

オリゲネスはその自由主義的傾向ゆえに後年批判の対象とされ、400 年にはローマ司教アナスタシウスに異端宣告されてしまう。それでも、大神学者であったことは間違いない。

## 5. 「理性と信仰」あるいは「自然 *natura* と恩寵 *gratia*」という課題

### (1) 伝統的な枠組み

① 理性と信仰は無関係だという立場。

「エルサレムとアテネに何の関係があろうか」「不合理なるがゆえに信じる」と言ったのはテルトゥリアヌス。そして、近世ではルター、近代ではキェルケゴールが類似の傾向。

② 理性に信仰が接木され、あるいは総合されるという立場

ユスティヌスないしオリゲネスの立場。中世のトマス・アキナスのことばで言えば「恩寵は自然を破壊せず、むしろ完成する」となる。

### (2) 「理性と信仰」の聖書に基づいた再検討

#### a. 対立の原理

従来、理性と信仰が対立していると思われてきた。しかし、そうだとすると、不信者は理性的であり、信者は非理性的ということになる。信仰とは非合理であるということになる。しかし、聖書的な信仰は非合理主義を意味していない。理性の限界をわきまえながら、これを適切に活用するのが聖書的な信仰である。実は、「理性と信仰が対立する」という枠組みがまちがっている。

「理性 VS 信仰」という場合、理性は非再生者においても再生者においても共通であり、

理性は自律的であるというドグマがあった。しかし、現実はそうではなく、＜再生者の信仰＞と＜非再生者の信仰＞が対立しており、＜再生者の理性＞と＜非再生者の理性＞が対立しているのである。

R. デカルトは『方法序説』で理性が、すべての人に平等に配分され、再生者・非再生者の別なく共通する能力であるとする。「良識がソフィアはこの世でもっとも公平に配分されているものである。…中略…正しく判断し、真偽を弁別する能力—これがまさしく良識、もしくは理性と呼ばれているところのものだが—は、生まれながらにすべての人に平等であることを立証している。」(小場瀬卓三訳)

この理性の自律という理念は、近世に始まったことではなく、古代教会以来のものである。理性の自律を認めるからこそ、神学的営みに非再生者である哲学者プラトンやアリストテレスの教説が公然と利用されていた。ユスティノスの立場やトマス・アクワナスの立場はあからさまにそうであるが、理性を排するテルトゥリアヌスにおいても理性の自律という概念が背後に隠れている。だからこそ、理性ではなく啓示だとした。

聖書的にこの問題を再検討してみるときにわかることを以下に簡潔にメモする。

第一に、人間理性は墮落前から、自律的なものではなく、神のことばの支配下でこそ正常に機能するものとされていた。「善悪の知識の木」は、人間理性は制限されていたことを示している。(創世記 3 章)。アダムが善悪の知識の木の戒めを破ったことは、理性の自律を求めたことを示している。

第二に、人間の墮落の影響(腐敗)は意志ばかりでなく、理性にまで及んでいる(ローマ 1:21-23、エペソ 4:18、1 テモテ 6:5、2 テモテ 3:8 テトス 1:15)。理性は、墮落後、正常に機能しなくなっている。

第三に、そもそも知性はそれ自体で中立的には機能しえない。理性は、ある信仰を前提とし、その信仰のめざすところに沿って機能する。「主を恐れることは知識の初めである。」(箴言 1:7)というのは、再生した知性は主を恐れることを根本原理とし目的として機能するということを言っていると理解される。

逆に、「愚か者は心の中で、『神はいない。』と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行なっている。善を行なう者はいない。」(詩篇 14:1)とあるとおり、無神論者は、無神論的前提で知性を活動させる。その理性は、神抜きで人間中心的・自然主義的・無神論的に考え、神を中心に考えることは愚かしく、神ぬきで考えることが賢明だと思いつむ。

第四に、人がキリストの贖罪を受け入れ神との関係が正常化され再生すると、全人格が聖化の過程をたどり始める。再生した理性は神をあがめることを目的として機能する。しかし、再生者とはいえ、聖化の途上にあるので、不完全である。肉の思いと御霊の思いは再生者のうちで対立し葛藤が生じる(ガラテヤ 5:17)。

## b. 関係の原理

では、非再生者と再生者どのような点で関係しているか? デカルトのことばが説得力を持ち、プラトンやアリストテレスの方法がある程度神学的営みに有効に用いられ得るように見えるのはなぜなのか。再生者と非再生者との間には対立と同時に関係があるからで

ある。

非再生者であっても、本来的に、神のかたちとして造られ、墮落後もそれは残っている(創世記 9:6)。非再生者の心にも律法の命じる行ないがある(ローマ 2:15)。カルヴァンのいう「神聖感覚」「宗教の種子」である。

H.ドローウェルトによれば、世界は多様な意味の法領域(様態的側面)から成っており、それぞれに領域主権があり相互に還元できない<sup>28</sup>。この意味ある世界の統一極は、この世界の創造主をおいてほかにはない。しかし、創造主を無視した人は、被造世界の一側面に全体を還元して全世界を統一的に把握することを望み、さまざまなイズムが生じるが、これは思想的偶像礼拝である。

また、その単純な側面においては、非再生者と再生者との認識は表面上共通しているように見え、複雑で信仰にかかわりが深いほど、両者の違いが明瞭になる。たとえば、数的領域や物理的領域においては再生者・非再生者を問わず、表面上、理性は共通した認識を持ちうるように見えるが、歴史や道徳や信仰において両者のちがいは明瞭になる。

## VIII. 異端の出現と正典・信条の成立

### 1. キリスト教グノーシス主義・・・キリストの史実性を否定

a. ドケティズムキリスト論：キリストはあくまでも霊であり、物質(肉体)は悪なので、受肉はありえない。キリストの人としての出現は仮現的。

b. ケリントスのキリスト論：人間イエスの肉体に一時に宿った(憑依)にすぎない。受難の前にキリスト霊はイエスを離れた。

c. 聖霊キリスト論：キリストははじめ霊なる父と一つだったが、イエスにおいて肉体をとってこの世に来られ、十字架において肉体を取り去って再びキリストとして昇天した。

d. 養子的キリスト論：人間イエスとその模範的行為のゆえに神の子に採用され、知識をもたらす。

### 2. マルキオン主義 2C ベッテンソン p 71

マルキオンは黒海沿岸ポント州シノペの裕福な船主だった。司教である父に破門され、140年頃ローマに上り、自説をうけ入れられるように運動するが、144年に異端として排され、自分で教会を作ってしまう、その新教会は急速に広がる。10世紀頃までマルキオン主義の痕跡が見える。

善悪二元論の構造がグノーシス主義に類似しているが、別のもの。グノーシス主義は基本的には個人的な悟りのための営みであるが、マルキオン主義は教会を形成した。マルキ

---

<sup>28</sup> 15の法領域 (the law spheres, the modal aspects) 単純なものから、①数的領域、②空間的、③運動的、④物理化学的、⑤生物的、⑥感覺的、⑦分析論理的、⑧歴史的、⑨言語的、⑩社会的、⑪経済的、⑫美的、⑬法的、⑭道徳的、⑮信仰的

オンは黒海沿岸のシノペの司教を父に持つ。マルキオン主義は数世紀にわたって正統的な教会に対抗しつづける。

マルキオンは反ユダヤ主義、反物質主義。思想内容はグノーシス主義とよく似ている。

この物質世界を創造したのは悪か無知なヤーウェである。イエスの父なる神は旧約のヤーウェとはべつである。ヤーウェはきまぐれな義なる神にすぎない。

キリストの父なる神は、愛の神であり、ヤハウエをはるかに超える神である。この神は復讐の神ではなく愛の神であり、私たちに何をも要求せず、むしろすべて無償で与えるお方である。

イエスはマリアから生まれたのではない。もしそうなら悪である肉体を彼女から享けたことになる。イエスは皇帝ティベリウスの治世に突然成人した姿で出現した。

終末の審判をも否定した。神は愛の神だから。

マルキオンは旧約聖書を否定した。新約正典の結集を試みたのは 140 年頃のマルキオンが最初である。マルキオンは旧約聖書の創造主なる神と、キリストにあって啓示された父なる神を区別した。神学的反ユダヤ主義である。そこで彼は、ユダヤ臭の少ないルカ福音書からユダヤ的部分を削除したものと、パウロ書簡から三つの牧会書簡を除いたもののみ OK とし、これらに含まれる旧約聖書の引用を排除した。これは、意図的な教会の正統路線からの逸脱だった。

旧約聖書を受け入れるか受け入れないかによって、異端と正統が分かれたことに注意すべきである。一見、受け入れないほうが簡単に思われるかもしれないが、キリストご自身や使徒はこれを受け入れたのである。

### 3. モンタノス主義——聖霊主義運動・再臨運動 ベッテンゾン pp125-126

157 年頃、小アジアのフルギアでモンタノス（-170）によって始められた運動。聖霊が教会に急速にそそがれることを待望して、その最初の顕現をかれが見たという。

モンタノスと女預言者プリスカとマクシミラとともに熱狂的。天のエルサレムがフルギアのペプザに下り、世界の終末が来ると預言した。

この運動はアフリカに移って禁欲主義化し、再婚、迫害されたときの逃亡を禁止、断食を勧めた。テルトゥリアヌスまでこれに加わって急速に拡大。ローマ、ガリアー帯にひろがったが、モンタノスと女預言者が市に、世界の終末も到来しないので衰退した。

「ハルナックは、モンタノス運動は教会の組織化、世俗化をとどめ最初の状態に戻そうとする熱意の表れであると理解する。しかし、この運動はキリスト教史に絶えず現れる黙示主義的グループのごく初期の一例として理解するのがもっとも適切であろう。」（キリスト教大事典）

聖霊主義運動の一つである。熱心はよいのだが、そして奇跡や超自然的癒しまでは、よしとしても、問題は聖書の啓示を超えた啓示を受けたと主張し始めたならば、それははず

れ異端になってしまうという教訓を学んでおくべきである。

#### 4. 異端への対応としての正典の確立

異端のマルキオンが 140 年頃、彼の正典を作った。正統な教会としては新の正典がなんであるかを知る必要があった。この必要はすでに教会が始めていた正典確定をはやめることになった。

##### (1) 旧約正典

###### a. 基本資料

AD37、エルサレムの祭司の家のヨセフスの証言『アピオン駁論』1：8

「われわれは互いにくいちがったり矛盾したりする万卷の書を抱えているのではない。ただ、あらゆる時代についての記録を有する 22 巻の書を有している。それらは、まさしく神聖なものと信じられている。

そのうち 5 巻はモーセによるもので、彼の律法と彼の死にいたるまでの人間の伝承を含んでいる。この期間は三千年に近い。モーセの死後、クセルクセスの次に即位したペルシヤ王アルタ・クセルクセスの統治の時までに起きたことがらを 13 巻の書に書き残した。そして残りの 4 巻の書は神にささげる賛歌と人間生活のありかたに関する考察を含む。

このアルタ・クセルクセス以後、われらの時代までのすべてのことも記録されてきた。しかし、それらの規則には上に挙げた書と同等の価値を有するとは認められない。なぜなら、正しき預言者の継承は終焉していたからである。

われわれがいかなる信仰をわれわれが有するこれらの書に置いているかは、我々の取り扱いによって明らかである。すなわち、今日にいたるまで、長い年月が経ってきているにもかかわらず、誰一人これらの書に加えよう、省こう、改変せんとしたものはいなかった。」

###### b. 証言者フラウィウス・ヨセフス (Flavius Josephus, 紀元 35 年?-紀元 100 年)

外典を認めたいリベラルやカトリックはヨセフスの証言を、一般民衆の考えだとか個人的なものなどといって貶めようとするが、ナンセンス。ヨセフスは祭司の家の大学者、ユダヤ人である。また議論の文脈はアピオンへの駁論という公的なものであるから、個人的見解ではありえない。ヨセフスは最高の資格をもつ証言者である。

またリベラルは旧約のある書(歴代、エズラ、ネヘミヤ、エステル、ダニエル、伝道)はアルタ・クセルクセス後だと推論して、ヨセフスの見解を否定するが、それは自然主義的前提に立つ正典発達説によるものにすぎない。

###### c. 旧約正典の巻数

22 巻 (= 5+13+4)

五巻 : 1 創世記、2 出、3 レビ、4 民、5 申

十三巻 : 6 ヨシュア、7 士師・ルツ、8 サムエル、9 列王、10 イザヤ、11 エレミヤ・哀歌、12 エゼキエル、13 十二小預言書、14 ヨブ、15 エステル、16 ダニエ

ル、17 エズラ・ネヘミヤ、18 歴代、  
四巻 : 19 賛歌(詩篇)、20 箴言、21 伝道、22 雅歌

#### d. 旧約正典各書の權威と保存

正典に含まれる各書は、長い年月を経て進化論的に徐々に權威を得たのではなく、最初から權威持つものとして扱われた。ユダヤ人たちは写本後、文字数を確認するまでしてこれを保存した。それぞれの書が神の書として信じたからである。

#### e. 旧約正典完結の年代

ヘブライ語聖書は紀元後1世紀の終わり90年頃にパレスチナのヤムニアで開かれたラビの会議において公認されたという現代のグノーシス主義であるニューエイジ運動を背景とした俗説がある。が、事実がちがう。旧約正典は、はるか昔、アルタ・クセルクセスの時代(465-424BC)に完成した。マラキはこの最後の預言者であると一般に理解されていた。

第一マカベヤ9:27「かくてイスラエルに、預言者の彼らに現れずなりしときよりこのかた、いまだなかりしほどの大いなる艱難起これり。」同15:41「しかして、ユダヤびとらと祭司らとは、まことなる預言者の怒るまで、いつまでも、シモンが彼らの指導者たり、大祭司たることを定めたり。」マラキ後、バプテスマのヨハネまで預言者は出現しない。

ヤムニア会議は、これを確認したにすぎない。今日もユダヤ教ではプロテスタントの旧約39巻を正典として持つ。

#### f. 旧約正典の結集

宗教改革時代の大ラビであるエリヤス・レビタによると、エズラと120人の助手たち(いわゆる the great synagogue)によるとされ、ルター、カルヴァンもこの見解を受け入れ、歴史的状況からみても妥当な見解。紀元前5世紀。

ただし結集したから權威が生じたのではなく、權威ある書を結集したのである。

#### g. 七十人訳の問題

アレクサンドリアのユダヤ人学者フィロは著書で旧約聖書に言及するが、外典への言及はない。彼は七十人訳を使用していたにも関わらず、外典からは何ひとつ引用しない。旧約聖書の一部とは考えられていなかったか、あるいは当時の七十人訳には外典は含まれていなかったと推測される。今日七十人訳聖書と呼ばれる書には正典にないものが含まれている。今日の七十人訳はすべてキリスト教的な者で、マリアの賛歌が含まれる。これが古代のアレクサンドリアのものと同じとはいえない。

#### h. 外典問題

いわゆる外典は初めの三世紀間、教父たちユスティノス、テルトゥリアヌス、オリゲネス、ヒエロニムスらによって一致して否認されていた。4世紀半ばから外典が重んじられたが、ヒエロニムスは言う「それゆえユディト書、トビト所、マカバイ書を読むからといって、

教会はそれらの書を正典として受け入れたわけではない。この知恵の書と集会書が読まれるのも人々の訓育のためであって、宗教の教理を証明すべきものとしてではない。」

外典12書が正典とされたのは、1545-63年の反プロテスタント会議であるトレント会議の第四会議のことにすぎない。

## 結論

ヘブライ語聖書がキリスト教正典に含まれることは、最初から教会は一致していた。福音書や書簡は<旧約は新約の預言、新約は旧約の成就であり、旧約は新約の影であり新約は旧約の本体である>とあらゆるところで語っている。マルキオンが偏愛するパウロ書簡やルカ福音書においてさえそうである。(ルカ 24:44、ローマ 3:21)

主イエスは旧約聖書を神の言葉として引用しており、かつ、外典からの引用は一度もなさっていない。また、旧約聖書はあいまいな思想としてではなく、一点一角までも神のことばであると主は主張された。イエスがユダヤ人たちと議論をするとき、共通して立った神の権威は旧約聖書であった。グノーシス主義、マルキオンは旧約聖書を否定するが、教会は創世記からマラキ書にいたる旧約聖書を初めから神のことばとしての権威あるものとして受け入れてきた。

### (2) 新約正典

a. 使徒時代・使徒後時代の新約聖書の位置。

1 テモテ 5:18 聖書に「穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけない」、また「働き手が報酬を受けることは当然である」と言われているからです。

前半の引用は申命記 25:4 から、後半の引用はルカ 10:7 からのもの。申命記と並べてルカ伝からの引用も『聖書に・・・といわれている』と言っている。つまり、申命記とルカ伝を同等の権威あるものとして扱っている。

II ペテロ 3:15 また、私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。それは、私たちの愛する兄弟パウロも、その与えられた知恵に従って、あなたがたに書き送ったとおりです。

3:16 その中で、ほかのすべての手紙でもそうなのですが、このことについて語っています。その手紙の中には理解しにくいところもあります。無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の個所の場合もそうするのですが、それらの手紙を曲解し、自分自身に滅びを招いています。

ペテロはパウロの手紙を旧約聖書のことばと同等に権威あるものとして扱い、パウロの手紙を曲解すれば滅びを招くと言っているのである。また、パウロはさらに新約のみことばの務めは、旧約のモーセの務めに勝るとさえ言う(2 コリント 3:6-11)。

つまり、新約聖書記者の意見では、彼らの福音は神の啓示であるみことばを聖霊に感じてのべ伝えたので、その内容ばかりか、ことばそのものまで聖霊によるものであった。2:13 「この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。」

だからこそ、彼らの命令には権威があり(I テサロニケ 4 : 2)、彼らの文書はその貯蔵庫なのである II テサロニケ 2:15 「そこで、兄弟たち。堅く立って、私たちのことば、または手紙によって教えられた言い伝えを守りなさい。」もしその手紙に聞き従わない者があれば彼と絶交せよと命令し (2 テサロニケ 3 : 4)、彼が語ったことを主の命令だと認めることをもって、その人が御霊に属しているかどうかの判定の基準とせよという(1 コリント 14 : 37)。

使徒後時代も同じ。ポリュカルポスは AD115 「聖なる書の中に・・・これらの書にいわれたように、『怒るとも罪を犯すな。怒ったまま日を暮してはならない。』』と言って、エペソ書を聖書として扱っている。またクレメンズ第二書 2 : 4 では、イザヤ書の引用のあと「しかしもうひとつの聖書は『わたしが来たのは義人を招くためではなく、罪人を招くためである』とある」といって、イザヤ書とマタイ福音書 9:13 を同等に扱っている。

「初代教会においては新約聖書は旧約ほど権威あるとは考えられず、長い年月の後に徐々に地位を高くした」というリベラルな見解には根拠がなく、新約聖書に属する書は最初から高い地位を得ていた。これは旧約の各書の場合と同じ。初期キリスト教は旧約に対抗して新約聖書を作ったのではない。聖書は創世記以来、一つ一つの文書が追加され全部で 66 巻となった。これは古代教会は、聖書をさして『律法と福音』と呼んだことと符合する。黙示録で完結したといえるのは、その内容からしても未来のことを記しているゆえに。

#### b. 新約正典成立と普及の順序

いつ正典が完結したかといえ、黙示録の最後の文字が書き終わったとき。結集・普及には時間がかかる。ほとんどの教会が 27 巻を手に入れたのはエイレナイオス(130-200)以降である。

最古の新約聖書目録は起源 170 年頃のもの。1740 年、イタリアで L.A.Muratri によって公表された「ムラトリ断片」。断片では、はじめのところが切り取られているが、ルカ福音書を第三福音書と呼んでいるので、マタイ、マルコとあったのだろう。次に、ヨハネ伝、使徒、パウロの 9 つの手紙 (ローマからテサロニケ 1, 2) と 4 つの個人宛ての手紙 (ピレモン、テトス、テモテ 1, 2)、ユダの手紙、ヨハネの二つの手紙、そしてヨハネ黙示録とペテロ黙示録。ヘルマスの羊飼いは読まれる価値があるが、正典には含まれないとされる。つまり、ヘブル書、ヤコブ書が欠け、ペテロ黙示録がよけいだけ。

オリゲネス(185-254)は四福音書、使徒、十三のパウロ書簡、ペテロ第一、ヨハネ第一、黙示録をすべての人に正典として認められたものとしてあげている。ヘブル、ペテロ第二、ヨハネ第二、第三、ヤコブ、ユダを一部の人に反対されているという。

エウセビオス (260-340) は、ヤコブ、ユダ、ペテロ第二、ヨハネ第二、第三を除く今日の新約聖書のすべてを正典としてあまねく承認されたものだという。

367年に回覧されたアタナシオスの第39復活際書簡では、今日と同じ27の新約聖書を正典的として確定している。

「新約諸文書が教会にとって権威あるものとなったのは、正典の目録に公式に収録され

たからではない。そうでなくて、教会はつとに新約諸文書に内在する価値と、一般的な使徒的権威を承認し、これを神の靈感によるものとして承認したからこそ、教会の正典目録に収録したのである。」(FFブルス『新約聖書は信頼できるか』 pp40,41)

正典目録を作ったのは何らかの会議の決定によったのではなく、各地の教会が次第に共通の見解を持つに至ったのを会議が追認・確認したというのが実態。新約聖書正典に含まれる中心的文書については、きわめて早い時期からほとんどの教会で一致していた。聖霊の導きであるというほかない。

最終的に 27 巻が確定公認されたのはカルタゴ会議(397 年)であり、ニューエイジの人々はこの会議やニカヤ会議をとりあげて、イエスはグノーシス主義者だったが、イエスからずっと後の時代になってから教会の権威主義者がグノーシス文書を意図的に排斥したのだと嘘を言う。事實は、カルタゴ会議が新約正典を決定したり、ニカヤ会議がイエスを神だと言い出したのではなく、すでにごく初期から広く信じられていることをただ確認したのである。

## 5. 信条と職制

### (1) 信条 Bettenson p51

使徒信条と呼ばれるが十二使徒がまとめたものではない。使徒的な信条という意味である。使徒信条は 150 年頃の古ローマ信条がもとのもの。洗礼の時に用いられた。この背景にはグノーシス主義との区別の必要があった。

父なる神が天地の造り主であることは：グノーシス主義、マルキオンとの区別。

御子がおとめマリアから生まれた。これも同じ。

ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け：歴史上の事実。仮現説と区別。

三日目に死人のうちよりよみがえり、からだのよみがえり：同上

### (2) 職制 Bettenson pp107-108

迫害の中にあって、教会は職制を固めていく。誰がみことばの教師であるかということ。しかも、各個教会主義ではなく、一つの公同の教会として形成されていくのである。それは原初的には使徒の働き 15 章に見えたエルサレム会議の姿の延長線上にある姿である。

<資料> 殉教したアンテオケの主教イグナティウス「スミルナ人への手紙」112 年頃

職制と聖礼典に関する文章で ベッテンソン史料 p 108

「キリスト・イエスのおられるところにはどこにでも公同教会があるように、監督のあらわれるところに人々をおらせなさい。監督のいないところでバプテスマをほどこしたり、愛餐を執り行うことは許されない。しかし、あなたがたの行なうところがすべて健全で有効なものになるようにと、監督が承認する事柄はなんでも、神に喜ばれる。」

\*今日でも正典・信条・職制の一致ということが、客観的な意味での教会一致の基本。各自教団・教派の一致の基本であることをわきまえられたい。

## IX. コンスタンティヌス大帝の回心

### 1. デイオクレティアヌス帝による最後の大迫害とコンスタンティヌス帝

デキウス帝とヴァレリアヌス帝の迫害の後、教会は比較的平穏な時代を長く過ごす。しかし、3世紀最初にデイオクレティアヌス帝による最大の迫害が起こる。デイオクレティアヌスは四人に皇帝を立てて広大なローマ帝国を統治する。東西にアウグストゥスを名乗る正帝と、カエサルを名乗る副帝をそれぞれに立てて。

**東：デイオクレティアヌス正帝(284-305)とガレリウス副帝**

**西：マクシミアヌス正帝(285-305)とコンスタンティウス・クロルス副帝**

ガレリウスはキリスト教徒を迫害する。発端は軍隊のキリスト教徒が所属することについて。多くの教会指導者はキリスト教徒は兵士になるべきでないと言っていたが、実際には軍隊に多くのキリスト教徒がおり教会には統一見解なし。295年、多くのキリスト教徒が軍役に拒否したり軍隊を抜けようとして処刑される。ガレリウスは軍隊の士気にかかわると考えて、デイオクレティアヌス帝にキリスト教徒を軍隊から追放させる。

303年の勅令では帝国の公職からキリスト教徒を追放し、会堂破壊と聖なる書物の焼却を命じる。さらに、すべてのキリスト教徒に神々に犠牲をささげよという勅令が出る。キリスト教の棄教を命じる迫害によって、棄教しないものは拷問の末、処刑された。

305年東では、デイオクレティアヌスは退位し、ガレリウスが正帝になる。

西でもマクシミアヌスは退位し、コンスタンティウス・クロルスが正帝になる。

**東 ガレリウス正帝(292-311)**

**西 コンスタンティウス・クロルス正帝(292-306)**

ガレリウスが正帝となった東ではキリスト教迫害が激しく続くが、西では迫害はほとんどなかった。ガレリウスのもとで人質になっていたコンスタンティヌスは逃亡して、父コンスタンティウス・クロルスのもとに戻って合流し、父の死後は彼が正帝となる。

**東 ガレリウス正帝(292-311)**

**西 コンスタンティヌス正帝(306-337)**

しかし、ガレリウスは大病を患い、これを神罰と思って311年4月30日政策を変更し、「彼らが社会秩序を乱したりしない限り、われわれの赦免を彼らにも広げ、彼らがキリスト教徒であることを容認し、彼らが再び集会を開くことを許可する」と勅令をだした。この勅

令交付の5日後、ガレリウスは死ぬ。

このとき、リキニウス、マクシミアス・ダイア、コンスタンティヌス、マクセンティウスの四人が割拠する。ダイアがガレリウスの教会迫害政策を継続。

東 リキニウス帝(307-323)    マクシミアス・ダイア帝(305-313)

西 コンスタンティヌス帝(306-337)、    マクセンティウス帝(306-312)

コンスタンティヌスは、ローマのマクセンティウスとミルウィウス橋で勝利を得た。エウセビウスによれば、このとき決戦の前夜に空にXとPの組み合わせた幻が現れ、「これによって勝利を収めるであろう」という啓示を受けたという。これを軍旗につけて彼は大勝利を収めた。彼はこれで不敗の太陽神を捨ててただちに回心したわけではないが。

勝利を得るとコンスタンティヌスはミラノでリキニウスと会合し同盟を結んだ。その合意内容に、「キリスト教徒の迫害をやめ、教会、墓地、その他の財産を返還する」といういわゆるミラノ勅令が含まれた。313年。ベッテンソン p p 40-41。

しかし、マクシミアス・ダイアは迫害を続ける。やがてコンスタンティヌスが唯一の皇帝になると、迫害はやむ。

コンスタンティヌス帝は、教会財産の返還、教役者への補助金、教役者の責任免除、占い者の禁止(319年テオドシウス法典 9:16:1)、国家による日曜休日の承認(321年ユスティニアヌス法典 3:12:3)など、キリスト教会に対して有利な政策をとった。ベッテンソン pp40-44

フスト・ゴンサレスは言う「これが果たして勝利であったのか、それとも、新しい、そしておそらくもっとも大きな困難の始まりであったのか」「どちらであるにしても、コンスタンティヌスの回心がキリスト教に計り知れない結果をもたらしたことは疑いの余地がない。」教会はそれまで十字架にかかって死んだ大工を主をと仰いできた。しかし、今や、教会は帝国の栄誉と権力に取り囲まれることになる。そのとき、どんなことが起こってくるのか？

## 2. コンスタンティヌス帝の回心と統治

### (1) 政治的動向

東    リキニウス    と    マクシミアス・ダイア。

西    コンスタンティヌス

やがて、リキニウスはマクシミアス・ダイアを滅ぼす。それで、

東    リキニウス

西    コンスタンティヌス

やがて、コンスタンティヌス暗殺計画が発覚するも、リキニウスは犯人引渡しを拒否して、宣戦布告。そして両者は激突。コンスタンティヌスはリキニウスを滅ぼし、帝国唯一

の皇帝となる。323年。以後337年まで君臨する。

## (2) コンスタンティノポリス建設

### ①ビザンティウムの戦略的価値

ヨーロッパの東端であり、小アジアとの接点であるゆえに、ヨーロッパとアジアの帝国領の両方を抑えることができる。また、ボスポラス海峡を支配できる。ライン川沿いのゲルマン諸族も脅威であったから、アジア側に都を移すのも問題だった。そこでビザンティウムが適地だった。

②コンスタンティノポリス建築のために、帝国の諸都市の神殿に安置された神々を取り外してきて、競技場や公共浴場や広場などの飾りとした。古代の神々は装飾品とされて、異教は打撃を受ける。古代最高の彫刻家フィディアスの作品、エジプトのアポロ像も運んできて、首を切って、コンスタンティヌスの顔に付け替えて市の中心に飾られた。

人口増加のために、コンスタンティノポリス市民は税や兵役免除という特権を与えたので人口は増加した。

## (3) コンスタンティヌス帝の回心とは？

コンスタンティヌス帝の回心が本物であったかどうかについて両極端の議論がある。単なる政治的パフォーマンスであったという説と、ほんとうにすばらしい回心であったという説と。どちらもほんとうではない。

### a. 政治的パフォーマンスと見られる印

- ① 彼は生涯の最後まで自分を「司教の中の司教」とみなして宗教生活については自由にする権利を確保し、教会に対して干渉した。それどころか、回心の後も繰り返しキリスト教徒が参加しない異教の儀式にも参列しつづけた。
- ② コンスタンティヌスはキリスト教に好意的であり、キリストの力を信じると公言したが、彼は死の直前まで洗礼は受けなかった。
- ③ 彼は生涯、異教の最高司祭としての働きを続けた。死後、三人の息子たちは元老院がコンスタンティヌスを神と宣言する動議を提出したとき、反対しなかった。

### b. コンスタンティヌスの回心はほんとうだと見られる印

- ① 彼の回心のタイミング——ローマ攻略寸前——は戦略上は不都合なときだった。すなわちローマは異教の伝統の中心地であり、その伝統の担い手はローマの古い貴族であり、彼らがマクセンティウスに不満を抱いていた。彼らを取り込むのに、キリスト教に回心することは不都合ではあった。
- ② 軍隊の中でキリスト教徒の占める割合は西方では低かった。キリスト教徒は貧乏だったので、コンスタンティヌスを経済的に支持する力もなかった。

結 コンスタンティヌスはほんとうにキリストを信じていたのであろう。彼がキリスト教に好意的な法令を出し、教会堂を建てたのは、キリスト教徒の好意を得るためではなく、キリスト教徒の神の好意を得るためだった。

けれども、彼は純粋な意味で回心したのではなく、異教と混じっていた。ローマ皇帝の伝統である「最高司祭」の称号を受けたり、あらゆる異教の儀式にも参加したりしながら、自分を勝利に導いた神を裏切っているつもりはなかった。

324年、週の初めの日、すべてのローマ軍兵士は至高の神を礼拝しなければならないという勅令が出る。これはキリスト教徒の復活日であり、不敗の太陽神礼拝の日でもあった。

325年 第一回公会議がニカイアで開かれる。

## X. コンスタンティヌス帝の回心の影響

礼拝・公神学・修道院の始まり・非戦論から義戦論へ

### 3. コンスタンティヌス帝回心と礼拝の影響

迫害が終わった。教会は国家の手厚い保護の下に置かれることになる。これはさまざまな影響をもたらすが、その一つは礼拝の姿への影響である。たとえば・・・

祭壇もいけにえも存在しない簡素なキリスト教の礼拝に、異教的な影響が生じてくる。

礼拝堂はバジリカ様式のもの。 薫香が教会でも用いられる。 司祭は平服でなく装飾のついた司祭専用の服。 聖遺物崇拜も生じる。 入祭行列もはじまり、聖歌隊も始まる。

→結果、礼拝のなかでの会衆の役割が減る。

### 4. エウセビオスの公神学

「公神学」とは教会と帝国を一つに結び合わせる目標へ歴史を導くために、神がコンスタンティヌスを選んだということを論証する神学。代表者はカイザリアのエウセビオス(260年－339年)。

エウセビオスは、オリゲネスの孫弟子にあたる。コンスタンティヌスが単独皇帝になる数年前 313年頃に、カイザリアの司教に選出された。迫害で四散したキリスト教徒を再び集めて教会の組織作りをした。そして、パレスチナ全体に対する責任も負った。

彼の仕事の最大のものは『教会史』である。古代教会におけるさまざまな事跡を我々が追うことができるのは、ほとんどこの本に拠っている。

『教会史』の「真の目的は、キリスト教こそが人間の歴史の最終目標であるということ

を弁証することにあつた。しかも、ローマ帝国の文脈からその歴史を解釈しているのである。」(ゴンサレス)「こうした歴史理解が正しかったということを示す要石が、コンスタンティヌスの回心であった。エウセビオスによると、キリスト教の迫害は、キリスト教こそがローマの最高の伝統を完成させる最後の仕上げであることをローマの権力者たちが理解しなかったからである。」信仰と帝国とは両立する。キリスト教信仰こそ哲学と帝国の頂点に位置する。・・とこのようにエウセビオスは考えた。

以下『大事典』より

コンスタンティヌス大帝の死後(337年)、エウセビオスは『コンスタンティヌス伝 Vita Constantini』を描いた。この本には、コンスタンティヌスが敬虔なキリスト信者として描かれているため、後代の歴史家ブルックハルトはエウセビオスを「古代で最も信用ならない歴史家」と評した。こういう観点から言えば、エウセビオスは御用神学者。

エウセビオスはコンスタンティヌスを大帝を神の支配の地上における型と考え、皇帝は神の代官、神の似姿、神によって選ばれた者という皇帝理念を作り出した。これがもとになって東方教会の皇帝を主張とするカエサル・パピズムが生まれた。なんと1917年ロシア革命までこれが続いたことを思えば、その歴史的影響は甚大。

コンスタンティヌスのもたらした新しい状況は、それまでの伝統的なキリスト教神学の主題のいくつかを放棄させることになった。

- ① 富や権力が神の祝福のしるしとみなされるようになった。新約聖書と初期教会にとっては、『貧しい者は幸いである』というのは、常識。福音とはまず貧しい人々へのよいしらせだったのであり、金持ちがいかにして救われるかは神学的議論の一つだった。
- ② 壮麗な教会堂、典礼が発展した結果、聖職者たちは貴族階級のようになった。

\*このようなことは、キリスト教がマジョリティになったいわゆるキリスト教国や地域では常に起こってくること。

③エウセビオスの歴史解釈は初期の教会の主が再臨して「神の国が来る」という中心的主題をわきにおしおのけてしまった。コンスタンティヌスとその後継によって、神の計画が成就したと語っているかのような印象を受ける。

## 5. 修道院のはじまり

コンスタンティヌスのもたらした世界は、富者の福音・権力者の福音を約束するような事態をもたらした。主イエスが示した狭き門は広くなったように見える。しかし、本当に広くなったのだろうか。かつて枕する所もない生活をした教師たちは、貴族階級、高級国家公務員となってしまった。

こうしたキリスト教が一見平穏無事なメジャーな世界の安全こそサタンの罠であると、認

識する人々がいた。彼らが修道生活を始めた。今日「霊性」への関心からさばくの修道士たちの営みが見直されている。

たとえば、ヘンリー・ナウエン『砂漠の知恵』教文館

「砂漠の師父母とはどんな人たちだったのか。彼らは砂漠で悪鬼と戦い、さらに神の愛に遭遇するため、権力欲に駆られた社会での衝動的欲望や策動策略から身を引いた男女である。彼らが鋭く感じ取っていたこと、それはキリスト教迫害の時代が去り、社会の『正規な』構成員として受け入れられたとき、父、母、兄弟、姉妹を去り、十字架を取ってキリストに従うという根源的な招きが薄められ、受け入れやすく心地よい宗教性にとって代われ、人の生き方を転換する力が失われてしまったことであった。エジプトの荒野に生きたアバ、アマたちは、妥協と迎合のこの世やなまぬるい霊性を背後にし、十字架にかけられ復活された主の証し人の新しいありかたとして独居、沈黙、祈りを選び取った。つまり彼らは新しい殉教者として血を流すことによってではなく、ひたむきにへりくだり、手仕事、断食、祈りに専念することによって証を立てたのである。」〔x iv〕

#### (1) 独身制

聖書的理由としては、①終末が近いならば結婚していろいろと計画をして暮らすことは意味がないと考えられたこと。②神の国においてははめとることも嫁ぐこともないと主イエスが言われたのだから、神の国の証人として独身でいるのがよいと考えた。

異教的影響もある。古代の哲学は、肉体は靈魂の牢獄であると考えた。そこから肉体の欲求を押さえつけて魂を解放しようという修行に意味があるとされた。

#### (2) 最初の修道士

彼らは孤独を求めてエジプトの砂漠で修道生活をした。孤独ということば *monachos*(ギリシア)が、修道士 *monk* の語源。

アントニオスの話

一切を捨てて、孤独を求めて修道生活をめざすが、多くの人々に付きまとわれる。

「聖大アントニオス (250-356 年) は修道士の父とされる。

250 年にエジプトで生まれた彼は 270 年に苦行生活を開始した。彼が隠棲したのは上エジプトのテーベに近い荒野であった。彼は数十年間にわたり、そこで、異形の獣に化けた悪魔から誘惑を受けることになる。「責めさいなむのに千変万化することなど、悪魔にとってはいとも容易なことである。

それ故、夜になると、化物どもはかかる大騒ぎを行なって、村人全員を震え上がらせるのだった。草の庵の壁は壊れているも同然だったため、化物どもは獣や爬虫類に化けて侵入してきた。そこら中に獅子や、熊や、豹や、牡羊や、大蛇や、アスピクスや、蠍や、狼などの亡霊が満ち溢れていた。……皆がものすごい音を立てて、樽猛な気性を剥き出しにしていた。アントニオスは、彼らから鞭打たれ、棒で小突き回され、その苦痛をだんだんと堪え難く感じるようになってきた。勇敢で、しかも魂が覚醒状態にあった彼は、肉体の苦痛に身をうち震わせながら体を横たえていたが、しかし、魂にいささかの怠りもなく、彼らのことを無視し続けていたのだった」(聖アタナシオスによる聖アントニオスの生涯、第 8 章)。

朱門岩夫より

### (3) パコミウスと共同体としての修道院

修道院の原則は①すべての所有物の放棄 ②上長への完全な服従 ③すべてのものはいっさいの労働を自分でする。いかなる仕事も自分にふさわしくないといってはならない。④互いに仕えることが基本原則。したがって、上長に対する絶対服従が求められるが、上長もまた自分の下位の者に仕える。

4世紀に修道院運動が一番盛んだったのはエジプト。

パコミウスもその後継者たちも、一度も教会の公の職務についてことがない。彼らは按手を受けた司祭ではない。彼らは聖餐式にあずかるために、教会に出かけ、あるいは司祭が修道院を訪問してミサを立てた。

### (4) 修道院の理念の普及

修道士の手本が教会生活に役立つと考えた司教や学者たちが、修道院運動を紹介している。アタナシオス、大バシレイオス、アウスグティヌス、トゥールのマルティヌス。

最初は司教の世俗化と虚飾にたいする抗議を動機とした修道院運動は、次第に司教制度のなかに組み込まれていった。真の司教は、修道士の生活に近づくように努力すべしという考えがもたれて。

初期修道院運動では、修道士が自分個人の救いを求めて荒れ野の生活にはいったが、後年になると、特に西方教会では、修道士は教会の慈善と宣教に用いられていく。教会改革の力として。

## 6. 非戦論から義戦論へ

参照>木寺廉太『古代キリスト教と平和主義』立教大学出版 2004年

キリスト教が「体制内の宗教」と化するまでは、キリスト教はローマ帝国の迫害の対象であった。体制内の宗教とされるまでは兵役拒否、平和主義が言えたが、体制内の宗教となったとき、信徒の兵役に対する教会の態度もほぼ唯一の選択しかありえなくなる。

その行き着いたところが、416年。東ローマ帝国皇帝テオドシウス2世は、キリスト教徒のみをローマの軍隊に受け入れ、異教徒を軍隊から排除してしまった。

### (1) 使徒10章 カイザリヤで百人隊長コルネリオの改宗の記事がある。

その後、沈黙からの推測であるが、ベイントンのいうとおり「新約聖書時代の末から紀元170-180年ごろまでには、軍隊にキリスト教徒がいたという証拠はない」し、信徒の兵役の問題もまだそのときまでまったく争点となっていない。

172年にキリスト教徒が軍隊にいた証拠が現れる。また兵役を忌避する例も見られるよう

になる。

(2) ケルススによるキリスト教批判(178AD)。P3

「もし万人がキリスト教徒のようなことをしたならば、すなわち、軍務を拒否したならば、皇帝は孤立無援となり、世界の事物はもっとも無法粗暴な蛮族の手中に陥るであろう。」

(3) テルトゥリアヌスは、皇帝などにあてた護教的著作では、信徒が忠実な市民として兵役についている事実を伝えているが、とりわけ後期の著作で、信徒の兵役に反対している。

「信仰に入って洗礼を受けたならば、多くの人がしたように、直ちに兵役を去るか、それとも、兵役についていないときでも許されないようなことを神に逆らって犯さないために、あらゆる種類の逃げ口上を言うか、さもなければ最後に、市民の信徒でもやはり受け入れるべき運命(殉教)を神のために耐え忍ぶかしなければならぬ。」(『兵士の冠について』11:4)p4

(4) キュプリアヌス(カルタゴ司教 248-258 在位)は信徒の生活を『靈的な戦い』とみる表現は多いが、戦争や殺人を非難した個所もあるが、兵役問題にはふれていない。彼の記述のなかには当時、少なくないキリスト者で兵士たるものたちがいたようである。

(5) ディオクレティアヌス帝の時代(在位 280—305)、大迫害が起こるが、その前に散発的ながら、キリスト教徒を軍隊から一掃しようとする動きがあった。大迫害でまず血祭りにあげられたのは軍隊にいた信徒たちであった。

(6) 資料 兵士たちの殉教

彼らが処刑された理由はベイントンによれば「多くの兵士が武器放棄のゆえでなく、信仰のために殺された。」

a. 殉教したマリノス エウセビオス『教会史』VII-15:1-5

ガッリエヌス帝治下、皇帝崇拝を拒否したマリノスという士官は処刑されている。彼の昇進をねたんだ他の兵士が「彼はキリスト教徒であり、皇帝がたに犠牲をささげていないので、古い法によるとローマ人にふさわしい地位につくことは許されていない」と非難した。そこで、総督アカイオスはマリノスを尋問し、3時間、棄教か殉教かを考えさせた。マリノスに剣と福音書とどちらを取るかと問うた所、彼は福音書を選び、殉教した。とはいえ、教会は、軍隊にキリスト者がいるということ自体はある程度寛大に見ていた。また帝国政府側としては、皇帝崇拝の拒否が処刑理由だった。 p6

b. 兵役拒否者マクシミリアヌス 21 歳

『マクシミリアヌスの行伝 Acta Maximiliani』 pp7-8

295年3月12日 アフリカ・プロコンスラリスのテウエステ

彼は新兵として徴募されたが、拒否して処刑された。「キリスト教徒だから兵役につくことはできない。悪いことはできない。私はキリスト教徒です。」と主張した。良心的兵役拒否である。総督は兵役侮辱の罪、宣誓拒否という不服従の罪で処刑された。

d. マルケッルススの殉教 Acta Marcelli より

298年7月21日

アグリコラス「おまえは通常勤務の百人隊長として兵役についてきたのか」

マルケッルス「ついてきました。」

ア「いかなる狂気にとらわれて宣誓を捨て、そのようなことを公言したのか。」

マ「神をおそれるものに何ら狂気もありません」

ア「おまえは武器を捨てたのか」

マ「捨てました。主キリストの兵士であるキリスト教徒がこの世の軍隊で兵役につくことはふさわしくなかったからです」

ア「マルケッルススの行為は軍規によって罰せられるべきものだ。通常勤務の百人隊長として兵役についてきたマルケッルスは宣誓を公に拒否し、それによって自らけがされたと言い、さらに、属州総督の報告にあるような狂気に充ちた言葉を吐いたゆえに、剣で斬首されるものとする。」

e. 古参兵ユリウスの殉教 Passio Iuli Veterani 304AD 春

属州総督 Maximus 「神々に犠牲をささげることを命じている皇帝がたのご命令を知らないのか」

I 「知ってはおりますが、私はキリスト教徒なので、あなたが望んでおられることをすることはできません。」

M 「香を焚いて、解放されるのがなぜ悪いのか」

I 「私は神のご命令を侮ることはできません」「私はむなしい兵役についていて誤っていたと思いますが」と前置きして彼が過去 27 年間にわたり 7 回も戦争に加わり、立派に兵役を務めてきたこと、その間ずっと真の神を礼拝してきたことを説明し・・・

M 神々に犠牲をささげれば報奨金を受けられるぞ

I 虚位する。

M ユリウスを死刑と宣告し、斬首。

解釈>この資料に拠れば、篤信のキリスト教徒であったユリウスは兵士としてずっと戦ってきたが、むなしく感じているようす。

f. アルル教会会議 314年8月の示す平和主義からの重大な転回

コンスタンティヌス帝治世以前に教会側で信徒の兵士がとるべき態度について何かを取り決めたという記録は残っていない。ところがミラノ勅令の翌年 314 年アルル教会会議の

第三決議で次のようなことが決められた。

De his qui arma proiciunt in pace, placuit abstineri eos a communione.

直訳すれば「平時に武器を捨てるものたちに関しては、彼らが交わりからとおざけられるべきことを定めた。」

Cadoux は arma proicere＝他人に武器を投げる、in pace＝武器を用いる必要がないときと取って、剣戦技への参加を禁止したと考える。

Bainton は、「この一文の意味は、キリスト者は警察力として働くことだけが職務とされるような平時には、武器を捨ててはならない。しかし、戦時には軍籍を捨てても良いということである。」と主張する。

C.J.Hefele,A.Harnack 「国家と教会との間に平和が支配しているので、キリスト教徒の兵士は義務を果たすべきであり、脱走兵は教会から処罰される」と考える。ハルナックの解釈「教会はアルルにおいて、信仰ゆえに脱走するという、これまでしばしばなされたキリスト教徒の兵士の行為を非難したのみならず、恐ろしい破門の罰を科したのである。」

「いずれにせよ、このアルル教会会議の決議は少なくとも兵役がキリスト教徒にとって当然なものを受け取っていることは確かである。」(木村)

「軍務を放棄するキリスト者に破門を宣しているのは、その解釈に問題があるとしても、キリスト教の平和主義の大きな転回を認めることができ、義戦－聖戦の道に歩みだしたことになる」(秀村「ローマ皇帝支配の意識構造」「岩波講座世界歴史3」所収)

### (6) アンブロシウス、アウグスティヌスの「正しい戦争」

アウグスティヌスは、ドナトゥス主義との論争において、正しい戦争についての理論を語る。

ドナトゥス派の一部キルクムケリオースが「この世」との戦いと称して暴力を用い、略奪行為を働いていた。アウグスティヌスは彼らに対する戦争は正当化されるべきだと考えた。キルクムケリオースというのは、340年頃ドナトゥス主義者から現れた集団で、彼らは暴力的手段に訴えてでも帝国と結んでこの世的になった教会と戦おうとした。彼らはほとんど北アフリカのヌミディア人とモーリタニア人であった。カルタゴは、経済構造からいうと、ヌミディア、モーリタニアから富を収奪している立場にあった。キルクムケリオースは熱狂主義に陥るほどに宗教的であり、もはや昔のような迫害が望めない時代にあっては、信仰をゆがめている世的な人々との戦いをし、その戦いに死んだ人々を殉教者とみなすようになる。時に殉教願望が高じて集団自殺をするものまで出てきた(ゴンサレス p 172)。

アウグスティヌスはキルクムケリオースの経済的社会的要因には気づいていないようである。

ただし、アウグスティヌスによれば正しい戦争には条件がある(ゴンサレス p 228)。

第一に、戦争の目的が正当でなければならない。領土的野心が目的ならば、それは正義の戦争ではない。

第二に、正しい戦争は合法的権力によって実施されなければならない。個人による復讐

を禁じる。

第三に、戦争において暴力を避けることはできないとしても、愛の動機が中心でなければならない。

・・・後年、ルターも正しい戦争について類似の条件付けを行なっている。しかし、これらの条件をほんとうに満たす戦争など現実にはあるだろうか？現実の戦場を知らぬ者のたわごとではないか。

アレン・ネルソン『ネルソンさん あなたは人を殺しましたか？ーベトナム帰還兵が語る「ほんとうの戦争』』講談社 講演 <http://www.coara.or.jp/~yufukiri/allen.html>

デーヴ・グロスマン『戦争における「人殺し」の心理学』ちくま学芸文庫

## XI. アレイオス論争とニカイア公会議

ユダヤ教会から出てきた初代教会が直面した最初の神学論争は、ユダヤ主義にかんする神学論争だった。つぎに、ヘレニズム世界の宣教がひろがっていったときグノーシス主義論争が起こる。そして、ローマ帝国の大迫害の中で生じてきたのは、棄教者がどのように教会に復帰できるかということをめぐるドナティスト論争だった。これらの論争においては、この世の権力は教会に介入はしてこなかった。為政者は、そんなことに興味はないから。

しかし、コンスタンティヌスが回心をして、キリスト教を公認すると帝国は教会の神学論争に介入してくる。というのは、皇帝はキリスト教を帝国の一致のための紐帯であると考えていたからである。教会が教理問題で長々と分裂してしまうのは、帝国にとって非常に都合が悪かった。

そこで従来、神学論争に携わる者は、論敵を言い負かす以上に、皇帝を納得させることが重要課題となる。ややこしい話だ。

けれども、実際にアレイオス論争の過程を見ていくときに、ニカイア信条が政治的産物になってしまわずに、真正な教会の信仰告白となったことは不思議なことである。「しかし、実際には驚くべきことに、この論争は政治的戦略に呑み込まれてしまうことがなかった。むしろ教会は、もっとも厳しい状況の中であってさえ、キリスト教使信の根幹を脅かすような見解を拒絶するだけの強さと智慧を発揮したのであった。」(フスト・ゴンサレス)

### 1. 三位一体の教理

三位一体の教理は 4 世紀になって突然登場したわけではない。まず、この教え自体は、聖書自体に啓示されたことであつた。旧約でも神の唯一性と複数性のわずかな啓示があつたが(創世記 1:1-3、26)、特に新約にいたって父・子・聖霊の三一性は福音書(マタイ 28:19)、パウロ書簡(1 コリ 12:4-7 2 コリ 13:13、エペソ 2:22、3:15-17、4:4-6etc...)であら

わさされている。

そして、ユスティノス、アレクサンドリアのクレメンス、オリゲネス、アイレナイオスたちは神の唯一性と三性をずっと語ってきている。

神が唯一であることについては、プラトンの教養のある神学者たちは、プラトン哲学における「宇宙全体の上にある**至高の完全な存在**」が神であるとした。その完全性は、不変、不受苦、不動とした。このプラトン主義の影響は今日の神学にまで及んでいる。(神の不受苦性は特に。そこで北森「神の痛みの神学」が話題となる)

もう一つはロゴス論。ユスティノス、クレメンス、オリゲネスが展開した。至高の存在である父は、不変・不動・不受苦であるとすれば、その神はいかにして被造物とかかわりを持ち得るか?という課題がある。ロゴス論者たちは神のロゴスが人格的存在として世界と人間と関係を結ばれるという。聖書において神がモーセに語りかけたのは、神のロゴスが話し掛けたということである。

<論点>神のロゴスは神と等しく永遠であるかどうか?

コンスタンティノスが西方を、東方をリキニウスが統治していた時代。

アレイオスは「ロゴスの存在しないときがあった」と主張した。それはつまり、ロゴスは永遠ではないとし、神ではないということである。父のみが真の神であり、ロゴスは神ではなく、第一の被造物であるという主張である。彼はロゴスの先在を認めたが、万物の創造に先立って、神はロゴスを造ったと言った。いわゆる「従属説」である。

教会の長老アレイオスのアレクサンドリア司教アレクサンドロス批判のポイント。アレクサンドロス説は、神性をもつ二つの存在を認めることになり、神は唯一であるというキリスト教の伝統を否定することになるというもの。

司教アレクサンドロスのアレイオス批判のポイント。アレイオスの主張は、ロゴス(イエス)の神性を否定することになるということ。教会はその初めからイエスを礼拝してきた。アレイオス説にしたがうなら、教会はイエス礼拝を止めるか、被造物礼拝を認めるほかなくなる。

アレクサンドロスは司教としてアレイオス説を非難し、彼をアレクサンドリア教会から罷免すると宣言し、アレイオスはこれを拒否して論争となる。

東方教会全体を分裂させる危機的状況となった。

## 2. ニカイア公会議

325AD、コンスタンティノポリス郊外のニカイアで公会議。第一回の公会議である。集った司教たち総勢 318 人という説。彼らは数年前に帝国から受けた拷問の痕をその体に残していたが、今や帝国の費用でここに招かれた。彼らは迫害が去った幸福感にひたりながら、会議をした。棄教者を教会に復帰させるための基準、長老や司教の選出と按手の方法、司教管区の優先順位付けをした。しかし、最大の難問はアレイオス論争。

①アレイオス主義に立つニコメディアのエウセビオス (カイザリアのエウセビオスとは

別人)・・・・・・アレオスは司教でなかったのに、公会議には招かれなかった。彼は代弁者である。

②御子の神性を主張するアレクサンドリアの司教アレクサンドロス・・・・・・彼の従者のなかに若きアタナシオスがいた。

③西方教会にとっては、テルトゥリアヌスの定式「神のうちに三つのペルソナと一つの実体がある」で十分だった。

④父神受苦説・・・・patri passionism の人々が少数いた。父と子は同一であるという立場。彼らは当然アレオス説に反対。

上の4つのどれにも属さない司教たちは、教会を分裂させることをもっとも嘆いていた。

会議はどのように進んだか。ニコメディアのエウセビオスがアレオス説を述べた。詳細に説明すれば、彼は公会議全体が自分の説を受け入れてくれると確信していたが、結果は逆だった。ゴンザレスによれば「たとえ神のことばが被造物の中でいかに高い位置を占めるとしても、結局は被造物以外の何者でもないとするアレオス説を聞いた司教たちは、激しい怒りを表し、このうそつき、この冒涇者、異端者と叫びだした！」

そして、彼らは出来る限り明白にアレオス主義を拒絶すべしとした。こうして、原ニカイア信条ができた。

#### 原ニカイア信条

われらは信ず。唯一の神、全能の父、すべて見えるものと見えざるものとの創造者を。われらは信ず。唯一の主、イエス・キリストを。主は神の御子、御父よりただ独り生まれ、すなわち御父の本質より生まれ、神よりの神、光よりの光、真の神よりの真の神、造られずして生まれ、御父と同質なる御方を。その主によって万物、すなわち天にあるもの地にあるものは成れり。主はわれら人類のため、またわれらの救いのために降り、肉をとり、人となり、苦しみを受け、三日目に甦り、天に昇り、生ける者と死ねる者とを審くために来り給う。われらは信ず。聖霊を。

御子が存在しなかったときがあったとか、御子は生まれる前には存在しなかったとか、存在しないものから造られたとか、他の実体または本質から造られたものであるとか、もしくは造られた者であるとか、神の御子は変化し異質になりうる者であると主張するものを、公同かつ使徒的な教会は呪うものである。(関川泰寛訳)

この同質なる「ホモウーシオス」が大事なポイント。ホモイウーシオスではなく、ホモウーシオス。

公会議はこれで合意が成ることの望んだが、ニコメディアのエウセビオスほか少数のものたちは署名をこぼみ、彼らは公会議によって異端宣告を受けて追放された。

コンスタンティヌス帝は司教たちだけの教会法による処罰に、市民法による追放刑という処罰が加えた。これは、重大な影響を後世に及ぼす。世俗権力が、正統とみなす教理の

ために教会に介入した前例となる。

ところが、これで論争は終わらず、ニコメディアのアウセビオスはコンスタンティヌス帝に取り入り、皇帝はアレイオス派にたいして厳しすぎたと後悔し、アレイオスを追放地から呼びもどした。

アレクサンドリアのアレクサンドロスは 318 年に死に、アタナシオスが司教になる。ニコメディアのエウセビオスは皇帝に取り入って、コンスタンティヌスを動かしてアタナシオスを追放刑にすることに成功。ニカイア派の指導者たちともどもに。コンスタンティヌスはアレウス派びいきで、洗礼をニコメディアのエウセビオスから受けた。

そのあとも、コンスタンティヌス帝死後、ごちゃごちゃする。詳細は省略。

コンスタンティヌス 2 世・・・ガリア、大ブリテン、スペイン、モロッコ  
コンスタンス・・・・・・イタリアと北アフリカを含む狭い地域  
コンスタンティウス・・・・東の大部分

### 3. アレクサンドリアのアタナシオス

「正統信仰の父」と呼ばれる。アレクサンドリア主教。325年のニカイア公会議をはじめ、その生涯のほとんどをアリウス主義との戦いに捧げた。司教在位45年のうち、5回の追放を受け、合計一七年間を亡命の地で過ごしている。

アタナシオス 年譜	
295頃	生まれた場所はナイル河畔の町か村？ 幼い日に、砂漠の隠修士アントニオスと交流。
304－ 311	迫害を体験。アレクサンドリア司教アレクサンドロスに師事し、プラトン、リストテレス、新プラトン主義などの古典学とキリスト教学を学ぶ。
318	助祭に叙階され、アレクサンドロスの秘書となる。
325	アレクサンドロスの随行員としてニカイア公会議に参加。
328	アレクサンドロスの死に伴い、後継者としてアレクサンドリア司教に選出。
335	アリウスのアレクサンドリア帰還を拒否したため、反対派の陰謀により

	無実の罪を着せられ、ティルス教会会議において司教職を罷免され追放される（第1回追放：335. 7-337. 11）。
337	コンスタンティヌス大帝の死によって新たに東方帝国の統治者となったコンスタンティウス帝の恩赦によりアレクサンドリアに帰還。
339	ニコメディアのエウセビオスらアリウス派によって開かれたシリアのアンティオキア教会会議において再び罷免。代わってカエサリアのグレゴリウスが司教に選出。アタナシオスはローマに逃れ、ここから彼とローマ教会との間に関係が生じる（第2回追放：339-346）。
341	ローマ司教ユリウスにより開かれたローマ教会会議において、ニカイア信条が再確認され、ローマからシリアのアンティオキアに書簡が送られる。
343	西方の統治者のひとりコンスタンス帝によって開かれたサルディカ教会会議に先立ち、ミラノでニカイア公会議における正統信仰の擁護者ホシウスと面会。サルディカではアタナシオス無罪が宣言される。これに対抗してアリウス派はフィリッポポリスにおいてアタナシウス罷免を宣言。
345	西帝コンスタンスの働きかけに東帝コンスタンティウスが動かされた形で、アリウス派の擁立したアレクサンドリア司教グレゴリオスの死に伴い、アタナシオスのアレクサンドリア帰還が許可。
350	ニカイア正統派の擁護者であったコンスタンス帝暗殺。翌年にはローマ司教ユリウスも死去。
355	帝国を統一したコンスタンティウス帝によって開かれたミラノ教会会議において、アタナシオスの断罪が宣言される。皇帝の軍勢の再度にわたる襲撃を受け、アタナシオスはエジプトの砂漠の修道士たちのもとに逃亡、潜伏（第3回追放：356-362）。この間、多数の著書を刊行。
361	コンスタンティウス帝の死去に伴い、新帝ユリアヌスが単独皇帝として即位。恩赦によって追放地にある司教たちに帰還が許可。

362	アレクサンドリア教会会議を開催。ニカイア派と半アリウス主義の融和をはかる。しかし、まもなくユリアヌス帝により追放される（第4回追放：362－364）。再びエジプトへ潜伏。
363	ユリアヌス帝の死と新帝ヴァレンス即位により恩赦。間もなく追放され、三度目のエジプト潜伏(第5回追放：365－366)。しかし4ヶ月後にアレクサンドリアに帰還し、以後はニカイア派後進の指導に当たる。
373	アレクサンドリアにおいて死去。

以下、フスト・ゴンサレスによる紹介要約

ニカイア公会議に集った人々の中にひとりの背が低く色の黒い青年がいた。論敵は彼を黒い小人と呼んだ。それがアタナシオスである。彼はナイル河畔の原住民のことばであるコプト語を話した。彼はコプト人らしく肌の色が黒だったのである。ギリシャ・ローマの文化に精通しているわけでもない。

アタナシオスは子どものころ砂漠の隠修士アントニオスをしばしば訪ね、彼の手を洗った。彼は生涯砂漠の修道士たちと親しい関係を持ち、修道士たちはアタナシオスを支持し、が追放されると避難所を彼に提供した。アタナシオスは厳格な修練を学び厳しくそれを実行した。アタナシオスは、議論が論理的に優れていたとか、政治的な洞察が優れていたとか、流麗な文体だったというわけではない。論敵のほうがそういう面ではすぐれていた。

アタナシオスは、単純な信仰の人であり、修道士としての修練、燃え立つ精神、強い確信こそが武器だった。

アタナシオスにとって、イエス・キリストにおいて神が人となられたことは、人類の歴史とキリスト教信仰にとって中心的な事実である。神の受肉=神が我々の中に来られたからこそ、神と我々は交わることができるというこそ、キリスト教の確信である。それゆえ、アレオイス主義はそれを危機にさらすものと考えた。アレオイスは、つまるところ、キリストとは被造物だと教えたからである。

アレオイス論争は、自分たちの生活とあまり関係のない神学議論ではない。キリスト信徒としての生活の土台の問題なのである。

論敵アレオイス派は皇帝コンスタンティウスを味方につけた。アタナシオスは、しばしば逮捕され、追放された。そして彼は砂漠に五年間暮らしたこともあった。アレオイス派は、シルミウムの公会議でニカイア会議の決定を公然と否定したことさえある。ところが、コンスタンティウス帝が突然死に、背教者ユリアヌスが皇帝となる。皇帝は論争をなすがままにまかせて、キリスト教会の弱体化を見ようという政策を取った。その結果アタナシオスはアレクサンドリアに帰還できた。

そして、神学的合意に達する。

362年アレクサンドリアの会議で、『父と子と聖霊の区別を取り除いてしまわないかぎりにおいて、『同じ本質』ホモウーシオスという表現を承認し、同時に父と子と聖霊が三つの神になっ  
てしまわないかぎりにおいて「三つの本質」ということが認められる、と。

こうして、ニカイア正統主義は、結局 381年第二回公会議であるコンスタンティノポリス公会議で確定した。

ニカイア正統主義の三位一体論の確立にはカイザリアの大バシレイオス、彼の弟ニュッサのグレゴリオス、ナジアンゾスのグレゴリオスが貢献しているが、ここで教えるほど私も知らないの  
で、名前だけ紹介しておく。

## XII. キリスト論論争と東西教会の分裂

### 1. 東西の教会

東西の教会は中世初期までの長い時間をかけて分かれていき、1054年に分裂。

文化的な違いとして、西方はラテン語を、東方はギリシャ語を話していたということ。

政治的状況のちがい。西方は帝国政府が倒れたので、その空白を教会が埋めるという時代があったのに対して、東方では帝国政府はさらに千年間生き続け、教会を支配しつづけたというちがいがある。

こういう違いがあるにもかかわらず、古代においては東西の教会が一つの教会だという意識が強かったが、それが徐々に分かれていく。

### 2. カルケドン会議までのキリスト論論争

キリストと神との関係は、ニカイア会議（325年）とコンスタンティノポリス会議（381年）で決着済み。エイレナイオスのいうように、「キリストは、人であるゆえに人の罪を担うことができ、キリストが神であるゆえに贖罪の能力を持っている。」では、「どのようにしてイエス・キリストの中に神性と人性が一つとされているか」というのが次の課題。東方教会には、人間を救うために人となられたその人性を強調するアンティオキア学派、神の真理を教える教師として神性を強調するアレクサンドリア学派二つの潮流があった。両派ともにイエスは神であり人であると信じていたが、「どのように」イエスは神であり人であるのかという点が問題だった。

アレクサンドリア学派：真理の教師としてのキリスト。神性を強調。

アンティオキア学派：人間の救い主としてのキリスト。人性を強調。

西方教会では、テルトゥリアヌスの「キリストのうちにおいて、二つの本性が一つのペルソナに結合されている」という定式で、解決済みだった。

### (1) アポリナリオス・・・・アレクサンドリア学派

キリストにあっては、ロゴスが人間の理性的精神に取って代わったと考える。言い換えると、人間にとって知性もしくは理性的靈魂が果たす役割は、イエスのうちにおいては神のロゴスが果たしている。つまり、人間の肉体に神の精神が宿っているということ。

これはキリストの神性を強調するアレクサンドリア学派にとっては良かったが、キリストの人性を強調するアンティオキア学派にとってはまったく不十分だった。人間の肉体に神の精神が宿っていても、それはほんとうの人間ではない。したがって、人間の救い主にはなりえない。ベッテンソン p p 81, 82

最終的に381年コンスタンティノポリス公会議で拒絶される。

### (2) ネストリオス・・・・アンテオケ学派

ネストリオスは、マリヤを「セオトコス（神を生んだ人）」と呼ぶことを拒否し、「キリストトコス（キリストを生んだ人）」とよぶべきだと主張した。この主張の意味は、マリヤを問題としたのではなく、イエスを問題としたのである。マリヤを「キリストを生んだ人」と呼ぶべきだというのは、イエスの人性を強調するためであった。逆にセオトコスはイエスの神性の強調であり、アレクサンドリア学派では一般的だった。

アレクサンドリアの司教キュリロスは、「ネストリオスは、『イエスの内には「神と人という二つの本性と二つの人格が存在する』と主張している」とネストリオスを厳しく攻撃した。431年エペソ公会議でネストリオスを異端とする。

対抗会議をヨアンネス（ネストリオスの支持者）が開き、キュリロスに異端宣告。皇帝テオドシウス二世が介入。433年「一致定式」でキュリロスとヨアンネスが合意。ネストリオスは断罪され、追放されペルシャで別に教会を建てる。これが唐の時代の中国にわたって景教と呼ばれる。

だが、実は、ネストリオスを異端と認定したのはキュリロスと教会のまちがいであった。「ネストリオス主義」という異端の教えは、ネストリオス自身の教えではなかったし、彼が設立してはるか中国にまで伝わった景教の教えでもない。ネストリオス自身と景教のキリスト教は、アンテオケ型の正統的なキリスト教であった。（詳細は、ジョン・M・L・ヤング『徒歩で中国へ』（イーグレイプ2010年）の5章、6章を参照せよ。）

### (3) エウテュケス・・・・極端なアレクサンドリア学派「キリスト単性論」

ベッテンソン p 87

キリストは「父と同一の本質」ではあるが、「我々と同じ本質ではない」。また、救い主は「結合の前には二つの本性に由来したが、結合の後には一つの本性をもった」とも。

ただ問題はキリストの神性のみを主張しており、キリストの人性を否定しているので、グノーシスのドケティズムの主張に極めて近い。コンスタンティノポリス主教フラウィアノス（フラヴィアン）はこれを異端宣告。

エウテュケスはローマ監督レオに上訴するも、レオはフラウィアノスを支持。

(4) カルケドン教会会議 451年（後に第四回公会議と呼ばれる）

キリストのうちに「二つの本性が一つの人格となって存在している」というテルトゥリアヌスの定式を確認した。

カルケドン会議は、極端なアレクサンドリア学派と極端なアンティオキア学派を退けた。エウテュケス主義は明白に拒絶。また、先に開かれた 325 年のニカイア、381年のコンスタンティノポリス、431年のエペソ公会議の決定を再確認した。

ところが、シリア正教、コプト正教、エチオピア正教、アルメニア正教はカルケドン会議の結果を拒否した。単性論として排斥されたが、彼ら自身はその呼称を拒否しているので、非カルケドン派と呼ぶ。

\* ベッテンソン p 91 カルケドンの定式

### カルケドン信条

されば、聖なる教父等に従い、一同声を合わせ、人々に教えて、げにかの同一なる御子我らの主イエス・キリストこそ、神性に於いて完全に在し人性に於いてもまた完全に在し給うことを、告白せしむ。主は真実に神にいまし、真実に人でありたまひ、人間の魂と肉をとり、その神性によれば御父と同質、人性によれば我らと同質にして、罪を他にしては、全ての事に於いて我らと等し。神性によれば、万世の前に御父より生れ、人性によれば、この末の世に我らのため、また我らの救いのため、神の母なる処女マリヤより生れ給えり。同一なるキリスト、御子、主、独り子は二つの性より成り、そは混淆せられず、変更せられず、分割せられず、分離せられずして承認せらるべきなり。されば、この二つの性の区別は、一つとなりしことによりて何等除去されることなく、却って各々の特性は保有せられ、一つの人格と一つの存在とに合体し、二つの人格に分離せられず、分割せられずして、同一の御子、独り子、御言なる神、主なるイエス・キリストなり。げに預言者等が、昔より、彼につきて宣べ、また主イエス・キリスト自ら我等に教え給ひ、聖なる教父等の信条が我等に伝えたるが如し。

（東京基督教研究所訳）

### 3. 東方教会——カルケドン派、非カルケドン派、アッシリヤ東方教会

#### (1) 流れの整理

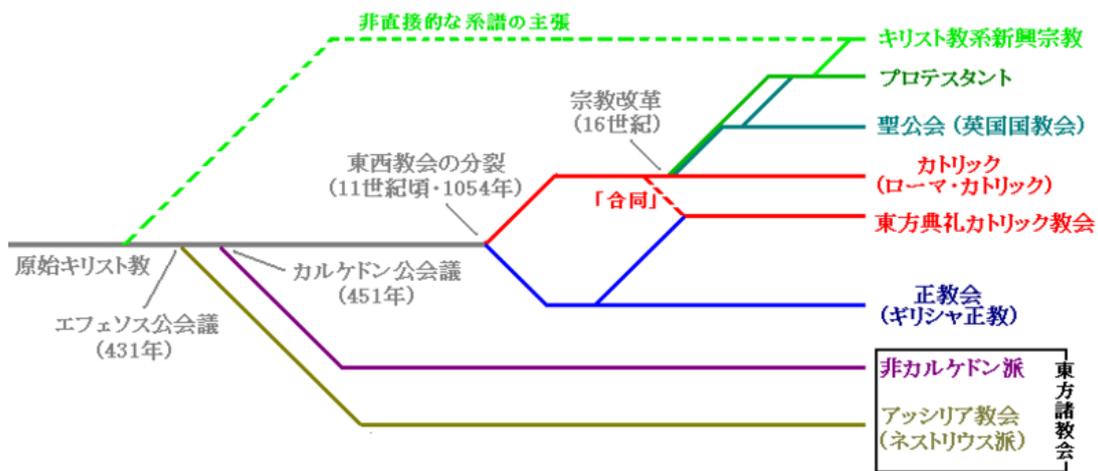
東方教会は、カルケドン派と東方アッシリヤ教会と非カルケドン派に分けられる。

カルケドン派とは正教（オーソドックス）のことである。コンスタンティノーブル総主教庁とする。ギリシャ正教、ロシア正教、グルジア正教、ルーマニア正教、ブルガリア正教、セルビア正教などがある。正教においては西方のローマ教会が世界中の教会をひとつの組織とするのとは異なり、一つの国に一つの独立組織を持つという原則がある。カエサ

ロ・パピズムだからである。コンスタンティノーブルを総主教庁とする東方教会が西方のローマ教会と分裂するのは、11世紀頃からの長いプロセスを経て後だが、最終的には中世のフィリクエ論争をめぐっての1054年のこと。

非カルケドン派とは、エペソ公会議は受け入れたが、451年のカルケドン信条を拒否した派である。カルケドン派からは「単性論」と呼ばれるが、彼ら自身は単性論であると認めていない。シリア正教会の主張によれば、シリア正教会は、「キリストの真の神性と真の人性は、彼の中で本質的に統合されている」と言い、「キリストはその二つの性質からなる一つの具体的な性質を持つ」と信じている。非カルケドン派にはいる東方諸教会はシリア正教会、アルメニア使徒教会、コプト正教会、エチオピア正教会(1975年まで国教)、エリトリア正教会(1993年エチオピアから独立)がある。彼らは431年ネストリオスを排斥したエペソ公会議は受け入れているが、カルケドン信条は拒否した。

アッシリア東方教会は本来、シリア教会の東方地区つまりペルシャ地区だった。ところが431年エペソ公会議で「テオトコス論争」に敗れて排斥されたネストリオスを、アッシリア東方教会は受け入れたゆえに、正統派から長らく異端とされることになった。それゆえ、一般にアッシリア東方教会はネストリウス派と呼ばれるが、事實は、アッシリア東方教会はもともとシリア教会の一部であり、東部シリア教会と呼ばれることもあった。彼らが431年にネストリウスを受け入れたためにシリア正教会から外れたということである。中国では景教と称される。<sup>29</sup>



## (2) シリア正教会 (資料はシリア正教会HP <http://www.syrian.jp/001-1-1.htm>)

「このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになった」(使徒11:26) アンティオキアの教会はキリスト教世界においてエルサレムの次、2番目に設立された教会。カエサレアのエウセビオスの『年代記』によれば、使徒ペテロがアンティオキアで初めて司祭職制を創始し、彼自身その最初の主教。総主教座は歴史の混乱期にあって518年にアンティオキアから移らざるを得なくなり、現在はダマスカス。

<sup>29</sup> 佐伯好郎『景教の研究』p287

## 教義

ニカヤ信条、ニカヤ・コンスタンティノポリス信条を告白する。

451年カルケドン信条を拒否。単性論教会として西方からは異端視される。

「キリストの真の神性と真の人性は、彼の中で本質的に統合されていると信じます。」というように、神性と人性の区別を拒否するが、エウテュケス主義ではないともいう。

## 特徴

第一に、セム族の文化を反映したキリスト教の形式を維持。

第二に、アラム語の一方言であるシリア語を典礼に用いる。

第三に、典礼は最も古来の形式を維持。

第四に、シリア正教会の信徒は多民族で構成されており、キリストの身体の統一性を体現。

シリア正教会は1960年から世界教会協議会のメンバー。シリア正教会は、ローマ・カトリック教会との間で2つの共同声明を出し、また、東方正教会とも共同声明を出した。

### (3) アッシリヤ東方教会

#### a. ペルシャの教会

ペルシャに最初に福音をもたらしたのは、ペンテコステにエルサレムに集っていたユダヤ人や改宗者たちであろうが、伝道者としてシリア正教会の働きの中で派遣された使徒トマス。35年には早くもトマスはペルシャ地域に伝道。

東部のシリア教会が431年エペソ公会議で拒否されたネストリオスを受け入れたため、東部が分かれることになってしまった。これがアッシリヤ東方教会で、トマスが初代大主教とされる。

ペルシャはローマと敵対しており、ローマがキリスト教を国教とするに及んで、ペルシャ国内のアッシリヤ東方教会はゾロアスター教の僧侶たちの策略もあって厳しい迫害下に置かれる。

#### b. インドの教会

シリア語を話すキリスト教は大変早い時期に南インドのケララ（古い著書はしばしばマルバラ湾）にたどり着いた。偽典言行録に収録された伝承と地方の歌によれば、キリスト教は紀元後52年に使徒トマスによりここに初めて伝えられ、彼は殉教するまで多くの現地人を改宗させた。（『トマス行伝』）

ケララとタミル・ナドゥからローマ居住地跡とともに発見されたネロの治世を記したローマ貨幣の備蓄が示すように、この時期ローマ人とインド人の間の貿易が盛んで、モンスーンの風は湾岸からケララまで直接3ヶ月もかからずに船で旅することを可能とした。遅くとも2世紀か3世紀までにはケララに相当のキリスト教徒共同体が創設された。

#### c. 中国の景教（波斯寺のちに大秦寺）

資料は、西安に 781 年に建立され、1623-25 年に再発見された「大秦景教流行中国碑」。この記述によれば、中国唐の太宗皇帝とペルシャの教会の宣教師との最初の公式な接触は 635 年。もっとも、非公式な接触はより早かっただろうが、この年、修道士阿羅本（おそらくアブラハムに充てた中国名）は宮廷の客人として迎えられた長安の都に入った。彼の聖典の写本は中国語に翻訳され皇帝太宗によって個人的に吟味され、彼は 638 年以下のように声明を布告した。これは中国の公文書にも記録されている。

「道に不変の名は無く、賢人に不変の体もない。方に合った教えを設け、密に人々を救う。大秦國（シリア）の大徳・阿羅本は経典と聖像を持って遠くよりこれを献納するため京に上った。その教旨を詳らかにすれば玄妙無爲である。その元宗を見ると、生を成すをして要と立する。…民を救済し人に利するため宜しく天下に行うべし。」

以後、およそ 200 年間キリスト教宣教が保護され、全土に大秦寺が建てられた。

845 年、景教の流行は、皇帝武宗によって突然の終焉を迎える。彼は、4 千 600 の僧院を破壊、26 万 5 千人の仏教の僧や尼を還俗させた。3 千人のキリスト教徒と拝火教徒修道会員を還俗させ、すべての外国人は自国へ送還。これで中国における景教は滅亡。

#### d. 景教の日本への伝来の可能性 甲論乙駁

『景教の研究』で有名な佐伯好郎博士は 1908 年（明治 41 年）論文「太秦を論ず」において、太秦寺のいすらい井戸や三柱鳥居や地名などから、太秦寺は、唐代の中国で流行した大秦寺と同じくキリスト教の寺であると提唱した。そして、渡来人である秦氏は古代ユダヤ人キリスト教徒である、と。太秦寺建立は 603 年説と 622 年説がある。

学界は時代錯誤であるという批判を佐伯説に向けた。すなわち、景教が中国にはいったのは、唐の太宗皇帝の時代の 635 年であり、その後、約 200 年間、中国では大秦景教が流行した。つまり中国における景教は 7 世紀前半から 8 世紀にかけてであった。しかも中国では最初、彼らの寺の名は波斯寺と呼ばれ、大秦寺と名を変えたのは 745 年であった。ところが、秦氏がこの列島に渡来したのは 4-5 世紀である。中国に流行した景教が日本に渡来したというなら、順序が逆である。…というわけで、学界では太秦寺=大秦寺=景教寺院説は顧みられない。

これに対して、佐伯氏はなお自説に固執し、後年になると、いや秦氏はもともと景教以前の古代キリスト教徒であり、彼らは中国をパスして日本に渡来したので、キリスト教は中国より先に日本に伝わったのだという。秦氏来日の記録は、日本書紀によれば、応神天皇の 283 年に弓月君が百済から 127 県の 1 万 8670 人を連れて来たという。そして、この弓月君は何者かといえ、天山山脈の北にあるバルハシ湖に流れるイル川の上流にあった弓月国の出身であるという。

現状としては、佐伯説はトンデモ学会でのみ話題になる珍説にすぎない。もし佐伯説の逆転ホームランがあるとしたら、「弓月国」なるキリスト教国が実在したこと、その 1~2 世紀ころ弓月国から東方へ向けての集団移住があったこととを、考古学者が遺跡を発掘して証拠立てる必要があるのだろう。そしたら、シュリーマンのトロイ発掘のようなことに

なる。それなしに、仮説の上に仮説を積み上げていっても、珍説は珍説のままである。

ただ現状で一点だけ佐伯説に有利なことを述べれば、たしかに紀元2世紀にはすでにシリア教会は佐伯氏が弓月国があったという中央アジアにさかんに伝道をしていたという事実がある。

シリア正教会の中央アジア伝道・・・HP <http://www.syrian.jp/002-3-4.htm>

### XIII. ヒッポのアウグスティヌス

ヒッポの司教。西方教会最大の教父。恩寵の博士。アフリカ人にして西洋の教師。そして、牧会者。

#### 1. 生涯

アウグスティヌス(Aurelius Augustinus, 354-430)は、ヘレニズム時代末期(古代末期)の354年、北アフリカの小都市タガステに中産地主の父パトリキウス(後にキリスト者となる)と熱心なキリスト教信者(カトリック教徒)モニカの長男として生まれる。

16歳のときに北アフリカのカルタゴに遊学し、当時としては普通のことであったとはいえ、ある女性と同棲生活を始め、翌年には、17歳にして1児(アデオダトゥス)の父となる。ペルシアのマニ(215-275)という人物が創始した**マニ教**に入信し、熱心なマニ教信者になった。

マニ教は、典型的なインド・ヨーロッパ語文化の宗教で、世界は光と闇、善と悪の対立抗争する場であり、人間のすべての不幸はこの対立抗争にあるとして、人間の救いは、マニ教の聖者の教えを聞き、儀式に参加し、禁欲生活をすることによって自らの魂を肉体から解放することにあるとした。またマニ教は、旧約聖書に描かれた神を荒唐無稽で不合理、不道德な神であるとして激しく非難していた。アウグスティヌスがマニ教に入信した理由については、様々に言われていますが、その理由の一つに、アウグスティヌスは、マニ教の教えによって自分の抑え難い欲望を克服しようとしたこともあるのではないか。アウグスティヌスにとって、悪と罪の問題は生涯の課題。

【カルタゴ】(Carthago) アフリカ北部、チュニス湾に臨む古代都市。紀元前9世紀頃、フェニキア人によって建設され、前6世紀にはギリシアを破って、地中海の制海権を獲得。紀元前146年、ポエニ戦争によって滅亡。その後、カエサルによって再興されたが、698年、アラビア人に破壊された。

【マニ教】(Mani) 3世紀にマニ(215頃～275頃)がイランにおいて始めた宗教。ペルシア固有のゾロアスター教的二元論に、グノーシス主義・仏教を加えた混合宗教。四世紀には、ローマ・北アフリカの都市知識層に迎えられ、六、七世紀にはチベットから中国にまで達したが、しだいに道教に同化された。

彼はその後 383 年、マニ教を頼ってローマ帝国の首都ローマに行き、一年後には、イタリア北部の町ミラノで、人々に立身出世を約束する修辞学教師となる。しかしここでアウグスティヌスは、ミラノのキリスト教指導者司教アンブロシウスの説教を聴き、遂にマニ教を捨ててキリスト教の教会に足繁く通う。そして同じ頃、新プラトン派の書物を読んで、プロティノスの新プラトン主義を学ぶ。これはアウグスティヌスのキリスト教理解に大きな影響を与える。

やがて 386 年、「とりて読め」の声にしたがい、決定的な回心を経験して、全面的にキリスト教を信じ、洗礼を受けた。 Confessiones は必読書。山田晶訳(中央公論社)がお勧め。

その後、ミラノで 10 年余りにわたってマニ教を批判する活動を続けますが、故郷のタガステに帰ってからは、親しい友人たちと修道生活を始め、息子のアデオダトゥスがなくなった翌年、391 年には、ヒッポの司教ヴァレリウスにその深い信仰と高い教養を評価されて司祭に叙階され、ヴァレリウスの死後 396 年には、その後任の司教に祝聖された。その後彼は牧会と著作活動に没頭。ドナトゥス派論争で教会・礼典論を、ペラギウス派論争で恩寵救済論を確定。『神の国』で歴史哲学を展開。

ゲルマン民族の一派のヴァンダル族によってヒッポが包囲されまさに陥落しつつあるとき、亡くなった(430)。

【アンブロシウス】(Ambrosius、340-397)キリスト教の初代教父。聖人。ミラノの司教。アウグスティヌスをキリスト教に導き、またテオドシウス帝に民衆虐殺の非道を懺悔させた。アンブロシウス聖歌と呼ばれる讚美歌集も作った。

## アウグスティヌス年譜 →[簡易版](#)

年 (年齢)	出来事	関連する周囲の出来事など
<b>&lt;幼少・少年時代&gt;</b>		
354	11 月 13 日、北アフリカのタガステに生まれる。父親パトリキウスは土地の名士 (死の直前まで異教徒)、母親モニカ (Monnica) は熱心なクリスチャン。	
幼時	重病になり、両親は洗礼 (=死ぬ前の儀式として) まで準備するが、回復する。	
少年期	学校でスパルタ教育を受ける。ウェルギリウスをはじめとするローマ古典に親しむ。ギリシア語は不得意。ある時期にマダウラへ移る。	
370 (16)	マダウラの学校をやめ、しばらくタガステでブラブラする。ローマニアヌスと知り合う (パトロン)。「梨を盗む」事件。その後、大都市カルタゴに移って弁論術の勉強	

年（年齢）	出来事	関連する周囲の出来事など
	<p>を続ける。この前後に父親が死去。</p> <p>カルタゴで（？）ある女性と同棲を始め、息子アデオダトゥス（372 頃-390 以前）をもうける。</p> <p><b>&lt;青年時代&gt;</b></p>	
373 (19)	<p>キケロ『ホルテンシウス』（散逸）を読んで感激し、「知恵を愛する」生を送ろうと決心する（＝哲学への「回心」）。聖書は文体が拙劣だという理由で軽蔑する。</p> <p>マニ教（キリスト教の異端的分派）の「聴聞者」となる（382 頃まで9年間、形の上ではそれ以降も）。モニカは息子の行状を嘆く。</p> <p>哲学の勉強を続け（独力でアリストテレス『範疇論』を読む）、一方でマニ教会に通い続ける。『美と適について』（381 頃、散逸）を書く。学問（artes liberales）を一通りマスターする。</p>	
375 (21)	<p>タガステに戻り、文法と弁論術の教師となる。親友の死。</p>	
376 (22)	<p>カルタゴに移り、教師を続ける。</p>	
		<p>381年、コンスタンティノーブル公会議、「ニカイア・コンスタンティノーブル信条」の制定。</p>
383 (29)	<p>マニ教の司教ファウストゥスに会って教義上の質問を向けるが、満足できる答えが得られず、マニ教に失望する。また学生にも失望（学級崩壊）。</p> <p>カルタゴに来ていた母親モニカを振り切ってローマに渡る。ローマで懐疑主義哲学に接近する。教師を始めるが、学生が授業料を払わないので失望する。</p>	
		<p>384年、ローマ元老院のウィク</p>

年（年齢）	出来事	関連する周囲の出来事など
384 (30)	<p>ローマ市長シュンマコスの推薦を受け、ミラノの弁論術教師に抜擢される。カルタゴ以来の友人アリュールピウスと一緒にミラノに移住する。ミラノでまず司教アンブロシウスと面会する。シンプリキアヌスとも知り合う。</p> <p>モニカがミラノに来る。アンブロシウスの説教を通して、次第にキリスト教カトリック教会の教えを理解しはじめる（特に、聖書の「アレゴリー的解釈法」）。</p> <p>モニカ、息子を正式に結婚させようとする。アウグスティヌス、長年の同棲相手と別れ、彼女をアフリカ（タガステ？）に帰らせる。</p> <p>正式な結婚を取り決めるが、それが実行可能になるまで（相手が若すぎた）、とりあえず別の女をつくる。</p>	<p>トリア祭壇をめぐる論争（シュンマコス vs. アンブロシウス）。</p>
386 (32)	<p>&lt;回心&gt;</p> <p>M・ウィクトリーヌスによるラテン語訳で新プラトン哲学の書物（プロティノス他）を読み、惹かれる。シンプリキアヌスを訪ね、ウィクトリーヌスがキリスト教に回心した時の話を聞かされる。次いで、ポンティキアヌスから修道士アントニオスの話（アタナシオス『アントニオス伝』）、そして修道生活の話を聞かされる。</p> <p>理想と現実の間で悩みつづけていたある日（8月1日前後）、隣の家から「取って読め」という声が聞こえたので、手元にあった聖書を開いて読む。それはパウロの手紙（ローマ書 13:13-14）であった。アウグスティヌスは一瞬にして（正統）キリスト教に「回心」する（＝「庭の場面」、『告白』8, 8; 8, 12）。</p> <p>葡萄収穫の休暇を待って、母親およびアリュールピウスと一緒に、ミラノ近郊の村カッシアークムにあった友人の別荘に引きこもって擬似修道院生活を始める。集中的な著作活動。休暇が終わると、正式に職を辞する（肺病の兆候があったのでそれをも口実にした）。</p>	
387 (33)	<p>カッシアークムを出てミラノに戻り、教会の洗礼志願者となる。復活節（4月24/25</p>	

年（年齢）	出来事	関連する周囲の出来事など
	日？）、アリュールピウスと息子アデオダトゥス（当時16歳）と共に洗礼を受ける。間もなくアフリカに帰るが、途中（オスティア）で母親モニカが死ぬ。アフリカに渡るのを中止し、ローマに行く。	
388（34）	夏を過ぎてからアフリカに戻る。カルタゴを経由して、秋のうちに故郷タガステに到着する。仲間（おそらくアリュールピウスその他）と共に擬似修道生活を始める。	
	<b>&lt;司祭時代&gt;</b>	
390（36）	ヒッポの司教ヴァレリウスと市民たちの希望で、不本意ながらヒッポの司祭職を引き受ける（391年初頭かも）。	
391（37）	司祭としての仕事を開始するかたわら、ヒッポに修道院を建てて禁欲的修道生活を送る。	
396（42）	この前後に司教となる。当初はヴァレリウスとの共同司教、ヴァレリウスの死（396?）の後はヒッポの単独司教。	
	<b>&lt;司教になってから&gt;</b>	
398（44）	<u>ドナトゥス派弾圧</u> が激化。411年ごろまで、反ドナトゥス派の著作や活動（公会議への参加）を精力的に続ける。	
400（46）	この頃『告白』を書く（397-401?）。	
		410年8月24日、アラリック率いる西ゴート族がローマを占領・略奪。
410/411（56/57）	ローマを逃れたペラギウス、ヒッポに滞在（アウグスティヌスは病気で不在）。ペラギウス派のカエレスティウスを巡って、対ペラギウス論争が始まる。  411年、対ドナトゥス派公開討論（カルタゴ）、ドナトゥス派の禁止。	

年（年齢）	出来事	関連する周囲の出来事など
413 (59)	『神の国』執筆開始（徐々に公刊され、完成は 426 年）。	
418 (64)	カルタゴ公会議（5月）。ペラギウス派、勅令によって禁止される。	
420 (66)	この頃『三位一体論』が完成（執筆は 400 年頃から）。この頃からアエクラーヌムのユリアヌスとの論争が始まる。	
426 (72)	『神の国』全巻が完成。その一方で対セミ（「半」）ペラギウス主義論争が始まる。	
427 (73)	『再考録』（Retractationes）を完成。	
		429年にヴァンダル族が北アフリカに侵攻し、430年夏、ついにヒッポを包囲。
430 (76)	8月28日、ヴァンダル族による包囲中のヒッポにて死去。	

## 簡略版

354	タガステに生まれる。母親モニカは熱心なキリスト教徒。
	マダウラ、カルタゴで勉強。
372頃	ある女性と同棲を始め、息子アデオダトゥスをもうける。
373	キケロの本を読んで「知恵を愛する生」に目覚める。 マニ教徒になる。
375	タガステ、後にカルタゴで教師となる。
383	マニ教に失望、またタガステの学校にも失望してローマに渡る。
384	ミラノの修辞学教授になる。司教アンブロシウスと出会う。 正式な結婚のため、同棲相手の女性を故郷に帰す。 次第に人生に行き詰まりを感じはじめる。 キリスト教（正統派）と新プラトン哲学に接近する。
386	回心。

	離職し、一時的にカッシアークムに隠棲。
387	ミラノでアンブロシウスから洗礼を受ける。 故郷に帰る途中、母親モニカが死ぬ。
388	タガステに戻り、仲間と修道的な共同生活をはじめ。
390	海岸の町ヒッポ・レギウスの司祭となる。
396	ヒッポの司教となる。
400	この頃、『告白』を執筆。
413	西ゴート族のローマ侵略を受け、『神の国』執筆を開始（426に完成）。
420	この頃、『三位一体論』が完成する。
430	ヒッポにて死去。8月28日。

## 2. ドナティスト論争

### (1) その歴史的背景

広く言えば背景は、修道院運動と同じように、コンスタンティヌス帝の回心のもたらした状況にある。つまり、教会が帝国と手を握り、全体として墮落してしまったという認識である。修道士たちは、砂漠にのがれて修道生活をすることによって、その不満を表したが、ドナティストたちは、墮落した教会は教会ではなく、自分たちのように熱心・忠実なものたちの新しい群れこそ真の教会であると主張した。

### (2) 経緯

ドナティスト問題は、迫害時の棄教者をどのように教会に復帰させるべきかという課題から生じた。激しい迫害が起こったとき、迫害の終わったときに同じ問題に教会は直面した。迫害のときに信仰を捨てた者が、教会に回復することを希望したときどうするか？

カルタゴの司教座を巡る問題。

311年司教フェリクスはカエキリアヌスをカルタゴ司教に任職した。

しかし、フェリクスは、かつてディオクレティアヌス帝の迫害のとき、聖書、聖なる者を官憲に渡し棄教した者であった。

そこでヌミディアの司教たちは、フェリクスの任職を否認し、別にマリヨヌスをカルタゴ司教として選任した。さらに、マリヨヌス死後、学識と実行力を兼備したドナトゥスが公認とされ、厳格派を率いてドナトゥス派と呼ばれる。

ドナトゥス派は、①背教者の行なった礼典は無効であり、②自派の教会のみが真の教会であり、③ドナトゥス派に改宗する者は、再洗礼を受けるべしとした。

逆に、カトリックはどうしたか。ドナトゥス派からカトリックに移る者には再洗礼は求められなかった。洗礼は、その執行者の人物いかんではなく、事柄自体に有効性の根拠があるとされたからである。

<社会的背景>

実はこの論争には社会的背景がある。

カエキリアヌスの支持者はカルタゴとその周辺の総督領に集まっていた。他方、西方のヌミディア、モーリタニアではドナトゥス派が一般的だった。カルタゴとその周辺地域にはラテン化された大土地所有者や商人、軍人などが住んでおり、イタリアとの貿易で利潤を独占していた。

他方、ヌミディア、モーリタニアの人々は下層の農民たちであり、彼らの小麦をはじめとする農産物をカルタゴの支配層が安く買って、イタリアに売って巨利を得ていたため、反発があった。

しかも、ヌミディア、モーリタニアに住む下層民には従来からキリスト教徒が多く、彼らはローマ帝国の偶像崇拝を初めとする罪と戦ってきた。ところが、コンスタンティヌス大帝の改宗によって、カルタゴのローマの支配層たちが急激に改宗して教会に押し寄せてきた。そして、教会はこの世的になり堕落し始め、政治と経済の実権を持つ連中が、やがて教会でも実権を持ってしまおうであろうということは眼に見えていた。こうした事態に対する反発が、ドナティスト派と一体となった。

ドナティストたちはやがて 340 年頃になると、暴力的手段に訴えるキルクムケリオーネスまでも出現した。彼らは殉教願望が熱狂主義になって、信仰をゆがめている人々に対する戦いで死んだものを殉教者とみなすようになった。

4 世紀末、アウグスティヌスがカルタゴの司教に就任した時点では、教区ではドナティストが多数を占めていた。彼は、説得に努めるが功を奏さなかった。

411 年カルタゴ会議で大論争。皇帝は統一命令を出し、ドナティストを異端と宣告する。ローマ当局は軍事力を行使して、虐殺と制圧が行なわれ、聖職者は追放、教会と財産は没収された。しかし、実際には、制圧はしきれず、最終的にドナティストが消滅するのは 7 世紀のイスラム教徒による征服後である。

### (3) その神学的な意義・・・アウグスティヌスの洗礼論~教会論の確立、

#### a. 『洗礼論』

「背教者も教会に復帰し悔い改めて回心するならば、たとえ再び洗礼を施されずとも、前の洗礼の恵みが失われたなど考えるべきではない。」 1 : 2

「洗礼を受けた人が教会の一致から離れても叙階された人が教会の一致から離れようとも、洗礼を施す sacrament 権を失わない。」 (1 : 2)

「世界で一なる教会に属する者に再洗礼を施そうと務めている人々が不敬虔なわざをなしていることである。また神与の sacrament であれば、たとえ分離派におけるものであってもあえて否認しないわれわれが正しい態度をとっていることになる。」 (同)

問「異端者が有効な洗礼を授けうるか？」

答え

① 異端者による洗礼も有効である。理由は、教皇ステファヌスによって権威ある承認を

得たから。これが権威による論証。アウグスティヌスは教会の公的決定を重んじる。

その上で、アウグスティヌスの信仰は理解を求める。聖書からさらに論証していく。……

②1コリント1：3「あなたがたはパウロの名においてバプテスマを受けたのか」ということばから、真の sacrament の授与者は人としての司教ではなくキリストである。だから、司教個人の人格が汚れているか清いかは、sacrament の有効性に何ら関係ない。

③マルコ9：38－39から、聖職者の人格の正邪や正統か異端かは洗礼の有効さに影響しない。マルコ 9:38-39

ヨハネがイエスに言った。「先生。先生の名を唱えて悪霊を追い出している者を見ましたが、私たちの仲間ではないので、やめさせました。」しかし、イエスは言われた。「やめさせることはありません。わたしの名を唱えて、力あるわざを行ないながら、すぐあとで、わたしを悪く言える者はないのです。

④ヨハネ1：13によれば、キリストこそ洗礼を授けるお方である。sacrament はキリストがお授けになるのであり、執行している司祭は道具にすぎない。ヨハネ 1:13

この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。

⑤「ユダが洗礼を受けた人々も、実はキリストが洗礼を授けたのである。」(ヨハネ福音書講解ヨハネ5：18)

トリエント公会議(16C)で確認され定式化された表現。

ex opere operato (なされたわざから)……事効説 (アウグスティヌスの趣旨からいえば、むしろキリスト効説と呼ぶべきだが)

ex opere operantis(なす者のわざから)……人効説

#### (4)「解放の神学」の観点から見るアウグスティヌスの限界

アウグスティヌスは、ドナトゥス派の問題の社会的背景には気づかなかった。彼自身は収奪する側に属していたから。(アンドリュー・マーレーという改革派の優れた器が有名だが、彼は南アフリカのアパルトヘイト政策の問題に気がついていたのか? Amazing Grace で有名なジョン・ニュートンは回心後も奴隷商人をしていて良心の痛みを感じなかったと自ら告白している。ラテンアメリカを食い物にしてきた米国の教会人がラテンアメリカの貧困層の苦しみを理解できないのと同じ。)

#### 『解放の神学』の課題

支配階級が正統的教会に擁護されることになり、被支配階級がその正統的教会の欺まん性に対して反発するということがしばしば起こってきた。教会が権力と結ぶとき、教会が社会体制維持、民衆に目隠しをして社会の欺瞞を悟らせないための道具として用いられてしまうということが起こってしまいがちである。「宗教はアヘンだ」といった共産主義者のいらだちと反キリスト教政策の理由である。ソ連や東欧などの共産圏では徹底的にキリスト教は弾圧された。

ベトナム戦争における米国教会の支持と、これに対する若者たちの失望と抵抗。

ラテンアメリカに対する米帝国主義の支配と、解放の神学。

参照:グティエレス『解放の神学』岩波

\*聖書はローマ書 13 章で地上的権威の積極的意義を片方で説くが、その悪魔性については黙示録 13 章、不当な貪りについてはヤコブ 4 章で説いている。

### 3. ペラギウス論争 ベッテンソン pp 92-102

#### (1) ペラギウス

ペラギウス(360 頃-420 頃)ブリトン人<sup>30</sup>(古代イギリス人)の修道士、平信徒。キリスト教徒の家庭に生まれる。前半生は不明。380 年頃ローマに法律を学び、成人してから洗礼を受け、聖書研究に励み、その徳を修めた生活と学識、修道土的禁欲主義の提唱と実践によって、ローマで名声をあげる。パウロの手紙の注解書、「三位一体の信仰」を出版。彼の信奉者が増えローマで指導的なキリスト者とみなされる。480 年アラリックの率いるゴート族のローマ侵攻の際、多くの避難者とともに、ペラギウスと弟子カエレスティウスは北アフリカに来た。

ペラギウス「デメトリウスへの手紙」16 ラテン教父神学 P.L.xxxiii. 1110 ベッテンソン p92

「われわれはあたかも神が、ご自分の創造になる人間の弱さを忘れて、彼らにはたえられない命令を負わせたかのごとく語る。そして同時に、義なる方に不義を、聖なるかたに残忍性を着せている。それは第一に、神は不可能なことを命令されたと不服をとなえることにより、第二には人は自分の力でどうにもできないことのゆえにさばかれる、と想像することによってである。・・・神は正しいからであるから、不可能な事を命令しようとは思われなかった。また、聖なる方であるから、人間の力でどうにもできない事のゆえに、人間をさばかれるというようなことはない。」

つまり、ペラギウスは、「神が我々に律法を授けられた以上、我々はこれを行なうことができる。」「完成が人間にとって可能である以上、それは義務である。」という。言い換えると、行なうことができるからこそ、神は我々に律法を授けられたのだと主張する。我々にできもしないことを命じ、それが守れないからということで罰するというのでは、神は正義ではないということになる。つまり、人間は自由意志でもって善を意志することができるという。

---

<sup>30</sup> ブリトン人とはアングロ・サクソンに支配・同化される以前の古代英国に住んだ一族。「ブリトン族の貴族は頬ひげは剃るが、口ひげは剃らない。従って口ひげは口を覆う。かれらが食事をする時、ひげは食べ物にまわりつく。飲むときは、飲み物は、あたかも濾過されるがごとく、ひげを通して口の中に入る。」AD1 世紀のローマの記録によれば、ケルト系ブリトン人(古代英国人)は長い口ひげを生やし、馬を二頭並べた戦車で疾駆し、槍を投げて戦ったという。紀元前 54 年、ジュリアス・シーザーは、敵ゲルマン族と通じるブリトン族を討つため初めてブリタニアに上陸した。戦いの神々を崇拝していたブリトン人だが、すでに 5 世紀、キリスト教が伝来していた。5 世紀にアイルランドに聖パトリックが、6 世紀には聖コロンバが、カレドニア(古代スコットランド)に布教し、修道院を中心にブリタニアに布教活動を広めていった。

これはつまり、アダム以来、原罪を背負っているということを否定するということである。

「われわれは完全に発達した状態に生まれたのではなく、善と悪とをやる能力をもって生まれた。徳も悪徳もなしに生まれたのであって、各個人の意志が働き出す以前には、神が与えられたもの以外は、何も人間の中にはないのである。」Pelagius、pro liberum arbitrium Augustinus, De peccato originali<sup>14</sup> から

**\* 「ペラギウスの所業」 Augustinus, De gestis Pelagii<sup>23</sup> ベッテンソン p 9 4**

1. アダムは死ぬべき者として創造されており、罪を犯しても犯さなくても死んだであろう。
2. アダムの罪は彼のみを傷つけたのであって、人類には及ばなかった。
3. 福音と同じように、律法も人を御国へ導く。
4. キリストの降臨以前に、罪を持たない人々がいた。
5. 新生児は、墮落以前のアダムと同じ状態にある。……

400年頃ローマ滞在中、ある司教がアウグスティヌスの有名な祈り「なんじの命じるところを与え、なんじの欲するところを命じたまえ」(告白X:29)を引用するのを聞いて、これでは人間の自由意志を無にし、道徳的責任能力を否定するものだと考えて攻撃し、相当な数の同調者を得て、論争が巻き起こる。

## (2) アウグスティヌスの救済論

### a. アウグスティヌスによる反ペラギウス文書

『罪の報いと赦しおよび幼児洗礼について』412年

人間はアダムの墮罪以後原罪を持つゆえに、神の戒めを守って義とされることはできず、救いのためには恩恵による以外ないこと、幼児も洗礼を受ける必要があり、人間が無罪であると考えるのは誤りである。

『霊と文字』412年

パウロの教えに基づく恩恵論と義認論を論じる。アウグスティヌスは「文字は殺し、霊は生かす」というパウロの言葉を、律法と恩恵という意味に理解し、律法を重視するペラギウス主義を批判し、恩恵による救いと意義を論じる。

『自然と恩寵』415年

ペラギウスが人間の意志の自律性と善悪をなしうる力を認め、神の恩恵なしに救いにいたることが可能だと説き、自然と恩恵を同一視している点を批判。

恩恵は自然的本性を正しく導く働きをする。人間の自然本性はたしかに最初は罪も汚れもなく創られた。しかしこの人間の自然本性は、各人がアダムからこの本性を引き継いで生まれるため、いまや医者が必要としている。というのはそれが健全ではないからである。

『人間の義の完成』 415 年か 416 年

人間は自然にそなわっている自由意志によって罪のない生活をしようという完全主義を批判する。

## b. アウグスティヌスにおける人間の罪と救い

### ① 罪

ペラギウスは人間の前 *coram hominibus* で人間を捕らえ、アウグスティヌスは神の前で *coram deo* の人間を問題にするところに根本的な人間観の違いがある(宮谷氏の解釈 P126)

罪とは無知・無力である。無知とは人間は善悪の判断ができないことをさす。無力とは人間はたとえ善悪を判断できても、その判断にしたがって正しく生きられないことを意味する。(ローマ 1:19-23)

また、アウグスティヌスは罪を情欲と結びつけて理解する。人間は情欲に支配されており、意志の働きを抑圧してしまう。(ローマ 1:24,26 と『神の国』における創世記 3 章の釈義参照)

また、彼は、人間の陥りやすい罪として、高慢・傲慢を指摘する。(霊と文字 12:19)

そして、情欲は、自己愛 *amor sui* となって現れる。自分の欲望のままに生きてしまう。

結局、人間は個々の行いが善い悪いではなく、その存在が根本的に罪に汚れている。原罪がある。

原罪については、詩篇 51:5、『告白』乳母子のねたみの目、なし泥棒の話参照。

### ② 義認論(「霊と文字」)参照

ペラギウスは、人間は本性に与えられている力によって、神の教えを守り、完全な義を獲得できるという。

アウグスティヌスは、人間は墮落しているので、神の教えを守れない。そこで、神は人間に恩寵を注ぎ、義とする。「神の義とはそれによってわたしたちが神の贈物のおかげで義人とされるものであり・・・」「神の義というのは、神がわたしたちに単に律法の戒めにより教えるだけでなく、御霊の賜物によって与えてくださるものである。」(霊と文字 32:56)

## (3) カルタゴ 16 回司教会議 418AD5 月 1 日<sup>31</sup>

本会議で 8 か条が採択され、その夏皇帝ホノリウスはペラギウスを異端としてローマから追放する。<sup>32</sup>

① 原罪(第 1 条—第 3 条前半)。アダムは自然の本性によってではなく、罪のために死んだ。

そのため生まれたばかりの幼児にも原罪はあり、罪の赦しのための洗礼が必要である。

洗礼なしには永遠の生命を受けられない。これらの考えを否定するものは異端である。

<sup>31</sup>年代は宮谷によるが、バットンソンでは 417 年カルタゴ会議とある。またウィキペディアでは「416 年のカルタゴ会議などで異端として排斥された。」とある。いずれにせよ、411 年ないし 418 年にかけての会議の過程。

<sup>32</sup>宮谷による要約 pp208-209

- ② 恩恵について(第3条後半—第8条)。キリストによる神の恩恵で人は義とされ、また、罪を犯さないようにされる。この恩恵なしに、自由意志によって神の掟を守ることはできない。人間はみな罪をもっているがゆえに「罪を赦してください」と祈る。これは自分を卑下しているのではなく、実際に罪があるからである。

#### (4) 神学的見通し：罪観と神学の三体系 と 自由意志論争

##### ① 「罪観は神学体系にとってのアルキメデス点である」 A.A.Hodge

人間における罪をいかに認識するかによって、三つの神学体系ができる。すなわち、人間の罪を聖書がいうままに深刻に捕らえ人間はアブノーマルだとするならば、恩寵によってしか救われようがないということになる。つまり、恩寵救済主義である。キリスト観は、神の御子贖い主ということになる。

逆に、人間には原罪はなく、道徳的にノーマルなものであるとすれば、自力救済主義になる。キリスト観は人間の模範者ということになる。

両者の中間に、神人協力説が来る。

自力救済主義： ペラギウス——ソッシニウス (ソツツイーニ)  
——自由主義神学

神人協力説： 中世ローマカトリック——アルミニウス主義

恩寵救済主義：パウロ——アウグスティヌス——ルター・カルヴァン

##### ②自由意志

神学的な焦点は「自由意志」。教理史で繰り返される論争。WCF 第9章

墮落前のアダム・・・罪を犯さないことができる posse non peccare 罪なき状態

墮落後のアダム・・・罪を犯さないことができない non posse non peccare 罪ある状態

恩寵を受けた人・・・善を意志することができるが、罪を犯さないことは完全にはできない状態

天国で・・・罪を犯すことができず non posse peccare、善のみを意志することができる状態

WCF 第9章 自由意志について <http://www.ogaki-ch.com/WCF/word-index/>

1 神は、人間の意志にあの自然的自由を拭与された。それは善にも悪にも強制されていないし、また自然の絶対的必然で決定されてもいない(1)。

1 マタイ 17:12、ヤコブ 1:14、申命 30:19

2 人間は無罪状態においては、善であり神に喜ばれることを意志し、行なう自由と力を持っていた(1)。しかし可変的であって、そこから墮落することもありえた(2)。

1 伝道 7:29、創世 1:26

2 創世 2:16,17、創世 3:6

3 人間は、罪の状態に墮落することによって、救いを伴うどのような靈的善に対する意志の能力もみな全く失っている(1)。それで生まれながらの人間は、そういう善からは全然離反していて(2)、罪のうちに死んでおり(3)、自らを回心させるとか、回心の方に向かって備えることは、自力ではできない(4)。

1 ロマ 5:6、ロマ 8:7、ヨハネ 15:5

2 ロマ 3:10,12

3 エペソ 2:1,5、コロサイ 2:13

4 ヨハネ 6:44,65、エペソ 2:2-5、Iコリント 2:14、テトス 3:3-5

4 神が罪人を回心させて恵みの状態に移されるとき、神は彼を、罪のもとにある生まれながらの奴隷のきずなから解放し(1)、彼を恵みによってのみ、靈的な善を自由に意志した行為することができるようにされる(2)。そうであっても、彼の残存している腐敗のゆえに、彼は完全に、あるいはもっぱら善だけを意志しないで、かえって悪も意志する(3)。

1 コロサイ 1:13、ヨハネ 8:34,36

2 ピリピ 2:13、ロマ 6:18,22

3 ガラテヤ 5:17、ロマ 7:15,18,19,21,23

5 人間の意志は、ただ栄光の状態においてのみ、善だけを行為するように、完全かつ不変的に解き放される(1)。

1 エペソ 4:13、ヘブル 12:23、Iヨハネ 3:2、ユダ 24

#### 4. 歴史哲学・歴史神学：ローマ略奪と『神の国 De civitate dei』

##### (1) 執筆の背景

408年、ローマはゴート人に包囲された。アウグスティヌスはその報告を受けて、飢餓と疫病のために、ローマでは埋葬されない死体のごろごろし、人肉を食べるほどに窮していることを知った。410年8月24日、アラリックに率いられたゴート族がローマに侵入し、三日間にわたり略奪をほしいままにし、「永遠の都」と言われたローマの一部は焼失さえた。この大惨事に人々は非常に大きな衝撃を受けた。ローマから逃れてきたペラギウスがローマのある貴婦人にあてた手紙にこう言っている。

「それはつい先頃起こりました。そしてあなたご自身お聞きになったとおりです。世界の主人であるローマが、ゴート人の吹き鳴らすラッパの音と彼らの喚き声に脅えて、震え縮みあがったのです。いったい、貴族たちはどこにいたのでしょうか。威厳のある確固として際立った人々はどこにいたのでしょうか。誰も枯れもが畏れに震えてひとかたまりに入り混じっていました。その家の者も悲嘆に暮れ、圧倒的な恐怖が私たちを飲み込んだのでした。奴隷も貴族も一つでした。同じ死の恐怖が私たちの間に蔓延していたのでした。」(ブ

ラウン p15)

ローマはすでに帝都ではなかったが、なお西方社会の中心であり、帝国の文明全体のシンボルであり、帝国がキリスト教化されても帝国を守護する伝統的な神々が祀られた場所であった。アウグスティヌスは「東方の諸族はローマの没落を哀泣し、地の果てにいたるまで都会と田舎おしなべて、うろたえ、嘆いた。<sup>33</sup>」と述べている。また、ヒエロニムスは「もしローマが減びるとしたら、何が安泰でいられるのでしょうか。」(ブラウン p15) また、「世界の燈台は消えた。ローマ市の滅亡はやがて全人類の滅亡である。<sup>34</sup>」と哀しみの言葉を残している。

ローマが減んだ理由をローマの伝統主義者たちは、キリスト教のせいだとした。キリスト教がローマの伝統的な神々をないがしろにした結果が、ローマ略奪であると。また、キリスト教徒たちがしばしば兵役を軽んじ忌み嫌ってきたことも非難の理由であった。伝統主義者たちは、共和制時代の古代のローマを理想の道徳的社会であったという「神話」をもって、帝国がキリスト教化されたところに問題があるとキリスト教を批判した。

永遠不滅の都と信じられていたローマの陥落という時代の転換期に、アウグスティヌスは歴史の問題について思索する。そして、ただローマの歴史のみならず、歴史における国家、正義、平和、それらを包括する神と人類の関係、教会の意義について考究する。

## (2) De civitate dei 全22巻の構成と内容

しばらく岩波文庫版『神の国』全5巻は絶版だったが、ごく最近再刊された。すぐ無くなるので、購入されたし。

アウグスティヌスは、これら異教の伝統主義者に対して立ち上がる。まず413年に1-4巻を公刊。その後13年以上もかけて執筆された。しかし、内容を見ると全体的な構想が当初から明瞭にあったことがわかる。

### 第一部 (序論) 異教徒のキリスト教批判へ反論

#### ① 第1巻から第5巻

異教の神々を崇拝すれば人間社会は繁栄し、それを禁じたことがローマ衰亡の理由だとする人々への反論。

ローマの衰亡は、キリスト教化される以前からのローマの不道徳が理由である。異教の神々は悪霊であり、悪霊はローマ人に正義も道徳も教えず、かえって悪行を助長した(2:25-27)。キリスト教布教以前、神々が礼拝されていた時代にもすでに、戦争や災害は事実あった(3巻)。

#### ② 第6巻—第10巻: 異教の神々への礼拝が死後の生の幸福のために有効だとする人々への反論

異教の神々は地上でも死後の生のためにも無益。悪霊礼拝批判。

弓削達はローマ帝国の道徳的退廃について、6章「悪徳、不正、浪費、奢侈、美食」とし、「ローマ人は

<sup>33</sup> 『世界の歴史2 ギリシャとローマ』 p 285

<sup>34</sup> 同上

全世界からあらゆる珍味を集めたが、放恣に疲れきった彼らの胃は、それを受け容れることができなくなったのである。ローマ人は『食べるために吐き、吐くために食べているのだ』というセネカの非難は単に過食の贅沢に向けられたものではなかった。全世界からかき集めた富を、奢侈と浪費に蕩尽している不健康な悪徳に対する文明批判なのである。吐いた汚物は、便所か路傍の小便壺に捨てられるか、あるいは道端に投げ捨てられる。不正によってかき集められた富は、こうして無駄に浪費されて行く。その汚物は、飢えた庶民の目の前に、日々投げ出されていたのである。」ローマ末期の文化のもう一つの特徴は7章「性解放、女性解放、愛欲の文化」である。<sup>35</sup>

## 第二部(本論)二つの国の展開としての歴史・・・聖書による歴史哲学

### ①第11巻から第14巻：「神の国 *civitas dei*」と「地の国 *civitas terrae*」の起源

二つの国の起源、展開、終末についての聖書の教え。創造、天使の墮落、人間の創造と墮落、原罪論。

### ②第15巻から第18巻：二つの国の展開してきた道筋

二つの国と二種の人間の起源、展開。ノアの洪水、アブラハム、イスラエルの歴史の意味と預言者。

### ③第19巻から第22巻 究極の到達点

最高善、真の幸福、平和、秩序、正義。最後の審判が問題。神の国の永遠の平和について。

#### <抜粋>

「このようにして、二種の愛が二つの国をつくったのであった。すなわち、この世の国をつくったのは神を侮るまでになった自己愛 *amor sui* であり、天の国をつくったのは自己を侮るまでになった神への愛 *amor dei* である。一言でいえば、前者は自己自身において誇り、後者は主において誇るのである。前者は人間からほまれを求めるが、後者では、良心の証人であられる神においてもっとも高いほまれを見出すのである。前者は、自己のほまれにおいてその頭を挙げるのであるが、後者は、前者の諸民族においては、その君主たちや、君主たちが隷属させている人々のうちに、支配しようと言う欲情が優勢であるが、後者においては、上に立つ者は、その思慮深い配慮により、そして服従する者は従順に従うことにより、愛において互いに仕えるのである。前者は権力をもつ者において強さを愛し、後者はその神にむかって『主よ、わたしの強さよ、わたしはあなたを愛する』というのである。」(第14巻第28章、服部英次郎訳の一部を改めた『神の愛』→「神への愛」)

「歴史は、あらゆる国家、人間の制度、人間のかかわるすべてのもの、時間と空間のすべてである。歴史のあらゆるところで、神の国と地の国、神への愛と自己愛が入り混じって存在している。ローマ帝国が地の国でもなければ、教会が神の国と同一でもない。…二つの国は不可視的なものとして存在している。

(中略)

<sup>35</sup> 弓削達『ローマはなぜ滅んだか』(講談社1989)

人間も人間の集団の歴史も、このふたつの愛の間をさまよっている。この世で、神の愛に基づく国をつくり、正義、平和、秩序を求めることはむずかしい。しかし、過去の過ちを探り、永遠の平和を求めて、地上の生活を続けていく。・・・・それが人間の歴史である。

アウグスティヌスは歴史の起源と展開を問題にするだけでなく、歴史の終局から歴史の過去と現在をみつめとらえようとする。・・・・歴史の意味が問われる。」(宮谷)

<メモ>

今日、私たちの国は歴史の曲がり角にある。安倍内閣は、米国に押し付けられた戦後民主主義体制が教育・社会の荒廃を生んだとして、戦後レジームとしてこれを否定し、「美しい国」を目指すという。彼が「立ち帰れ」と言うのは、観念的に美化された戦前の日本であり、皇国史観の伝統である。具体的には、教育基本法改変、憲法改変、共謀罪制定が政治日程に上がっている。

小林よしのり、西尾幹二、西部邁らの「新しい歴史教科書を作る会」は自らの皇国史観を「新自由主義史観」と呼び、戦争責任を考える歴史観を「自虐史観」として誹謗する。(扶桑社『新しい歴史教科書』、西尾『国民の歴史』、西部『国民の道徳』、小林『戦争論』参照)

私たちは、キリスト者として、教会として歴史の形成にかかわっていかねばならない。今というときにいかに生きるかを知るためには、聖書に歴史の意味を問わなければならない。

## 5. アウグスティヌスの死とラテン的アフリカの終焉

429年5月、南イスパニアのゲンセリック率いるヴァンダル族、総勢8万うち兵士2万人がジブラルタル海峡を渡った。彼らはアリウス派のキリスト教徒であり、戦の神が自分たちに味方していると信じていた。彼らはいたるところで略奪、暴行、殺人、放火をほしのままにした。ティアパの司教ホノラトゥスはヒッポのアウグスティヌスに手紙を書いた。このようなとき、教会の教師はどうすべきか。蛮族にむなしく殺されるよりは、信徒と教会のために逃避したほうがよいのか。と。アウグスティヌスはすぐ返書を認める。

「司教はいかなるときにも住民を見捨てたり、教会を捨てるべきではありません。困難と危険が切迫しているときに、司教たるものは人々のために苦悩を背負い、生命を賭して働くべきです。それなにしはキリスト者であることも、キリスト者として生きる意味もありません。たとえ民衆のために殉教することがあっても、愛に生き、愛に死ぬべきです。あなたは、目の前で男が殺され、女が凌辱され、教会が焼き払われ、略奪が行なわれている、蛮族の剣や拷問によって無残に生命を失うより逃げたほうがいい、と言う。そのとき、あなたは恐れている災いよりももっと恐ろしい災い、災いを恐れる怖れに陥っているのです。なぜ神のあわれみによって、怖れに向かい勇敢に戦おうとしないのですか。愛のゆえに死ぬよりも、愛なくして生きるほうがはるかに恐ろしいのです。魂の清さを失うことを、肉体に危害や屈辱を受けるにもまして恐れなさい。真の純潔は心に保たれるもので、暴力

によって犯されるものではない。肉体が剣で殺されるよりも、心が悪霊の剣で殺されることを恐れよう。外的建物が焼かれるより、聖霊の宮が減びることを余計に恐れよう。一時的死でなく、永遠の死の恐ろしさを思うように、人間がひとりでも町にいるかぎり、そこにとどまり、主の力によりその人に罪の許しを語り、慰めと励ましを与えるように努めてください。最後のひとりになるまで愛をもって仕え、愛によって生きてください。どんな危険に遭遇しても、恵み深い神が力と愛を備えてくださることを信じて祈りましょう。後略」(手紙 228 の大意)

「船長はもちろん、水夫でさえも、船が危険なとき、そんなにたやすく船を見捨てることなどは夢にも思わないものです。」(同書簡)

そして、430年6月、ヴァンダル族はヒッポを包囲した。人々は飢餓と、恐怖と死の不安の中に過ごさねばならなくなる。「死の状況は絶望的に思われた。死は避難民であふれ、海からは遮断されていた。アウグスティヌスは病気にもかかわらず、信者たちの中にふみとどまることを望んだのであった。かかる試練は当然の罰であると考え。・・・しかし同時に彼は涙を流しながら、慰めの神に試練の軽減に同意されますようにと懇願する。」(クルセル『文学にあらわれたゲルマン大侵入』P136)

同年8月、アウグスティヌスは熱病に倒れる。床に臥してから死ぬまでの十日間。彼は悔い改めのダビデの詩篇4篇を書き取らせ、それを記した紙がいつも見えるように壁に貼り付けた。そして、これを独りで読んでは、ひっきりなしに痛恨の泣き声をあげて、祈った。430年8月28日、76歳で生涯を閉じる。罪の懺悔と神への讃美以外はなにも口にすることなく、彼は息を引き取った。

包囲14ヶ月目にヴァンダル族はヒッポになだれ込み、町は占拠され破壊された。アウグスティヌスが40年間かけて築いたものは無に帰した。後に、最期までアウグスティヌスのそばにおり、彼の伝記作家となったポシディウスはいう「しかし、私は、彼から多くを得た人は、彼が、教会で話しているのを、実際に、見たり聴いたりすることができた人であり、とりわけ、彼が人々のあいだで歩んだ生涯のあり方に触れていた人だと思います。」

(ポシディウス<sup>36</sup>、『聖アウグスティヌスの生涯』熊谷賢二訳)

<アウグスティヌスに関する本>

教文館のA著作集、『告白』(山田晶訳、中央公論社世界の名著)、岩波文庫『神の国』(服部英次郎訳)、

---

<sup>36</sup> Possidius(370頃—440頃)アウグスティヌスの弟子。アフリカのカマラの司教(397)。アウグスティヌスと修道生活をともにし、ドナトゥス論争、ペラギウス論争の会議に参加し、たすける。ヴァンダル族がカマラを侵略したとき(428)、ヒッポへ逃れ、臨終のアウグスティヌスを助けた。再びカマラに帰ったが(435)、ヴァンダル族に追放された(435)。アウグスティヌス伝を編集。

## 第二部 中世教会史

### XIV. 古代の終焉・中世の始まり

「大バビロンは倒れた。倒れた。激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた者。」黙示録 14:8 b

#### 1. 西ローマ帝国の滅亡

<主要事件年表>

- 395年      ローマ東西に分割
- 410年      西ゴート王アラリック、ローマに侵入。
- 449年      アングロ・サクソン族、ブリタニアに侵入
- 452年      ローマ教皇レオ1世、フン族のアッチラを交渉で退去させる
- 476年      傭兵隊長オドアケルにより西ローマ帝国滅亡

##### (1) ゲルマン民族の移動

4世紀になると、中央アジア方面よりフン族という遊牧騎馬民族が向かってきた。フン族については、中国漢の武帝(156-87AD)が圧迫したために忽然と姿を消した匈奴がはるばる西に移動してきたものではないかという説もある。このフン族は、黒海北岸のゲルマンの一派・東ゴート族を従属させ、ほかのゲルマン諸族が大移動を始めた。これが、ゲルマン民族の大移動と呼ばれるものである。

そして中部ガリア（今のフランス地域）にはブルグント族、北ガリアにはフランク族、ブリタニア（今のイングランド島）にはアングロ＝サクソン族、北アフリカの旧カルタゴの地域にはヴァンダル族が移動し建国する。また、375年西ゴート族は西ローマ帝国に助けを求め、ドナウ川を越えてみなごっそりと領内に入る。そして、帝国中で傭兵などとして出世していく者も現れてきた。

また西ゴート以外でも、西ローマ領内へある部族は平和理に、ある部族は侵入という形で入り込むようになり、もはや西ローマにこれを防ぐ力はなかった。408年ゴート族がローマを包囲した。飢餓と疫病によってローマは埋葬されない死体のごろごろしており、人肉を食べるほどに窮した。410年8月24日、ローマはアラリック率いるゴート族にローマは3日間に渡り略奪される。永遠の都と呼ばれたローマは蛮族に陵辱された。<sup>37</sup>この事件の

---

<sup>37</sup> ローマから逃れてきたペラギウスがローマのある貴婦人にあてた手紙にこう言っている。「それはつい先頃起こりました。そしてあなたご自身お聞きになったとおりです。世界の主人であるローマが、ゴート人の吹き鳴らすラッパの音と彼らの喚き声に脅えて、震え

衝撃がアウグスティヌスに「神の国」を書かせたというのは周知の如し。

## (2)西ローマ帝国の滅亡

さてこの頃のローマ帝国は東西に分割され統治されていたが、コンスタンティノーブルの東ローマ帝国と、ローマの西ローマ帝国では国力に大きな差があった。というのも、東は人口も多く、農業基盤も整備され、また熟練した政治家が統治していたが、西では、生産能力が低く、また統治者も若い貴族が出世への過渡的な役職として働き、傭兵を雇うために都市に重税をかけ、経済を没落させた。そんなわけで、東ローマ帝国では西は自分たちの宗主権下にあると考えていた。

そんな中、再び動きを見せたのがフン族。フン族の王アッティラ（位434～453年）は、彼は従属させている東ゴート族の軍勢を引き連れ、まずは東ローマ帝国へ。皇帝**テオドシウス2世**の軍勢を打ち破り、コンスタンティノーブルに迫るが、城壁に囲まれているこの都市を落とすことは出来ず、賠償金を貰い撤退。続いて、ガリアに侵入。この時は西ローマ帝国の軍勢にまさかの敗北を受けた。が、立て直すと452年にはローマへ向かう。

それを救ったのがローマにいるキリスト教の**司教レオ1世**。彼は、アッティラを「こちらに来ないで、あちらに行って」と説得し、これを思いとどまらせた。そして、翌年アッティラは死去。これにより、フン族はバラバラになり歴史上から姿を消した。この出来事に象徴されるように、西方では俗権が弱かったので、教皇の力が強くなっていく。

そして西ローマ帝国はいよいよ死なむとする。476年、西ローマ帝国では傭兵隊長の**オドアケル**が「ゲルマンに土地を！」と皇帝**ロムルス・アウグストゥス**に要求し、拒絶されたことから反乱。これを滅ぼし、自ら王を名乗って**オドアケル王国**を建国。そして、東ローマ皇帝ゼノンに要求して、パトリキウスの称号をもらう。オドアケルは東ローマ皇帝の代官として、ローマ帝国の西方地域を支配した。こうして西ローマ帝国は姿を消し、古代社会が終わった。

東ローマ帝国はその後ギリシャ語を公用語にするなど、次第にローマ文化からは離れていき、さらに後に勃興するイスラム教世界の影響も少なからず受けることになった。そのため、コンスタンティノーブルの旧名のビサンティウムをとって、**ビザンツ（ビサンティン）帝国**といわれるようになる。

---

縮みあがったのです。いったい、貴族たちはどこにいたのでしょうか。威厳のある確固として際立った人々はどこにいたのでしょうか。誰も枯れもが畏れに震えてひとかたまりに入り混じっていました。その家の者も悲嘆に暮れ、圧倒的な恐怖が私たちを飲み込んだのでした。奴隷も貴族も一つでした。同じ死の恐怖が私たちの間に蔓延していたのでした。」(ブライウン p15)

もう一つ重要なのは西方地域における商業の衰退と、農業を主産業とした封建制への移行。ローマ帝国は金貨を鑄造し、これで東南アジアにまで貿易の手を伸ばしたが、西ローマ帝国末期には貨幣を改悪し、経済を混乱。加えて滅亡後は、有力者が貨幣を好き勝手に鑄造するものだから信用がたおちになる。

また、奴隷制度も変わる。奴隷から隷属的な小作人（コロヌス）から地代を取って自給自足をする小作制が一般化し、後の農奴制の先駆となった。

### (3)西ローマ帝国衰退と気候の寒冷化

古代ローマ帝国は、いわゆる五賢帝時代に最盛期を迎えた後、徐々に衰え、大移動を開始したゲルマン民族に蹂躪され、滅んだ。なぜ古代ローマ帝国は持続不可能になったのか。

(中略) ローマ帝国はトラヤヌス帝（在位：98年-117年）の時に版図が最大となったが、その後、辺境の蛮族の攻撃を受け、変質し、段階的に衰退していった。ここでは、古代ローマ帝国の滅亡の年を特定することなく、5世紀ごろに事実上消滅したとみなしつつ、その段階的衰退の原因を探りたい。

#### 1. 蛮族侵入説

最もポピュラーな説は、古代ローマ帝国は、周辺の蛮族、特にゲルマン民族に滅ぼされたという説である。確かに、4世紀から5世紀にかけて「ゲルマン民族の大移動」と日本で呼ばれている現象が、主として西ローマ帝国の領土内で起きており、これが直接の原因であったことは、事実。問題は、なぜ、ゲルマン民族の大移動が惹き起こされ、なぜ西ローマ帝国は、東ローマ帝国とは異なり、それを撃退し続けることができなかつたかである。

なお、この説を補強するものとして、3世紀にゲルマニアで蹄鉄が発明され、ゲルマン民族の騎馬勢力が強力となり、歩兵中心のローマ軍を圧倒したという説があるが、当時のゲルマン民族には歩兵も多かつたし、またこれと戦っていたローマ軍の中にも、大量のゲルマン人の傭兵がいたから、あまり説得力はない。

#### 2. 士気低下説

『ローマ帝国衰亡史』の著者として有名なエドワード・ギボンは、ローマ市民の道徳の低下が、根本的な原因だと見ていた。ローマ市民は、国防をゲルマン傭兵に頼るようになり、それが命取りになったというわけである。またキリスト教が普及するに連れて、人々の関心がこの世からあの世に行き、こうした精神的な変質も原因の一つとして挙げられている。

これもあまり説得力のない説明である。ローマ帝国が、領土を拡張するにつれて、被征服民を軍団に参入していくことは不可避的である。ゲルマン民族と一口に言っても、ローマ帝国の国境近くにいる文明化された近蛮族とその背後にいる遠蛮族がいて、近蛮族がローマ国内に侵入してくる原因の一つは、遠蛮族による圧迫があったわけだから、近蛮族を使って遠蛮族を攻撃するという戦略は決して悪くはなかつた。また、キリスト教が原因

で西ローマ帝国が減んだとするならば、同じ原因で、キリスト教徒がもっと多かった東ローマ帝国も早々と減んだはずだが、そうではなかったから、これも原因とは考えられない。

### 3. 貨幣改悪説

経済的側面から、ローマ帝国の滅亡を説明しようとする人もいる。例えば、3世紀以降、貨幣の銀含有率が大幅に低下し、これがインフレをもたらしたという事実がよく指摘される。しかし、もし国家財政が豊かなら、発行している通貨に金や銀が一分子も含まれなくても、インフレを惹き起こさないはずである。金や銀が不足したから、商品経済が衰退したわけではなかった。

問題は、蛮族侵入の頻発化で、歳出は増える一方なのに、農作物が不作で、歳入が落ち込んでいたことである。古代ローマ時代も末期になると、ローマの軍隊は、かつての三十万から六十万に倍増し、借地料は、**10%から50%以上に跳ね上がっていた**。このため、耕作を放棄する農民が続出し、農地が荒れ果て、収入の不足を補うために、さらに借地料が上げられるという悪循環が続いた。

古代ローマ時代末期のインフレは、経済成長をもたらすインフレではなくて、スタグフレーションの様相を呈していた。

なぜなら、三世紀後半になって、金利の低下現象が起こっているのだ。「パクス・ロマーナ」が完璧に機能していた時代の金利は年率十二パーセントが普通であったのが、この時代四パーセントにまで下がっているのである。これも、投資意欲の減少傾向の反映ではなかったか。[塩野 七生：[ローマ人の物語 \(12\) -迷走する帝国](#), p.254]

スタグフレーションは、物不足が深刻になった、敗戦や石油危機のときの日本に起きたような、景気後退をもたらすインフレで、実質金利は低くなる。では、なぜスタグフレーションの原因となる物不足が起きたのか、この点が問われなければならない。

### 4. 疫病流行説

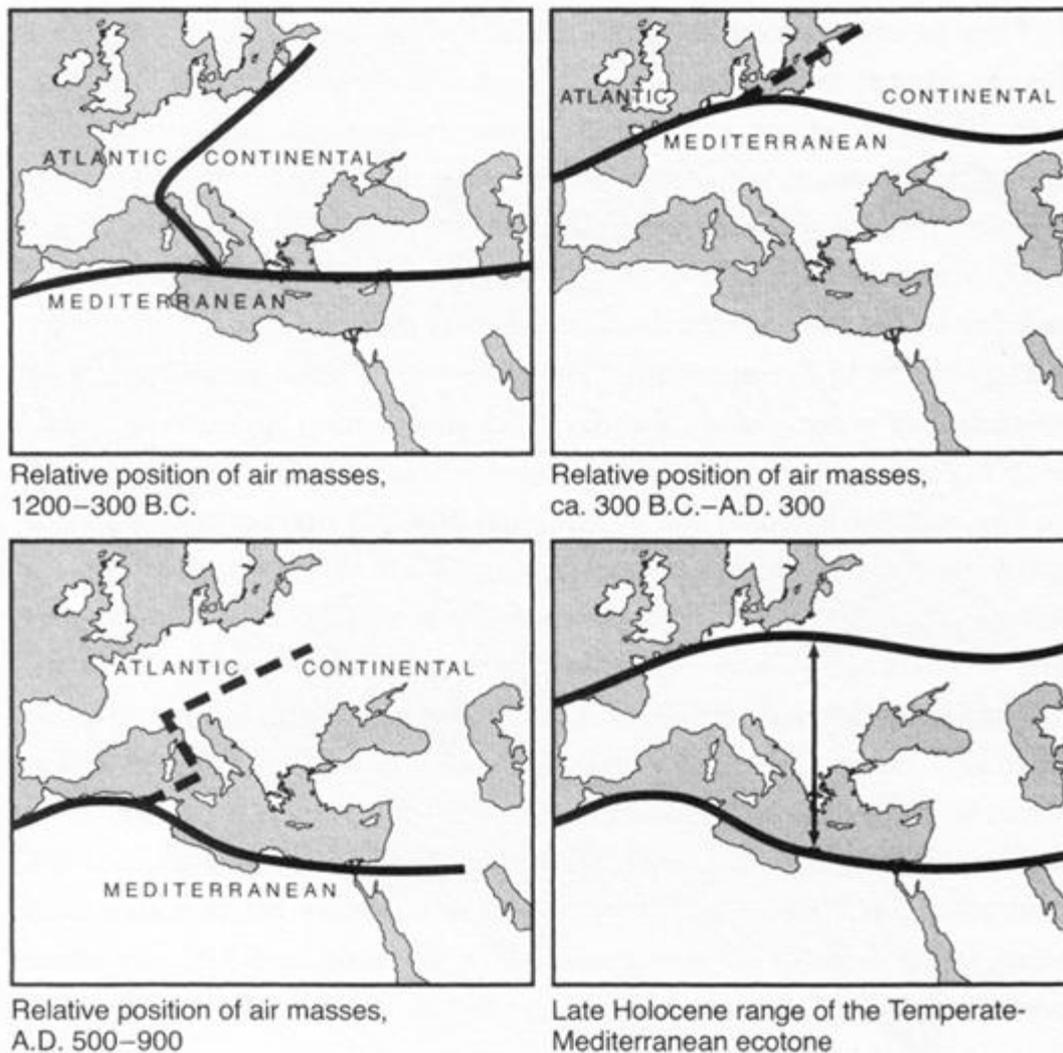
古代ローマ帝国では、**2世紀から7世紀にかけて人口が減少した**。これは、疫病の流行が原因だと言う人がいる。**144-6年、171-4年にエジプトの人口が2/3になり、165-180年には、マケドニアから始まって、ローマ帝国のほぼ全土に「アントニヌスの疫病」が、251-266年には、一日に5千人が死ぬ、より悪質な「キプリアヌスの疫病」が流行した**。こうした疫病が人口を減少させ、それが税収の不足をもたらしたという説が唱えられることがある。しかし、古代ローマ帝国の衰退が決定的になる3-5世紀には、大きな疫病の流行はなかった。もしも農作物が十分実っていたのなら、疫病で一時的に人口が減っても、すぐに回復することができたはずである。問題は、なぜ、人口を回復させるだけの食料が生産できなくなったかである。

### 5. ローマ帝国衰退の気候的原因

ローマ帝国が、衰退した直接的原因は、二つある。一つは、ゲルマン民族の侵入の頻発化とそれに伴う軍事支出の増大であり、もう一つは、作物の不作による税収の減少である。

る。歳入が減り続け、歳出が増え続ければ、当然のことながら、国家財政は破綻する。この二つの現象は、一つの原因で説明できる。気候の寒冷化である。気温が下がると、凶作となる。また、北方の騎馬民族は、南の暖かい気候を求めて、南下してくる。

振り返ってみると、ローマ帝国は、温暖化により膨張し、寒冷化により収縮したと言えそうである。紀元前 800-400 年の精神革命寒冷期において花開いたギリシャ文明は、ローマ帝国に受け継がれ、その後の温暖化とともに、ローマ帝国の版図は拡大し、トラヤヌス帝の時に最大になった。しかし、トラヤヌス帝が死去したあたりから、気温は再び下がり始めた。以下の図は、古代ギリシャの黎明期から中世初期にいたるまでのヨーロッパの気候の変遷を説明した図である。



Changing ecological zones in Europe. Reprinted by permission from Carole L. Crumley, ed., *Historical Ecology* © 1994 by the School of American Research, Santa Fe, New Mexico

[Brian M. Fagan : [The Long Summer: How Climate Changed Civilization](#), p.192]

左上は、精神革命寒冷期の頃のヨーロッパの気候である。地中海性気候の北限を示すライン (Mediterranean) が、現代よりも南にあることがわかる。右上の図は、ローマが繁栄

していた頃のヨーロッパの気候である。地中海性気候のラインが、現代よりも北にあることがわかる。ローマ人たちは、地中海性気候の北上に合わせるかのように、ケルト人を駆逐して、北方へと膨張して行った。そして左下の図は、ゲルマン民族が南下して、建国した頃のヨーロッパの気候である。地中海性気候のラインは再び南下している。あたかもこのラインの南下に合わせて、ゲルマン民族は南下したかのようである。

もしも、寒冷化が西ローマ帝国を滅ぼしたのだとするならば、なぜ東ローマ帝国は、同じ原因で滅びなかったのかと読者は訝しく思うかもしれない。東ローマ帝国は、西ローマ帝国とは異なって、高度な文明国であるペルシアと国境を接していた。このため、税源を農作物のみに頼る必要はなく、交易による富にも依存することができた。このため、凶作による税収入の落ち込みが、西ローマ帝国ほどひどくはなかったと考えられる。

ブライアン・フェイガン『千年前の人類を襲った大温暖化』1000年前

『歴史を変えた気候大変動』(河出文庫)500年前 中世末期

『古代文明と気候大変動—人類の運命を変えた二万年史』(河出文庫)

#### \* 聖書的な国家史観から

結局、気候の寒冷化がローマ帝国滅亡の原因ということである。気候が寒冷化→凶作→税収が激減→貨幣の質が低下。寒冷化→ゲルマン民族の南下→軍事費増大。凶作は疫病からの立ち直りをできなくさせた。こうしてローマ帝国は破綻したということである。

気候を摂理するのは、創造主である神である。神は、西ローマ帝国の滅亡を意思された。聖書申命記 28 章の歴史観を観察してみよう。

主の御声に聴き従わず、偶像崇拜と不道德にふけるならば、神はすべてののろいが臨むといわれる(15節)。すべての呪いとは①疫病(21、22) ②自然災害：日照り(22—24)→いなご・害虫(38、39、42)、③異民族・外敵の侵入・略奪(49—57)である。

申命記的な歴史観から解釈すれば、ローマ帝国の滅亡はやはり、帝国に対する神のさばきであったと解釈できる。エドワード・ギボン、弓削達がいうようにローマ帝国は偶像崇拜に耽り、かつ道徳的に退廃しきっていた。神は、その帝国への審きとして、寒冷化という気候変動をもたらし、帝国に自然災害をもたらし、かつ、北方からゲルマン民族の侵入を招き寄せたのであった。

#### 参考＜環境・森林破壊と文明の滅亡＞

グレコ・ローマ文明の誕生から中世の終焉まで(紀元前 2000 年～紀元 15 世紀)

古代文明に代わって興ったギリシャ・ローマ文明は天水農業をもとにして独立自営農民を初めて生み出した。天水農業を支えるものは森林と降水である。これが枯渇すると食料を求めて植民地経営に頼らざるを得ない。ギリシャ文明は森林を破壊して没落し、ローマ文明はエジプトを植民地としてパンを得た。ローマの支配者はゲルマンの森を求めて激しい植民地化戦争と略奪を繰

り返し、その後修道院による農耕牧畜経営によりゲルマンの森の 1/3 は破壊された。ギリシャの多神教の世界（他の価値を受け入れる）は一神教のキリスト教（人間中心の「キリスト」）にとって代わられた。キリスト教が森林破壊の原動力であったといっても言い過ぎではない。それはすなわち牧畜の民の思想であり、東洋のモンゴル帝国の殺し尽くす思想もおなじ牧畜の民の思想であった。ローマ以後の中世でも植民地化は奴隷という農耕労働力獲得のために続いた（人間の家畜化）。この奴隷制はヨーロッパ中世の暗部であり、スラブ人、ゲルマン人、アフリカ人が奴隷化されユダヤ人が売買を仲介した。森林破壊と動物の殺戮によってペストが大流行して中世の人口は激減した。石弘之 安田喜憲 湯浅赳男 鼎談「環境と文明の歴史」洋泉社（2001年）

次は、『気候変動の文明史』（N T T 出版）

安田喜憲（やすだよしのり）

古代ギリシャのアテネが減んだのも、森林破壊と温暖化が重なったことが一因とされる。アテネ付近はナラなどに覆われた森の国だった。海洋国家だったアテネは大量の船を建造する目的で、森林を伐採しまくった。そこに温暖化が重なったが、乾燥した気候だったため雨が減少し、森林の荒廃が進んだ。

山の荒廃で、雨が降るたびに土砂が流出、港がその土砂で埋まり湿地化した。マラリア蚊が発生、病気がまん延して人口が激減、衰退したといわれる。

・・・

2050年には人口が百億人近くなる。木材の消費量も増大し森林はまったくなくなると予測される。海水温の上昇で海藻がほとんど生えなくなる海の砂漠化も進行している。地球全体が環境変化に極めて弱い状態だ。科学だけで簡単に防げると考えるのは甘い。

化石燃料の大量消費を前提にした現代社会は、森林資源を搾取することで発展させてきた過去の文明と基本的に同じ構造にある。木を切り、家畜を飼うことで森林を破壊してきた牧畜中心の文明の延長線上にある。

意図的に環境を破壊しようとしていたわけではなく、豊かな生活をしたいという努力が招いた結果ではある。しかし、資源が無限と考えるような20世紀型の社会システムは二酸化炭素の濃度をかつてないレベルに高めた。放置すると気候変動で人類の危機がやってくる恐れが強い。

・・・(略)・・・

異常なスピードで進む現代の森林破壊、爆発的に進む人口増加、そして地球温暖化。今我々は過去に滅亡していった数々の文明と同じ境遇にいる。だがその規模、スピードは過去の人類史に比類なきものであることは間違いないようである。

## 2. 中世とは西ヨーロッパの形成期である

### (1) 中世の見直しとプロテスタント的歴史観

啓蒙主義的歴史観においては、中世 middle age とは栄光の古典古代と、その栄光の復興たる近代との間にはさまれた時代であると言われてきた。たしかに西ヨーロッパの中世は

ペストの流行・異端審問などに象徴される暗黒面はある。しかし、新たな文化を生み出した時期でもある（例えば 12世紀ルネサンス）として、歴史学の分野では再評価が行われている。しかし一般的には中世を暗黒時代とみなす風潮はなお根強い。また、12世紀になるまでは経済力・文化などの面などでイスラムや東ローマ帝国の後塵を拝していたのも事実である。

いち早く、二度の世界大戦の時代に、従来啓蒙主義者によって暗黒とされていた中世を再評価した代表的書物はオランダの歴史家ヨハン・ホイジンガー『中世の秋』である。ここで、彼は現在オランダ・ベルギーとなっている当時の先進地域・フランドル地方の豊かな生活、祈りの世界を生き生きと描いた。中世のヨーロッパ世界は、一方では異端裁判やガリレオの迫害に見られるようにスコラ神学が一世を風靡し、教会によって世界が支配されていたが、他方では人々は、信仰を堅持しながら、様々な絵画や文学に見られるように絢爛たる文化を創り上げ、豊かな生活を楽しんでいたことを描き出したのである。

現代も、中世を再評価する本が続々と出ている<sup>38</sup>。なぜか？それは時代がポストモダンであるからである。今、我々の時代はモダンつまり近代の限界に突き当たってもがいている。近代的合理主義の人氣が衰えると、もっと神秘的な・ロマンチックな時代への憧れが生じるのである。そこで中世の再評価ということになる。

しかし、流行は流行として、聖書的プロテスタントの教会史の理解からいうならば、基本的には、やはり中世は靈的な暗黒時代であったと位置付けざるをえまい。それは中世がみことばの光を隠した時代であったからである。その暗黒に対してルターたち宗教改革者たちが、みことばの光をもたらしたというのが基本的な史観であるからである。

プロテスタントからみた教会史についての、基本的な考え方は、初代教会から古カトリック時代前期(迫害時代)・後期(帝国の教会時代)まで教会は聖書に耳を傾け正しい教理が教えられていたが、中世ローマカトリック教会には教会はみことばを離れて靈的暗黒のなかをさまようようになった。けれども、16世紀になると中世の暗闇にみことばの光を照

---

<sup>38</sup> 2006年9月9日 asahi.com 「中世ヨーロッパは豊饒なる文化は現代の基礎か」 5世紀後半から約1000年間も続いたヨーロッパ中世。最近、この時代に光を当てる本の刊行が相次いでいる。水先案内役として、映画にもなったU・エーコ『薔薇(ばら)の名前』(東京創元社)が挙げられる。堀越孝一著『中世ヨーロッパの歴史』などで通史をおさえて、奥深い森に分け入ろう。

ひところ中世は、宗教的な原罪意識におおわれ、生気に乏しい“暗黒時代”と見なされていた。

しかし、美術様式だけみても、ビザンチン、ロマネスク、ゴシックなどを生みだし、繚乱(りょうらん)の様相だ。とりわけゴシック建築は、高らかな尖塔(せんとう)、過剰な突起状装飾、濃密なステンドグラスなど、派手でグロテスクな要素に満ちている。異端も増殖した。

徳井淑子著『色で読む中世ヨーロッパ』は、色彩で中世を読み解こうとする。14、15世紀の写本挿絵を見ると、濃淡多様な青や赤が鮮烈に迫ってくる。ちなみに青は主に「誠実」を意味し、赤は「最も美しい色」だったという。ただ、色彩の快樂は、もっぱら教会・世俗権力が享受したのかもしれない。

権力側が、抑圧する一方で、賛美したり庇護(ひご)したりしたのが、例えば身体や放浪芸人など。J・ル＝ゴフ著『中世の身体』やM・バッハフィッシャー著『中世ヨーロッパ放浪芸人の文化史』は、このアンビバレントな関係を考察し、例証する。

騎士道精神に沿って麗しい女性の美もたたえられた。恋の歌にも酔いしれた。ホイジンガーの『中世の秋』(中央公論新社)や、今月逝去した阿部謹也の『ハーメルンの笛吹き男』(筑摩書房)は、街でたくましく生きる人びとを活写していた。生気を葬った人間は見あたらぬ。

多くの論者が、この「豊饒(ほうじょう)なる中世ヨーロッパ」に現代の礎を見いだそうとしている。混迷が続く現代世界の出口を探るかのよう。

らす宗教改革が起こったというのが、今は流行ではないけれども、プロテスタントとしての教会史の大きな枠組みである。

## (2)中世とはヨーロッパが形成された時代

しかし、中世は暗黒時代であって何も積極的な意味では起こっていないというならば、それは大きな間違いである。堀米庸三は次のように言う。

「中世とはなにか。中世を、栄光の古典古代と、その精神が回復した近代のあいだにはさまれた暗黒時代という見方がある。それでは中世は積極的な意味がないということである。せいぜいルネッサンスの準備にすぎない。

マルクス主義的な歴史観からは、発展段階論。古代は奴隷制社会、中世は農奴制の社会、近代は資本制の社会という。たしかにそれなりの説得力はあるのだが、考察の中心は社会構造の変化に置くので、歴史の具体性は捨てられてしまう。マルクス主義の歴史観では、下部構造が上部構造を決定するというドグマが支配していて、具体的な歴史は見えなくなる。

古代は地中海世界を舞台とし、中世はアルプス以北の北西欧を舞台とする歴史だと説く。これには発展段階論をも取り込むことができる。古代の奴隷制社会は地中海世界であり、中世は農奴制社会で北西欧。しかし、これでも中世史の内容は捨象される。

中世史は、ギリシャローマの古典古代文化・キリスト教・ゲルマン文化の一体となったヨーロッパ文化の生成を扱うのである。<sup>39)</sup>

「ゲルマン精神をもくわえた三者が、三つ巴の対立・緊張をつづけながら新しいなにかをつくってゆく。これがヨーロッパ文化なのであり、三者間の対立と緊張は、ときに合一・融合の局面をみせながらも、中世を通じて継続するのである。しかもそれはおそらくまだにおわってはいないのである。」

つまり、中世とは古典古代・キリスト教・ゲルマン精神三つ巴の緊張によってヨーロッパの生成された時代なのである。ヨーロッパはこの三者の鼎立・融合によって形成された。ここにいうヨーロッパとは西ヨーロッパのことである。中世とは西ヨーロッパができた時代なのである。そして、その西ヨーロッパ文明が歴史の事実上、今日の世界を席卷していることを思えば、歴史的に中世はきわめて重要な時代であると言わねばならない。

「ヨーロッパの形成とは、西ローマ帝国の滅亡以後、それ自体まとまりもなく、さりとて東ローマの直接支配下にあるわけでもないが、その付属物としての地位しかもちえなかった西方——その共通語ゆえにラテン的西方とも言う——が、このあいまいな状態から脱却する過程なのである。この過程を推進する役割をになったのが、フランクの王権とローマ法王権であった。・・・中略・・・ヨーロッパは、フランク王権とローマ法王権の合作が実を結んだカトリック世界としてだけ、正しく設定されるのである。その最初の、決定的な段階は、シャルルマーニュのローマ皇帝権復興において達せられた。」(堀米 p 37)

<sup>39)</sup>堀米庸三『中世の光と影 上』 p p 26-30 要旨

中世とは、世俗領域におけるフランク王権と、霊的領域におけるローマ教皇権の緊張関係において成立している世界である。小さな領邦ごとの自給自足経済であったから、各民族は民族意識や国家意識をもち得なかったから、ヨーロッパ全土にわたるフランク王権の普遍性と、ローマ教皇権の普遍性が認められていた。

## 歴史区分

紀元 500 年から 1500 年まで、つまり、西欧キリスト教史の約半分の千年間を中世教会史という。東方教会には中世はない。6 世紀から 10 世紀まで異民族の侵入などによって、教会は包囲されている状態だった。7 世紀からは戦闘的イスラム勢力からの攻撃を受ける。

西洋史では一般に西ローマ帝国の滅亡（476 年）から 15 世紀末（1453 年の東ローマ帝国の滅亡を以って終わりとするのが一般的。また、ルネサンス以降あるいは宗教改革以降を近代とする。ルネサンスを中世に含めるかどうかは議論があるところ。

通常、中世はさらに、ゲルマン人の侵入からマジヤール人、ノルマン人の侵入が収まるまでの中世初期（Early、500 年頃 - 1000 年）、十字軍により西欧が拡大し、汎ヨーロッパ的な権力を巡り教皇権が皇帝権や王権と抗争する中世盛期（High、1000 年 - 1300 年）、ルネサンスや百年戦争の混乱から絶対王制に向かう中世終期（Last、1300 年 - 1500 年頃）に分類される。

## (3)アンブロシウス——教会と国家

**Ambrosius** 340 年?・397 年 4 月 4 日）は 4 世紀のミラノの司教（主教）。四大ラテン教父・西方の四大教会博士の一人に数えられる。アウグスティヌスに影響を与えたことでも有名。4 世紀半ば、ローマ帝国の高級官僚の息子として、父の任地ガリアのアウグスタ・トリヴィノールム（現在はドイツのトリーア）で生まれたアンブロシウスはローマで法学を学んで、官僚の道を歩んだ。優秀な人物であったため、368 年にシルミウムの長官、370 年にはミラノの首席執政官に選出された。ちなみに当時のミラノは帝国西方の中心都市であった。

374 年、アンブロシウスの運命が大きく変わることになる。ミラノ司教アウクセンティウス死去に伴う後継人事問題は、アリウス派と反アリウス派の民衆が入り乱れてもめにもめた。人望のあったアンブロシウスが調停に乗り出すと、派閥間の争いとうんざりしていた民衆はアンブロシウスこそミラノ司教にふさわしいと要求し始めた。

あまりに熱心な要求に、アンブロシウスはまだキリスト教徒ですらなかつたにもかかわらずこれを受諾。司祭についてキリスト教のカテキズムを学ぶと、洗礼を受け、すぐに司教に叙階された。これが 374 年 12 月 7 日であり、アンブロシウスの記念日はこの日付に由来している。

司教となったアンブロシウスは教会政治家として優れた手腕を発揮。アリウス派を駆逐して正統信仰の擁護に尽力した。

後世に影響を及ぼした重要な事件。390 年にテサロニケで皇帝テオドシウスが民衆を虐殺する事件が起きた。テサロニケの暴徒が市の総督を殺害した。アンブロシウスはただちに

皇帝に穏便な処置をとるように求め、一時皇帝は納得したかに見えた。が、皇帝は態度を翻し、「暴徒をゆるす」ということばを伝えさせ、その祝いのために闘技場に集った七千人余の人々をローマ帝国軍に殺害させた。次に皇帝が教会を訪れると、アンブロシウスは門の前にたちはだかり「そこで止まりなさい。あなたは罪で汚れ、その手は不正なふるまいによって流された血にまみれている。そのような人は、悔い改めるまでは、聖なる場所にはいって聖餐にあずかるのにふさわしくない。」と宣言した(ソズメノス『教会史』7:25)。このとき、一人の廷吏が力づくでアンブロシウスを脅迫したが、皇帝は彼のことが正しいことを認め、公衆の面前で悔い改めを表明した。その後、皇帝は自分がだれかに死刑を宣告した場合、執行は30日間延期せよと命じた。・・・やがて死期を迎えたテオドシウス皇帝が、その枕辺に呼んだのはアンブロシウスであった。

このアンダーラインを引いた事件は、西方教会の国家に対するかかわり方の伝統になっていく。カエサル・パピズムの東方教会では考えられないこと。

#### (4)ゲルマン民族の姿

さて古代ローマ時代、現在のドイツ地域に進出した民族がゲルマン民族です。彼らについては、カエサルの「ガリア戦記」、タキトゥスの「ゲルマニア」という著作が様子を伝えてくれます。

もともとバルト海周辺に、牧畜を主とし農業を従とする生活をしてきた。そのために、広大な農地を必要とし、その結果、地力が衰えると新しい農地が必要となっており、『多少とも長い定住期をもつ徐々とした移動の生活』を送っていた。

ゲルマン人の風体は、タキトゥスによると、ゲルマン人は他の民族との通婚を一切しないことから種族的な純粋さをよく保っており、人口が多い割にその「鋭い空色の眼、ブロンドの頭髪、長大かつ強靱な体軀」を種族全員の特徴として誇っていた。もちろんこの記述にはローマ人タキトゥスの主観が混じっており、ゲルマン人が本当に何の混血も行っていなかったかどうかは疑わしいのだが……。ちなみに現在あちこちで発掘される古代ゲルマン人の遺骨の身長は平均1.72メートルであるといい、同時期のローマ人の平均身長より約20センチ高い。またゲルマン人のブロンドの髪がローマ人の讃嘆的であったのは有名な事実で、ローマ人はゲルマン人の頭髪を買い取ってカツラとして用いていた程だったという。その他の暮らしは脚注に。<sup>40</sup>

---

<sup>40</sup> ゲルマン人の一日

ゲルマン人の1日は日没から始まって翌日の日没に終る。これは夜型の生活を送っているという意味ではなく、日にちを数えるのに昼ではなく夜の数を数えるという意味である。これは、正確な時間を把握するには、太陽の動きよりも、月の満ち欠けを見る方が便利という発想からくると考えられ、民会の召集も新月あるいは満月の日を期して行われる。「あたかも夜が昼を導くかのようである(タキトゥス)」

ゲルマン人は朝目覚めるとまず沐浴し、食事はその後にとる。沐浴に際しては、脂肪と灰からつくった石鹸が用いられる。貴族クラスだと湯を用いるが、一般は河川での水浴である。食卓には獣の肉(生で食ったり薫製にしたり)・パン

## ①ゲルマン的自由人社会

当時のゲルマン人は、約50の「キヴィタス」なる小国家にわかれて暮らしていたことがわかる。基本的にこの部族単位というものは、ドイツでは長いこと続き、領邦国家として存続します。ゆえに17世紀でも300ほどの国があり、さらに19世紀になっても40カ国ほどありました。

王または首長のもとに、身分差の希薄な戦士の農民の自由な共同体をいとなんでいた。キヴィタスの中で最高の権力を持つ者は「国王」もしくは「首長」であり、前者は1人、後者は数人が君臨するという違いがある。しかし、国王も首長も絶対的権力をもつものではない。戦争・講和・移住・裁判など、重大な問題は「民会」にかけられる。武器を持つ自由民は全員出席出来るが、実際に話し合うのは首長や貴族だけで、他の者はそれに対し承認・否認の意志を示すだけである。反対の場合はざわめき、賛成の場合は武器を打ち鳴らす。「最も名誉ある賛成の仕方は、武器をもって称讃することである（タキトゥス）」。

---

(のようなもの)・柔らかいチーズ等の乳製品・野菜・魚等々が並ぶ。バターもあったが食するのは富者のみである。調味料は、岩塩程度のもはあり、岩塩坑をめぐる戦争も行われていた。食事は一人一人別の卓を用いる。酒類としてはもっぱらビールを嗜むが、ローマ産の葡萄酒もよく飲まれる。ローマ帝国は政策としての葡萄酒輸出を盛んに行った。ゲルマン人をアル中の腑抜けにするためである（マジで）。「彼等は渴き（飲酒）に対して節制がない。もしそれ、彼等の欲するだけを与えることによって、その酒癖をほしのままにせしめるなら、彼等は武器によるより、はるかに容易に、その悪癖によって征服されるであろう（タキトゥス）」

### 男女

成人男子の仕事は、戦争以外には狩猟ぐらいしかない。農業や家事は女性・老人・奴隷の仕事である。男共がつね日頃なにをしているのかという、ただひたすら飲んで騒いで喧嘩しているのである。そもそも、略奪によって獲得出来るものを、わざわざ働いて得ようという方が（ゲルマン人にとっては）よっぽど無能なことなのである。ただし意外というか何というか、少なくとも若いうちは女遊びはしない。『ガリア戦記』によると、ゲルマニアの若い男は童貞を守ることによって頑強な肉体を手に入れることが出来ると考えており、20歳前に女性を知るのを恥としていたという。

成人してからも、基本的に妻は1人だけである（国王クラスは別）。婚姻の際には夫が妻に贈り物をする。それは牛・馬・剣・槍・楯である。ゲルマン人の一夫一婦制はタキトゥスも称讃するところであり、（彼によると）姦通すら減多にないという。万が一不義密通を働けば、その女性は髪を切られて裸にむかれ、鞭によって家から追い出される。

ゲルマニアには都市は存在しない。村すらつくろうとせず、仮につくっても、それぞれの家の周囲に広い空き地をめぐるしている。ローマ建築では一般的な切り石やレンガもあまり用いない。地下に穴を掘って貯蔵庫にするが、これを婦人の織り場として用いることもある。

### 宗教

ゲルマン人は古来太陽・月・星・火等を崇拝していたが、それを「ヴォーダン」「トール」などの人の形に置き換えたのはローマの影響によるという。タキトゥスはヴォーダンをメルクリウス（ギリシア神話のヘルメス）、トールをマルス（アレス）と呼び、エジプトの女神であるイシスへの信仰もあったという。またタキトゥスは、ホメロスの叙事詩で名高いユリシーズ（オデュッセウス）がゲルマニアに漂着したとの伝説を伝えている。ユリシーズはこの時現地に都市を建設したとされ、タキトゥスの時代にも、ギリシア語を彫り込んだ記念碑や墓が存在していたという。

れは重要な話である。武器を持つことはすなわち一人前の男たる証なのである。ある一定の年齢に達した男子は、長老・父・近縁の者によって楯とフラメア（槍の一種）を与えられ、これによって自由民たる資格を得たのである。

貴族には「従士」が付き従う。従士は貴族の子弟および自由民である。貴族の地位は高く、中世の「騎士」に近いものであるが、騎士が（主君にもらう）領地とひきかえに主君への忠誠を誓うのと違い、従士は主君の家で養われることになる。従士は主君を選ぶことが出来、主君は戦場において従士に遅れをとることを恥とする。ここにもゲルマン社会の自由人社会としての色がうかがえる。

奴隷は主人に対し一定量の穀物・家畜・織物を納めるが、主人の家から独立した世帯と住居を持つ、小作人のような存在である。鎖に繋がれたり鞭で打たれたりすることはあまりない（ただし簡単に殺される）。奴隷にはゲルマン人に征服されたケルト人が多いが、ゲルマン人の中にも、自分自身を賭けた博打に負けて奴隷におちる者もいる。彼等は自己の自由を買い戻して解放奴隷になることが出来るが、どこの「家族」にも属さない以上、一人前の自由民として認められることはない。こうしてみると、彼らを「奴隷」と呼ぶのも用語として不適切な観がある。

古くは、ゲルマン社会を土地の所有を知らず、共同の農地を共同で耕す人々と言われていたが、今日では巨大な墓と立派な副葬品も見つかって、それは誤解であったということになった。しかし、貴族制・身分制社会だということも言い過ぎである。たしかに、首長、貴族、自由人、奴隷という身分はあるにはあるが、それらは緩やかなものであって、絶対的なものではなかった。基本的にゲルマン人は自由人社会をなしていた。

ドイツ語でアーデルバウアーという不羈独立の自由人を意味することばがある。独立の世襲地所有農民である。彼らは首長や国王をいただくこともあるが、合意なく命令を受けることはない。合意は各個に、あるいは民会の合意による。民会では全員一致で決議されるから、構成員がそれぞれヴェトー(拒否権)を持つ。12,13世紀以後、ようやく多数決制になった。

**結び** ギリシャ・ローマ古典古代精神（人間中心哲学・西ヨーロッパの一体性）、ヘブライ・キリスト教精神（罪意識・教会の自律）、ゲルマン精神(自由・独立)という三者の精神の鼎立と融合がヨーロッパ文明をつくっていく。

## XV. ユスティニアヌス大帝と西方教会

### 1. 帝国の弱体化とローマ総主教(教皇)の活躍——レオ1世

かつて帝国の厳しい迫害下にあった時代、教会は自らをこの世から聖く保つことについては比較的たやすかった。キリスト者となることが権力や富を得ることと直接関係なく、むしろ権力や富を放棄することを意味していたからである。「貧しい者は幸いです。神の国はその人のものです。」ところが、キリスト教が国教化されると事態が変わる。キリスト教

徒であることが出世へのパスポートになる。こうなると聖なるものが徐々に俗なるものに侵食されていく。

キリスト教を国教化したテオドシウス帝は死にあたって、二人の息子に帝国を東西に分割した（395年）。東ローマ帝国はこの後1453年に滅亡するまで存続し、コンスタンティヌス帝の伝統にのっとり、皇帝が教会の元首として君臨する。カエサル・パピズムである。

他方、西方にはゲルマン民族が各地に侵入し、フランス、スペイン、北アフリカ、北イタリアにそれぞれ王国を建設し、四六七年ついにオドアケルによって西ローマ帝国は滅亡した。帝国の弱体化は社会を混乱させるが、反面、教会は比較的国家権力から自由な勢力として成長する。西方教会には、先に見たアンブロシウスの行動に見られる教会の国家からの自律という理念の伝統がある。

その好例がローマ司教レオ一世の活躍である。レオ1世（Papa Leo I、390年 - 461年、在位：440年 - 461年）は390年、ピサ近郊で生まれた。若い頃の経歴はあまり詳しく分かっていない。ただ、史書によれば聡明かつ雄弁な人物で、440年に教皇として即位した後は地方教会の改革や教皇権の強化などに務めた。教義論争でも異端説を弾圧し、正統論を確立した。

ローマ教会は、使徒ペテロの殉教の血の上に築かれたと信じられていた。その信仰にもとづいてコンスタンティヌス大帝はローマに聖ペテロ寺院を築いた。それでローマ教会は他にぬきんでた権威を持っていた。しかし、エルサレム、アレクサンドリア、アンティオキア、コンスタンチノーブルも古来由緒ある教会だった。コンスタンチノーブル大司教が皇帝の後ろ盾をもって首位権を主張したとき、それに抗議して451年レオ1世はローマ教会こそすべてに優越すると主張した。

またローマの世俗上の行政における功績もよく知られる。この頃のイタリアではフン族の首長・アッティラが侵攻してきていたが、レオ1世はアッティラと会見して平和的解決を図った。その結果、452年にアッティラはローマから撤退している。また、ヴァンダル族がローマに侵攻してきたときも、その責任者と会見することで平和的な解決に努めている。461年、72歳で死去した。レオ1世が即位した頃の欧州では、ゲルマン人の大移動による紛争時代であったが、レオ1世は常に平和的な解決を図り、武力による解決を好まなかった。このため、レオ1世は「大教皇」と称されている。

## 2. ユスティニアヌス大帝と東ローマ帝国の歴史的役割

### （1）ユスティニアヌス大帝

ユスティニアヌス1世（大帝、ラテン語：Justinianus I、483年5月11日 - 565年、在位：527年 - 565年）は、貧農の子から皇帝まで登り詰め、①西ローマ帝国の故地を再征服して一時的にローマ帝国を復興させた。②また古代ローマ法の集大成である『ローマ法大全』の編纂や、③ハギア・ソフィア大聖堂の再建でも知られ、その功績から後世コンスタンティヌスとともに「大帝」と呼ばれた。④しかし、一方では相次ぐ戦争や建築事業に

よる国家財政の破綻と国力の疲弊、それに伴う帝国の衰退という大きな負の遺産も残した。ユスティニアヌス大帝は東西帝国の再統一を政治的にも宗教的にも成し遂げることを、目指した。事実、彼の治世の一時期には帝国は昔日の栄光を回復したかに見えた。

### <政治的・軍事的>

政治的には、東方ではペルシャと和平を結び、西方では北アフリカのヴァンダル族を、イタリアから東ゴート族を、スペインから西ゴート族を追い払い、失地を回復した。

しかし長続きはせず。彼は軍隊を軽んじ、カネでペルシャと和平を維持しようとして経済的に苦しくなったといわれる。当然、財政難は諸属州への重税となるわけで、諸属州の不興を買った。これが七世紀にイスラムが侵入したときに、やすやすと諸属州を奪われてしまった一因である。

### <宗教政策>

ユスティニアヌス帝はカエサロ・パピズム（皇帝教皇主義）を徹底した。聖ソフィア大聖堂の再建(537年)。宗教的統一の象徴のシンボルであり、ビザンチン建築の傑作。後にイスラムの聖堂とされた。

神学論争への介入もし、キリスト単性論問題を政治的に解決しようとした。有名なところでは「三章論争」である。ユスティニアヌスはカルケドン会議の結論に不満な単性論者が、カルケドン会議で承認された「三章」を異端とすることに組みした。[ベッテンソン p p 147-148](#)。

ユスティニアヌスは皇帝教皇主義をもって異教と異端を弾圧したので、ローマ帝国の諸属州からは不評となり、これがイスラムの侵攻を許す一因となった。イスラムは宗教的には寛容政策を取ったからである。

### <法的>

ユスティニアヌス法典。529年発布。長い伝統をもつローマ法の集大成。コンスタンティヌス大帝の理想である「一つの帝国、一つの教会」政策の法律上の決着であり、政治と宗教の両面からキリスト教社会の秩序付けを図った。

皇帝の権力は、政治・軍事のみならず、文化・思想・宗教一般、教会をも支配する。無神論・偶像礼拝は禁止、ユダヤ人を迫害、529年ギリシャ哲学の学院アカデメイアを閉鎖。

ユスティニアヌス法典の観点からすれば、三位一体論批判とか再洗礼は国家秩序を破壊する大罪とされた。16世紀宗教改革時代に、反三位一体論者セルヴェトゥスがジュネーブで処刑されたのも、アナバプテストが弾圧されたのも、この法典を根拠としている。

ユスティニアヌス大帝の力も、時代の流れには逆行しがたく、彼の死後はやはり西方支配はできなくなり、ペルシャからも攻め込まれ、教会の東西分裂は元の木阿弥となっていく。

## (2) 東ローマ帝国の歴史的役割

東ローマ帝国は、この後、さらにイスラムの進出によって、決定的に西方世界への直接的な影響力を失ってしまう。それでは「コンスタンチノーブルの役割は、ただ古代ローマのむなしい残照を保つにすぎなかったのであろうか。帝国の失われた栄光の残りかすを保つ

ていたということにすぎないのか。」と堀米は問う。そして、否、という。

第一には、専制帝政に道を開いたディオクレティアヌス、コンスタンティヌス大帝の帝国改造は、市民を臣民につくりかえたものであったとはしても、狂乱状態を秩序あるものに戻す大事業であったこと。

第二には、中世東ローマは9世紀のマケドニア王朝のもとでは強国であったこと、

そして、第三に、後世への影響として一番大きなこと。「このような東ローマあつてはじめて、蛮族化した西方にも、この世の唯一最高の支配圏としてのローマ帝国の観念がのこり、これをシンボルとする統一ヨーロッパ世界が生まれ、やがては近代をひらくことができたのだ。1453年、東ローマが滅亡したとき、ローマ帝国、いな古代文化の遺産は、すべて西方にあり、これによってヨーロッパは世界そのものにまで、みずからを拡大する準備をおえていたのである。」<sup>41</sup>

たしかに堀米のいうように、もしローマ帝国の観念がなかったならば、伝統的に部族連合を基本形とするゲルマン人たちはヨーロッパ全体を一つの統一することなど理想として考えもしなかったであろう。事実、ゲルマン人たちの国ドイツは、今も連合体として存立している。ローマ帝国の理想、一つのキリストのからだとしての教会があわせられて、ヨーロッパを統一世界として考えることになった。今日のEUもまたしかりである。

## XVI. グレゴリウス大教皇とベネディクト修道院

### 1. グレゴリウス大教皇(グレゴリウス1世)

#### (1) 人物

中世ローマ教会の幕をあけたのは西ローマのグレゴリウス大教皇(一世)(在位五九〇—六〇四)である。彼はローマの最も由緒ある元老院議員の貴族の出身で、25歳の若さでローマの司政長官に任ぜられた。しかし、数年たつとこの職を辞し、ローマやシシリーの全財産を投げうって七つの修道院を建て、自らローマに建てた聖アンドレアス修道院の修士となった(573年)。七つの修道院は、ベネディクトゥスの戒律に従うものだった。

590年、選ばれてグレゴリウスは教皇となる。大グレゴリウスの在位は十四年間だが、その間に以後千年間の中世ローマ教会の基礎を築いてしまう。グレゴリウスは歴代の教皇のなかで最初に意識的に東ローマの影響からの離脱、教皇権の確立に務めた。監督制の教会は、有能な監督を得るときにどれほど多くの仕事を効率的になしうるかということのサンプルである。

#### (2) 歴史的状況

ユスティニアヌス大帝の皇帝教皇主義に立つ教会政治は教会の自由を脅かし、東方教会での教義論争はコンスタンティノーブル大司教とローマ教会との間に不必要な摩擦を引き

---

<sup>41</sup> 堀米同上 pp 19—21

起こした。他方ランゴバルドの脅威は強まってくるが、皇帝からの支援は期待できないという状況だった。

表面上はコンスタンティノープルと有効関係を保ちつつ、東ローマ勢力とランゴバルドを対抗させ、自らはランゴバルドと妥協して教会の基礎をかためるという政治的な離れ業をやった。皇帝の要求に対しては敢然とレオ1世の宣言に基づいて拒否した。

ゲルマンの改宗。アリウス派または異教徒のゲルマン諸部族をローマ教会の傘下に取り込んだ。西ゴート族、アングロサクソンを改宗させたのである。これに用いられたのが、ベネディクトゥス派の修道院である。

また、彼は典礼の整備をした。グレゴリオ聖歌はレオ1世の成果のひとつである。もう一つ典礼で注目すべきことはミサを犠牲とみなす考えである。生きている者は煉獄で苦しんでいる者のためにミサをささげるのである。16世紀プロテスタントの改革まで、これは正統的な教理をみなされるようになる。

さらに、司祭－主教－大主教－教皇というピラミッド型のヒエラルキーからなる職制を確立した。

### (3)半ペラギウス主義と煉獄と免罪符

中世の西方教会の神学では、関心は救済論に集中する。救済論には徹底した恩寵主義であるアウグスティヌスの線と、徹底した自力主義のペラギウスが両極にあり、その中間に自力と他力のバランスで中途半端な立場<神人協力説>がある。中世の神学的な基本線は、表向きアウグスティヌス主義とされるが、実質的には半アウグスティヌス主義から徐々に半ペラギウス主義へとずれていったということが出来る。つまり、救済の理解においても聖なるもの（恩寵）が俗なるもの（人の功德）に侵食されていく。

半ペラギウス主義については、ベッテンソン pp103-106 参照。アルル会議（473年）は半ペラギウス主義の主張をまとめた。カルタゴ会議の決定は教会全般にわたって不評で、完全なアウグスティヌス主義の教理はあまり広くは受け入れられなかった。当時の多くの人々は・・・、ペラギウスが肯定した点すなわち、人間側の責任、恩恵に協力する必要、神を正しいと呼ぶことには意味があるうんぬんは、大体において正しかったが、彼が否定した事柄、遺伝的に受け継いだ罪への性向、幼児洗礼の必要性、人類の罪の真実性、においては一般的に誤っていたと考えた。

アルル会議は「人間の努力は神の恩恵と結び付けられるべきである。人間の意志の自由は消滅したのではなく、減退し弱められたのである。救われる者も危険の中にあり、滅びた者にも救われる可能性はあった。」とした。

アルル会議の半ペラギウス主義に対しては、アウグスティヌス派からの反動が起こり、529年オランジュ会議が開かれる。ここで通された25の公認教理は、アウグスティヌスのことばのまま受け入れられた。しかし、悪への予定は異端とされた。つまり二重予定説は否定された。つまり、厳密な意味での本来のアウグスティヌスの主張は退けられて、棘を抜かれた穏健なアウグスティヌス主義ということになる。結局、ヤロスラフ・ペリカ

ンのことばを借りれば、「中世神学の成長」とは「アウグスティヌスへの一連の脚注である」。

肯定的主張としては「最初の人によって自由な選択の能力はゆがめられ、弱められたので、神の恩恵が最立ち導きたまわないかぎり、人はだれも、当然そうすべきであるように神を愛し、神を信じ、神のために善を行なうことができない。

われらはまた、公同教会の信仰にしたがって次のことを信じる。すなわちバプテスマをとおして恩恵を受けた後もしくは忠実に労するなら、バプテスマを受けた者はだれでもキリストの援助と協力によって、魂の救いに関するあらゆることを行なう力と義務とを与えられる。

しかしわれらは、ある者は神の力によって悪に予定されているということを信じないばかりでなく、そのようなよこしまなことを信じる者があるならば、心からの嫌悪をもって、その人はのろわれよというものである」

中世教会千年の土台をすえた大グレゴリウスは、アウグスティヌスの影響を強く受けたが、アウグスティヌスほどには恩寵主義に徹しないで、半ペラギウス主義である。アウグスティヌスは、人間は墮落して自由意志までも正しく機能しなくなったといったが、グレゴリウスは、人はアダムにあって墮落したが、自由をすべて失ったわけではなく、ただ意志の善性を失ったのみだとした。とはいえ、恩寵なしに救いはなく人の功績もないとも強調し、神の「先行の恩恵」が人間を動かして善を願うように導き、新たにされた自由意志は「後続の恩恵」と共に働いて善を行ない功德を積むのだという。

要するに、人は救いを得るためには、神の恵みだけでなく人の功德が必要とされ、教会が定めた徳を積むことが奨励され、教会は神と人との間を取り持つ仲保者となる。

「アウグスティヌス的総合」とは、人間の自由意志と神の恩恵との両方を否定せず総合することである。アウグスティヌスが恩恵を具体的に表現するのは徹底した原罪論と二重予定説である。人間には原罪があるゆえに百パーセント恩寵によらなければ救われようがない。また、人間の救いは人間のなんらかの功績によるのではなく百パーセントの救いによるということは、言い換えると、すべて神の予定によるということになる。そして、その神の予定を徹底すれば、ある者を救いに選び、ある者を滅びに選ぶという二重予定説となる。また墮落前予定説ともなる。事実、アウグスティヌス自身は二重予定について記している。

しかし、この二重予定説の難点は、神を悪の創造者とし、自由意志を全否定する決定論に陥ってしまうのではないかということである。ゴットシャルク（808－868）、ラムラムヌス（－868）はアウグスティヌスにしたがって二重予定説を唱えて、ライムスのヒンクマル（805－882）から激しく非難されている。

#### （4）煉獄の教えと免償状（免罪符）

神人協力説に立つならば、信者は救いの確信をもてません。救いが百パーセント神の恵みによるのなら、罪人は己の無力を認めてキリストにすがれば救われるのですが、たとえ

1パーセントでも人間の功德が必要となれば、良心の敏感な人ほど自分の行いが神の目の前に十分な功德であるかどうかを疑うからです。

ローマ教会では、信者は司祭に罪を告白すれば、教会の司祭を通して、罪が赦され永遠の罰は除かれるものの、有限な罰は残るとされます。そして、現世か来世で、教会の定める善業を行なって、有限な罰を償わねばならないと教えられます。その償いの期間を免除・短縮するために教会が取り成すことを誓うことを免償といいます。

ローマ教会においては、教会は一般信者から成る「聞き学び信じる教会」と教皇以下全聖職者から成る「教える教会」とに区別され、一般信者は俗なるものでキリストに直接近づくことができません。信者は地上の「教える教会」と、聖母マリヤを筆頭とする諸聖人からなる天の教会とを仲保者として、キリストに近づくことができるのです。信者は諸聖人の大量の「功德の宝庫」のおこぼれに与かることによって、罪を償い、キリストに至り救われるというのです。恩寵プラス諸聖人の功德というわけです。

この「功德の宝庫」の教えと煉獄の教えが十五世紀に合体することによって、免償状（免罪符）が登場します。ローマ教会によれば、聖人でもない大多数の信者はストレートで天国には入れません。そこで天国の予備校に入ります。これを煉獄と言います。煉獄で清めの試練を受けて償いを果たして後、天国に入るのです。しかし、現世にある信者が死者のために教会から免償状を買ってやるならば、死者はその試練の期間を免除・短縮されて天国へと移されるというのです。なんだか情実入学みたいです。あるいは長々しい戒名を付けたら極楽で良い椅子が用意されているという、墮落した仏教寺院みたいです。まさに、聖なるものが俗なるものに侵食された姿ではないでしょうか。この免償状に対する抗議がルターによる改革の発端となります。

## 2. ベネディクトゥスの修道院の働き ベッテンソン pp180-194

### (1) 背景

修道院は、キリスト教信仰がミラノ勅令 313 年で公認されたとき、信仰の世俗化に抵抗を覚えた「殉教志願者」たちが、荒野で禁欲的訓練をはじめた隠修士たちに始まった。エジプトのアントニウスはその一人。パコミウスは西方で修道院制度を創設。これらの修道院は厭世的で天国志向が強かった。

しかし、4世紀頃から教会全体への修道院の影響が強くなり『天国の門』と見なされ、そこから学ぼうとするようになった。聖なるものと俗なるものとの二元論は、キリスト者をも二種類に分ける。一般信徒は俗なる者として神に喜ばれる完全な生き方をする必要はなく、山上の説教に教えられるような完全な生き方は、この世から聖別された修道士たちのなすこととされた。修道院はこの時代の教会にとって霊的生命を維持した力。

しかし、6世紀ベネディクトゥスの創設した修道院は天国の門としての役割に加えて地上の役割を重視した。

### (2) ベネディクトゥス (480年頃-543年) 人物

イタリアのモンテ・カッシーノに修道院を設け、530年頃修道会則（戒律）を定めて、共同で修道生活を行った。彼の戒律に従った修道会の1つをベネディクト会と呼ぶ。

ベネディクトゥスはヌルシアの古代ローマ貴族の家系に生まれた。ヌルシアはスポレートに近い小さな町である。伝承によれば双子の妹にスコラスティカ（彼女も聖人である）がいた。少年時代は両親とともにローマに住み、学問を習得した。これはローマの行政官として必要な教養を身につけるためであったが、福音の教えに共鳴したベネディクトゥスは神に自らの生涯を捧げることを決意し、早い時期に学校を退学した。

ベネディクトゥスは隠修修道を行ったわけではなかったが、ローマ郊外の都会の喧騒を離れた場所で新たな生活を始めた。しばらく後、ベネディクトゥスはローマを完全に離れる必要を感じ、田舎で自らの労働によって生活しつつ修道生活を営むことを考えるに至った。ベネディクト会の標語 "ora et labora"、「祈り、かつ働け」はこの精神を表現したものである。

修道士ロマヌスの勧めで数年間洞窟での隠修生活をした後、ベネディクトゥスはスピヤコに修道院を設立した。彼のもとに、次々と共鳴者が集まり、スピヤコには12の修道院が増設されるに至った。12の修道院のそれぞれに、ベネディクトゥスは12人の修道士と1人の監督者を住まわせ、自身は別の修道院にごくわずかな弟子たちと共に住んだ。とはいえベネディクトゥスは依然としてスピヤコ全体の修道院長であり、修道士たちの信仰生活の父親役を務めたのである。その後モンテ・カッシーノに移り、ここで73か条から成る『聖ベネディクト戒律』を仕上げ、修道院を設立。モンテ・カッシーノの修道院設立の後、ベネディクトゥスの生涯はその理想とする修道生活の実現のために捧げられた。

9世紀までには彼の編んだ規則はシャルル・マーニュによって、フランク王国内の修道院規則の標準となる。ベネディクトゥスはモンテ・カッシーノで543年に没した。

### (3) ベネディクトゥスの戒律 主な内容は ベッテンソン p p 180-194

無所有・純潔・服従の三原則を堅く守る。

一日は短い睡眠と食事の時間を除き、すべて4-5時間の8回の礼拝（祈り）と6-7時間の労働に配分する。たいせつなのはいわゆる極端な苦行とは違った生産労働と祈りが合理的に組み合わせられていて、時と場所によって変更可能であるという柔軟性があつたこと。飲食について過度の節制を強いなかったこと。院長に対する絶対服従と、この服従のもとに同志愛的な結合を図った。

この修道院は旧来の修道院のように不合理な苦行を強いるものではなく、また労働を忌み嫌うものでもなく、先に述べたように『祈れ、働け』としていた。修道院は、祈りと瞑想の場であると同時に、農業・手工業・宗教書の筆写という生産的労働を行なう場ともなった。農業の合理的経営の工夫が修道院内でなされるようになり、ベネディクト修道院が、荒廃した農業の再建・未墾地の開墾に役立った。それゆえ、広く歓迎されたのである。このようにして、ベネディクト修道院がゲルマンの改宗の働きをしていった。

### (4) イギリス宣教 ベッテンソン p 227

グレゴリウス大教皇（一世）は、ベネディクト修道院を用いて英国の伝道をなした。グレゴリウスはアングロ人の少年奴隷たちを買い取って、修道院に入れ、後に宣教師として育ててイギリスへと送る計画を立てた。

596年、宣教師アウグスティヌスの統率のもとに40人の修道士団をイギリスに送り込んだ。彼は司教に任職してカンタベリーに会堂を建て、ファミリア(公立学校・神学校)を設立し、ベネディクト修道院を設立した。

ベッテンソン p 228. イギリスにきて、アウグスティヌスはその慣習がローマの慣習と違うことに気づき、どうしたものか悩んで、グレゴリウス大教皇に質問状を出している。グレゴリウスは、「物事は場所のゆえに愛されるべきでなく、良い事柄のゆえに場所が愛されるべきだからである。」として、敬虔で信心深く適切な事柄を教会から選び出してうまく調合して英国人たちがそれに慣れるようにせよと指示している。なかなかの卓見である。

### （5）「修道院の循環」

修道士たちは無所有であったから、修道士たちの労働の実は修道院という組織に吸収される。土地についても、修道士たちの開墾、篤信者からの寄進が修道院に吸収されていく。その結果、カロリング時代には修道院は巨大な土地所有者となってしまう。たとえば後にボニファティウスの立てたフルダ修道院は、その所領はアルプスから北海にまで散在し、広さは総計45万エーカーに達した。1エーカーは40.469アールだから、45万エーカーはおよそ18万2250ヘクタール。

中世を通じて修道院が古代文明を保持して継承させたこと、教会の霊的刷新に寄与したことは事実である。しかし、同時に、大地主となり一般民衆の住まいとはかけはなれた建物や豪華な礼拝堂と金銀の祭儀の調度品を有するにいたって、修道院は特権的なものとなっていた。禁欲と勤勉が富と余裕を生み出し、最初意図したのと正反対の放恣・怠惰の極みに至り、するとまた新しい禁欲と勤勉の運動が起こる。「修道院の循環法則 monastic cycle」とはこのことである。

一つの例をクリューニ修道院に見よう。10世紀になると修道院はノルマン人、ハンガリー人に略奪され、それを免れた修道院は修道院長や高位聖職者の野心の道具にされていた。大修道院も墮落してしまったのである。910年アキテーヌの領主ギョームがベネディクトゥス修道会に一つの修道院を寄進した。彼はベネディクトゥスの会則に忠実な修道士ベルノを修道院長として迎え、ベルノは926年までこの職を務めた。10世紀・11世紀に彼とその後継者は修道院改革を実行していく。クリューニーの修道士たちはほとんどすべての時間を礼拝のために用いたので、肉体的労働はおろそかにされるようになった点は、ベネディクトゥスの会則から外れた点であるが、この修道院は、教皇の直接管轄と保護下に置かれたので、世俗領主たちからの影響をまぬかれることができた。

教会の最高聖職者たちが墮落していた暗黒の10世紀にあって、クリューニーがなしている改革は奇跡的なものであって、多くの人々に支持されることになる。世俗権力から独立していた彼らの運動は、まず第一に聖職売買の廃止をめざした。第二に廃止されるべき害悪は聖職者の結婚であるとされた。

しかし、清貧の理想は、先に述べた修道院の循環によって崩れていく。修道士たちは無所有で勤勉に務め、多くの支持者たちが修道院に寄進をした。その結果、修道院という組織は広大な土地と莫大な財産をもつようになっていく。こうなると、ベネディクトゥスの会則を維持することがむずかしくなっていく。クリューニーの改革運動が失敗に終わったのは、その富のゆえである。砂糖にアリが群がるように、富があるところには、世俗の権力者たちの策謀が働くようになってしまうのである。

11世紀末になると、生ぬるくなってしまったクリューニーの運動に対して、シトー会による修道院改革運動が始まる。この運動の偉大な指導者がクレルヴォーのベルナルドゥスである。彼は名説教者として知られ、しばしば政治的・教会的抗争の調停にまで招かれている。ベルナルドゥスは教皇以上に力を持つようになり、特に彼の弟子が教皇になるとそうであった。ベルナルドゥス第二回十字軍を提唱している。

教会や修道院が富を抱えることの危険ということを私たちはわきまえるべきであろう。

## まとめ

修道院は、もともと隠遁者たちが共同体を作ったのが始まりで、厭世的で天国への望みだけに生きるという性格の強いものだった。しかし6世紀、ベネディクトゥスによってモンテ・カシーノに設立された西方の修道院はこうした隠遁的性格に加えて、外に向かったの愛と宣教の奉仕活動や古典文献の継承という役割を果たす。福音未伝のヨーロッパへの宣教の主演は修道院だった。

しかし、無所有・禁欲・勤勉という修道士の生活は、修道院という組織を富裕化させるという結果を生み、修道院は大地主となり特権的な地位を得ることになり、それはほぼ必然的に怠惰と放縦という墮落にいたる。その極みに達すると、新たな禁欲と勤勉の修道院運動が起こった。歴史家たちのいう「修道院の循環法則」である。

修道会が考えた聖職者の墮落は、聖職売買（シモニア）と結婚であり、常にこれが改革の焦点とされていくが、聖書的観点からみるときに半分は的外れであることに気づく。すなわち、魔術師シモンが聖職を金で買おうとしたことが非難されたように聖職売買はまぎれもない罪である（使徒8：9-24）。キリスト教が公認され国教化された社会にあっては、聖職はえてして富と名誉を約束するステイタスになってしまうが、そこには常にシモニアの問題がついてまわる。

一方、聖職の結婚は旧新約聖書を通じて禁じられていない。旧約の祭司たちは妻帯していたし、ローマ教会が初代教皇として祭り上げるペテロも結婚していた（1コリント9：5）。主イエスの教えによれば、独身は特殊な生得的な賜物であり、また神の国の奉仕のためである場合には独身を選ぶほうがよいこともあるだろうが、一律に制度的に強制すべきことではない（マタイ19：11,12）。パウロのように住む場所も一定せず、たびたび投獄されることも辞さないような伝道の働きに就こうとする場合には、正常な家庭を営むことは不可能であるから結婚はしないほうがよいだろう。しかし、通常の牧会活動においては聖職者が結婚していないことは実際上不利である。聖職者の妻帯を一律に禁じることは、神のことばに反している上、福音宣教・牧会においても不利である。

聖書は正しい範囲の中で用いられる性を罪悪視せず、かえってこれを祝福している(創世記1:28、雅歌)。性欲それ自体を罪悪視して禁欲を勧めるのは、聖書ではなくむしろグノーシス主義である(コロサイ2:20-23)。ローマ教会における聖職独身制は、むしろ異教的慣習の制度化にすぎない。結果、異教の僧侶たちと同じようにローマ教会の僧侶たちは、内縁の妻をかこったり、あるいは幼児の性的虐待という罪に陥るのが関の山なのである<sup>42</sup>。

## XVII. イスラムの侵入と聖像破壊論争 7世紀

七世紀は、イスラムの台頭によってキリスト教が多くの地を失った時代である。かつて北アフリカは、古代教会におけるキリスト教神学者輩出の地だった。アウグスティヌス、テルトゥリアヌス、オリゲネスたちはみなアフリカから出た人々である。また修道院的靈性の始まりも北アフリカであった。しかし、イスラムの進出によって北アフリカのキリスト教世界は失われてしまう。

他方、ヨーロッパの奥地、北方の諸民族の改宗が進むのも七世紀。

### 1. 十字架と三日月

#### (1) 信仰と社会生活の文明体系

イスラームは、[ムハンマド](#)が[アッラーフ](#)の啓示を受けて創始したとされる。[ムスリム](#)の信仰及び生活を、聖典[クルアーン](#)によって規定する体系。むしろ聖書主義的立場からいえば、聖書啓示はすでに完結しているのであるから、ムハンマドが啓示を受けたという証言は嘘か、あるいは証言が本当であるとすれば、その啓示はまことの神からの啓示ではなく、異なる霊からのものということになる。ゆえにイスラームは史上最大の異端運動である。

日本語における「イスラーム」は全知全能の[唯一絶対神](#) ([アラビア語](#)で[アッラーフ](#))に絶対的に帰依する事、唯一神に完全・完璧に[服従](#)すること、またその状態を意味する。

イスラームの[啓典](#)である[クルアーン](#) (コーラン) や[ムスリム](#) (イスラーム教徒) の従うべき規範を定めた[シャリーア](#) (イスラム法) から理解されるように、イスラームはその定めにとって行うべき行為として単に[宗教](#)上の信仰生活のみを要求しているのではなく、[イスラーム国家](#)の[政治](#)のあり方、ムスリム間やムスリムと異教徒の間の[社会](#)関係にわたるすべてを定めている。このことから、イスラームとは、**単なる宗教の枠組みに留まらない、ムスリムの信仰と社会生活のすべての側面を規程する文明の体系である**、と説明される。

この理解に基づいて、近年はイスラーム研究者の間で「イスラム教」あるいは「イスラ

---

<sup>42</sup> 教会聖職者の性的暴行問題、被害者に805億円の和解案(2007年07月17日10時35分) ミロサンゼルス・ローマ・カトリック大司教区の多数の聖職者が信者の子どもたちを性的虐待していた問題で、ロサンゼルス郡地裁は16日、教会が被害者らに総額6億6000万ドル(約805億円)を支払うとの和解案を承認した。

問題発生は数十年に及び、被害者は508人に上る。同大司教区のマーオニー枢機卿は15日、「聖職者らに暴行されたすべての方々に申し訳なく思う。二度とあってはならぬことだ」と謝罪した。一部の被害者は、枢機卿は虐待問題の隠ぺいを試みたと批判していた。(asahi.com 時事)

ーム教」という「宗教」の側面のみを意味する「教 (-ism)」の字を取り去って単に「イスラーム」と表記すべきであるという主張が行われ、ある程度の市民権を得つつある。あるいは、イスラームの規程する諸側面すべてをイスラームと呼び、宗教としての側面をイスラム教、イスラーム教と呼んで区別することも可能であるかもしれない。

## (2) 成立

アラビア半島南西部ヒジャーズ地方にあるメッカで、クライシュ部族のハーシム家に生まれた。570年頃の事。メッカのカアバ神殿には、当時のアラブ遊牧部族に祭られた多くの偶像があった。メッカは商業都市でありムハンマドも商人として育つ。金持ちの未亡人ハディージャに隊商を任され、シリアに旅したときキリスト教修道士に会ったという。

610年、ムハンマド 40歳になるころ突然啓示を受けた。「おきて警告せよ」(74:2)。神の恩恵の豊かさに感謝し、神をあがめ、隣人同胞は助け合うべしとした。これは富と権力のみを追求し、個人主義・利己主義に走って助け合いの精神を失った商業都市メッカのクライシュ部族に対する非難であり、このような社会的墮落を続けていけばかならず終末の日が来ると警告した。「背信の徒は、神の道を阻むために自分の財産を費やしている。これから彼らは費やしつづけるであろう。しかし、やがてそれらが彼らの嘆息のもとになるであろう。そして敗北を喫するであろう。不信の徒はやがてゲヘナに召集させるのだ。神は悪を善から区別し、悪の上に悪を置いて積み重ね、全部ゲヘナに入れたもうのである。これらの者こそ損失者である。」(80:36-37)

大商人階級はムハンマドを先祖の神々を否定するやからとして迫害するが、彼は神の唯一性と終末を強調する。迫害はひどくなり、622年ムハンマドはメディナに移住。メディナで教団国家建設を進める。最初自分と同じ唯一神をとくユダヤ教、キリスト教は自分を預言者と認めてくれるだろうと考えて友好的な態度を示すが、偽預言者呼ばわりされて対決的姿勢に転じる。そして自分の宗教こそ祖先アブラハムの一神教の復興であると主張。アブラハムとイシュマエルがメッカのカアバ神殿の建設者として、アラブのカアバ崇拜感情をうまくイスラムに取り込んだ。630年1月メッカを無血征服し、偶像をことごとく破壊した。メッカのクライシュ部族もアラブ遊牧諸部族もイスラムに改宗。

## (3) イスラムの教義の特徴<sup>43</sup>

\*唯一なる神、創造主、アッラーフ

「これぞ、神にして唯一者、神にして永遠なる者。産まず、生まれず、ひとりとして並ぶ者はない」(第112章)

「アッラー」あるいは「アラー」と表記されることが多いが、「アッラーフ」がよりアラビア語発音に近い。[イスラーム](#)以前の[アラビア半島](#)においては多くの神々が信仰されていたが、[ムハンマド](#)後のイスラームにおいては万物を創造し、かつ滅ぼすことのできる至高神こそが唯一の神とされ、その超越性が強調される。イスラームの聖典[クルアーン](#) (コー

<sup>43</sup>藤木勝次「コーランとイスラム思想」中央公論世界の名著『コーラン』所収 参照

ラン) にはアッラーフの絶対性と全知全能性が記されている。

アッラーフは、生みも生まれもしない存在とされ、親も子もない。ゆえに、キリスト教徒の「神の子イエス」を非難する。「彼らは神をさしおいて、・・・マリヤの子キリストを主とみなしている。彼らは、ほかに神なき唯一なる神を拝せよ、と命ぜられているのに。・・・」(クルアーン 9: 32)。そして、目無くして見、耳無くして聞き、口無くして語るとされ、姿形を持たない、意思のみの存在であるため、絵画や彫像に表す事はできない。イスラーム教が偶像崇拜を完全否定しているのも、このためである。

アッラーフはユダヤ教・キリスト教の神 (ヤハウエ) と同一である、とされる。したがってアッラーフは世界を六日間で創造した創造神であると同時に、最後の日には全人類を復活させ審判を行う、終末をつかさどる神でもある。

ただし、一切を超越した全能の神・アッラーフが休息などするはずが無い、という観点から、創造の六日間の後に神が休息に就いたことを否定するなど違いはある。これはイスラームがユダヤ教やキリスト教を同じ「啓典の宗教」として尊重しながらも、それらの教えに人為的改変あり、と見なしてきたことの顕著な例でもある。

イスラームから見ると、キリスト教の三位一体論は異端である。イスラームにおいては、神の超越性のみで内在性がない。唯一であって、三位の神というのは、偶像礼拝への転落だと批判する。

#### \* 預言者

ムハンマド以前に同じ神から啓示を受けた預言者のリスト。アブラハム、イシュマエル、イサク、ヤコブ、イエス、ヨブ、アロン、ダビデ、ソロモン、モーセ(4:163,164)、ノア、ザカリヤ、ヨハネ、エリヤ、ロト(6:84-86)。

そして、ムハンマドこそ最後のそして最大の預言者とされる。アッラーフがクルアーンを授けたとされるムハンマドは、アッラーフより派遣された使徒であり、最後の預言者とされる。これは飽くまでもアッラーフから被造物である人類のために人類のなかから選ばれて派遣された存在に過ぎないとされている。また、そもそもアッラーフ自体が「生みもせず、生まれもしない」絶対固有の存在であるため、キリスト教神学のイエス・キリスト像のようにムハンマドに対して「アッラーフの子」と見なすような信仰的・神学的位置付けもされていない。

#### \* 最後の審判

「天が裂けるとき、幾多の星が飛び散るとき、海洋があふれでる時、幾多の墓が掘り返される時、魂はすでになした事、あとに残した事を知る。おお、人間よ、気高い主のことでおまえたちを欺いたものは、いったい何か。汝を創造し、形を与え、ととのえ、御心のままに汝に姿を与えたもうお方ではないか。いや、まったくのところ、おまえたちは審判を嘘だと言っている。しかし、おまえたちの上には監視役たちがいる。気高い書記がいる。彼らは、おまえたちの所業をよく知っている。敬虔なものは、至福の中に住むが、放蕩者は業火の中に住み、審判の日、そのなかで焼け滅びる。そこから抜

け出すこともかなわぬ。云々・・・」(82:1-16)

「右手に自分の帳簿を授けられる者は、たやすい清算を受け、その家人のもとへ喜んで帰るだろう。これにひきかえ、背後に帳簿をさずけられる者は、死なせて欲しいと叫びながら、火炎の中で焼けるだろう。」(84:7,8)

\* 天国と地獄

審判を受けたものは三組に分けられる。(56:7-56)

先頭を進むものは天国でも至福の天国へ。

「率先する者は、先頭を進む。このような者は、近くに召され、至福の楽園に入る。昔の者が多く、のちの世の者は少ない。錦織の寝台の上に、向かい合って寄りかかる。永遠の少年たちが、そのまわりを、杯と水差しと、泉から組んだ満杯の杯などを献上して回る。頭痛を訴えることも、泥酔することもない。彼らは好みどおりの果物を選び、鶏肉も望みどおりのものを得る。眼の大きな色白の乙女も居る。彼女たちは、まるで秘められた真珠のよう。これが、彼らの所業にたいする褒賞というもの。楽園のなかで、彼らは、くだらぬ話や罪なことばを聞くことはなく、ただ平安あれ、平安あれというのを聞くだけ。」

右側の者は天国へ。

「右側の者はだれか、右側の者とは。棘のないシドラと、実が重なり合っているタルフの木と広広とした日陰と、湧き出る泉のそばにあつて、果物は多く、絶えることもなく、食べるのを禁じられることもない。高くしつらえた寝台が、彼らのためにある。われらは、この乙女たちを作っておいた。汚れない処女に造りあげておいた。同じ年頃のかわいい乙女にしておいた。これらは、右側の者にあてがうためである。昔の者は多く、後の世のものも多い。」

左側の者は地獄へ。

「左がわの者はだれか、左側の者とは。業火の炎と、煮えたぎる熱湯と、黒煙の陰のもとにあつて、涼しさも楽しさもまったくない。彼らは以前にぜいを尽くし、大罪をおかし・・・云々」

## 2. イスラムの進出とヨーロッパ史への影響

### (1) イスラムの進出のすさまじさ

ローマ帝国にとって、地中海はいわば内海だった。経済的なことを言えば、ローマをはじめとして、地中海に面するそれぞれの都市地域は、背後にその地域を養うに足る農業地帯を持ってはいなかったのので、地中海全体として物資のやり取りをする経済圏として成り立っていたのである。たとえば、ローマは対岸の北アフリカから麦を輸入することで食糧

を得ていたのである。また東ローマも、エジプトからシリアからの経済によって潤っていた。

また政治的には、地中海があつてこそ東ローマは海軍力をもって西方に支配力を及ぼすことができた。地中海は、帝国各地を隔てるのではなく結びつける役割を果たしていた。

ところが、7世紀からイスラム教のすさまじい進出が始まる。預言者ムハンマドに鼓舞されたアラブ人たちは、後継者（カリフ）アブー・バクル(632-634)、オマール（634-644）統治下のわずか12年間で、東ローマからエジプト、シリア、パレスチナの諸地方、キプロス、クレタ、ロードスの諸島を奪い、大帝国ペルシャを打倒してしまった。ローマ帝国、ペルシャ帝国は長期間にわたる互いの攻防戦で疲弊しており、ローマの属州諸地方はユスティニアヌスの重税と不寛容な宗教政策に不満だったのである。イスラームは宗教政策では寛容だった。被征服者が他宗教にとどまることは許された。ただ、イスラームを信奉しないかぎり政治上権利がなく、税を負担しなければならなかった。被征服民は、しかし、このイスラームに関心をもって自発的改宗者が多かった。いな多すぎたので、改宗者からも徴税するようになったほどである。

オマールの後、アラブ人の内部抗争でイスラームの拡大は一時停止するが、ウマイヤ朝(661-750)が成立すると、再び征服が始まる。東では中央アジアとインド内部に及ぶ。西方ではカルタゴを中心とする北アフリカのローマ帝国属州である。この地域の人々もユスティニアヌスの苛烈な宗教政策(異端ドナティスト摘発)と、重税でローマ帝国の支配に不満をもっていた。

708年までにイスラムの将軍タリクは北アフリカ征服を完了し、711年ジブラルタル海峡をわたる。ジブラルタルとはタリクの岩という意味。数年で西ゴート族を征服し終わり、720年イスラム軍はピレネー山脈を越える。732年ツール・ポワチエの戦いでカール・マルテルとの戦いとなり、ここで主将を失ったために退くことになった。しかし、南フランスの海岸地帯はリヨンに至るまでイスラムの略奪を経験し、解放されるのは752年以後のことである。

## (2) イスラム進出と地中海世界の分裂

9世紀にはベレアル諸島からシシリーにいたる西地中海の島々はすべてイスラムの手に落ちた。14世紀のイスラムの歴史家イブン・ハルドゥーン「いまやキリスト教徒は、地中海に板きれ一枚浮かべることができなくなった。」

地中海はもはや周辺地域を結ぶものではなく、信仰と文化を分断するものとなった。地中海の北はキリスト教であり、南はイスラム世界である。さらに、地中海世界は東西にも分断されてしまう。

東ローマの影響は西地中海に届かない。イタリアでは、それまで日常的に用いてきた東の物産が姿を消す。エジプトのパピルスは羊皮紙に、胡椒などの香辛料はなくなり、オリーブ油も少なく、絹は貴重品となってもっぱら羊毛と麻にたよる。

東ローマ帝国の威光は、決定的に西方世界に及ばなくなってしまふ。すでに西方教会は

東ローマの対ランゴバルド問題における頼りなさと、宗教政策のうるささを感じていたが、イスラムの進出によっていよいよ西方は、自らの足で立ち、自らの手で戦わねばならなくなるのである。それは、ローマ教会が、イスラム進出をツール・ポアチエで食い止めたフランク王国と結んでヨーロッパ世界を築いていくということである。

### 3. キリスト論論争と西欧の成立・東西教会の分裂

#### 背景と歴史的影響の概観

聖画像論争とフィリオクエ論争を通して東西教会の分裂が決定的になっていく。

初代教会以来、教会はひとつであるという意識は強かったものの、もともと

- ① 東方はギリシャ語圏であり、西方はラテン語圏。
- ② 神学的傾向も、東方は哲学的傾向が強く、西方は法学的傾向が強かった。
- ③ 「教会と国家」のかかわり方も東西で違う。

#### (1) 聖画像破壊論争(アイコノクラズム)と西欧の成立

##### a. イスラムの進出

イスラムの地中海世界進出によって、東ローマは地中海世界で力を失い、西方世界は自立へと動く。またランゴバルドの圧迫に苦しんでいたローマ教皇は、あてにならない東ローマの皇帝をもはやあてにせず、イスラムを撃退した実力者フランクに近づく。

イスラムの進出は、それだけに留まらず、聖像破壊論争を誘発する。東ローマ皇帝レオ三世(在位 717-41)は、718年ウマイヤ朝イスラムをコンスタンチノーブル水域での海戦で撃退する。そして、皇帝レオ三世は<イスラム教徒、ユダヤ教徒を改宗させようとしても成功しないのは、キリスト教会が聖画像礼拝をしているからである>として、726年、聖画像礼拝を禁止し、聖画像の破壊を命令するにいたった。この後、120年間にわたる聖画像論争の始まりである。

この論争の背景には、東方教会のキリスト単性論がある。これはキリストの人間性に対して神性のみを強調するエウチュケス主義であって、東ローマ東方に広く浸透しているものであった。エウチュケス主義からすれば、聖画像はキリストの人間性以外は表現しないものだから、これを尊ぶのは偶像礼拝にひとしいということにもなりえる。

しかし形あるものを形なきものへの信仰のよすがとするというのは、ヘレニズム世界の根底にある考え方であって、キリスト教が古代社会にひろがるために必要であると西方教会は考えていた。神学的にこれも調整して、聖像には *veneratio* (崇敬) が、神には *adoratio* (礼拝) をささげるといった区別がなされていた。

かつて皇帝コンスタンティウス二世が押し付けようとしたキリスト単性論を、ローマ教皇マルティノスは拒んだために逮捕、拷問されて殉教したことがあった。今回は、東ローマ皇帝レオ三世は、かの故事をひいてローマ教皇を脅して偶像破壊を強制しようとしたが、皇帝レオ三世はマルティノスの時代とは違って直接に逮捕するまでの力をもってはいなか

った。そこで、ランゴバルドをたきつけて教皇を攻撃させたり、南イタリア住民に人頭税をかけて、ローマ教会所領の収入を削減したり、さまざまな方法でローマ教皇権を苦しめた。

こうした状況で、西方教会はいよいよ東ローマ皇帝から自立を図ろうとする。教皇グレゴリウス 3 世は、その即位の承認を東ローマ皇帝に願い出た最後の人であり、彼は、同時にフランク族のカール・マルテルに対してランゴバルドからの保護を申し出た(739年)。これは功を奏さなかった。カール・マルテルはイスラム撃退のために、ランゴバルドの助力を得ていたからである。とはいえ、ローマ教皇がフランク王権に近づいて、わが身の保護をえようとする動きは、今後続いて行き、実現して行く。751年小ピピンは、教皇ステファヌス二世に油注がれて王位につき、800年には、教皇レオ三世はフランク国王シャルルマーニュ（カール）に冠を授けて西ローマ帝国成立（後の神聖ローマ帝国）。聖像破壊論争がもたらした影響は、1054年の東西両教会の分裂という結果を生む一因となった。聖画像破壊論争は 120 年間も続くのだが、神学的な影響よりも、教会史的な影響のほうが大きかったと言える。

## b. 聖画像論争

古代教会ではカタコンベの礼拝場の壁に、聖餐や洗礼のようすを描いた絵画や聖書の物語が描かれているように、聖画像を用いることに反対はなかった。

しかし、帝国でキリスト教が公認されて後、司教のうちに大衆が聖画像を偶像として礼拝するのではないかという懸念を示す人々が出てきた。聖画像そのものではなく、聖画像の用い方を問題にした。

8世紀、726年、レオ3世が聖像破壊勅令を出す。754年、ビザンチンのコンスタンティヌス5世が教会会議を開き、すべての聖画像の使用を禁止。イスラムからの「偶像崇拜だ」という非難に答えるためであった。

こうして聖画像崇拜主義者と、聖画像破壊主義者に分裂する。西方教会は教皇の勅令を拒否、東方教会は完全に二分される。

### ダマスカスのヨアンネスの聖画像擁護論

「神を何らかのかたちによって表そうとすることは狂気の沙汰であり、不敬度の極みである・・・。しかし、神は・・・真の人となった・・・。文字を読むことができなかつたり、読む時間がなかつたりする人が多くいることを知っていた教父たちは、これらの事実を画像によって表すことを認めた。それが簡潔な注解所としての役割を果たすことができるからである。」（「正統主義信仰について」4：16）

最終的に、787年、第七回ニカヤ公会議での決議第七。ベッテンソン p p 151、152 聖画像にささげる「崇敬」*timhtikh proskunhsis* と神にささぐべき「礼拝」*alhqinh latreia* を区別する。しかし、ラテン語で礼拝 *latreia* と崇敬 *dulia* の区別はできないので、西方では歓迎されなかつた。しかし、聖画像を教会で用いるにも節度を持つてするようになった。

## (2) フィリોકエ論争 filioque と教会の東西分裂

### ①フィリોકエ論争

三位一体の神観から、聖霊の父および子との関係についての論争。

聖書は聖霊は父から出ているとカタるところヨハネ 15:26「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。」と、子からと語っているところがある。ヨハネ 16:14「御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。」、20:22「そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」

ニカイア信条「聖霊を信ず」

コンスタンティノポリス信条 聖霊は「主にして命を与えるお方」「礼拝され、崇められる」お方として、父と子と同質であり、「父から発出する」と。

論争は聖霊と父と子の関係で論争が起こる。

東方は、父子聖霊を経綸的にとらえて「三」を強調し聖霊は父から出るという立場を取り、西方は存在論的にとらえて「一」を強調して聖霊が父と子から出るという立場を取る傾向。

589年トレド会議で西方教会は、<父と子より発出する助け主 Paracletus a Patre Filioque procedens>と明記された。しかし、これは東方教会からは受け入れられなかった。

### ②フォティオスの分裂

#### ・政治的要因

シャルルマーニュ（カール、チャールズ）大帝によって西ローマ帝国が再建された。西方教会は、その後ろ盾を得て、東方のビザンチン帝国の支援を必要とせず、独立を志すようになった。

・聖画像の使用をめぐる論争で、東方教会は皇帝の操り人形であると西方教会は不信感を持つようになった。

・コンスタンティノポリス総主教フォティオスは、ニカイア信条に西方教会がかつてに filioque を書き加えたという理由で、西方教会全体を異端と宣告した。

#### \*最終的分裂 1054年

西方はパン種の入っていないパンを用いていること、聖職者の独身制を定めていることは間違いだと東方が指摘する。西方は、反論し、さらに東方では皇帝が教会に対して権威を持っていることを非難して。

### ③filioque 問題の現代神学における重要性——聖霊は受肉した御子の霊であること

東方教会は、聖霊は「父から、子を通して」出るという理解をしている。したがって、西方教会同様、聖霊は父と子で関係の仕方は異なるものの、両方に関係している。しかし、強調点として父に発出の起源ということ置くため、子を通してという点が弱い。そのため、聖霊と汎神論的な宇宙霊とが混同される危険がある（ユルゲン・モルトマン『いのちの泉』参照）。

キリスト者の霊性と異種の霊性との区別の第一のポイントは、キリスト者の「霊性」において、人の霊を革新する神の霊とは、『アバ、父』と呼ぶ御子の御霊」（ガラテヤ4：6）すなわち「子とする御霊」（ローマ8：15）であるということである。聖霊はナザレのイエスとして受肉した御子の御霊であるという事実の認識が、異種の霊性との区別のためには決定的に重要なのである。キリスト者の霊性における神の霊とは、諸宗教に共通する漠然とした「世界霊」ではなく、歴史の中にナザレのイエスという具体的なお方として受肉した御子の御霊なのである。

ここで重要なのは「ニカヤ・コンスタチノポリス信条」におけるフィリオクエ条項、つまり、聖霊は父のみならず「子からも」出たという点である。というのは、「父から出た聖霊」という表現で、被造物にいのちと秩序を与えた神の霊を指すだけでは、聖霊と汎神論的「世界霊」との区別がいかに不明瞭だからである。父から出て万物を創造した聖霊は、歴史の中にあのナザレのイエスとして受肉した御子の霊であることが、聖霊と汎神論的「世界霊」との識別の鍵である。

東方教会のフィリオクエ否定論に親近感を抱くJ.モルトマンは、地球規模の環境保全に神学的視野を拡大しようという意図から、「神の大地の聖なること」「『産み出す母』としての大地」を強調している<sup>44</sup>。その論述は慎重で誤りとは即断しがたいが、聖霊と汎神論的「世界霊」との区別性をあいまいにしていることに関しては批判されるべきである。聖書は、この世の霊と神からの霊の区別を明確にせよと命じているからである。その識別法とは、グノーシス主義について警告を発しているヨハネの手紙第一に記されるように、ナザレのイエスとして受肉したキリストを告白するか否かということにほかならない。

「愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。」（1ヨハネ4:1—3）

古代教会ではカタコンベの礼拝場の壁に、聖餐や洗礼のようすを描いた絵画や聖書の物語が描かれている。司教のうちに大衆が聖画像を偶像として礼拝するのではないかという懸念。イスラムがキリスト教徒は偶像崇拝をしているという攻撃。東ローマ皇帝レオ三世はイスラムの人々を回心に導くことができないのは、聖画像礼拝ゆえと考えた。そして、**726年、聖像破壊勅令**を出す。聖像破壊勅令の背景には、エウテュクス主義がある。

<sup>44</sup> J. モルトマン『いのちの泉』蓮見幸恵訳、1999年、新教出版社 pp44—46

経済的・政治的背景。聖画像崇拜の熱心な支持者は修道院だった。修道院は免税特権をもっていたので国家財政を脅かす。聖像破壊勅令によって修道院をたたく。

東ローマ皇帝レオ三世はローマ教皇に対しても聖像の破壊を強制しようとしたが、ローマ教会は挙げて皇帝の命令に反抗した。

754年、東ローマ皇帝コンスタンティヌス5世は、教会会議を開き、すべての聖画像の使用を禁止。聖画像論争は東西教会分裂と、ローマ教会をフランクに結びつける。

ダマスクスのヨアンネス(670頃-750頃)は皇帝レオ三世の聖画像破壊に対して強行に反論を主張した。「神を何らかのかたちによって表そうとすることは狂気の沙汰であり、不敬虔の極みである……。しかし、神は……。真の人となった……。文字を読むことができなかつたり、読む時間がなかつたりする人が多くいることを知っていた教父たちは、これらの事実を画像によって表すことを認めた。それが簡潔な注解書としての役割を果たすことができるからである。」(「正統主義信仰について」4:16)

最終的に、787年、第七回ニカヤ公会議での第七決議。ベッテンソン p p 151、152  
聖画像にささげる「崇敬」*timhtikh proskunhsis* と神にささぐべき「礼拝」*'alhqinh latreia* を区別する。次第に聖画像を教会で用いるにも節度を持つてするようになった。

## XIIX. ヨーロッパの成立と叙任権闘争

### 1. ピピンの寄進

「①フランク部族は、ヨーロッパをイスラムの侵略から救い、②ローマ教会をランゴバルドと東ローマの圧迫から解放し、③さらにシャルルマーニュの西ローマ帝国復興によってヨーロッパの運命を決定したものとして、中世史のなかで特別な位置を与えられている。<sup>45)</sup>この三つがフランク部族の事業だった。

初期はメロヴィング王朝がこの部族を支配する。初代王はクローヴィスである。残忍にして果敢、狡猾なゲルマン的気質にあふれた人物だった。彼はガリア(今のフランスがしめる地域)を統一し支配した。

やがてメロヴィング朝は弱体化して、形ばかりのものとなる。実力を蓄えたのは宮宰ピピンである。ピピンはイスラムをツール・ポアチエで止めた英雄カール・マルテルの子であり、シャルルマーニュの父にあたる。

751年、ピピンが司会をするソアッソン会議は、メロヴィング朝最後のフランク王ヘルデリク3世の廃位を決議するが、その決議を促したのは教皇のもとから使わされた二人の使者の持ってきた教皇ザカリアス(741-752)のことばだった。「力なき者が王であるよりは、力ある者が王であるべきである。」

これはピピンが十分に根回しをした会議だったのである。ピピンの家柄は7世紀から三代にわたってフランクの中心であって、事実上の王であり、他方メロヴィング朝の王は飾

---

<sup>45)</sup> 堀米 p 120

り物にすぎなくなっていた。年の初めに「百姓が御する牛くびきの戦車に乗ってでかけ、群臣の前で王国の幸を祈る」だけのものにすぎなかったのである。が、それでも王朝交代ということは容易ではなかった。それを可能にしたのは、ローマ教皇の権威だったのである。

権力と権威はちがう。権力(武力・財力)だけに頼って長期にわたる安定的な統治を行なうことはできない。支配者は、支配される人々の側の自発的な服従を必要としている。その自発的服従を求める契機は二つある。一つは伝統価値であり、もう一つは宗教的価値である。この二つの価値が権威の所在である。この権威は、武力といった物理的力によって獲得することはできない。

クローヴィスに始まる王統にはすでに伝統的価値があり、フランク族の人々はこれに服従していた。実力はなくなっているといっても、その王統を絶やすことは伝統的価値を否定することを意味した。あからさまにそれをすれば、メロヴィング朝をかつぐ人々によって逆にたたかれてしまう。そこでピピンは、ローマ教皇というより高い宗教的権威を利用して、自ら王となって王朝の交代を成し遂げたのだった。カロリング朝の始まりである。

フランク王となったピピンは、ランゴバルドを破ってラヴェンナ以下の征服地を返還させて、中部イタリアの土地をローマ教会に寄進した。「ピピンの寄進」と呼ばれ、ローマ教皇領の基礎となる。この一連の動きに、ローマ教会とフランク王国の関係が典型的なかたちで現れていると言えよう。ローマ教皇はフランク王国と提携することによって、ランゴバルドの圧力を退け、東ローマから独立しようとしているのである。フランク王は、自らの王権の後ろ盾として、ローマ教皇の宗教的権威を必要としていたのである。

江戸幕府と天皇の関係に類するものである。国家権力は、宗教性を帯びることによって民心を掌握し安定を獲得することができる。そこで古代から現代にいたるまで権力は宗教を利用するのであるが、これには危険がある。ローマ 13 章からいえば、国家権力の務めは世俗領域に限定されるべきであり（警察・徴税）、国家権力が強く宗教性を帯びると自己神格化に走る（黙示録 13 章）。

## 2. コンスタンティヌスの寄進状 (*Constitutum Donatio Constantini*)

ベッテンソン pp 157-160

これは、ローマ教皇ステファヌス 2 世（在位 752 年-757 年）ないしその側近によって 8 世紀中ごろに偽造された文書（偽書）。かつてはローマ皇帝コンスタンティヌス 1 世が教皇領を寄進した証拠の文書とされていた。

その内容は『自分（コンスタンティヌス）はハンセン病を患っていたが、ローマ教皇シルヴェステル 1 世（在位 314 年-335 年）による洗礼を受けた後、治癒した。その感謝の印として、ローマ司教（教皇）に自分と等しい権力を与え、全西方世界（ラテラノ宮殿やローマおよびイタリア全土と帝国西部の支配権など）を委ね、自分はコンスタンティノープルに隠退する』というものであった。8 世紀当時、東ローマ帝国からの独立性を主張するた

めに造られたと考えられている。

800年のフランク王国カール大帝への戴冠も、この偽書を根拠として行われた。中世におけるローマ教皇領と神聖ローマ皇帝との「叙任権闘争」の際にも根拠とされ、また東方教会との対立問題ではカトリック教会の独立性を主張するために引用された。11世紀以後も、教皇の世俗権と皇帝に対する優位性（「世界はローマ教皇に帰属する」という主張）の根拠として使用された。

15世紀にイタリアの人文主義者ロレンツォ・ヴァッラが古いラテン語文献に使われている用法とは異なる点があることに気付き、『コンスタンティヌス寄進状の偽作論』を発表した。その後幾度もの論争を経て、18世紀に偽作であることが確定した。

### 3. 西ローマ帝国の復興——カール大帝

#### (1) カール(シャルルマーニュ)が皇帝に

768年ピピンが没し、その子カール(シャルルマーニュ)が後を継いだ。彼は軍事的にもすぐれた人物で、ザクセン族を平定、ランゴバルドを併合、アヴァール族、イスラムを破って辺境守備を行ない、かつての西ローマ帝国の大半を含む大統一を成し遂げた。その領土は、すでに弱体化してバルカン半島の一部を保つに過ぎない東ローマを上回る大領土だった。そして、ここに行政制度、教区制度を整えた。彼は単なる軍人や政治家ではなく、敬虔なキリスト教徒であったことは確かである。彼が子どもたちのために学校を設立することについて記した文書を見れば、それがよくわかる。ベッテンソン p 156

800年には、教皇レオ三世はフランク国王カールに冠を授けて神聖ローマ帝国を成立させ、滅亡していた西ローマ帝国を復興させた。800年秋、前年にレオ三世に反対派が加えた傷害事件をさばくためにカールはローマに上っていた。12月23日、レオの立場が認められて事件は落着。翌々日は25日クリスマス。聖ペテロ寺院をカールは訪れる。ミサに連なる前にカールは告解所でひざまずいた。そのとき、レオ三世は、手にした「高貴な冠」をカールの頭上に載せた。そして言った「気高きカール、神によって加冠され、偉大にして平和的なローマ人の皇帝万歳。」すると、満場の聖職者と貴族らは声を合わせて三唱した。ついでカールは古式にしたがう教皇の臣従礼を受けた。

このときから、カールは東ローマ皇帝から受けていた「ローマのパトリキウス」なる称号をやめて「インペラートル(皇帝)にしてアウグストゥス」と呼ばれることになる。

#### (2) カールの皇帝戴冠の意味

この出来事の意義。一つは、名目的なものであったにせよ、法理的には東ローマ帝国に属していた西方ヨーロッパを独立させたということである。これは先にも述べたように東ローマ帝国というものがあつたがゆえに、西方もまた一つの帝国という意識を維持しえたということから来ている。そうでなければ、もともとゲルマンは部族連合というのが伝統的な生き方であった。実際、カール大帝の死後、西方は息子たちに分割統治されることになる。

この出来事から皇帝と教皇の微妙な関係がうかがえる。教皇がカールに戴冠して皇帝にした。実は教皇による皇帝の戴冠というのは、史上初めてのことである。途油はあっても戴冠はなかった。そして教皇はカールに対して臣下として服従するという。この微妙な緊張関係。

しかし、当時はローマ教皇の実力は、まったく微弱なものであって、到底カールに及ぶものではなかった。カールは自分の息子皇太子には共同皇帝をさせるときに、自己戴冠させている。カールは、西ローマ皇帝として、コンスタンティヌス大帝以来の caesar-papism 皇帝教皇主義を意識したものであった。

皇帝が教会に対して持っている権限の一つは、コンスタンティヌスがしたように司教の叙任権である。どんな時代であれ、組織を握るということは、人事権と財政を握るということである。この司教叙任は「指輪と司教杖」を用いて、皇帝によってなされた。指輪と司教杖は司教の司牧権をあらわす象徴であるから、この儀式によって皇帝の精神的権威が確認された。皇帝が教会の上に立つということである。

皇帝が任命した司教によって教会の教区は支配される。人事権を皇帝が持つということは、その教区を皇帝が支配することを意味する。

### (3) 教会の伝統

しかし、レオ 3 世のカール戴冠という行為は、まったく伝統を無視したことであったかというところでもない。西方教会では、4 世紀のアμβロシウス以来、信仰上の問題に関しては「教会がキリスト者皇帝をさばくのが習慣であり、皇帝が教会をさばくべきではない。」とし、「皇帝は教会の内にあるが、教会の上にはない」といい蒔いた。390 年無意味な大量殺人を命じたテオドシウス帝を破門した事件は有名。六世紀のグレゴリウス大教皇は、西方の名手としてローマ教皇の地位を東ローマ帝国に対して主張した。こうした伝統ののちでレオ三世は、サムエルがダビデに油を注いで王としたように、カールを西ローマ皇帝として立たせた。しかし、814 年にカール大帝が死ぬと、843 年のヴェルダン条約で国は東フランク、西フランク、イタリアに三分される。

## 4. 司教叙任権闘争 ベッテンソン p 162、p 174-

751 年小ピピンは王の立場を精神的に権威づけることをねらって、教皇ステファヌス二世に油注がれて王位についた。ピピンは、そのお返しとしてラヴェンナを教皇領として寄進。800 年には、教皇レオ三世はフランク国王シャルルマーニュ（カール）に冠を授けて神聖ローマ帝国を成立させ、滅亡していた西ローマ帝国を復興させ、東ローマ帝国の干渉を退けた。フランク王国とローマ教皇は、権力と権威を依存しあっていた。しかし、やがて両者の間にあつれきが生じてくる。

### (1) 背景

#### ①コンスタンティヌス以来の伝統 VS アμβロシウス以来の伝統

シャルルマーニュの戴冠のときから、ヨーロッパは皇帝となったフランク国王と教皇の合作である。しかし、この二つの権力の間には、相互の権限について一致できないところがあった。教皇は、自分が油注ぎと戴冠によって皇帝をつくりうると考え、他方、皇帝は自ら皇帝になったのであり、教皇はそれを追認したにすぎないと考えた。

ドイツ国王オットー大帝はシャルルマーニュの皇帝権を復興してから、東ローマ皇帝と同じ立場で教皇を臣下としてあつかつてきた。オットーは教皇を廃位する実権を持ち、実際に、その権限を用いた。

他方、ローマ教皇グレゴリウス7世はアンブロシウス以来の伝統にたちもどって、皇帝の教会支配を批判するようになる。グレゴリウス改革である。ここにコンスタンティヌス大帝以来の皇帝教皇主義と、アンブロシウス以来の教会の皇帝からの自由との対立が生まれた。

#### 注\*オットー1世(大帝)912～973

ザクセン朝第2代のドイツ王、初代神聖ローマ皇帝

彼の父、ハインリヒ1世は辺境の防備に力を注ぎ、ノルマン人やマジャール人・スラブ人の侵入を撃退して、国内の結束を固めました。また「ドイツ王国」の名称を用いたので、ハインリヒの即位をもって国家としての「ドイツ」が成立したと見なされています。

父ハインリヒ1世は、国民の信頼を得ていたので、彼の死後、子のオットー1世が諸侯の選挙によって東フランク王に選ばれました。

彼は、即位すると、国家の統一に力を注ぎ、933年と特に955年のレヒフェルトの戦いでマジャール人を撃破し、その西方進出を阻止するとともに、オストマルク辺境領（後のオーストリア）を置いてその後の侵入に備えました。

さらに、国内では敵対する諸侯を抑えて中央集権体制の確立に努めましたが難航し、そこで、教会や修道院領を王領とし、司教や修道院長の任命権を握り、聖職者を国王の官僚とし、彼らを王権の支柱とする政策「帝国教会政策」を採用して中央集権体制の確立をはかろうとしました。

彼は、帝国教会政策を進めるために、3回にわたるイタリア遠征を行ない。2回目の遠征の時、962年に教皇ヨハネス12世から「ローマ皇帝」の冠を授けられ、「オットー大帝特権状」をもって教皇の世俗的権力を確認し、皇帝、教皇間の関係を規定しました。

これが「神聖ローマ帝国」(962～1806)の起源となります。この国は最初は単に「ローマ帝国」と呼ばれていたのですが、13世紀の中頃以後「神聖ローマ帝国」と呼ばれるようになりました。彼の治下には文芸も栄え、「オットーのルネサンス」と称されました。

ここにドイツからイタリア中部にまたがる大帝國が出現したのですが、その後のドイツ王は代々「ローマ皇帝」の称号を受けたことから、本国の統治よりもイタリア支配に熱中してしまいます。このためドイツ国内は分裂状態に陥っていったのでした。この歴代の神

聖ローマ皇帝のイタリア支配政策は「イタリア政策」と呼ばれています。

<復習 ローマ帝国東西分裂後の流れ>

ローマはディオクレティアヌス帝の時代、巨大な帝国を支えきれなくなり、東西に分かれた。

ゲルマン民族が中央アジアのフン族に押されて大移動を始め、やがて 476 年、西ローマ帝国を倒す。

ゲルマン民族の国、フランク王国が勢力を拡大し、西ヨーロッパを統一。

西ローマ教会は、東ローマの東方教会と聖像礼拝問題で対立。

800 年、ローマ法王レオ三世が、フランク王国のカール大帝をローマ皇帝に戴冠する。

カール大帝死後フランク王国が三つに分裂、フランス、ドイツ、イタリアの元になる。三国はそれぞれさらに分裂を繰り返すが、962 年、ドイツを統一したオットー一世がイタリア遠征を行い、イタリア王位とローマ皇帝位をドイツに結びつける。これが神聖ローマ帝国の始まりである。

## ②経済的背景

古代末期以来、私領に建てられた聖堂（私有教会）や修道院が増えていったが、その種の聖堂の聖職者あるいは修道院長を選ぶ権利（叙任権）は土地の領主が持っていた。また、俗権が強大化していくと、その地域の司教の選出に対しても影響力を及ぼすようになっていった。これは少なからぬ教会財産の管理権を握ることと直結していたので世俗権力にとっても重要であった。中世に入ると、教皇権が伸張する中でこの叙任権をめぐる争いが頻発するようになっていった。

## ③司教の叙任権をめぐる

特に神聖ローマ帝国内では皇帝が司教たちの任命権を握って影響力を強くしていくことで、教皇選出においてまで影響力を持つに至った。しかし、俗権による叙任権のコントロールは聖職売買（シモニア）や聖職者の墮落という事態を招く一因ともなった。

10 世紀に創立されたクリュニー修道院の俗権からの影響力を否定した改革運動や俗権による叙任権を否定した教皇レオ 9 世、聖職者の綱紀粛正をはかったグレゴリウス 7 世による教会改革は教会に叙任権を取り戻そうという流れを生んでいった。ここに至って皇帝と教皇の間で叙任権をめぐる争いが行われるようになった。

### (2) カノッサの屈辱

教皇グレゴリウス 7 世は、教会改革の一環として皇帝・国王などが行なう司教の叙任を、教会法にもとり、教会を不敗させる根源であるとして、禁止した(1053)。

司教叙任権は国王のもっとも重要な伝統的権利だったので、ドイツ国王であり神聖ローマ皇帝であるハインリヒ 4 世は反対し、ドイツ司教会議に命じて教皇の廃位を決議させた(1076)。→ベッテンソン p162

教皇はこれに対して、ハインリヒ 4 世を破門し、臣下たちの彼に対する忠誠義務を解除した(→p164)。封建諸侯たちもまた、教皇の要請にこたえて国王に背き、一年以内に破門が解除されない場合は国王を廃位すると決議した。ドイツ国内の封建領主たちの中には、中央集権化を図る国王に対する不満があったのである。グレゴリウス 7 世はそこにつけこんだ。

そこで 1076 年の暮れ、ドイツ国王ハインリヒ 4 世(1056-1106)は、その家族をわずかな従者をともなっただけで、厳冬のアルプス、モン・スニ峠をこえてイタリアに入り、教皇グレゴリウス 7 世のいるカノッサ城に赴き三日三晩、はだしで雪の中に立ちつづけて破門の許しを乞うた。

赦しを乞われれば許さざるを得ず、教皇グレゴリウス 7 世は国王の破門を解く。するともはや、ドイツ国内の反対派を倒し、今度は教皇をローマのアンジェロ城に囲む。今回は教皇支持派がドイツ国内から掃討されていたので、教皇による再度の破門はすぐには機能せず、脱出するもののサレルノで客死した。しかし、その後、ドイツ国内にハインリヒ 4 世に対する反対派が起こり、国王は最後には子にも背かれて失意のうちに死ぬ。

### (3) ヴォルムス協約(1122年)とヨーロッパの確立 →ベッテンソン p 172

幾度か皇帝側と教皇側の交渉が設けられたものの、両者の間での微妙な駆け引きが続いた。しかし、ハインリヒ 4 世の後を継いだ[ハインリヒ 5 世](#)は、ドイツ内での勢力基盤が安定しなかったこともあり、この叙任権闘争の決着を急いだ。最終的には、[1122年](#)に結ばれた[ヴォルムス協約](#)において、聖職叙任権は教皇が有するが、教会の土地、財産などの世俗的な権利は王が受封するという妥協が成立し、一応の解決へと至った。

堀米によると、

「この協約の骨子は、教会権限を俗権と教権とにわけ、教会領とこれに付属する権利を含む前者を皇帝が、司教の聖職的権限である後者を教会がにぎるということで、「神のもの」と「皇帝のもの」をわかったのである。司教は教会法にのっとり司教教会参事会によって選ばれ、ドイツの場合は、まず皇帝が、選挙された聖職者に俗権を封与し、その後、管区大司教の手により司教に叙任される。イタリアの場合は、その逆に、被選挙者は、まず管区大司教の叙任をうけ、皇帝の俗権封与がこれにつづく。こう区別する意味は、選挙されても叙任式をへないものには、事情により俗権封世を留保することができるので、皇帝はドイツ国内の司教に関しては、実質的にその任命を拒否できるわけだ。此れに反し、いったん叙任されたものはすでに司教であり、これに俗権封世を拒むことはできない。つまりイタリアでは教会が完全に司教叙任権を掌握したことになる。」

「しかしヴォルムスの協約には、これまでの皇帝権の本質を根本から変えた、もうひとつの条項が含まれていた。それは皇帝がこれまでとりおこなってきた『指輪と司教杖』による司教叙任権の放棄である。指輪と司教杖は司教の司牧権をあらわす象徴であり、その放棄は皇帝の精神的權威の放棄なのである。皇帝は今後も法王のほどこす塗油の秘蹟により、一面聖職者の人格をもつ精神的權威でありつづける。しかし皇帝は今後もはや教会の

上にたつ權威たることをやめるのである。

こうしてオットー一世によって復興されたシャルルマーニュの皇帝権は大きく変質する。それはシャルルマーニュによって西方に再生させられたコンスタンティヌス大帝の皇帝権の終焉なのである。・・・東ローマ的皇帝法王主義は、ついにヨーロッパに根付かなかったのである。ヨーロッパの成立にあたって法王権が執拗に追求した、この新世界の支配に関する主導権への要求は、ここに実を結んだ。ヨーロッパは今後同等の立場にたつ皇帝権と法王権を二つの軸として動いて行くことになる。これをヨーロッパの確立とわたしはなづけるのである。」（堀米下 p p 20-22）

## XIX. 十字軍

序 2003年イラク戦争で、ブッシュ大統領が「クルセード」ということばを使ったことが諸国から非難的となった。ブッシュはこの用語によって、欧米キリスト教諸国民を巻き込もうと考えたのであろうが、クルセードということばでその気になるのは無教養な米国保守派層くらいのもので、イスラム諸国にとっては十字軍とは凶暴な侵略者集団にすぎなかったことをイスラム圏の人々はもとより、欧米の知識層も認識していたのである。

中世の年代記作者は、十字軍を中世騎士の華麗なるロマンというイメージで描いた。美しいよろいかぶとに身を固め、色とりどりの旗指物を翻して駿馬にうちまがり、はるかパレスチナの戦場を疾駆する騎士たちが、群がるイスラム教徒の大群を打ち破ってゆくという絵巻物として。そこに登場する聖地巡礼者たちは、王侯・貴族の戦士たち、無名の騎士、修道騎士、女性や子どもたちであり、対するマホメット教の輩は多くは悪逆非道であるが中にはサラディンのような敵ながら天晴れな武将もいるという具合。

ブッシュ大統領にとって、十字軍というのはこの種の正義の戦いの勇猛な英雄・騎士たちの物語というものだったのだろう。西部開拓の騎兵隊たちによるインディアン虐殺がかつては、英雄的な行為としてハリウッドで描かれていたのと同じである。福音派キリスト教会は、その歴史認識において米国福音派の無知の影響を受けて著しく遅れていることに注意すべきである。ピリー・グラハム・クルセードとか、本田公慈クルセード、キャンパス・クルセードという名称を平気で使う無神経さ。

十字軍（ラテン語 croisade）とは、一般に中世に西ヨーロッパのキリスト教諸国が、聖地エルサレムをイスラム教諸国から奪還することを目的に派遣した遠征軍のことと言われる。1096年から約200年間に渡って行われた。当時の西欧キリスト教国側から見ればその戦闘は聖戦とされたが、イスラム諸国や東方正教会諸国に攻め込んだ侵略軍である。

### 1. 社会的・経済的・宗教的背景——大変動の世紀

(1) 気候の温暖化と農業生産力向上と人口増加(中世的秩序崩壊図解参照)

1045年ごろについて年代記作者は次のように描写する。「不吉な死の抱擁は、高貴な人と庶民の別なく、最下層の人々まで多数をむさぼり食い、・・・全世界のほとんどすべての人々

がぶどう酒と小麦の不足による飢えに耐えていた。」(ラルウ・グラベール)。11世紀前半まではヨーロッパは雨量が極度の多く、その上、寒かった。人口については、極度の過疎状態で西ヨーロッパの人口密度は1平方キロメートルあたり2人ないし3人にすぎなかった。

しかし、11世紀後半から気候が温暖化し、かつ、農業革命が起こり、大開墾が行なわれるようになった。中世の農業革命とは蹄鉄の使用、農耕馬の使用、有輪重犁、三圃制農法、水車の普及である。大開墾と呼ばれる善ヨーロッパでの耕地拡張事業のピークは12世紀末。生産性が著しく向上し、食糧がたくさん供給されるようになった。

結果、出産率が高まり、乳幼児や老人の死亡率が下がり、かつて過疎状態だった西ヨーロッパの人口は増加する。人口増加と耕地の拡大は循環し、経済的繁栄をもたらす。12世紀の武勲詩「出家のギョーム」の一節

「今日ほど多数の人々が大地に満ち、かくもよく大地が耕されたことはない。かほど豊かな領地を、かくも多数の城を、はたまた裕福な都を、この地上に見た者はない。」

## (2) 社会的身分の流動化

### ①農民

食糧が豊かになり人口が増加すると、社会的身分の流動化が起こる。すなわち、地域ごとの自給自足で精一杯だった状態が、食糧に余剰ができると、それを他の地域に売ろうとする目端の利く人々つまり商人層が出現し、彼らは富を得て都市を形成し、都市の富裕層を形成する。中世にはいりイスラム進出で地中海貿易は絶えて久しく、寒冷化でヨーロッパは食糧不足で内陸の商業も絶えていたが、温暖化・食糧増産・人口増加によって商業が復興し、都市が形成される。そしてこれは後に大学の出現をもたらす。

都市ができると農村からは都市に成功を夢見て出てくる人々が生じる。出稼ぎ・出世主義の空気が出てくる。むろん彼らのほとんどは望んだような富を都市で得ることはできず、貧困な労働者層となる。ウルバヌス 2 世の演説原稿そのものは残っていないが、研究者がまとめたものには、彼らに貧しい西ヨーロッパを捨てて「乳と蜜の流れる地」を目指してゆけという一攫千金を夢見させる文言が含まれている。「あなた方がいま住んでいる土地はけっして広くない。十分肥えてもいない。そのため人々はたがいに争い、たがいに傷ついているのではないか。したがって、あなた方は隣人のなかから出かけようとする者をとめてはならない。彼らを聖墓への道行きに旅立たせようではないか。乳と蜜の流れる国は、神があなたがたに与えたもうた土地である。」

「11, 12世紀の西ヨーロッパ社会には、単調な日常生活から脱け出そうとする衝動や、お祭り騒ぎにうかれ出そうとする欲求がみなぎっていた。」(橋口 p60)

十字軍に参加した人々の多くは、時代は隔たるが、成功を夢見てヨーロッパから新大陸を目指した人々、あるいは、幌馬車に乗って西部を目指した人々、日本なら戦前に成功を夢見てふるさとを捨てて満州に渡った人々、戦後成功を夢見て南米に渡った人々と同じような動機をも持っていたのである。

### ②領主・貴族階級は

また、貴族(領主)階級においても、幼児の死亡率が下がると、子どもたちが増える。ゲルマン的伝統では遺産は分割され相続されるので、領主たちの領地は細分化した。そして領土のない貴族を領主は食べさせるために、領土(庄園)をめぐるこぜりあいの戦争が頻発するいわば戦国時代となっていた。

また、分割相続も限界に達すると、相続にあぶれてしまった騎士たちが力と時間をもてあます。西欧には戦争エネルギーが充満していた。次男坊以下の貧乏貴族たちも、乳と蜜の流れる地での一攫千金を夢見る。

### (3) 宗教的動因——巡礼・免償・殉教者

しかし、決して経済的理由だけで十字軍を理解できるわけではない。そこには、熱烈な宗教的な動機があった。

#### ①免償・殉教・聖遺物蒐集を求める巡礼

当時十字軍という呼び名は無く、単に「十字をつけた者」と呼ばれた。「十字軍(クルセーダー)」という言葉が最初にあらわれるのは第1回十字軍の百年ほどあとである。彼らは、聖地を奪回する、イスラム教徒と戦うという意識以外に、免償(罪の償いの免除)を求めてエルサレムへ向かう「巡礼者」という意識も強かった。第2回十字軍のルイ7世はその典型である。きまじめな彼は、奔放な妻との不和に良心の呵責を覚えつづけ、『十字架を取る』事にしたといわれる。

もともと十字軍は一部の騎士に対する呼びかけであったが、やがて膨大な人数を動員して移民活動のような状況を呈することになった。このことからわかるのは十字軍への呼びかけというのは当時のキリスト教徒にとってとても魅力のある言葉だったということである。

戦闘に参加したものに免償が与えられる、あるいは戦闘で死んだものが殉教者となりうるとするのは十字軍運動の中で初めて生まれた概念であった。そして十字軍に参加することで与えられる免償は、エルサレムへ詣でるといふ巡礼者としての免償とキリスト教戦士として戦うという免償の二重の意味があるため、生き残っても死んでもどちらにせよ免償を受けられるというのが魅力であった。また、下級騎士たちは封建制度の息苦しさから逃れようとし、農民や職人たちも退屈で困難な日常から逃れたいという気持ちをもっていた。このように宗教的なものから、世俗的なもの、心理的なものまでさまざまな人々がさまざまな動機によって十字軍運動に身を投じたのである。

聖地巡礼という習慣は、もともとヨーロッパの敬虔な人々にとっての大切なロマン、夢であった。また、聖遺物蒐集という風習があった。コンスタンティヌス時代から流行し始め、キリストゆかりの遺品や道具類、聖母マリア、使徒や諸成人にまつわる聖遺物への熱烈な愛好の風が広まっていた。聖遺物蒐集というたのしみを予測にいれずに十字軍に参加した人はひとりもいないだろうと言われる(橋口 p 9)。

#### ②出エジプトと十字架への道行き

旧約聖書の引用。年代記記者たちは、十字軍遠征記のいたるところに旧約聖書を引用す

る。「十字軍時代の人々は旧約の世界に共鳴し、その登場人物の心境に直感的なシンパシーをいただいている。したがって、かれらの東方巡礼は中世のエクソダスでなければならない。そうだとすれば、このエクソダスには全キリスト教徒が参加しなければならないであろう。」(橋口 p35)彼らのエルサレム城でのイスラム・ユダヤ教徒たちの大虐殺は、旧約聖書ヨシュア記に見る聖絶を思想的な背景としていると理解すべきであろう。

旧約聖書をいかに受容するかという、重要な課題がここにある。

また、十字軍における宗教的情念は、十字架を背負ってキリストの十字架の苦悩を追体験するという面もあった。実際、聖地エルサレムへの旅は苦難に満ちた試練の連続であった。自ら、キリストの受難を味わうという、そのような敬虔・霊性も十字軍の一面。

### ③ローマ教皇の権威

だがどんなにこのような背景があったとして、ヨーロッパ全体を巻き込む軍隊と民衆をエルサレムに送ったのは、なんと言ってもローマ教皇の絶大な影響力である。カノッサの屈辱(1077)に見るように、この時代、教皇の権力は諸王国・領主たちも動かすほどに絶大なものとなっていた。第一回十字軍の成功によって、その威光はさらに強化される。

## 2 十字軍遠征までの経緯

### (1) 東ローマ皇帝からの依頼と教皇ウルバヌス二世のねらい

トルコ人のイスラム王朝であるセルジューク朝にアナトリア半島を占領された東ローマ帝国の皇帝アレクシオス 1 世 (在位 1081 年-1118 年) が、ローマ教皇ウルバヌス 2 世に救援を依頼した (1095 年)。このとき、ウルバヌスは大義名分として異教徒イスラム教国からの聖地エルサレムの奪還を訴えた。しかし、この時皇帝アレクシオスが要請したのは東ローマ帝国への傭兵の提供であり、十字軍のような巡礼者たちを含む軍団ではなかった。

ウルバヌス 2 世は、これを機会として、独自の巡礼者軍団を送り、イスラムを撃退し、東西教会の統一、もっとはっきりいえば東方教会をローマの支配下に置こうとした。1095 年クレルモン教会会議が開かれる。この会議ではシモニア禁止、聖職独身制奨励など教会改革会議の内容が語られたが、もう一つ注目すべきは、「教会のために異教徒と戦う者が、その行動中にこの世の生命を終えたときは罪のゆるしにあずかることができる」という赦免が確認されていることである。つまり、いわゆる「聖戦」の宣言である。

### (2) ウルバヌス二世のクレルモンでの演説

会議の終わり 1095 年 11 月 28 日に、広場に集まったフランスの数千人の大聴衆に向かってエルサレム奪回活動に参加するよう呼びかけた。彼はフランス人たちに対して聖地をイスラム教徒の手から奪回しようと呼びかけ、「乳と蜜の流れる土地カナン」という聖書由来の表現をひいて軍隊の派遣を訴えた。彼がフランス人に、神のために武器をとるようにと呼びかけると、人々は"Dieu le veult!" (神の御心のままに!) と答えた。

引用。橋口 p43

「最愛の同胞諸君。至高者たる法王にして、神に許されて全世界の最高聖職につくわたしウルバヌスは、この地方での神のしもべたちなるあなた方にとって、差し迫った重大な秋に、神のおさとしを伝える死者として、ここにやってきたのである。

おお、神の子らよ。あなた方はすでに同胞間の平和を保つこと、聖なる教会にそなわる諸権利を忠実に擁護することを、これまでもまして誠実に神に約束したが、その上新たに・・・あなた方が奮起すべき緊急な任務が生じたのである。・・・すなわち、あなた方は東方に住む同胞に至急援軍を送らなければならないということである。かれらはあなた方の援助を必要としており、かつしばしばそれを懇請しているのである。

その理由はすでにあなた方の多くがご承知のように、ペルシアの住民なるトルコ人が彼らを攻撃し、またローマ領奥深く『聖グレゴリウスの腕』と呼ばれている地中海沿岸部まで進出したからである。キリスト教国をつぎつぎに占領したかれらは、すでに多くの戦闘で七たびもキリスト教徒を破り、多くの住民を殺しあるいは捕らえ、教会堂を破壊しつつ神の王国を荒らしまわっているのである。これ以上かれらの行為を続けさせるなら、かれらはもっと大々的に神の忠実な民を征服するであろう。

されば・・・神はキリストの旗手なるあなた方に、騎士と歩卒をえらばず貧富を問わず、あらゆる階層の男たちを立ち上がらせるよう、そしてわたしたちの土地からあの忌まわしい民族を根絶やしにするよう・・・繰り返し勧告しておられるのである」（フーシェを橋口 p43 - 44 より孫引き）

この演説を数千人の人々がクレルモン市外壁の野天の広場で聞いた。

ウルバヌスは十字軍への参加をキリスト者の義務だと説いた。

「あなた方には異教徒を相手に戦い、キリストの聖墓を汚辱から救い出す義務がある。もし、郷里に残す家族のことが気にかかる者があれば、福音書の『わたしよりも父や母を愛する人は私にふさわしくなく、私よりも息子や娘を愛する人も私にふさわしくない』という一節を思い出すべきである」

また、

「あなた方がいま住んでいる土地はけっして広くない。十分肥えてもいない。そのため人々は互いに争い、たがいに傷ついているではないか。したがって、あなた方は隣人の中から出かけようとする者をとめてはならない。かれらを聖墓への道行きに旅立たせようではないか。『乳と蜜の流れる国』は、神があなたがたにあたえたもうた土地である。・・・かの地エルサレムこそ世界の中心にして、天の栄光の王国である！」 p47

このように教皇がほえたとき、「多数の聴衆が『神の御旨だ』とさけび、教皇はこれをうけてしばし眼を天に向け、神にむかって感謝の祈りをささげながら、手を上げて群衆のざわめきを静止、『私の名によって二人三人が集まるところには、私もまたそこに居る』という主のみことばをととなえ、さて『今こそ、あなた方の間にも主がまします・・・されば、いまあなた方のあげた叫び声は主の与えたもうみことばである。これを遠征の合言葉としよう』とこたえられた。」

これこそ十字軍の直接的な動因だった。いろいろな社会的背景があったにせよ、ウルバヌス二世のこの演説がなければ十字軍は起こらなかった。ウルバヌス二世はグレゴリウス改革の協力者であり、1088年には彼自身が教皇となった。やがて1095年には対立教皇に打ち勝ってクレルモン会議の行なわれた1095年までには名実ともにローマ教会のかしらとしての権威を確立していた。

### 3 民衆の十字軍運動

#### (1) 民衆十字軍

ウルバヌス2世の計画では軍隊の出発は [1096年8月15日](#) を期していた。しかしそれより数ヶ月前に教皇の計画に入っていなかったグループ、すなわち農民たちや貧しい下級騎士たちが勝手に集まってエルサレム目指して出発してしまった。彼らはアミアンの隠者ピエールを指導者とあおいで聖地を目指した。このグループはなんと(資料によってずいぶんちがうが)2万人ないし10万人という規模に膨れ上がっていた。しかし、その多くは戦闘技術などまったく知らない人々で、子供や女性も多く含まれていた。これを「民衆十字軍」という。十字軍とはいっても彼らの多くは巡礼というくらいの気持ちで参加していたのが実情であった。

民衆十字軍は人数のみ多く、統制がとれていなかった。聖地にたどり着く前のヨーロッパの国を移動している時点でトラブルが頻発する。彼らはそもそもエルサレムがどこにあるかを知らず、まだヨーロッパの町町をたずねるたびに「ここはエルサレムかね？」と問うたという。また、彼らは途中の町々で食料や水、各種の物資を得ようと、無料ではなくとも、低価格で必需品を購入できるものと考えていたが、これが原因となって民衆十字軍と滞在先の人々はしばしばいさかいを起こした。

一部のものがハンガリー領内で略奪行動を行ったため、ハンガリー兵の攻撃を受けた。同じことが[ブルガリア](#)やビザンティン帝国領内でも繰り返された。これによって参加者の四分の一にもものぼる人々が殺害された。生き残った人々は8月に[コンスタンティノープル](#)にたどりついた。しかし、突如あらわれた大人数の外国人集団に、コンスタンティノープルの市民との間の緊張が高まり、皇帝アレクシオスは民衆十字軍の一行を首都から追い出して小アジアへ送り出した。

小アジアを移動は困難を極める。民衆十字軍はまもなくセルジューク朝領内に入ってギリシア人の農村を略奪しながら首都[ニカイア](#)を目指したがセルジューク朝軍精鋭の[テュルク](#)系騎兵部隊の包囲と攻撃を受けて、飢えと乾きに苦しみなすすべもなくほとんどが殺害され、女子供は奴隷として売られてしまった。

#### (2) 反ユダヤ主義との結びつき

十字軍運動の盛り上がりは反ユダヤ主義を高まらせた。ヨーロッパでは古代以来、反ユダヤ人感情が存在していたが、十字軍運動が起こった時期に初めてユダヤ人共同体に対する組織的な暴力行為が行われた。エルサレムまで行かずとも、ここにキリストを殺した異民族がいるのではないかということである。[1096年](#)の夏、1万人のドイツ人たちはライン川

周辺のヴォルムスやマインツでユダヤ人の虐殺を行い、ケルンでも虐殺を行なった。彼らはユダヤ人にキリスト教に改宗するか、ユダヤ教徒のまま死ぬかの二者択一を迫った。ユダヤ人の多くは改宗の屈辱よりは誇りある死を選んだ。

イスラムは「コーランか？税金か？」と問うたが、十字軍は「聖書か？死か？」と問うたのである。

ここで気をつけなければならないのは、指導者や聖職者たちがユダヤ人虐殺をあおったようにとらえるのは誤りだということである。実際には町や村の指導者たちはユダヤ人をかくまい、聖職者はユダヤ人への迫害を禁止しており、迫害の実行は民衆レベルで行われた。教皇庁もヨーロッパに住むユダヤ人やイスラム教徒への迫害を再三禁止しているが、ユダヤ人への迫害は十字軍運動の盛り上がるたびに繰り返されることになる。

#### 4. 第一回十字軍（諸侯による）1096年

##### （1）コンスタンティノーブルで冷遇される

十字軍運動の盛り上がりの中で、民衆十字軍が壊滅し、ユダヤ人への迫害が行われたが、あとに続いたのは1096年に出発した貴族や諸侯たちによる軍事行動である。これが十字軍の本隊であり、西欧各地の多数の諸侯が集まって聖地を目指した。諸侯たちの中で特に主導的な役割をはたすことになったのは、教皇使節であったアデマール司教、南フランスの諸侯のまとめ役だったトゥールーズ伯レーモン4世、南イタリアのノルマン人のまとめ役をつとめたボエモンの三人であった。ほかにもそうそうたる顔ぶれがそろっていた。

諸侯と騎士からなる十字軍本隊は計画通りに1096年8月にヨーロッパを各自出発し、12月にコンスタンティノーブルの城壁外に集結した。この本隊にも騎士だけでなく、必要な装備にも事欠く多くの一般市民が付きしたがっていた。民衆十字軍の壊滅から生還した隠者ピエールも民衆十字軍の生き残りの人々と共にこの本隊に合流した。その数は、騎士4200ないし4500、歩卒3万とも(橋口 p74)とも、6万とも言われる(p84)。

コンスタンティノーブルにたどりついた十字軍は、すでに食料が乏しかったが、呼びかけ人の皇帝アレクシオス1世から食料が提供されるものと考えていた。しかしアレクシオス1世は民衆十字軍を見ていたことや、軍勢の中にかつての宿敵ノルマン人のボエモンがいたことから猜疑心を抱き、指導者たちに向かって、食料を提供する代わりに、自分に臣下として忠誠の誓いを立て、さらに占領した土地はすべてビザンティン帝国に引き渡すことを誓うよう求めた。食料にとぼしかった指導者たちに、これを断る選択肢は残されていなかった。

##### （2）ニカイア攻城戦でビザンティン不信が決定的に

アレクシオスから小アジアを案内する部隊を提供され、十字軍将兵は最初の目標としていた都市ニカイアにたどりついた。十字軍は協議の上でニカイアの攻囲を開始。力攻めを避け、水源を封鎖して兵糧攻めを行う。クルチ・アルスラーン1世はアナトリア高原のアンカラ近郊マラティヤで、当地のセルジューク系の王と戦っていたが、首都を包囲してい

ると聞きあわてて引き返し戦うものの損害を出し、これ以上この強力な軍団と戦えばルーム・セルジューク朝自体が危機に陥ると考え、城内に立て籠もるギリシア人住民やテュルク系守備隊にビザンティン帝国への降伏を薦め、退却することを決めた。この状況を伝え聞いたアレクシオス 1 世は、十字軍がニカイアを陥落させた場合は略奪を行うに違いないと考え、ひそかに使者を派遣してニカイアの指導者に降伏するよう交渉を行った。守備隊は説得され、住民らは夜ひそかにビザンティン兵を城に入れた。

1097年7月19日の朝、街を囲んでいた十字軍将兵は目覚めて仰天した。城壁にビザンティン帝国の旗がひるがえっていたからである。それだけでなくアレクシオスの指示で十字軍将兵は城内に入ることが許されなかった。十字軍将兵たちがアレクシオスに裏切られる形になったこの事件は十字軍とビザンティン帝国の関係に修復できないほどの亀裂をもたらし、お互いの不信感が決定的になったのである。

西側の年代記作者たちは、ギリシャ人の枕詞に「不実な」「卑怯な」「邪悪な」「裏切り者の」とつけるほどに偏見と憎しみを表現していた。

### (3) エデッサ伯国成立

十字軍はニカイアを離れ、エルサレムを目指した。ビザンティン帝国軍は十字軍の道案内をしながら彼らの助けを借りて小アジアの西半分の領土をセルジュークから回復していた。小アジア進軍は十字軍将兵にとって苦痛に満ちたものとなった。夏の暑さと水や食料の不足から多くの兵がたおれ、軍馬も失った。彼らはアナトリア横断に百日もかけてしまった。小アジアで十字軍は略奪によって物資を得ることが多かった。十字軍全体の統率ができるほど強力な指導者がいなかったが、全体の中ではレーモン・ド・サン・ジルと司教アデマールが指導者的地位を認められていた。

キリキア地方を通過したところで、ブルゴーニュ伯ボードワンは手勢を率いて十字軍と別れ、ユーフラテス川沿いを北に進んで 1098年、エデッサ（現在のトルコ領ウルファ）にたどりついたボードワンは統治者ソロスに自らを養子、後継者と認めさせることに成功した。市民の暴動によってソロスが命を落とすと、ボードワンはエデッサの統治者の座に着き、ここに最初の十字軍国家であるエデッサ伯国が成立した。

### (4) アンティオキア包囲・アンティオキア公国設立

十字軍本隊は 1097年 10月、コンスタンティノーブルとエルサレムの中間点にあたる都市アンティオキアに到着し、これを包囲した。アンティオキアは難攻不落の都市であった。アンティオキアの周囲を全て包囲できるほどの軍勢がなかったため、都市に対する補給を許すことになり、包囲戦は八ヶ月の長きに及んだ。十字軍将兵が地震と大雨におびえ、飢餓に苦しみ人肉食まで行う中で、ボエモンはアンティオキアを自らのものにしたいという意志を公言するようになった。

十字軍将兵は、7月28日、敵が戦わず退却するところを十字軍は逃さず、撃破し潰走させ大勝利を収めた。シリアに十字軍を相手にできるムスリム勢力はもはや存在しなかった。また、エデッサとアンティオキアの占領で十字軍の領土欲が満たされ、宗教的情熱をもつ

諸侯や大多数の庶民・騎士をのぞき、諸侯らの一部がエルサレムへの関心を見失い始めた。

ここにきてボエモンは、皇帝アレクシオスが十字軍部隊に何の援助もしないので、占領した都市はすべて皇帝に引き渡すという誓いは無効であると主張しはじめた。十字軍の指導者たちは紛糾し、進軍はストップした。さらにそこで疫病の流行が軍勢を襲い、多くの兵や馬が命を落とした。疫病の犠牲者の中には教皇使節アデマールも含まれていた。軍勢は指揮系統を失ってシリアで行き場を失い、住民たちも食料の提供を拒んだ。[1098年](#)の末には、シリアの都市[マアツラ](#)を陥落させた後、住民を殺戮し、犠牲者を鍋で煮たり串で焼いたりする人肉食事件が起こる。[1099年](#)初頭になってようやく指揮系統が回復し、軍勢はエルサレムに向かった。ボエモンは[アンティオキア公国](#)建国を宣言、アンティオキア公ボエモン1世となる。

#### (5) エルサレム攻略とエルサレム王国成立

中近東地域に入った十字軍はエルサレムを目指して地中海沿岸を南下した。組織的な抵抗はほとんどなかった。十字軍の通過した町や村の荒廃を聞き、セルジュークやアラブの地方有力者たちは十字軍に宝物・食料・馬など物資や道案内を提供して無難に通過させることを選んだからであった。

一方エジプトのファーティマ朝は動揺していた。アンティオキア攻略中の十字軍に使者を送り、シリアの南北分割統治を提案したものの、彼らはいくまでエルサレムの地位にこだわり、十字軍との同盟も不可侵条約も成り立たなかった。その後の交渉も十字軍側はすべてはね除け、エルサレムを軍で奪取することを宣言し、ついにファーティマ朝の北限境界を越えた。こうして[1099年5月7日](#)、軍勢はいよいよ目的地のエルサレム郊外に到着した。

アンティオキア攻略と同様に十字軍はエルサレムの包囲を行い、攻城やぐらを建設し城壁を乗り越えようとした。しかしファーティマ朝の司令官イフティハール・アル・ダウラは石油や硫黄を使った攻撃で、兵を満載した攻城やぐらに火を放ち城を守り、一方十字軍側は満足な食料の補給もなかったため、死者の数は増える一方となった。しかもファーティマ朝本国からムスリム軍援軍が迫っており、不十分な軍勢でエルサレム攻略は不可能かと思われた。そのとき従軍していたペトルス・デジデリウスという司祭が、断食したうえ裸足で九日間エルサレムの周りを回ればエルサレムの城壁は崩壊するという幻を見たと言張しはじめた。旧約聖書の[エリコ](#)の陥落の故事をふまえた発言であった。[1099年7月8日](#)、デジデリウスの後に従い、将兵たちはエルサレムの周りを回り始めた。七日目の[7月15日](#)、一同は城壁の弱点を発見してそこを打ち壊して城内に入ることに成功した。

一方、城内に入った軍勢は一週間にわたって[エルサレム市民の略奪と殺戮](#)を行い、イスラム教徒、ユダヤ教徒のみならず東方典礼のキリスト教徒まで殺害した。ユダヤ教徒はシナゴグに集まったが、十字軍は入り口をふさぎ火を放って焼き殺した。多くのイスラム教徒は[ソロモン王](#)の神殿跡に逃れたが、十字軍の軍勢はそのほとんどを殺害した。虐殺された数は七万人以上とされる。虐殺に伴ってイスラム教徒、ユダヤ教徒、東方正教徒の女性に対する強姦と財宝の略奪も行われた。狂信的なキリスト教徒である十字軍兵士達はこ

これらの蛮行を行った。

市民の殺害が一段落すると、軍勢の指導者となっていたゴドフロワは「アドヴォカトゥス・サンクティ・セプルクリ」（聖墳墓の守護者）に任ぜられた。これはゴドフロワが、王であるキリストが命を落とした場所の王になることを拒んだからである。ギリシア、アルメニア、コプトなどの東方正教会各派のエルサレム総主教たちは追放され、カトリックの司教が立てられた。

ゴドフロワはこのあと、エルサレムを拠点にパレスチナやシリア各地を襲い、1100年にエルサレムでこの世を去った。弟のエデッサ伯ボードワンが「エルサレム王」を名乗った。ここに十字軍国家「エルサレム王国」が誕生する。

## 5. その後の十字軍

**第2回十字軍（1147年～1148年）「空虚な理想」**。しばらくの間、中東において十字軍国家などキリスト教徒と、群小の都市からなるイスラム教徒が共存する状態が続いていたが、イスラム教徒が盛り返し、エデッサ伯国を占領したことでヨーロッパで危機感が募り、教皇エウゲニウス 3世が呼びかけて結成された。当時の名説教家クレルヴォーのベルナルドゥスが教皇の頼みで各地で勧誘を行い、フランス王ルイ 7世と神聖ローマ皇帝コンラート 3世の2人を指導者に、多くの従軍者が集まったが全体として統制がとれず、大きな戦果を挙げることなく小アジアなどでムスリム軍に敗北した。パレスチナにたどりついた軍勢もダマスカス攻撃に失敗し、フランス王らはほうほうのていで撤退せざるを得なかった。

ベルナルドゥスは「十字軍は人を殺すためではなく、キリストのために死を受け入れて殺されるために行くのである。十字軍の思想は政治によって圧倒されようとしているが、その性格は福音的でなければならない。」（橋口 p139）というが、武装した十字軍がどうしてこのような理想を達成できようか。

**第3回十字軍（1189年～1192年）「異教徒の寛容」・・・エルサレムがサラディンに奪還される 1187年に「イスラムの英雄」サラディンにより、およそ90年ぶりにエルサレムがイスラム側に占領、奪還された。**

教皇グレゴリウス 8世は聖地再奪還のための十字軍を呼びかけ、イングランドの獅子心王リチャード 1世、フランス王フィリップ 2世、神聖ローマ皇帝フリードリヒ 1世が参加した。フリードリヒ 1世は1190年にキリキアで川を渡ろうとしたところ、落馬し、鎧が重くて溺死したとも。イングランドとフランスの十字軍が1191年にアッコを奪還した。その後フィリップ 2世は帰国し、リチャード 1世がサラディンと休戦協定を結んだことで聖地エルサレムの奪還は失敗に終わった。しかし、エルサレム巡礼の自由は保障された。

サラディンは聖地奪回したときも、虐殺を働かず、巡礼の自由も認めた。

### 第4回十字軍「大脱線」・・・コンスタンティノーブル征服→ラテン帝国建国

1202年～1204年。ローマ教皇インノケンティウス 3世の呼びかけにより実施。エルサ

レムではなくイスラムの本拠地エジプト攻略を目ざす。しかし十字軍の輸送を請け負ったヴェネツィアの意向を受けてハンガリーのザラを攻略、同じカトリック国を攻撃したことで教皇から破門される。

ついで東ローマ帝国の首都コンスタンティノポリスを征服、この際十字軍側によるコンスタンティノポリス市民の虐殺や掠奪が行われた。フランドル伯ボードゥアンが皇帝になりラテン帝国を建国。やむなく教皇は追認し、さらにエルサレムを目指し遠征するよう要請するが実施されなかった。

東ローマ帝国はいったん断絶し、東ローマの皇族たちは旧東ローマ領の各地に亡命政権を樹立した（東ローマ帝国は57年後の1261年に復活）。

**第5回十字軍（1218年～1221年）。**エジプトを攻略するも失敗。

**第6回十字軍（1228年～1229年）。**『平和共存』

神聖ローマ皇帝フリードリヒ 2 世は、エジプト・アイユブ朝のスルタンアル・カーミルと、戦闘を交えることなく平和条約を締結。ブルクハルトは彼を「最初の近代人」と表現した。フリードリヒはエルサレムの統治権を手に入れる。1239年に休戦が失効し、マムルークがエルサレムを再占領した。1239年-1240年に、フランスの諸侯らが遠征したが、やはり戦闘は行わないまま帰還した。宗教の異なる民族の間に平和共存、聖地共有が可能であるということを示したわけである。

**第7回十字軍（1248年～1249年）。**

アル・カーミル死後、1244年にエルサレムがイスラム側に攻撃されて陥落、キリスト教徒2000人余りが殺された。1248年にフランスのルイ 9 世（聖王ルイ）が遠征するが、アイユブ朝のサーリフ（サラディン 2 世）に敗北して捕虜になり、莫大な賠償金を払って釈放される。

**第8回十字軍（1270年）。**

フランスのルイ 9 世が再度出兵。アフリカのチェニスを目指すが、途上で死去。

## 6. 十字軍の後代への影響

(1) 教皇の威信への影響

第1回十字軍は、エルサレム王国、アンティオキア公国、エデッサ伯国、トリポリ伯国の十字軍国家と呼ばれる国家群をパレスティナとシリアに成立させて、巡礼の保護と聖墳墓の守護という宗教的目的を達成し、教皇権は威信を高めた。

しかし、その後、十字軍が敗退して戦果が上がらないと、教皇の威信の低下という結果をもたらすことになっていった。

## (2) 地中海の交易再開とルネサンスの準備

十字軍国家の防衛やこれらの国々との交易で大きな役割を果たしたのはジェノヴァやヴェネツィアといった海洋都市国家である。これらイタリア諸都市は占領地との交易を盛んに行い、東西交易（レヴァント貿易）で大いに利益を得た。

十字軍は、東方の文物が西ヨーロッパに到来するきっかけともなり、これ以降盛んになる東西の流通は、後のルネサンスの時代を準備することにもなった。

## (3) 封建領主の弱体化

封建領主たちは、十字軍遠征に自ら出かけるために経済的な困窮に陥ったり、生命を落とした。領主不在という状況は、西ヨーロッパの政治的状況を不安定にした。また、十字軍の資金調達のためから教皇や君主が徴税制度を発達させ、西ヨーロッパの封建領主は、衰退した。中世崩壊の準備となる。

## (5) 東方教会とローマ・カトリックの溝が深まる

東方正教会とカトリックの和解が十字軍を唱えたカトリック教会指導者側の当初の動機のひとつだったが、両者の間がかえって十字軍により緊張した。両教会は、それまで教義上は分裂しつつも、名目の上では一体であり、互いの既存権益を尊重しつつ完全な決裂には至っていなかったが、十字軍が東方正教会のエルサレム総大司教を追放しカトリックの司教をおいたことで、かえって緊張が深まった。

## (6) 東ローマ帝国滅亡

ビザンティン帝国は、第一回十字軍によって十字軍諸国が設立されたことで、直接にイスラム諸国からの圧迫をうけることがなくなった。これによってアナトリア地方の支配権を大きく取り戻し、ふたたびとりあえず命脈を保つことができた。

しかし、コンスタンティノープルは第四回十字軍に滅ぼされ、その後 1261 年に復活したもののその打撃から立ち直れずに衰退し、1453 年の滅亡に至った。

(7) イスラム諸国は西洋諸国とキリスト教の蛮行に対して決定的に憎悪を抱くことになった。

## (8) 近現代への影響

十字軍はイスラムから見れば略奪者である。2003 年のイラク戦争において、アメリカのブッシュ大統領は、自軍を十字軍と表現したが、イスラム圏からの反発によって、すぐに撤回した。また、アラブ民族主義者や一部のイスラム教徒は、21 世紀の今日でも、イスラエルへの支援やイラク戦争など、中東に対する欧米のあらゆる関与を「十字軍」と呼んで糾弾している。

これは東方正教会から見ても同様であり、直接攻撃と略奪を受けた東ローマ帝国を始めとする東方正教会諸国の対西欧感情は、決定的に悪化した。これ以降何度か東西キリスト

教会再統一の試みがあったものの、正教徒の人々の強い反対と、交渉の間にも時代を経て教義の差が開いたことから実現することなく現代にまで至っている。更には十字軍と並行して西ヨーロッパでユダヤ人迫害が起こったため、ユダヤ人からも十字軍は忌避されている。

西欧においては、十字軍は西欧がはじめて団結して共通の神聖な目標に取り組んだ「聖戦」であり、その輝かしいイメージの影響力は後日まで使われた。後の北方や東方の異民族・異教徒に対する戦争ほか、植民地戦争などキリスト教圏を拡大する戦いは十字軍になぞらえられた。また異国への遠征や大きな戦争の際には、それが苦難に満ちていても、意義ある戦いとして「十字軍」になぞらえられた。

2000年には当時の**教皇ヨハネ・パウロ2世**が十字軍について謝罪した。

## 7. 教訓と課題

### (1) 戦争と旧約解釈

年代記作者は十字軍の戦いを旧約の出来事になぞらえて記し、また、当時の人々も旧約の出来事と十字軍とを重ね合わせて、この侵略戦争の正当化を図った。すなわち、十字軍の聖地への旅は出エジプトの民の旅と重ね合わせられ、エルサレム攻略はエリコ攻略と重ね合わせられる。そこでは当然、殺戮戦が聖戦として正当化された。

旧約時代、神はイスラエル国家を選び、彼らをたしかに神の警察や司法として用いた。しかし、新約時代においては、「ユダヤ人もギリシャ人もローマ人もない」。神の民は特定の国家や民族にかぎられない。だから特定の国家が神の警察や司法ではありえず、したがって聖戦などありえない。むしろ、主イエスは非戦・愛敵を唱えられた。古代教父たちも非戦の立場が基本であった。中世の好戦的なゲルマン的ヨーロッパに受容されたとき、福音が歪められたといわねばなるまい。

### (2) この世の権力と教会の問題、あるいは **civil religion** の問題

・・・超越性を失ったキリスト教は塩気をうしなった塩である。

教会が世俗の権力と結びついたとき、教会は塩気を失った塩になってしまった。とくに世俗権力とは、「剣の権能」(ローマ13章)であるゆえに、教会が暴力装置を持つことを意味する。御言葉の剣が、暴力装置を備えるということが、どれほど危険なことであるか。

教会が超越者である神からのメッセージを失い、この世に迎合するという問題は、与えられたを近代に敷衍すると、これは市民宗教の問題となる。市民宗教とは、そのときの社会を支配するエートスやイデオロギーと合致していて、それゆえに広く支持されている単純な宗教思想のことである。民族性や社会の利害と合致するので支持されているのであるが、聖書とは直接関係のないものである。J. J. ルソー『社会契約論』における理性の女神をあがめる市民宗教の創設は、それ。たとえば、米国人がしばしばいう、「われわれはクリスチャンである。だから資本主義者である。共産主義はサタンの教えである。」というのは、市民宗教の典型である。

### (3) 戦争と西欧型キリスト教の問題性

- ① 主イエスと新約聖書、そしてコンスタンティヌス以前は、非暴力・愛敵主義。
- ② コンスタンティヌス帝による公認とその後の国教化によって変質。  
教会が世俗権力と結ぶときに、義戦論が生まれた。ただし、アウグスティヌスの義戦論は制約の多いものだった。
- ③ 十字軍(12世紀—14世紀)に、白人による異教徒の有色人種殲滅という構図ができた。
- ④ 15世紀大航海時代には中南米先住民の殺戮。
- ⑤ 16世紀宗教改革でも戦争に関しては、義戦論の伝統のまま。
- ⑥ 17世紀ピューリタンが新大陸に渡って、先住民殺戮(1500万人が現在ではわずか30万人に)  
1899 - 1902年には米国はフィリピン人をスペイン・カトリックから解放すると称して、スペイン軍を撃退したが、その後、植民地支配を邪魔するフィリピン独立運動を弾圧してルソン島で60万人を殺戮した。  
20世紀 東京大空襲・原爆投下による無差別殺戮。  
ベトナム戦争では300万人の無差別殺戮。それを米教会は支持した。  
21世紀 アフガン戦争、イラク戦争

#### \*十字軍の罪に目を閉ざしてきた結果、同じ罪を繰り返してきた

「問題は過去を克服することではありません。さようなことができるわけではありません。後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまいりません。しかし過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。」(リチャード・フォン・ヴァイツゼッカー「荒野の四十年」)

十字軍(12世紀—14世紀)が、現代にいたる歴史におよぼした重大なことの一つは、<白人による異教徒の有色人種殲滅を聖書の聖戦として位置付ける構図>をつくってしまったことである。十字軍の悪逆非道の現実を認識せず美化したために、このあと西欧キリスト教社会はこの罪を繰り返すことになる。その一部を紹介する。

15世紀大航海時代にはコルテスはアステカ文明を、ピサロはインカ帝国を破壊し尽くし、異教徒である中南米先住民殺戮を行なった。これにはキリスト教への強制改宗が伴っていた。たとえばピサロはインカ帝国の国王アタルワパを逮捕し、彼を「反乱の罪で火あぶりの刑にする。ただしキリスト教徒に改宗するならば火あぶりの刑にはしないが。」と脅した。そしてアタルワパが改宗すると、絞首刑にした。

17世紀米大陸の新住民たちが、先住民殺戮をした。かつて1500万人いたネイティブ・アメリカンが現在ではわずか30万人になっている<sup>46</sup>。

<sup>46</sup>新渡戸稲造のアイヌ政策は米国のインディアン政策の輸入版。

1899 - 1902 年には米国はフィリピン人をスペイン・カトリックから解放すると称して、スペイン軍を撃退した。フィリピン現地にはスペイン統治時代からアギナルド将軍率いるフィリピン独立軍があり、アギナルドは大統領を称し、政府を組織し、閣僚や国会議員を選出しようとしていた。アギナルドが手本にしたのは米国独立の父ジェファソンの人権宣言であり、これを新聞に載せていたが、米国はこれを没収し焼却し、アギナルドの独立軍を攻撃した。なたや山刀で武装したフィリピン・ゲリラは最新装備の米軍の敵ではなかった。当時 360 万人の人口のルソン島で 60 万人を殺戮した。米軍はしばしば一つの地方の 12 歳以上の男子をすべて銃殺した。要するに米国が望んだのは、フィリピンを米国の植民地とすることであった。

残虐行為の数々が本国に聞こえ、国会で問題になり、上院の査問がおこなわれたが、その席上ベル将軍は「我々は良いフィリピン人のために悪者たちを殺したのである。誰も無駄には死んでおらず、良いフィリピン人のためなら、人口の半分を殺してもいい。」と答弁した。総司令官アーサー・マッカーサー(ダグラス・マッカーサーの父)は「もしこのような清潔なやり方で、良心に恥じる点がなく、道徳的な戦闘で、明白な目的をもって征服できるなら、日本も征服すべきである。」と答弁した<sup>47</sup>。

米国人のほとんどはフィリピン戦争の実情を知らない。スペインの圧制から米国がフィリピン人を解放したのだと教育されているのである。自国の負の歴史に対して無知なのは日本だけではない。

フィリピン戦争から 50 年経たぬ 1945 年、米国はドイツに住む白人キリスト教徒ではなく、広島、長崎の、異教徒の有色人種の日本を原子爆弾の実験台にした。また、米国は、ベトナム戦争では 300 万人の無差別殺戮を行ない、それをビリー・グラハム・クルセードの指導者たちをはじめ米国の保守的キリスト教界は支持した。

欧米キリスト教会はなぜこのように罪を繰り返してきたのか。罪を罪として認識せず悔い改めていないからである。ビリー・グラハム・クルセード、キャンパス・クルセードなどという名称を平気で使うキリスト教会の歴史への無知・無反省・無神経の結果である。＜白人のキリスト教徒による、異教徒の有色人種の殺戮は聖戦である＞という十字軍の呪いはなお解かれていない。2000 年ローマ教皇ヨハネ・パウロ 2 世は十字軍についてイスラム世界に対して謝罪表明をしたが、プロテスタントはなお十字軍について謝罪表明をしていない。ヴァイツゼッカーのことは真実なのである。

## XX. 異端運動と托鉢修道会 ベッテンソン pp195-199 堀米下 p 60-

### 1. 背景

ローマ教会の発展過程では、常に異端は出現するが、格別、司教叙任権闘争がヴォルムス協約(1122年)で終わってから教皇庁の最盛期には特に異端の運動が盛んだった。なぜか？堀米「ローマ教会隆盛の基をひらいた司教叙任権闘争が、他方では異端の根源をつちかつ

---

<sup>47</sup> Miller, *Benevolent Assimilation*, Yale Univ. Press 1982

たのであり、フランチェスコとドメニコの托鉢修道会は、この異端に対する防波堤として  
うまれたものである。」(p 61 堀込「光と影」)

当時、温暖化と農業革命による大開墾と農業の発展、余剰作物によるヨーロッパ内の交  
易の発達と、十字軍による地中海貿易再開によって、富裕層が出現しヨーロッパ各地に都  
市が急増した。都市の領主である司教・大司教は大部分封建貴族の出身であり、封建貴族  
にとって位の高い聖職は一種の既得権だった。教会税というものがあつたから、彼らは聖  
職を得ることによって都市からの税収を得ることができたのである。聖職にはこのように  
莫大な役得が伴っていたからこそ聖職売買(シモニア)が行なわれた。また、こうした封  
建貴族出身の聖職者たちは、めかけを蓄えるのが常態であるというほどに規律が乱れてい  
た。

グレゴリウス7世による改革は、こうして世俗化・腐敗した教会を教皇のもとに再組織す  
ることをねらっていた。叙任権闘争は、この聖職の叙任権をめぐるものだった。

グレゴリウス改革が刷新の方法として採った方法の一つは、腐敗聖職者のとりおこなう  
秘蹟を無効とし、その受領を信徒に禁じることであった。これは改革導入にとって有効な  
方法であったが、ローマ教会の礼典の客観主義をあやうくするものでもあった。礼典の有  
効性という事柄の本質からいえば、これはドナティスト論争にかかわることである。

かつてローマ帝国時代、当局からの激しい迫害下に教会が置かれたとき、迫害の厳しさ  
ゆえに裏切った者が行なった礼典は無効であるというのがドナティストの人効説 *ex opere  
operantis* (なす者から)であった。その時代、アウグスティヌスは礼典はその執行者の品  
性や熱心によらずその事柄ゆえに有効であるという事効説 *ex opere operato* (なすわざか  
ら)を説いてこちらが正統とされた。礼典主観主義は異端であり、礼典客観主義が正統と  
いうことである。

ところが、古代教会のような厳しい迫害下にあった時代とは、時代的文脈が全く異なる  
状況になったとき、「腐敗司教がなす礼典は無効である」ということを教皇庁が主張せざる  
をえなくなった。つまり、教皇庁の主張が異端ドナティストの主観主義・倫理を強調する  
立場になっている。これは逆転現象である。

教皇庁自身が「腐敗司教の礼典は無効である」といって、形よりも中身が大事である  
ということを主張をすることは、ローマ・カトリックが自らの權威によって与えた司教や司  
祭といった職務や肩書き必ずしも絶対ではないのだと認めることに他ならない。ここに福  
音の自由説教者や異端運動が出現する土壌ができた。

## 2. 福音の自由説教者とカタリ派・ワルド一派

11世紀になると農業の大躍進と地中海商業の再開にともなって、商工業がさかんになり、  
市民の力が大きくなる。都市の増殖に聖職の供給が追いつかず、空白地帯ができる。また、  
十字軍の成功・失敗は都市住民を興奮の渦に陥れた。

従来の農村に基盤を持ち、俗世からの逃避を基本とする修道院活動は、このように急増  
した都市住民たちを導くには不向きだった。そこに新しい福音の伝道者たちが出現する。

彼らは、自発的な無所有つまり財産の放棄と、自由説教の実践をし、腐敗した司教たちを非難の的にした。こうなると教皇としては彼らを弾圧せざるをえなくなる。

### (1) カタリ派

カタリ派は、12世紀半ばから南フランスとロンバルディアを中心にイギリス、スカンディナヴィアを除く全ヨーロッパに広がった異端運動である。厳しい禁欲生活とは、結婚制度を否定し、性行為によって生まれた獣の肉、ミルク、卵、チーズなどを忌避する。獣は性行為によって繁殖すると考えた。魚類は性行為をとまなわないうで増えると考えられたので食された。カトリック教会の職制とミサ・洗礼などの秘跡を否定し、教会堂やその装飾は無意味なものであると断じた。そして、彼ら自身の手による単純なパン裂きの儀式を行なう。カトリック教会は、カタリ派の教えはマニ教の影響を受けた二元論であると見た。

まず、聖ベルナルドゥスが巡回説教をして、正統教会に取り戻そうとする。また、カタリ派に対峙した主要な教皇はインノケンティウス三世。彼はフランチェスコ会を異端対策に用いた。

しかし、カタリ派の勢いは衰えない、1165年には公然とカタリ派の会議をひらき、絶対的二元論に立つ教義を採択し、アルピに加えていくつかの司教区まで開設した。こうして南フランスのランドックではカタリ派はカトリックをしのぐ勢いとなる。13世紀にはワルド一派と混ざる。

12世紀半ばになると、体制側はこれをマニ教的なものだと見て、これに古い帝国法による禁圧令を適用する。1179年に第三ラテラノ会議が開かれ、カタリ派・パタリ派・謙卑者、アルノルドゥス派、ワルド一派を異端として、回勅「壊滅せんがために」*ad abolendam* が発せられ、異端審問法廷が設置される。

13世紀にはいると、1209年教皇庁はアルピ十字軍を発動させた。重武装のフランス正規軍は南フランスに派遣され、町々を落した。住民たちはカトリック・異端をと区別せず皆殺しにされた。軍司令官に対して、包囲した町の住民の処置を訪ねられたある司教が次のように言ったという。「皆殺しにせよ。神は正統信仰の持ち主をご存知であるから、死後はカトリック信徒は天国へ、カタリ派の異端どもは、どのみち地獄へ落ちる定めだ。」<sup>48</sup>降伏しようとしないうカタリ派は、進んで火中に身を投じた。

### (2) ワルド一派

ワルド一派は、完全な使徒の模倣者の団体であり、信仰も元来は正統的だったが、福音宣教の使命感があまりにも強く、福音書の口語訳をつくり、禁止されても自由説教をやめなかつたので、異端とされ弾圧された。やがて宗教改革が起こると、これと気脈を通じるようになり今日なおプロテスタントの一派としてイタリアに存在する。

1173年、リヨンの商人ピエール・ワルドーは使徒的清貧に生きることを志し、知り合いの聖職者に福音書を母国語プロヴァンス語に翻訳してもらい、そのとおりに生きるこ

---

<sup>48</sup> 出村 p 165

とを決心する。妻と娘たちの生活費を渡すと、ザアカイのように、不正な高利貸しによって得た巨利はこれを償い、残りの財産は全部貧者に施し、自らを「リヨンの貧者」と呼んで托鉢生活にはいる。そういう生活をするうち、少しずつ仲間が集まる。

1179年ワルドーはローマに赴き、教皇アレクサンデル3世に謁見し、説教活動の許可を求めた。教皇は使徒的生活に共感したが、肝心の説教活動の許可は所属教区の司教にしたがうべきことを命じた。しかし、司教は彼に説教活動を許さなかった。しかし、彼は人に従うより神にしたがうべきであると考え、説教活動を止めなかった。

ワルドーらの信仰は正統信仰であったが、教会の権威を軽んじ秩序を脅かす者として異端とされる。1184年、異端禁圧令にはワルドー派の名も含まれる。結果的に、ワルドー派は反体制的な色彩を濃くすることになる。

ワルドー派の特徴の一つは、清貧と純潔の生活を送っている男女は誰でも説教をする権威、権威を持つとしたこと。信徒皆祭司というプロテスタントの先駆であるとも理解され、実際、宗教改革が始まると気脈を通じることになり、今はプロテスタントの一派として存在する。

出村彰によれば、「中世が最も中世的だった12世紀、13世紀こそ、異端運動もまたヨーロッパ各地で最も広く広がり、体制そのものを脅かすほどだったことになる。考えれば、光が強ければ強いほど、それが投げる陰影も濃い道理である。13世紀末から14世紀に入ると、カタリ派やワルドー派の異端はおのずと消滅に向かう。」<sup>49</sup>

### 3. インノケンティウス3世とフランチェスコ ベッテンソンp195-

ベネディクト会、シトー会といった従来の修道会は、農村を基盤とし俗世を離れて「祈りかつ働け」をモットーとするものだったが、これでは急増した都市には向いていなかった。聖職者たちは墮落して民衆の支持を得ることができなくなっており、霊的空白地帯となった都市には異端的自由説教者が増えて混乱していた。さらに、グレゴリウス7世の改革によって、腐敗した聖職者のなす礼典を無効と宣言したために、カトリック教会による礼典の客観性を自ら手放したという状況にあった。それはカトリック教会自身がいづのまにかドナティストの異端の立場を取ったことを意味する。

インノケンティウスの課題は、いかにしてカトリック教会が負ったこの深手をいやすかにあった。カタリ派やワルドー派が、教会の秩序の外において提起した問題を解決することである。彼らが生命を失うことをもいとわずに求めたものを、教会の秩序の内側において獲得することである。

そこで、必要とされていたのは、教皇庁の権威のもとにありつつ、俗世を捨てながら俗世のなかで生きる使徒的生活者の組織だった。労働の代わりに貧民の世話と説教を、財産のかわりに乞食を、俗世離脱のかわりに都市内の一所にとどまらない生活をする修道会だ

<sup>49</sup> 出村彰「中世キリスト教の歴史」p174

った。それがフランチェスコの始めた修道会であり、インノケンティウスはこれを公認した。堀米庸三「正統と異端」書き出し。

「1210年(実は1209年)、早春のある日のことである。中世ローマ法王インノセント三世は、ラテラノ宮の奥深い一室で、みなれぬ一人の訪問者と話し合っていた。この訪問者は、やせぎすの中背、やや中高の細面、平たく低い前額の下には一重の黒目がのぞき、鼻と唇はうすく、耳は小さくとがり、頭髪もひげもうすい。変哲がないというより、むしろ貧相なこの訪問者を特徴付けていたのは、しかし、そのやわらかな物腰と、歌うようなころよい声音であった。が、その風体は少なからず変わっている。長い灰色の隠修士風のマンとは、腰のあたりで荒縄で縛られており、裾から飛び出している足は裸足である。・・・この会見こそは、起伏にとぼしくない西洋の歴史にあっても数少ない、世界的な出会いの一つだった。」

インノケンティウスは、フランチェスコの「小さな兄弟たちの修道会」をカトリック教会の秩序のうちに取り込むことによって、異端運動、おもにカタリ派に対応したのである。腐敗した聖職者からはなれた民衆の心を、フランチェスコ会はもういちど教会につれもどしつなぎとめる役割を果たした。

また、インノケンティウス三世の次のホノリウス三世は、説教活動を重んじるドミニコ会の成立を許した。これら托鉢修道会は、どの教会管区にもしばられず、教皇に直属する。

(1) アッシジのフランチェスコ (伊: [Francesco d'Assisi](#)、1181年或は1182年 - [1226年10月3日](#))。

a. <生涯>

フランチェスコは、西欧中世の盛時、12世紀後半、ピエトロ・ディ・ベルナルドネ(Pietro di Bernardone)を父に、イタリアはローマの北に位置する[ウンブリア](#)地方[アッシジ](#)の町に生まれた。織物商人の父親が仕事上フランス語が堪能だった。

裕福な家庭に生まれ放蕩生活を送っていたが、騎士となり捕虜になったり、病気にかかり、23歳のとき信仰に目覚め、隠修士となり、アッシジ近郊の聖ダミアノ聖堂の修復を行う。回心を経て、すべてを捨て、主の家の再建を目指した。1208年に「清貧」「純潔」「従順」という三つの戒律を定めて活動を始めた。彼は弟子たちとともに各地を放浪し、説教を続けた。

1210年ローマ教皇[インノケンティウス3世](#)に謁見し、教皇は修道会設立の認可を与えた。当時、[カタリ派](#)などキリスト教内部の腐敗に対する批判として、多くの信仰復活の運動がローマによって弾圧された中で、フランシスコ会は例外的に教皇から承認されて発展した。これに倣ってその他の[修道会](#)が次々に誕生し、それらの中から教皇が選ばれるようになっていく起点となった。

b. フランチェスコの思想

①自然と一体化

有名な「太陽の歌」 *Cantico delle creature* であろう。そこでは太陽・月・風・水・火・空気・大地を「兄弟姉妹」として主への賛美に参加させ、はては死までも「姉妹なる死」として迎えたのである。こうしたことから、彼は西洋人には珍しいほど自然と一体化した聖人として国や教派を超えて世界中の人から愛されている。小鳥へ向かって説教したという伝説も大変に有名であり、教皇ヨハネ・パウロ 2 世は彼を「自然環境の保護の聖人」とした。

神よ、造られたすべてのものによって、わたしはあなたを賛美します。  
わたしたちの兄弟、太陽によってあなたを賛美します。  
太陽は光をもってわたしたちを照らし、その輝きはあなたの姿を現します。  
わたしたちの姉妹、月と星によってあなたを賛美します。  
月と星はあなたのけだかきを受けています。  
わたしたちの兄弟、風によってあなたを賛美します。  
風はいのちのあるものを支えます。  
わたしたちの姉妹、水によってあなたを賛美します。  
水はわたしたちを清め、力づけます。  
わたしたちの兄弟、火によってあなたを賛美します。  
火はわたしたちを暖め、よろこばせます。

わたしたちの姉妹、母なる大地によって賛美します。  
大地は草や木を育て、みのらせます。  
神よ、あなたの愛のためにゆるし合い、  
病と苦しみを耐え忍ぶ者によって、わたしはあなたを賛美します。  
終わりまで安らかに耐え抜く者は、あなたから永遠の冠を受けます。

わたしたちの姉妹、体の死によって、あなたを賛美します。  
この世に生を受けたものは、この姉妹から逃れることはできません。  
大罪のうちに死ぬ人は不幸な者です。  
神よ、あなたの尊いみ旨を果たして死ぬ人は幸いな者です。  
第二の死は、かれを損なうことはありません。  
神よ、造られたすべてのものによって、わたしは深くへりくだってあなたを賛美し、感謝します。

## ②修道生活について

修道生活に関する思想はフランシスコ会則によく現れている。当時のベネディクト会則とはまったく違う 独自の会則に従い従順・清貧・貞潔に生きた。特に清貧が強調。

⇒ベッテンソン pp195 - 199

### 『平和の祈り』

神よ、わたしをあなたの平和の使いにしてください  
憎しみのあるところに、愛をもたらすことができますように  
いさかいのあるところに、許しを  
争いのあるところに、平和を  
分裂のあるところに、一致を  
迷いのあるところに、信仰を  
誤りのあるところに、真理を  
絶望のあるところに、希望を  
悲しみのあるところに、よろこびを  
闇のあるところに、光を  
もたらすことができますように、  
助け、導いてください。

神よ、わたしに  
なぐさめられることよりも、なぐさめることが  
理解されることよりも、理解することが  
愛されることよりも、愛することができますように

なぜなら、与えることによって、与えられ  
自分を捨てて初めて自分を見出し  
許すことによって、許され  
死ぬことによって  
永遠の生命を与えられるからです。

\*「平和の祈り」はフランチェスコ自身の筆という証拠は無い。この祈りは1917年、フランス・ノルマンディー地方の宗教雑誌にフランス語で初めて登場。だが、「平和の祈り」は聖フランチェスコの精神をよく伝える。富や権力と癒着してしまったローマ教会に、霊的いのちをなんとか維持させたのは、修道会だった。

## (2) ドミニコ会

### <生涯>

聖ドミニコは、スペインのブルゴス県のカレルエガにフェリックス・デ・グスマンを父に福者ホアナ・デ・アサを母として1170年頃に誕生した。彼に関して初期の伝記作者は、ドミニコの人生を象徴していると思われる二つのエピソードを書き記している。彼の母はドミニコが生まれる前のある象徴的な夢を見た。それは、胎内の子供が燃える松明を口にくわえた白黒まだらな子犬の形をしていたというもので、彼が胎外に出るとその火でもって世界を燃やすかのようなものであったという。

また彼を洗礼盤から取り出した婦人によれば、幼児聖ドミニコの額に星があり、その光は全世界をあかるくしているように思え、代母である彼女は、将来彼が人々の光となると理解したということである。

ドミニコが 6 歳になるとグミエル・デ・イサンの首席司祭であった叔父のもとに送られ教育を受け（一般学業の初歩をおさめる）、幼少の時から聖なる芳香で満たされていたという。勉学の初歩と共に、教会の人としての道を学んでいくことになる。

14 歳になると、ドミニコは叔父の教会を離れてさらに上の学校に通うためパレンシアに行く。そこでは、伝統的自由七学科を 6 年間くらい学び、後には神学と聖書の養成を 4 年間受けた。彼は非凡な記憶力に恵まれていたが、神の言葉を自分の中に保ったのは、単に記憶にとどめることによってではなく、行いによってもそれを保ったのである。

ドミニコは、他者に対して自分を閉じていたのではない。一人で祈るとき、彼は祈りの中で他者と共にあった。このことがはっきりと示されるのは、パレンシアに滞在中、厳しい飢饉でスペイン全土が荒廃した時のことである。彼は「人が飢えて死んでいくとき死んだ皮の上で勉強していることはできない」と言って非常に高価だった本を売り、代金を貧しいひとたちのために使った。このように苦しんでいる人と苦しみ、英雄的な愛徳に励んだのである。

貧者を救うために自分の書籍や家具・衣服などを売ることで、本も家具もなくなったパレンシアの部屋で、ドミニコは自分の生命の意味を発見する。－飢えた人々に食物を与え自分自身までも与えること－しかしどういふ食物に人々が飢えているかを理解するまでには、もう少し時を要する。

ドミニコは自分の計画を長い時間をかけて熟させ、着実に実現させていくというタイプだった。何かあるできごとで衝撃を受けると、まずショックを心で受け止め、心中に変化が起こるのであったと言われている。

ドミニコの聖性の名声は広がった。オスマの司教 (Martín Bazán) は 1196 年または 1197 年頃にドミニコを司教参事会員にした。ここで彼は約一世紀来、オスマの司教、より広くは全カスティリア地方の司教たちが取り組んでいる大事業に、自分の立場を通して協力していくことになる。25 歳・司教参事会員として誓願を宣立して後、間もなく司祭となる。司祭となる最低年齢である。

1199 年 8 月 18 日の文書によると、司教座聖堂の典礼生活の責任者になっている。彼の聖性は、驚くほど高いものであったから 1201 年 1 月 3 日に、参事会員たちは彼を称賛し、ドミニコの意志に反してではあったが司教参事会員の副院長に選出した。オスマの司教参事会は、聖アウグスチヌスの戒律を採用していた。当初は初代教会に帰り、使徒たちの生活に倣おうという気運のもとに教会の改革がなされていた。

ドミニコは、カシアヌスの『砂漠の師父たちの説教集』を愛読し、深い内的生活を深めた。それと同時に彼の生活は、不断の祈り、優れた愛徳、聖務日課の詠唱といった参事会員本来の役目に熱心に励んだ。

<修道会>

ドミニコ修道会は [1206年](#)に[聖ドミニコ](#)（ドミニクス・デ・グスマン）により立てられ [1216年](#)にローマ教皇ホノリウス3世によって認可された[カトリック](#)の[修道会](#)。正式名称を説教者修道会という。略号は OFP である。

清貧を重んじ、初期は托鉢によってのみ生活したため「乞食修道会」「[托鉢修道会](#)」の異名を持つ。[アルビジョア十字軍](#)における[異端審問](#)で知られ、反対派から domini canis の綽名を付けられた。黒と白の修道服で表される。

フランシスコ会がキリスト的な生活実践を重んじたことに特徴があるのに対して、ドミニコ会が学問的営みをも重視するという点に特徴がある。ドミニコ会からトマス・アクィナスが生まれたのは自然な結果であった。

## XXI. 中世の神学——スコラ哲学

序 啓蒙主義的な歴史観においては、中世は暗黒時代だとされてきたが、近年は「十二世紀ルネサンス」という言い方がされ、再評価されている。ホイジンガは「十二世紀は他に例を見ないほど、創造的で造形的な時代であった」といい、歴史家バラクローも「十二世紀はヨーロッパ史上、もっとも建設的な時代であった」とまでいう。これらの言葉はひいきの引き倒しという気がするけれども、たしかに中世は、アンセルムス、アベラール、ペトルス・ロンバルドゥス、アルベルトゥス・マグヌス、トマス・アクィナス、ボナヴェントゥーラが輩出された時代である。

ヨーロッパでは、封建制が確立し、教会と国家の闘争はヴォルムスの和議で一応決着して安定し、9世紀から始まった農業革命によって12世紀までに農業生産性は飛躍的に増大し、生活にある余裕が生まれた。そして、商業・手工業が発展し始め、自己完結型の経済からヨーロッパの他の地域との交流を求めるようになり、富が蓄積して都市が誕生する。都市は権力から自立して市民階層が誕生する。都市の中心は聖堂と市庁舎であり、教会には聖職と官僚養成を目的とする教育機関が発生し、やがて大学となる。大学と都市とはきっても切れない関係にあった。(農業革命→生活に余裕→商業・手工業発展→富の蓄積・都市が誕生→市民階層成立→大学の誕生)

12世紀、こうした背景のあるところに、一部は十字軍によりおもにはスペインおよびシチリアのイスラム教徒との接触によって<sup>50</sup>ギリシャ哲学とくにアリストテレス哲学が導入される。イスラム哲学の代表者といえばアウェロエス（イブン・ルシュド）とアヴィケンナ（イブン・シーナー）である。当時の世界的観点からいえば、ヨーロッパは後進地域であり、イスラム世界のほうが芸術的にも学問的にも経済的にも高水準にあった。文化は水のように高きから低きに流れる。イスラムから中世ヨーロッパはアリストテレスを学んだ。これが「12世紀ルネサンス」の原動力となる。

古代教会の神学的役割は、「なにが信ずべき真理であるかを確立する」ことだった。中世の神学的営みの役割は、その「確立された教理を説明し、論証し、体系化する」ことであ

---

<sup>50</sup> フスト・ゴンサレス p 339

ったといえる。

また、神学の営みの場と神学のタイプの関係についていえば、教父神学は教会が神学の場であり、修道院神学は修道院が神学の場であり、スコラ神学は大学が神学の場である<sup>51</sup>。場が神学の性格を決定しているという面がある。本来的には、神学の場とは教会であるべきである。

## 1. 普遍論争による概括<sup>52</sup>

中世を通じて神学上の課題となったのが普遍と特殊をめぐるいわゆる普遍論争であった。これは古代哲学におけるプラトン学派とアリストテレス学派の再燃である。課題は、「普遍は実在するのか」ということである。たとえば普遍というのは「人間」という類概念である、特殊というのは山口陽一とか水草修治とかいう個々の人間である。なぜ山口陽一と水草修治は「人間」という概念で一括りにできるのか。「人間」という普遍があつて、その普遍の地上界におけるさまざま現れとして個々の人がいるのか。それとも実在するのは山口陽一とか水草修治とか個物のみであり、それらを名目上、人間と呼んでいるにすぎないのか。この問いについては、中世を通じて三つの立場があつた。

第一は中世の用語で実在論 **realism**、特に極端な実在論である。内容をいえば「普遍実在論(実念論)」ということ。事物をラテン語で **res** というが、「普遍は事物に優先する **universalia ante rem**」(**ante**=before)という主張であり、プラトン哲学のイデア論に依拠している。たとえばイデア界における「人間」という普遍は、この世の水草修治、山口陽一といった特殊な事物に先立ってあり、特殊な事物は普遍の影にすぎないという。これを教会観に当てはめれば「教会」なる普遍が先にあつて、個々の地域教会があるということになる。この立場からすれば、公同の教会が重んじられるのでローマ教皇庁が重い立場を持つことになる。アンセルムスがこの立場である。

第二は、穏健な実在論である。これはアリストテレス哲学がボエティウスを通じて紹介されたことが大きい。ボエティウスはプロティノスの弟子ポルフィリオスの『アリストテレス範疇論序説』をラテン訳し、アリストテレス論理学を紹介した。アリストテレスの哲学においては、「普遍は事物のうちにある **universalia in rem**」。普遍はたしかに実在するのであるが、そうは言うものの極端な実在論のように地上的なものをすべて普遍の影とみなすのではなく、その実体性を認めながらそれら個物(特殊)に通じている普遍的なものが実在すると考える。地上的な具体的なものから、それらに共通する超越的な普遍の実在を考えるわけである。

中世の神学者としてはピエール・アベラールとトマス・アキナスがその代表で、トマスは穏健な実在論にたつて壮大な体系を作り上げた。これを教会観にあてはめれば、各地域教会という個物が実在すると同時に、それらを超えて公同の教会が実在するというわけ

<sup>51</sup> ピエール・アドネス『カトリック神学』(ケジユ)p45

<sup>52</sup> J.ペリカンは「普遍論争」による概括を否定しているが、常識として必要。

である。各地域教会において説教と礼典にあずかっているという経験が実在であり、かつ、諸地域教会を超えて教皇の権威・権能も実在であるとするわけ。

第三の立場は唯名論 nominalismである。普遍(類概念)というものは、単なる名称にすぎず、現にあるのは特殊(個物)だけであるという立場 universalia post rem。山口陽一、水草修治など個物があるのみで、一応それらをひとくくりにするために便宜上「人間」と読んでいくだけのことであるというわけである。中世の崩壊の気配が見えてくる時代のオッカムらの立場である。これを教会にあてはめると、個々の地域教会のみが実在であり、普通の「教会」なるものは実在せず、名目上あることになっているだけのことだということである。したがって地域教会の集合である教会会議の権威を重んじ、教皇権を軽んじる論拠となる。

こういうわけで、中世の神学思想の流れは、極端な普遍実在論のアンセルムスに始まり、アリストテレス哲学導入によってトマス・アクィナスの穏健な普遍実在論で最盛期に達するが、やがて教権が衰え中世が終わろうとする時代に唯名論が現れるというのが大きな流れである。神学思想の展開と、教皇権の盛衰の姿が重なり合っていることに注目。

## 2. カンタベリーのアンセルムス (Anselmus Cantuariensis, [1033年](#) - [1109年4月21日](#))

——修道院神学・スコラ哲学の父 ベッテンソン pp207-211

### 神の存在・キリストの受肉と贖罪

#### [0] 年譜

1033年. アンセルムスは[ブルグンド](#)王国の町[アオスタ](#)で誕生した。

1059年 [ル・ベック修道院](#)の副院長[ランフランクス](#)に師事

1060年 [修道士](#)として誓願。

1063年 ル・ベック修道院の副院長に選出。

1078年 同修道院長に選出。

ル・ベック時代に、『モノロギオン』(1076年)『プロスロギオン』(1077-78年)執筆。

1093年 師ランフランクスを継いでカンタベリー大司教に推挙される。

が、当時は[聖職叙任権闘争](#)の時代であった。ウィリアム2世、ヘンリー1世と対立。[1107年](#)、ウェストミンスター教会会議にて、国王が叙任権の放棄を約束し、和解。

1109年4月21日 アンセルムス死亡。

[1494年](#) [アレクサンデル6世](#)によって[列聖](#)された

[1720年](#) [教会博士](#)の称号を得た。

#### [1] 生涯

\*ル・ベックの修道士

1033年. アンセルムスは[ブルグンド](#)王国の町[アオスタ](#)で誕生した。アオスタは、今日の[フランス](#)と[スイス](#)両国の国境と接する、[イタリア](#)の[ヴァッレ・ダオスタ州](#)に位置する。彼の父ガンドルフォは[ランゴバルド](#)の貴族であり、また彼の母エルメンベルガもブルグンドの貴族の出自であり、大地主であった。

父は息子に政治家の道を歩ませたかったが、アンセルムスはむしろ思慮深く高潔な母の敬虔な信仰に大いに影響された。15歳の時、彼は修道院に入ることを希望したが、父の了承を得ることはできなかった。失望したアンセルムスは心因性の病を患い、その病から回復して一時の間、彼は神学の道をあきらめ、放埒な生活を送ったといわれる。この間に彼の真摯な気持ちを理解してくれていた母が亡くなったため、アンセルムスはこれ以上父の激しい性格に我慢ならなくなった。1056年（もしくは1057年）に家を出たアンセルムスはブルグンドとフランスを歩いてまわった。その途中、当時ベネディクト会クリュニー修道院系列のル・ベック修道院の副院長を務めていたランフランクスの高名を見つけ、アンセルムスは同修道院のあるノルマンディーに向かう。1060年、同修道院で修士としての誓願を立てた。アンセルムスの才能が開花するのはこの時からである。

1063年、アンセルムスはル・ベック修道院の副院長に選出された。彼はその後15年間にわたってその座にあり、1078年、ル・ベック修道院の創設者であり初代修道院長であるハールインの死によって、アンセルムスは同修道院長に選出された。アンセルムスの下で、ベックはヨーロッパ中に知られる神学の場となった。この期間に、アンセルムスの最初の護教論文『モノロギオン』（1076年）と『プロスロギオン』（1077-78年）が書かれた。また、問答作品『真理について』、『選択の自由について』、そして『悪魔の墮落について』が書かれたのもこの時期である。

その後アンセルムスは、師であったランフランクスを継いでカンタベリー大司教となるが、当時は聖職叙任権闘争の時代であった。イングランドも例外ではなく、イングランド教会の長であるカンタベリー大司教を始めとする聖職者の座を、王室と教皇、どちらの権威を持って叙任するのかという問題へ発展してゆく。これは、ただ単に名誉的な問題ではなく、高位聖職者は司教管区や修道院を元として、封土（不動産とそこに基づく財産の所有）が慣習として認められていたため、政治的、実質的問題となるのであった。このようにして、イングランドにおける教会の代表者アンセルムスはイングランド国王たちと、長く渡る闘争に巻き込まれてゆくのである。

ノルマンディー公であったギヨーム2世は、1066年にイングランド国王ウィリアム1世として即位し、ノルマン朝を興す。ノルマンディー公として、ウィリアム1世はル・ベック修道院の保護者であり、また同修道院がイングランドに広大な地所を所有するにいたり、アンセルムスは時折同地を訪れるようになる。彼の温厚な性格とゆるぎない信仰精神により、アンセルムスは同地の人々に慕われ、尊敬されるにいたって、当時カンタベリー大司教であったランフランクスの後継者だと、当然のように思われていた。

しかし1089年、その偉大なるランフランクスの死に際して、（教会に対する）王権の拡大を狙っていた当時のイングランド国王ウィリアム2世は、司教座の土地と財産を押さえ、新たな大司教を指名しなかった。約4年後の1092年に、チェスター卿ヒューの招きによって、アンセルムスはしぶしぶ（というのも、そのような態度をあからさまにしていた同王の下で大司教に任命されるのを恐れたから）イングランドへ渡った。4ヶ月ほどチェスターにおける修道院設立などの任務により同地に拘束された後、アンセルムスがノルマンディーへ帰ろうとした時、イングランド王によって引き止められた。翌年、ウィリアム2世は

病に倒れ、死が近づいているように思えた。そこで、大司教を任命しなかった罪の赦しを欲したウィリアム 2 世は、アンセルムスをしばらくの間空位となっていたカンタベリー大司教の座に指名した。いざこざがあったものの、アンセルムスは司教座を引き受けることを納得した。

ノルマンディーでの職務を免ぜられた後、アンセルムスは [1093年12月4日](#) に司教叙階を受けた。彼は大司教座を引き受ける代わりに、イングランド王に次の事項を要求した。すなわち、①没収した大司教管区の財産を返すこと ②大司教の（宗教的な）勸告を受け入れること ③[対立教皇クレメンス 3 世](#)を否認し、[ウルバヌス 2 世](#)を教皇として認めることである。自分の死が近いと思っていたウィリアム 2 世はこれらのことを約束するが、実際には、最初の事項が部分的に認められたのみであり、また、3 番目の事項はアンセルムスとイングランド王を陰悪な関係に追い込むことになる。

ウィリアム 2 世は病の床から回復して、アンセルムスの大司教座の見返りに多大な財産の贈呈を要求した。これを聖職売買と見たアンセルムスはきっぱりと断り、これに怒った国王は復讐に出る。教会の決まりとして、カンタベリー大司教などの首都大司教として聖別されるには、[パリウム](#)を直接、教皇の手から授与されなくてはならない。したがって、アンセルムスはパリウムを受け取りに[ローマ](#)へ行くことを主張したが、これは実質的に王室がウルバヌス 2 世の権威を認めることとなるため、ウィリアム 2 世はローマ行きを許さなかった。

イングランド教会の首都大司教の叙任問題は、その後 2 年にわたって続いた。[1095 年](#)、国王はひそかにローマへ使いを出し、ウルバヌス 2 世を認める旨を伝え、パリウムを持った教皇特使を送ってくれるよう教皇に頼んだ。そして、ウィリアム 2 世は自らパリウムを授与しようとしたが、聖職叙任という教会内の事柄に俗界の王権が入り込むことを強硬に拒んだアンセルムスは、国王から受け取ることはなかった。

1097 年 10 月、アンセルムスは国王の許可の得ずにローマへ赴いた。怒ったウィリアム 2 世はアンセルムスの帰還を許さず、直ちに大司教管区の財産を押さえ、以降彼の死まで保ち続けた。ローマでのアンセルムスはウルバヌス 2 世に名誉をもって迎えられ、翌年の[バリー](#)における大会議にて、[東方正教会](#)の代表者らの主張に対抗して、カトリック教会の[ニカイア・コンスタンティノポリス信条](#)で確認された[聖霊](#)発出の教義を守る役に指名された（[東西教会の分裂](#)は 1054 年の出来事である。また、聖霊問題に関しては[フィリオクエ問題](#)を参照）。また、同会議は教会の聖職叙任権を再確認したが、ウルバヌス 2 世はイングランド王室と真っ向から対決することを好まず、イングランドの叙任権闘争は決着を見ずに終わった。ローマを発ち、[カプア](#)近郊の小村で時を過ごしたアンセルムスは、そこで[受肉](#)に関する論文『cur deus homo 神はなぜ人間になられたか』を書き上げ、また、翌 1099 年の[ラテラノ宮殿](#)での会議に出席した。

1100 年、ウィリアム 2 世は狩猟中に不明の死を遂げた。王位を兄の[ロバート](#)が不在の間に継承した[ヘンリー 1 世](#)は、教会の承認を得たいがために、ただちにアンセルムスを呼び戻した。しかし、先代王と同じく叙任権を要求したヘンリー 1 世とアンセルムスは、再び仲たがいをすることとなる。国王は教皇に何度かこれを認めようと仕向けたものの、当時の教

皇パスカリス 2 世が認めることはなかった。この間、1103 年 4 月から 1106 年 8 月まで、アンセルムスは追放の身にあった。そしてついに 1107 年、ウェストミンスター教会会議にて、国王が叙任権の放棄を約束し、和解がもたらされた。このウェストミンスター合意は、後の聖職者叙任権闘争に幕を下ろす 1122 年のヴォルムス協約のモデルとなる。こうして、アンセルムスは長きにわたった叙任権闘争から解放されたのである。

彼の最後の 2 年間は大司教の職務に費やされた。カンタベリー大司教アンセルムスは 1109 年 4 月 21 日に死亡した。

彼は 1494 年にアレクサンデル 6 世によって列聖され、また 1720 年には学識に優れた聖人に贈られる教会博士の称号を得た。

## [2]神学的貢献

神学は、それが営まれる場によって性格がつく。教父神学は、異教世界に取り囲まれ宣教の戦いをする教会を場として成立した。つぎにローマ帝国が滅び修道院がその神学の場となって、修道院神学が生まれる。アンセルムスは、親友ベルナルドゥスとともに修道院神学の代表者である。アンセルムスはスコラ神学の父と呼ばれはするが、彼の神学は後の大学を営みの場とするスコラ神学とは性格をことにする面がある。修道院神学はスコラ神学とちがって敬虔な祈りの香りが高い。ベルナルドゥスのことば「知るために知ろうとつとめることは、信仰に關することがらの中では恥ずべき好奇心に属する。」(「雅歌について」第 3 6 説教)<sup>53</sup>

### a. 知解を求める信仰 fides quaerens intellectum

理性と信仰という課題は、福音がギリシャ思想と触れたとき以来の課題である。テルトゥリアヌスは「不合理なるがゆえに信じる credo quia absurdum」という信仰一元論の立場といわれる。このことばは彼の著作のなかにはそのままない。いちばん近いのは次の表現。「信じられるのは、それが不合理だからである。確かといえるのは、それがありえないからである。Credibile est, quia ineptum est. certum est, quia impossibile est.」

ユスティノスはむしろキリスト教こそ最高の哲学という立場だった。理性と信仰の連続の可能性を見出そうとした。

アンセルムスがスコラ学の父と呼ばれる所以は、すでに処女作『モノロギオン』に見て取れる。「独白」を意味するこの論文で、彼は神の存在と特性を理性によって捉えようとした。それは、それまでのキリスト教の権威をもって神を論ずるものとは一線を画した。

アンセルムスの思索の最大の特徴は、信仰と理性的探求の関係を自覚的に確立したところにある。その関係を次のように言っている。彼の目的は、証明なしには信じないぞというのではなく、すでに信じていることを一層深く理解することにあった。

「理解(知解)を求める信仰」(fides quaerens intellectum)、

「credo ut intelligam 我信ず、そうすれば理解せん」(Prosl, 1)

「理解せんがために信ず」と訳されることが多いが、ラテン語の ut は目的より結果とし

<sup>53</sup> ピエール・アドネス『カトリック神学』p45

て英語でいえば *so that* として訳すほうがよい。

「聖書の権威(*auctoritas scripturae*)に全く頼ることなく」証明することを試みる；しかしそれは「*ratio* を通して信仰に達するためではなく」、「信じている事柄の *intellectus* に喜びを見いだすため」である(*Cur Deus Homo*, 1,47)。

すなわち、彼は、権威に依拠して信じるのみで理性的探求を軽んじる態度、および理性的探求に立脚して信仰に異議を唱える態度の双方を戒めて、まず信じるところから出発した上で、信じる者が自己の信の根拠(*ratio fidei*)を、聖書の権威に頼ることなく探求するという姿勢を提唱した(cf. *Monol.*, pref.)。

すなわち、権威至上主義に対しては *ratio* を排除すべきではないと言う：

「堅い *fides* の持ち主が、その *ratio* の発見に努力することを望むとしても、非難されるべきではない」(CDH 40)

「聖書は『信じないならば理解しないだろう』と言って、私たちを根拠の探求へと招いている(*ad investigandam rationem invitatur*)」(ibid.)

他方、弁証学者の権威に対する傲慢な対応に対しては、まず信仰を堅くしてから始めるべきであり、理解できないと行って、異議を唱えるのは高慢だと言う(対 Roscelinus)(*Inc. Verb.*1)。

理性的探求のこのような位置づけは、以降のスコラ哲学・神学に大きな影響を与えたため、彼は「スコラ学の父」と呼ばれる。

## b. 神の存在の本体論的証明

『プロスロギオン』 *Proslogion* ベッテンソン pp207-208

書名プロスロギオンは神との「対話」を意味している。実際に読んでみると、単なる抽象論をふりまわした神学書ではなく、全篇これ祈りである。敬虔と知性がみごとに一体化した作品であり、まさに知解を求める信仰の書なのである。それゆえアンセルムスやその親友のベルナルドゥスの神学は、スコラ神学(学校の神学)とは区別して「修道院神学」と呼ぶことがある。「秘儀との有機的な結びつきを保ち、絶え間なく祈りながら、情愛深く、より深く秘儀を知覚しようとする人間の全能力の結集なのである。<sup>54</sup>」ベルナルドゥスは指摘した、識るために識ろうとつとめることは、信仰に関することがらのなかでは『恥ずべき好奇心』に属すると(雅歌説教36)。

構想当初「知解を求める信仰 *fides quaerens intellectum*」と題されていたが、これは彼の神学者、スコラ学者としての姿勢を特徴づけるものとしてしばしば言及される。この立場は通常、理解できることや論証できることのみを信じる立場ではなく、また、信じることのみで足りるとする立場でもなく、信じているが故により深い理解を求める姿勢、あるいはより深く理解するために信じる姿勢であると解される。

神の存在証明は、『プロスロギオン』の特に第2章を中心に展開されたもので、おおよそ以下のような形をとる。

<sup>54</sup> ピエール・アドネス『カトリック神学』白水社 p45 文庫クセジュ

神はそれ以上偉大なものがないような何者かである。

存在には二種類ある。すなわち、観念の中に存在するが実在しないものと、観念の中に存在し、かつ実在するものである。

観念の中のみ存在して実在しないものよりは、観念の中に存在しかつ実在するもののほうが偉大である。

神はそれ以上偉大なものがないものである。

したがって、神は人間の観念の内にあるだけではなく、実際に存在する。

「それゆえ、疑いもなく、それより偉大なものが考えられ得ない何かは理解のうちにもまた実在としても存在する」(プロスロギオン2章)

「主、神よ。あなたはこのようにまことの存在し、存在しないことは考えられ得ません。」(プロスロギオン3章)

アンセルムスの神の存在証明は、神とはいかなる存在であるかという神の本性そのものの理解から出発するので、本体論的証明と呼ばれる<sup>55</sup>。

では、この論証は単なる知解による証明であろうか。「実にわれわれはあなたが、それより大いなるものが考えられない存在であられることを信じています。」という。つまり、この論証の出発点である「神はそれ以上偉大なものが考えられ得ない何者か」は、アンセルムスの信仰告白であり、神の自己啓示なのである。この自己啓示を信仰によって受け入れて、そこから神の啓示内容を理解していこうとするのである。「理解を求める信仰」というのはこのことである。

### c. 贖罪論 *Cur deus homo* (Bettenson pp208-211)

なにゆえにキリストの贖罪が必要なのか、それはいかにして成就され、現在のわれわれといかにかわりあうのか。これが贖罪論の課題。アンセルムス以前、十分な意味でこれを論じた神学はなかった。

オリゲネス、ニュッサのグレゴリオス、ナジアンゾスのグレゴリオスらギリシャ教父たちは賠償説を唱えた。すなわち、キリストは神が人間を救出するために悪魔に支払われた身代金であるという説である。当時の社会に奴隷、捕虜の解放についての社会的慣行があったので、それになぞらえたのである。テルトゥリアヌス以来の西方ラテン神学の伝統には、キリストのわざを罪びとに科せられた刑罰に対する身代わりであるとする代償説があったが、論理的整合性をもった神学論の展開はまだなかった。

---

<sup>55</sup> これは実在論的立場。もしわれわれが「神」という語だけを考えているなら、それが存在しないということは可能であるかもしれない。しかし「神」において、「それ以上大きなものが考えられ得ないもの」が思考されている限りは、その存在を否定することは不可能である、ということである。

## 第一巻

「罪を犯すとは神に帰すべきものを帰さないことである。」神に帰すべきものとは神に榮譽を帰すことであるから、神に榮譽を帰さないことは神を辱めることである。

「罪を正す唯一の可能な方法は罪を罰することである。」罰しないで許すことは、神の正義というご性格に反する。

## 第二巻

「罪ある人間はだれも完全な賠償をすることはできない」

「神以外にこの賠償をなしうるものはいない。しかも、人間以外のものが、これをなすべきではない。…神であり人である方がこれをなさねばならない。」

「彼は、神以下のすべてよりも偉大なものを、義務に束縛されてではなく、自分から進んで与えることのできる何ものかを持っていなくてはならない。」それであってこそ、大いなる功績となるから。

「このような偉大なささげ者を自由になしうる方(キリスト)には、明らかな報いが与えられなくてはならない。…しかしすべてに満ち足りておられる神なるキリストに報いは与えられない。」そして…キリストは報いの請求権を人間に譲渡されることを選ばれた。」

こうして神の正義を満たしつつ、神の慈愛が実現した。

### [日本語文献情報]

アンセルムスは「スコラ哲学の父」と哲学入門書などで紹介されることは多いものの、彼の著書を購入することは非常に困難となっているのが現状である。聖文舎より全 1 巻の『アンセルムス全集』（1980年：古田暁訳）が出ている。上智大学中世思想研究所（編訳、1996年）『中世思想原典集成7 前期スコラ学』（平凡社）は、『モノロギオン』、『プロスロギオン』を始めとするアンセルムスの主著を納めている。また、彼の主要著作は単書としても存在する。

聖アンセルムス（1942年）『プロスロギオン』長澤信壽（訳）（岩波文庫）

--（1946年）『モノロギオン』長澤信壽（訳）（岩波文庫）

--（1948年）『クール・デウス・ホモ - 神は何故に人間となりたまひしか』長澤信壽（訳）（岩波文庫） アンセルムスに関する著作、研究書には、印具徹（1981年）『聖アンセルムスの生涯』（中央出版社）K. バルト『知解を求める信仰』

### 3. アベラール (Pierre Abélard、Petrus Abelardus [1079年](#) - [1142年4月21日](#))

「中世最初の近代人」と呼ばれるように、その哲学における思惟の自由さ、神学における三段論法の徹底、その奔放な生き方においても近代的自我の強烈な印象の強い人物である。

#### <universalia in rem>

フランス、ナント市の南パレーに生まれる。やがてパリに出て弁証法にかけて「名実ともに第一人者であったシャンポーのギョームに弟子入りした。」(『アベラールとエロイズ』

畠山訳)しかし、アベラールは普遍論争におけるギョームの極端な実在論を、徹底的に批判し言い負かしてしまう。ギョームの説では、<普遍的なもの=実体的なもの/個別的なもの=付帯的なもの(おまけ)>となる。例えば、柴田勝彦と伊藤明生が違うのは、単に付帯的(たまたま)であって、両者は普遍性の観点からは別に違ったものではなくなるからである。これを拡張すれば、神であれ個々の人間であれ、みな同じであることになってしまう。だとすればこれは汎神論であり、行き着くところは無神論である。このようにアベラールは師の立場を批判した。アベラールは先に見たように *universalia in rem* つまり普遍は個物のうちに内在するという立場である。

アベラールの主張はもともとで、ギョームも自説を訂正せざるをえなくなるが、アベラールの罵倒癖は激しい反発を買い、パリを去らざるをえなくなるが、数年後パリにもどると、彼はその鋭い論理をかかげて多くの弟子を集め、「われらがアリストテレス」とまで持ち上げられる。彼はその関心を哲学から神学に転じ、彼自らいうところでは「かつて哲学の教授において得たに劣らない神の恩寵を神学の教授においても得たものと人々から思われるに至った。」

「しかし、順境は愚者を常に増長させる。浮世の安寧は精神の力を弱め、その上肉の誘惑によって容易にそれを台無しにする。私はすでに自分をこの世における唯一の哲学者のように思い、もはやいかなる攻撃も恐れる必要が無いと考えた。そしてこれまでは最も節制的に生活してきた私が、欲情の手綱を緩め始めた。」当時アベラールはこうして姪であり才媛であり22歳も年下のエロイーズとの激しい肉欲的な恋に陥る。やがて子供ができ、おじが激怒するが、二人は秘密の結婚をする。聖職が結婚することはカトリックでは当然法度であったから秘密にしたのだが、おじはこれを言いふらす。また、アベラールがエロイーズをおじの暴力から救うために知り合いの修道院に保護すると、おじはアベラールがエロイーズを捨てたと誤解して激怒し、人を送ってアベラールを襲わせて性器を切除するという事件が起こった。後年彼は次のように書く。「自分が罪を犯した身体その部分において償いをせねばならぬとはなんと正しい神のお審きであろう。自分が先に裏切った人間から逆に裏切り返されるとはなんと正当な応報であろう。」

その後、性器を切除された二人はそれぞれに修道院で余生を送ることになる。アベラールはその後、クリューニ修道院で死に至るまできわめて謙虚にすごしたという。修道院長ピエールは証言する。「私の記憶する限り、その態度や身振りにおいて彼を謙譲な人を私は見たことが無い。…彼はただ過剰なものばかりでなく、絶対に不可避的とはいえないもの一切、自らのためまた他の人々のために排斥しました。言葉によってあるいは実行によって。彼は絶えず読み、常に祈り、兄弟たちに親しく教えたり・・・集会の席上で神に関すること一般は説教したりすることに迫られて以外は決して口を開きませんでした。」(畠山訳)『アベラールとエロイーズ』

<*intelligo ut credam*>理解する。そして信じる。I understand so that I may believe.

アベラールの強烈な近代的自我意識は、恋愛においてそうであったように、知的営みにおいては、「すべての神秘を理性によって知的に理解しようとする情熱にとりつかれた一生

であった」(O.テイラー)と評されもする。アンセルムスの *credo ut intelligam* に対して、アベラールは *intelligo ut credam* といわれる。すなわち、「理解する、そうして信じる」ということ。「理解によって裏付けられえない立言は空虚なことばにすぎない。・・・ものはまず理解されなくては信じることができないというのである。」(三位一体論について)

アベラールはアリストテレスの論理学(三段論法)を教会の教義や教理に適用していった。彼のアリストテレスの大胆な神学への適用は、後のトマスの基礎となる。

『然りと否』*Sic et Non* には、方法論的批判主義が明瞭である。本書は聖書や教父からの著作からの抜粋集。聖書や教父文献の中に、一見、相互に矛盾・対立する文章があることを指摘し、そのくいちがいの理由を学徒が考察することによって、より高度の真実に到達することを意図している。158の提題についてそれぞれについて肯定的な文章と否定的な文章を羅列し、学徒が解決をもとめて考察するようにと編まれている。彼は、聖書や教父の権威を貶めることを意図したのではなく、より深い学識に至らせること意図しているところは近代主義とは異なる。また、矛盾や誤謬は翻訳を通じて生じている可能性もあるので、彼は聖書のヘブル、ギリシャ語原典を使用することの重要性を説いた点、当時としては特異であった。

「この種の文字は信ずべき必然性をもってではなく *cum credendi necessitate*、判断する自由をもって *cum judicandi libertate*・・・ただ裸で純粋な知性によって読むべきである。」

アベラールが「然りと否」の序文で権威とするのは「すべての哲学者のなかで最も洞察力に富んだかの哲学者アリストテレス」である。

「われわれは疑うことによって探究するようになり、探究することによって真理を把握するのである。」

「いかなる教義も、それが神によって語られたからというのではなく、我々が理性によって『然り』と確信するが故にこそ信ぜられるべきである。」・・・このままのことばをアベラールが言ったかどうかは定かでないが、彼の批判精神を要約している。

### <道徳感化説——贖罪論>

アベラールの贖罪論は、アウグスティヌス——アンセルムスの客観主義に対して主観主義的なものである。キリストを悪魔への賠償とする賠償説に対しては、アンセルムスと同様否定的であるが、アンセルムスと異なりキリストの死による贖罪が絶対不可欠だったということを否定する。神が人間性を取られたと言う意味での受肉は、神の愛の顕われだった。キリストは神の意志に従順であったという意味で、我々人類の模範である。人間は、このキリストにおける神の愛に触れるとき、その魂の中に神への愛が応答として湧き出して、キリストと信仰において結ばれる。キリストの十字架に示された神の愛に目覚めさせられた人間は、キリストとおなじ愛の道を歩むようと励まされ、古い自己から救われ新しい人となる。アベラールのことばを引こう。

「われわれの欲情に対する戦いの中で勇敢に耐え忍ぶために、われわれは常にわれわれの目の前に彼を捉えねばならない。また、われわれが倒れることのないために、彼の受難が常に我々の模範として役立たねばならない。」(棕櫚の日の説教 ペリカン第三巻 p205)

またアベラールは主イエスのことば「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(ヨハネ 15:13)について、「われわれがキリストについて持っている信仰によって、神はキリストにおいてわれわれの本性をご自身に結び付けてくださったという確信を通して、また、その本性における苦難によってかれはご自身が語っておられる至高の愛をわれわれに証明して下さったという確信を通して、愛がわれわれのうちに育てられる」という意味であるという。

また、キリストはその死と復活によって、我々を完全に指導し、教え、その死に方によって模範を差し出し、死者からのよみがえりによって「不死の生を示し」、その昇天によって天国の永遠の命について「われわれに教えられた」という<sup>56</sup>。

神の愛に対して応答する我々の愛が我々の罪の赦しの根拠となる。「われわれが、この義、すなわち愛により罪の赦しを得るためである。」(ローマ書注解3:22以下)もつとも、人間の功績だけでは不十分なので、キリストが父のもとで我々のためにとりなしたまうことによって補われる。アベラールは「ある手紙の中で「キリストはご自身の血によってあなたを買い取り、贖って下さったのである。世界の創造者ご自身があなたの値段になったのである。」とも言っている<sup>57</sup>。

細かく見るとたしかにアベラールは贖い主としてのキリストについても教えている。しかし、彼の強調点が人間全体の教師としてのキリストにあることは事実である。信仰とはキリストを模倣すること *imitatio Christi* である。

アベラールの贖罪論の模範としての側面は近代自由主義神学を開いたシュライエルマッハーに連なっていくものである。部分的真理としては神の愛の強調という点であろうか。中世最初の近代的自我といわれるだけあって、その神学も近代主義的なにおいがすでにする。またアベラールのキリストを模範とする愛の実践についての教えは、彼がエロイーズとの間で犯した淫らな行状を思い出すとき、はなじらむ思いがするのであるが、こうしたことはえてしてありがちのことである。強烈な禁欲主義は、いったん箍が外れるときに正反対の肉欲主義に振れてしまうものなのである。

#### 4. サン・ヴィクトルのフーゴ(Hugo de Saint-Victor, Hugh とも 1096 - 1141)と リチャード(Richard de Saint-Victor, スコットランドまたはイングランド生まれ-1173)

フーゴはフランドルあるいは ザクセンの貴族の出。幼時、ザクセンのハーメルスレーベン修道院で教育を受け、1115年、パリ近郊のサン・ヴィクトル修道院に移る。この修道院はアベラルドゥスの師ギヨーム・ド・シャンポーの創立にかかり、十二世紀には神秘主義の一本拠であった。やがて彼は同修道院の律修司祭の一人となり、1130年から没年まで同学林の神学講義を担当した。

フーゴの神学的貢献を概括すれば、それまで西方教会に知られていなかった東方ギリシャ神学の思惟と西方的思惟との総合を図ったこと。神秘主義と弁証法の結合を試み、神の

<sup>56</sup> ペリカン『伝統』第三巻 p205

<sup>57</sup> ペリカン *ibid.* p 206

純粋な直観こそ哲学の最高目的だと説いた。ベルナルド・ド・クレルヴォーの親友であり、弟子には愛の分析から三位一体を解いたリカルドゥスやペトルス・ロンバルドゥスなどを数える。トマス・アクィナスによって最も頻繁に引用された学者。主著『キリスト教信仰の秘跡について』では、 sacrament を軸に据えて、キリスト教信仰全体を組織的に叙述する。

フーゴーによると秘跡とは「身体的あるいは物体的要素であって、外面的にはもろもろの感覚によって受け止められ、何か不可視的かつ霊的な恩寵を、類比性によって代表し、制定によって指示的とされ、聖化によって包含するなものか」である。このような条件を満たすものは聖書でいえばエデンの園の命の木、ノアの洪水の虹、洗礼の水、キリストのからと血。フーゴーは救いに不可欠なものは信仰、信仰による秘跡、善行の三つだとする。

\*リチャード・ド・サン・ヴィクトル Richard de Saint-Victor の愛の分析による三位一体理解(三位一体論第三卷)

「最高善、まったく完全な善である神においては、すべての善性が充満し、完全な形で存在している。そこで、すべての善性が完全に存在しているところでは、真の最高の愛が欠けていることはありえない。・・・しかるに、自己愛を持っている者は、厳密な意味では、愛をもっているとはいえない。したがって愛情が愛になるためには、他者へ向かっていなければならない。それで位格が二つ以上存在しなければ、愛は決して存在することができない。

もしだれかが自分の主要な喜びに他の者もあずかることを喜ばなければ、その人の愛はまだ完全ではない。したがって愛に第三者が参与することを許さないことは、ひどい弱さのしるしである。もしそれを許すことが優れたことであれば、それを喜んで受け入れることはいっそう優れたことである。最も優れたことは、その参与者を望んで求めることである。最初に述べたことは偉大なことである。第二に述べたことはいっそう偉大なことである。第三に述べたことは最も偉大なことである。したがって最高のかたに最も偉大なことを帰そう。最高の方に最もよいことを帰そう。

ゆえに、前の考察で明らかにしたあの二人の相互に愛し合う者(父と子)の完全性が、充満する完全性であるために、相互の愛に参与する者が必要である。・・・

もしだれかが他者を愛するとき、一方だけが他者を愛するならば、そこには愛はあるが相互愛はない。また、もし二人が互いに愛し合い、相互に心から愛し合うならば、甲の愛情は乙へ、乙の愛情は甲へ向かい、いわば二つの異なった対象へ向かっているとき、彼らは二人とも愛情はもっているが、そこには共通な愛は存在しない。共通な愛は、二人が一心同体となって、第三者をとともに愛するところに存在する。すなわち、二人の愛は、第三者への愛の炎で一つにとけてしまうところに存在する。そこから次のことが明らかになる。すなわち、もし神に二つの位格しか存在せず第三の位格がないとしたら、神において共通な愛は存在しないであろうということである。なぜなら、私がここで問題にしている共通の愛とは、ありきたりの共通な愛ではなく、創造主が被造物に対して決して持ち得ないほ

ど最高の共通の愛であるからである。」<sup>58</sup>

## 5. ペトルス・ロンバルドゥス(Petrus Lombardus, 1100-1160or1169)

\* ペトルス・ロンバルドゥス『命題集』はラテン・英語対訳がネットに公開されている。

<http://www.franciscan-archive.org/lombardus/index.html>

アベラールのような論理力も、フーゴのような霊性もないが、後に「命題集の師 magister sententiarum」と呼ばれる。伝統的な教会の教理を聖書や教父文献から裏付けようと多くの命題を収集して、これを主要な神学的項目にしたがって配列した。第一部三位一体論、第二部創造論、第三部受肉論、第四部秘跡・終末論。これが標準教科書『命題集 Quatuor Libri Sententiarum』である。後に、この命題集に注解を加える許可が、神学を講じる基礎資格(baccalaureus sententiarum)となった。独創の才はないが、神学的教理の包括的記述ということでトマスの備えをした。アウトラインだけでもため息が出るような膨大なものである。たとえば第一巻の中だけで68部あり、それぞれの部に1-10程度の章があつて、第一巻に204章もある。

## 6. トマス・アキナス(Thomas Aquinas 1225-1274)——スコラ学の最盛期

「恩恵は自然を破壊せず、むしろこれを完成する」((*gratia non tollit naturam, sed perficit.*)

Theologiae <http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/~skawazoe/text/thomas/st/content.html>

英訳 Summa Theologiae <http://www.newadvent.org/summa/> これは便利!

参考 朱門岩夫HP「教父学」

### (1) 背景「西方の新プラトン主義、東方のプラトン主義、アラビアのアリストテレス主義」

ヘレニズムの哲学的伝統は、アウグスティヌスの影響を受けたキリスト教の修道士たちによって、修道院の中で細々と受け継がれていく。アウグスティヌスは、新プラトン主義のことばでキリスト教を理解したから、**西ヨーロッパには、新プラトン主義風のキリスト教が伝えられた**と言ってもいい。

他方、アリストテレス哲学はどうなったのか。**アリストテレスの哲学は、アラブ人のマホメットによって創始されたイスラム教によって引き継がれ、研究された。**アリストテレスは、プラトンのイデア論に対し、プラトンのイデアを現実に戻し、現実を重んじる立場を取った。普遍が個物のうちにあるとしたわけ *universalia in rem*。そこで、医学や測量術や天文学などの科学技術の盛んであったアレクサンドリアで重んじられ、イスラム教徒はこの土地を東ローマ帝国から奪った(西暦642年)。こうしてアリストテレスの哲学はイスラム教に取り込まれる。なおアレクサンドリアは、かつてオリゲネスをはじめ多くの偉大なキリスト教の学者を輩出した町だったが、今や見る影もない。

<sup>58</sup> P. ネメシエギ訳『父と子と聖霊』 p p 205 - 208 参照

イスラム帝国は、誕生してからわずか百年余りの間に、北アフリカ、イベリア半島にまで勢力を伸ばした。イスラム教は、イベリア半島を介して、西ヨーロッパのキリスト教と接触し、対決する。イベリア半島の町**コルドバ**では、イスラム教がアリストテレスの哲学を取り入れて、イスラムの教えを整備していた。西ヨーロッパのキリスト教は、イスラム教の教えと対決する必要上、アリストテレスの哲学を取り入れる。

こうして「アウグスティヌスが、プラトンのイデア論を取り入れて、いわばプラトンをキリスト教徒にしてしまったように、アリストテレスをキリスト教徒にしてしまったのは、次に述べるトマス・アキナスである。」（参考 朱門岩夫）

## （2）生涯

トマス・アキナスの思想を紹介する前に、彼の生涯を簡単にたどってみよう。彼は、イタリアのローマとナポリの間にあるアキノのロッカ・セッカ城に、城主ランドルフと母テオドラとの間に男5人・女4人の末っ子として生まれ、6歳のとき(1231年)モンテ・カシノ修道院に預けられ教育を受けた。14歳のとき(1239)ナポリ大学に入学し、ドミニコ会の影響を受けて18歳のとき(1243)、ドミニコ会に入会した。しかしこの知らせを聞いた両親は、猛反対し、彼を強引に拉致してロッカ・セッカ城に連れ帰り、1年間ほど彼を幽閉した。そのとき、両親は、トマスに修道生活を諦めさせるために彼の部屋に美女を送り込んで誘惑させようとしたが、結局、彼の決意は変わらず、トマスがドミニコ会に入ることを許した。そこで彼は、20歳のときパリのドミニコ会に入り、パリ大学で神学を学んだ。その後、パリ大学を始めとする各地の究機関で神学の研究と教授活動に一生を捧げ、49歳の若さでなくなった(1274)。彼は、死の三日前に、「私は、夜を徹して学び、説教をし、教えた。それはすべて、あなたへの愛のためでした」と言ったと伝えられている。彼は、神への愛に駆られ、学問研究に燃え尽きたのである。

彼の残した著作は膨大で、中世哲学の総決算であり最高点だった。トマスは、壮大なゴチック様式の思想を作り上げた。主著は、『**神学大全**』(Summa Theologiae)である。

## （3）トマスの思想

トマスが取り組んだ最大の課題は、アリストテレス哲学で理論武装したムスリムに対抗するために、キリスト教の神学をアリストテレスの哲学を使って説明すること、しかしその前に、そもそもキリスト教とは関係のないアリストテレスの哲学を使用することがキリスト教にとって問題のないこと——キリスト教の信仰とギリシア哲学の理性との間には何の矛盾もないこと——を証明することだった。なお、信仰とは何事かを無条件で認めることであり、理性とは、物事の根拠(由来)を探求する思考能力である。

トマスは、どのようにしてアリストテレス哲学とキリスト教信仰の対立を解消したのであろうか。トマスは、この対立を解消するのに、アリストテレスの哲学とキリスト教との類似点を指摘することから始めた。

アリストテレスは、<この地上の諸物事は、形相と質料から成り立っており、形相が物事の本質や運動を決める>と述べ、<万物は純粋形相を頂点にして秩序づけられている>

としていた。彼は、この<純粹形相を、質料を一切もたず、おのれ自身を完成させた完全現実態で、みずから動くことなく他のものを動かす不動の動者とか第一原因>と呼び、またある時は、この<純粹形相を神>とも呼んでいた。アリストテレスにとっての神は、万物の創造者とは言わないまでも、みずから動かずして世界を動かす第一原因だった。トマス・アキナスは、アリストテレスのこの説に注目した。キリスト教の神も、万物のいわば第一原因だったからである。

トマスは、キリスト教の信仰とアリストテレスの哲学とは重なり合う面があり、この重なり合う面だけに注目すれば、アリストテレスの哲学をキリスト教の中に取り込むことに何の問題もないとした。トマスによれば、我々は、キリスト教が無条件で信じている信仰上の真理の幾つかを、アリストテレスの哲学を使って理性的に証明できる。

しかしながら、トマスは、アリストテレスがキリスト教の信仰内容を書き記した聖書を知らなかったために、彼の哲学は不完全であると言っている。たとえば、アリストテレスの第一原因は、みずから動かずして、他のものを引きつける不動の動者であるが、人間の言葉を使って語りかけることはない(非人格神)。他方、キリスト教の神は、人間の歴史に積極的に介入して語りかけてくる人格的な存在である。トマスによれば、アリストテレスの哲学は、この第一原因を人格的存在として捉えることができなかつた点で不完全なのである。したがって、アリストテレスの哲学は、キリスト教と重なり合う面があると言っても、キリスト教の信仰の真理には、彼の哲学には及ばない(はみ出した)部分があり、この部分は信仰(それを書き記した聖書)によって補うしかないのである。

たとえて言うと、キリスト教の信仰が大きな円であるとすれば、アリストテレスの哲学は、その中に描かれたより小さな円だということになろう。共通部分は、信仰によっても理性によっても近づくことができる真理であるが、共通しない部分は、ただ信仰(聖書)によってしか近づくことができない。トマスは、キリスト教の信仰が対象とする範囲と、人間の理性が対象とする範囲とを整然と分け、理性の限界を示したと言える。

アリストテレスは、世界という書物を読んで、理性を使って世界の作者に関して幾つかの真実に到達した。しかしその世界の作者に関するもっと立ち入った情報は、神の自伝すなわち『聖書』を信じて、それから得るしかない。

この点で、トマス・アキナスの理性は、アウグスティヌスの理性と同様に、信仰によって補われなければならなかった。神に関する情報を得るには、理性の道と信仰の道があるが、両者は同等ではなく、後者の方が優っており、最終的には理性の道は、信仰の道によって補われなければならない。トマスの残した有名な言葉に、「恩恵は自然を破壊せず、むしろこれを完成する」(『神学大全』第1部第1問第8項(*gratia non tollit naturam, sed perficit.*)というものがある。この場合の恩恵とは神からの啓示(神から与えられた情報)であり、自然とは人間に生まれつき備わっている理性のことである。完成するとはまさに欠けた所を補うという意味であるとすれば、この言葉は、キリスト教の啓示は、理性とは矛盾するものではなく、かえってこの理性を補ってこれを完成することを意味している。

トマス・アキナスは、キリスト教信仰とアリストテレス哲学とが決して互いに矛盾するものではないことを証明した上で、アリストテレスの哲学を駆使し、信仰上の諸問題や哲

学上の諸問題のほとんどすべてに、答えてしまった。彼は、ヨーロッパの中世が生んだ最高の頭脳だった。中世哲学は、トマス・アキナスに到ってその最高点に達した。

しかし最高点に達したということは、次に来るのは衰退である。

## 7. ボナヴェントゥーラ(1217年ごろ-)の霊性

中世スコラ学の最盛期、トマス・アキナスと双璧とみなされた。彼の『命題集注解』の英訳はネット参照。<http://www.franciscan-archive.org/bonaventura/sent.html>

### (1) 生涯

幼少のとき、重病で命あぶないとき、アッシジのフランチェスコにとりなしの祈りをしてもらい、一命を取り留めた。このときからボナヴェントゥーラとフランチェスコと園『小さな兄弟たちの修道会』とのつながりができた。

長じてパリに出て学芸学部に学び始める。このときにはアリストテレスが神学構築の方法論として取り入れられ始めていた。パリ司教ギョーム（アベラルの師）、アレクサンデル（ボナヴェントゥーラの師）、アルベルトゥス・マグヌス（トマスの師）が先駆者たち。『小さな兄弟たちの修道会』にアレクサンデルが入会し、ボナヴェントゥーラもフランチェスコ会に修道士誓願をして入会し、アレクサンデルに学ぶ。アレクサンデルの死後、ボナヴェントゥーラが指導的立場にされ、1253年パリ大学神学部フランチェスコ会学院で教授として教鞭をとるようになる。1257年にはフランチェスコ会総長職に選出される。

フランチェスコ死後30年にして修道会内部に路線問題で分裂が起こりつつあった。彼はフランチェスコの霊的体験のアルヴェルナ山にこもって主との交わりをする。このとき、不朽の名著『魂の神への道程』を記す。

山から下りると修道会総会で統一的な会の憲法をさだめ、フランチェスコの大小の伝記をまとめて公式のものとするので、修道会の分裂問題に解決。

### (2) 霊性と神学

当時、神学界はアリストテレス主義導入にともない、極端なアリストテレス主義による混乱が生じていたが、立場は異なるがドミニコ会のトマスとともにキリスト教信仰の論理と倫理の弁証にあたった。

ボナヴェントゥーラは、アンセルムスからアウグスティヌスそして新プラトン主義に淵源を求めた。信仰および神学と、理性および哲学との根本的相違から出発する。『哲学は神学が始まるまさにそのところで終わってしまう。』理性もまた神の賜物としてよいものであるが、理性は神の栄光を仰ぐには足りないとする。彼は被造物を「何か超越的なもの」の象徴と見たが、これらから神の存在証明をすることは彼の関心の外にあった。神の存在は理性的な証明のことがらではなくて、信仰告白の内容であり賛美することにある。「われわれの心のあるがれは、神を証明することではなく、神を見奉ることである」

神にいたる三つの道があるが、その目的とするところはトマスがしたような証明ではなく、神のうちに安らぎ、憩うことである。

第一の道は、神の存在はすべての理性的被造物にとって生得的にあらかじめある真理であるという確信。「確かに、人間には神を完全に把握することはできないが、しかも何人も神の存在に無知であることは許されない。」

第二の道は、被造物においてその痕跡である神を観想する。それは「証明」でなく、フランチェスコがしたように、小鳥や太陽や月を味わいながら、神を観想する自然的敬虔を意味している。

第三の道は、神の存在は自ずから証明されていることである。神という語が発せられるとき、最高の真理としての神が存在しないことは不可能である。「もしも神が神であるならば、神は存在する。Si deus est deus, deus est.」アンセルムスと同じ線に立っていることがわかる。

ボナヴェントゥーラは神学の最終目標は、イエスの十字架の苦難を観想することによる魂の深い眠り、やすらぎに至ることである。「超脱」への道の三段階がある。

第一は「浄化 purgatio」であり、自分の魂の惨めな状況を瞑想し、ゆるしの恵みを求める。

第二は「照明 illuminatio」真理への透徹。

第三は「完全 perfectio」。罪ゆるされてキリストとの一致にいたる。

「神への接近が可能になるのは、有限な被造物と絶対なる創造主の仲保者なるキリストをほかにしてない。この神人の十字架の観想において魂は確かさと安らぎを見出し、キリストとともに十字架の上で眠りに陥り、至福の暗黒のなかで知性もその働きを中絶する。この無知の知にあって目さめているのはただ純然たる愛そのものだけである。こうして魂は神の愛の体験において神と一つとなる。」(出村彰 p 253)

「我々の精神は、自己の外に、痕跡を通しかつ痕跡のうちに、また自己のうちに、像を通しかる像のうちに、そして最後に自己の上に、我々の上に輝いている神的光の類似を通しかつその光そのもののうちに・・・神をしかと観た後に、ついに第六の段階として・・・イエス・キリストのうちに、・・・この感覚的世界のみならず、自己自身をもまた超越し超出していく。この過ぎ越しの旅路において、キリストは道であり、門であり、はしごであり・・・秘儀なのである。」(魂の神への道程 7章 1節)

## 8. ドゥンス・スコトゥス(Johannes Duns Scotus1264or65or74-1308)

### 精妙博士 doctor subtilis———普遍実在論・主意主義

若くしてフランチェスコ修道会に入り、司祭となり、オックスフォードで学んだ後、パリに遊学、イギリスとフランスを何度か行き来する。

フランチェスコ修道会であるから、アリストテレスでなく、アウグスティヌス—アンセルムス—ボナヴェントゥーラのプラトン主義あるいは普遍実在論者の位置にある。

神の存在証明について複雑精妙な論述をするが、ポイントは、「無限者の存在を実証に基づいて証明することは、そもそも無限の概念そのものからして不可能であるが、しかも『被造物とのかかわりからという事実から初めて、このような提題をすることは可能だ』。」という。

スコラ的な主知主義からいえば、無限ということから論理必然的に存在が演繹されると

いう議論になるところである。存在には観念の中のみ存在するものと、観念界とともに現実界に存在するものとがある。しかるに、無限者が観念の世界にのみ限定されているとすれば、それは無限ではないから、無限者は必然的に現実界にも存在するというアンセルムス流に本体論的照明をすることができよう。

しかし、スコトゥスの線に沿えば、無限者を有限者のことを手がかりとして証明すること自体、不可能であるとも考えることもできる。有限者は無限者をとらえきれない、すなわち、無限者は有限者から自由であるから。意志は他の外的な要因に束縛されないので、知性よりも優位に立つ。神が大いなるものとするのは、この絶対的に自由な意志である。主意主義である。「意志以外には意志における全意欲の原因は存在しない」（「オックスフォード講義録」Ⅱ命題25）「意志が意志であるという以外に、この方の意志がこのことを欲した理由は存在しない」（Ⅰ命題8問題5,24）

こうなると哲学と神学とは分裂することになる。哲学とは、ある課題について、知性の働きによって論理必然的について説明することを求めていくのである。たとえばアンセルムスの『クール・デウス・ホモ』のように。ところが、神の自由意志はその論理必然性を超えて働くとすれば、哲学的営みはほとんど無効となる。「キリストの受難がわれわれの救済にとって有効であるのは、ただ神がそれをそういうものとして指定し、したがってまた恩恵の授与、すなわち秘跡の設定にとり有効なものとして受納しようとしたもうかぎりにおいてにすぎない。」（Ⅲ命題19,20）トマスにおいて達成された信仰と理性の統合、神学と哲学の統合は、スコートゥスにおいてさらに精妙に表現されたかに見えたが、ここにおいて逆に破れが見えてくることになる。

さらにスコートゥスの思想はウィリアム・オブ・オッカムに受け継がれる路線は、新路線 *via moderna* と呼ばれ、トマスの路線は旧路線 *via antiqua* と呼ばれるようになる。ルターが若い日に学んだエルフルト大学は前者の牙城であった。ルターは「アリストテレスなくしてのみ、我々は神学者となることができる。」と言ったが、その背景には主意主義的な神観がある。パスカル風に表現すれば、アリストテレスの論理でその存在を必然的に証明されたかに見えた「哲学者の神」は、生ける神ではなかったということになる。

## 9. ウィリアム・オブ・オッカム(William of Occam1285or1300-49or50)

-----主意主義・ノミナリズム・スコラの統合の崩壊

(1) 生涯 1309年—1315年までオックスフォードに学び、聖書を講じ、1317年からロンバルドゥスの命題集を講じる資格を得て、神学講師となるが正規の教授職とはならなかった。それは彼の神学上の特異な主張による。1324年彼はその主張のゆえにアヴィニョンの教皇庁(ヨハネス22世)に呼び出され、1328年までフランチェスコ修道会に住まわせられる。

当時、フランチェスコ会は会祖の清貧の思想をめぐって論争があった。彼は絶対無所有を主張したので、ヨハネスによって追放され、ミュンヘンのドイツ皇帝ルートヴィヒ4世に保護を求めて亡命する。以後、その死にいたるまでミュンヘンで絶対無所有の厳修派の

リーダーとして活動。しかし、ルートヴィヒの死によって立場が危うくなり、彼はフランチェスコ会総長の印璽を返し、クレメンス教皇に前言取り消しをする。その直後、オッカムは黒死病で死去。

## (2) 神学:主意主義、唯名論

オッカムはスコトウスから主意主義を受け継いだ。スコトウスの实在論についてはこれを批判して、唯名論 nominalismを確立した。

主意主義について。主意主義 voluntarism とは主知主義 intellectualism に対することば。实在の根底をなす原理を知的なもののみとするのが主知主義であり、意志的なもののみとするのが主意主義である。オッカムにとって活ける神は全知全能であり、ただ神のみが自立にして自存者である。「神が意欲されることはすべて正しく適切である。端的に神がそれを意欲されるからである。」(オッカム)

唯名論について。オッカムは「何事も必然によることなしに確かだと断言してはならない。」という後世の人が「オッカムのかみそり」と呼ぶ認識の原則を立てる。「ある命題が真実であると確証したり、ある事物が存在すると確信したりすることが我々に許されるのは、それが自明であるか、啓示、経験あるいは啓示された真理か、観察によって確認された命題からの論理的帰結として、そのようにせざるをえなくなる時のみである。」(祭壇の秘跡について)。しかるに、普遍的なものは認知する者の思考のなかに存在するだけであって、反対に、その外には普遍を観察することはできないのである。ゆえに、普遍は实在しない。

オッカムの唯名論は後世に大きな影響を及ぼすことになる。たとえば「教会」という言葉は、具体的にある礼拝堂で礼拝に参加する会衆にだけかぎられ、それを超えてより包括的な全体教会というのは単なる呼び名にすぎず、実体はないことになる。これは教皇よりも教会会議が重要という哲学的・神学的根拠となっていく。

## 結び

普遍論争においてドゥンス・スコトウスそしてウィリアム・オッカムの唯名論が出現、普及はヨーロッパ中世という世界を揺るがす理論となる。中世ヨーロッパとは、霊的領域におけるローマ教皇と、世俗的領域における神聖ローマ皇帝という二つの普遍的権威の緊張関係によって成り立っていたからである。普遍ではなく、個物(特殊)が優先し、普遍とは名目上のことにすぎないという唯名論の主張は、聖なる領域はローマ教皇という普遍的な権威が、俗なる領域においては神聖ローマ皇帝という普遍的王権がヨーロッパ世界を統治するという、中世的な権威の構造もまた名目上のことにすぎないという主張の理論的根拠となる。

唯名論は、世俗領域にかんしていえば、各国の独立の正当性の理論的根拠を提供する。霊的領域については、ローマ教皇の権威よりも具体的な諸教会の意見を集約した教会会議のほうが優先するという理論的根拠を提供する。

また、アベラールのうちに胚胎し、スコトウスにおいてことばにされ、オッカムに継承された主意主義は、哲学と神学の区別という事態を来たらせることになる。改革者ルター

は「アリストテレスを忘れなければ神学者たりえない」と言ったことに響いていく。

## XXII 中世の崩壊・教皇庁の捕囚と大分裂

中世の崩壊を言おうとすれば、そもそも中世というものがどういうものであり、その成立条件を述べなければならぬ。その条件が壊れたことによって、中世が崩壊したと言わねばならぬ。

### 1. 経済

都ローマは後背地に、その人口を養うに十分な農業地帯を持っていなかったし、また、地中海世界の諸都市はいずれも類似の状況にあった。そのこともあって、古代においては地中海の交易と貨幣経済が発達していたが、ローマ帝国が崩壊し、さらに七世紀イスラムの地中海制圧によって、地中海貿易はできなくなりヨーロッパの商業は衰退した。産業は農業による自給自足を基本とする封建制となった。しかし、十字軍(1096年に第一回)の影響で、地中海貿易が徐々に回復し、中世の終わりごろになると貨幣経済が主要な社会の構成要素なる。地中海貿易によりブルジョワ階級が富を蓄え、ベネツィア、ミラノなど商業都市が栄える。彼らブルジョワの利害は、封建領主たちの利害と衝突する。

封建領主である貴族階級は、領内で自給自足することを望んでいたもので、領地を通る者たちには通行税をかけたが、こうした封建領主たちの行為はブルジョア商人たちは人々の交易を妨げるものだった。商人たちが望むのは、封建領主たちの小競り合いを抑制し、自由な交易が可能な大きな市場を実現する強力な国王の出現である。そこで、ブルジョワ階級は国王の権力の強化を支援するようになる。

こうして、国王は封建領主たちを抑え込むための軍事力を維持する軍資金をブルジョワ階級から調達するようになる。中世後半に専制君主が中央集権政治を推し進めることができたのは、ブルジョワ階級の出現と結びつきの強化と関係している。こうした歴史の流れから、近代諸国家が生まれてくる。まず、フランス、イングランド、スカンジナビア諸国に中央集権国家が生まれる。ドイツ、イタリアの統一はずっと後のことである。

<十字軍→地中海貿易復活→ブルジョワ階級出現→専制君主強化・封建領主弱体化>

### 2. 政治的背景・・・近代諸国家出現と百年戦争と教権弱体化

以上のような流れで国家意識というものが目醒めてくる。それまで人々は自分はフランス人だという意識はなく、それぞれが住む封建領主の支配地や、その町の出身者であるという意識を持つのみだった。私はブルゴーニュ人だとか、シャンパーニュ人だとか。明治開国まで、この列島の住民たちが日本人という意識はなく、信州人だとか薩摩人だとか長州人だという意識以外持っていなかったのと同じである。しかし、専制君主の出現によってフランス国が自覚され、その国家の民はほかの地域の人々とは異なる共通するものを意

識するようになる。専制君主が出現して国家意識を強く持つようになるのは、フランス、イングランド、スコットランドである。そうすると、他のまだ専制君主の出現していない地域でも、それに類似する意識を持つようになる。国王はいなくとも、スイス人、ドイツ人といった意識を持つようになるわけである。かつてイスラエルが王を欲したように、あるいは江戸時代末に日本が強力な王としての天皇を欲したように、彼らも専制君主を求めようになる。

このように個々の国家が伸びてくると、教皇の権限がヨーロッパ全体を支配しているという普遍主義の理念と衝突し、教皇庁を弱体化させることになる。教皇庁がフランス国王になびけば、イギリスから反発され、イギリスになびけばフランスから反発される。いずれにしても教皇庁の権威は落ち目になっていく。(それは神学における普遍と個物のいずれが優先するののかという普遍論争の背景であり、教会政治において教皇庁の権限と教会会議の権限とどちらが優先するかという議論の背景である。)

14-15世紀、フランスとイングランドと、その他多くの関連諸国が戦ったのが**百年戦争(1337年-1453年)**である<sup>59</sup>。イングランドのエドワード三世が、フランス国王の王座も自分のものだと主張し、かつスコットランドの王座も自分のものだと主張してスコットランド侵略を開始すると、フランス国王はスコットランドを支援する。そこでイングランドはフランスに深く侵攻し、フランスは危機的状況に陥る。この時代に出現したのが、オルレ안의少女ジャンヌ・ダルクである。彼女の出現と数々の戦勝によってフランスは息を吹き返したが、彼女はイングランド軍に捕らえられ、魔女・異端として生きながら火あぶり処刑されてしまう。しかも、フランス国王は彼女を見捨てた。ともかく、フランスはカレー市をのぞき英国軍を大陸から追い出して1453年戦争は終わった。

百年戦争の間、かなりの長い期間、教皇はアヴィニョンに住み、強力なフランスの支配下におかれた。そのためイングランドはアヴィニョンの教皇庁を敵であると思なすようになり、対立教皇を立てるようになる。こうして教皇庁は文レスしてしまう。いずれにせよ、フランス、イングランド、スコットランド、そして他の地域の諸民族もそれぞれに国家主義的感情を強く持つようになり、結局、教皇庁は普遍的な権威を持つという主張は弱められてしまう。

<専制君主強化→国家主義強化→教皇庁の権威低下>

### 3. ペスト大流行 1347-1350AD

(1) 十字軍で交易が盛んになった結果・・・

十字軍、対イスラム戦争によって交易が盛んになったことはまた恐るべき結果をもたらすことになる。特にジェノア人がイスラム(ムーア人)を破ってジブラルタル海峡をキリスト教徒の船に解放すると、交易が盛んになった。北ヨーロッパと地中海の交流が盛んになる。

---

<sup>59</sup>百年戦争 戦った期間は、おおむね次のとおり。1339年～1340年、1341年～1342年、1345年～1347年、1355年～1360年、1369年～1375年、1413年～1453年、従って56年休戦し、58年戦争をしていた。

しかし、交易が盛んになるということは、病気の伝染も盛んになるということの意味する。

「1347年9月、シチリアの港に、珍しい病気が出た。急に発病し、リンパ腺がはれ、ノドが渴いた。まもなく高熱で意識不明となり、肌がカラカラとなり、ついで黒紫色に変色した。発病から数日以内に、患者は死んだ。海港で出たからには、外地からの伝染病であろうと予想された。じっさい、コンスタンティノーブルや黒海地方で、おなじ病気が猛威をふるっていたという。

病気は、たちまち船員から、仲間や家族にうつった。感染力はすさまじく、人々はただあぜんとするだけだった。ペスト（黒死病/black death, peste noire）の侵入であった。シチリア島に始まり、ジェノヴァとマルセイユへ。翌1348年には、アルプスをこえてドイツとフランスへ。そしてイングランド、スペイン、ドナウ川沿岸もすぐに感染圏に組み込まれた。血気盛んな青年も、発病すると数日以内に、ときにはその日の夕方にも屍（しかばね）となった。

ペストは、ペスト菌の宿主であるネズミが、ノミに菌を与え、ノミにかまれた人間が発病する。もっとも、そのメカニズムは、はるか後世になってからわかったことである。また、リンパ腺から肺に入ったペストは、呼吸を通して空気感染するのだ。

1350年に、一応の終結をみるまでに、全ヨーロッパは黒死病におかされつくした。人々は恐れおののいて、神の怒りを感じ、悔恨の行列を組み、鞭で自分の体をたたいた。治療法も予防法も知れず、ひたすら祈り、そして死体や患者を遠ざけ、ところによってはユダヤ人を病気をまきちらした張本人として血祭りにあげた。」<sup>60</sup>

近年、ヨーロッパ中世の黒死病はペストでなく出血熱によるものという説が発表されているが<sup>61</sup>、実証研究によってやはりペストによるものであることが確認されている<sup>62</sup>。

ペスト大流行は、教会にも重大な影響を及ぼす。三年にわたって大陸全体に大流行したペストで全ヨーロッパの人が三分の一死んだと言われる（2500万人くらい）。三年後には沈静化するが、以後10年ないし12年の周期で繰り返し流行する。

---

<sup>60</sup> [http://www.actv.ne.jp/~yappi/tanosii-sekaisi/05\\_tyusei/05-07\\_plague.html](http://www.actv.ne.jp/~yappi/tanosii-sekaisi/05_tyusei/05-07_plague.html)

<sup>61</sup> <http://www.shiga-med.ac.jp/~hqanimal/zoonosis/zoonosis159.html>

<sup>62</sup> 「Suicide PCR（自殺PCR）」法でペスト菌DNAを検出 by Kristina Wasson and Michael D. O'Neill  
「黒死病」と呼ばれ、甚大な被害をもたらした中世の世界的流行病の原因が、ペスト菌(*Yersinia pestis*)だったことを、フランスの研究者たち Didier Raoult 博士と Michel Drancourt 博士が DNA レベルで初めて示した。彼らはこの研究のために、「Suicide PCR(自殺PCR)」と名付けた、新しいPCRの手法を開発した。ヨーロッパでは、黒死病のために14世紀に1700万人から2800万人が死亡したとみられている。科学者たちは、新しいPCR手法とABI PRISM® 377DNAシーケンサによるDNA配列決定によって、黒死病の犠牲者と推定される3人の菌の菌髄から、ペスト菌に特有のDNAを検出した。これらの犠牲者の骨はフランスの共同墓地から掘り出され、死亡時期は世界的大流行の期間と推定されている。中世の黒死病の原因をペスト菌とする根拠は、これまでは主に歴史的資料から分かる黒死病の特徴と、現代のペストの特徴との類似性によるものだった。しかし、この仮説を支持する決定的な分子レベルの証拠はなかった。

ペストは、黒ねずみが中間宿主となり、のみが媒介となって広がる。症状は悪寒・ふるえとともに突然高熱を出し、死亡。皮膚が黒くなるので黒死病とも呼ばれる。ペストは毛皮のついたのみ、あるいは船蔵のねずみが運んできたと考えられる。

では中世以前にはペストはなぜ大流行せず、この時期、特に大流行したのか。背景には農業革命による大開墾がある。ペストはねずみが中間宿主である。ねずみの天敵は森に住むさまざまな獣である。ところが、11世紀から13世紀、ヨーロッパでは森が切り開かれ次々と農地が作られた。畑はねずみにとって快適な住家であるが、森の野獣たちは住めない。なぜ11－13世紀に大開墾が実現したかと言うと、農業技術の革命があったからである。中世の農業革命とは蹄鉄の使用、農耕における馬の使用、有輪重犁、三圃制農法、水車の普及。

## (2) 気候変動の背景

「14世紀後半のヨーロッパには疫病の壊滅的伝播を可能とするあらゆる条件がそろっていたと言えよう。前にも述べたような中世盛期の繁栄をもたらした11世紀後半からの気候の温暖化(気温上昇と適当な降雨など)は過去のものとなり、低温と多雨、日照不足のため食糧生産は停滞し、ヨーロッパは慢性的な飢餓に苦しめられていた。」(出村 p 359)

民衆は劣悪な食糧事情に置かれ、公衆衛生には深刻な影響が出ていた。栄養不良に陥っていた人々はペストの餌食となった。

ローマ帝国が衰退した背景に、気候の寒冷化があったことは第一回に学んだ。気候の寒冷化により、北方騎馬民族は南下した。すると、民族進入に対応するために帝国の軍事支出が急増した。また、作物が不作続きでやはり税収が不足したということである。ローマ帝国は、温暖化により膨張し、寒冷化により収縮したと言えそうである。

中世の崩壊にも気候の寒冷化ということがあった。気候変動、地震、火山の爆発、疫病といった外的要因が時代の大きな変化をもたらすという歴史研究はまだまだ発展途上であるが、実は、非常に大事な観点なのではないかと考える。たとえば江戸幕府が倒れた背景には各地に頻発した巨大大地震と気候変動とそれにもなう飢饉があった。

### <現代への適用>

現代は地球環境について未曾有の危機的状況がある。ここ10年間で地球温暖化にブレーキをかけられるかどうかがかぎとなっている。参照：田中優『地球温暖化／人類滅亡のシナリオは回避できるか』(扶桑社新書)。

もう一ついえば原発震災の問題である。浜岡原発はM8程度の東海大地震の想定震源域の中央に位置しており、偏西風5メートルの吹く季節に5基のうち一つが破綻するだけで、6-8時間で静岡から首都圏はチェルノブイリ化し、3000万人は難民となり、200万人は死ぬとシミュレーションされている(京大原子炉実験所)。東海大地震の周期は過去のデータからすると110年から150年だが、今年2007年は前回の安政大地震から154年目にあたる。すでに、いつ巨大地震が起こってもおかしくない時期にはいつている。文部科学省地震調査委員会は2005年1月1日を基準点として、30年以内に東海地震が起こる可能性を87パーセントとしている。

### (3) ペスト大流行の社会的影響

村や町が全滅あるいは人口の10分の9が死んでしまい、中世半ばまでの文献に出てくる町の名称や地名が、ペスト以後の中世後期には歴史上から存在しなくなっているのがしばしば見受けられる。ヨーロッパ全人口の三分の一が死ぬ。これだけ人が死んでしまうと、伝統的な社会制度や組織が維持できず、社会構造が人口減を理由に大きく変化した。

封建的な荘園経営の崩壊がもたらされる。ペストで農業労働者が激減した結果、土地にいついた農奴が減り、領主は荘園を維持するためにやむなく賃金で農民を雇うようになり、また独立自営農も増えていく。賃金労働者の増加は、まさに農奴による封建社会の構造の崩壊つまり中世社会の崩壊を意味する。

教会について言えば、ペストは教会関係者の死亡率が一際高かった。彼らは他の職種に比べ、多くの人と接触する機会が多く、疫病により慈善的作業が増大したのでペスト患者と接触する機会が増大したため。その補充として十分な訓練や知識を施されず、教会関係者としての意識の低い者が多数採用される結果となり、教会関係者の不正行為が増大し、教会の威信が大幅に低下した<sup>63</sup>。

社会的上層階級が占めていた閉鎖的なギルドや市政の運営のような組織にも、欠員により、本来なら入れるはずのない下層階級からの成り上がりが参画したりするようになった<sup>64</sup>。彼らは中世的・封建的伝統を維持するような人々ではない。彼らは、合理的に新しいことを企画していくようになる。

宗教的・思想的影響としては、次々に身近な人々が死ぬという状況では、知識階級のなかでも宇宙のコスモスや、宇宙の神秘を把握できるとしてきた理性に対する信頼感は薄れる。庶民にも迷信がはびこり、人生は死への備えであるという見方が一般的になる。社会には恐怖が満ち満ちていた。

## 3. 教皇庁のバビロン捕囚と大分裂——政争の道具と随した教皇庁

### (1) アナーニ事件 ベッテンソン p 178

十字軍遠征の失敗で、十字軍を提唱し推進したローマ教皇の権威は大きく揺らぎ始めていた。最後の十字軍の撤退から四半世紀後に即位した教皇ボニファティウス 8 世は、教皇至上主義者だった。

他方、フランス王フィリップ 4 世は英国をはじめとする対外戦争で財政難を招き、その解消のためにフランス国内の聖職者に課税した。これに対して教皇は 1296 年の教勅「クレリキス・ライコス」で、教皇の許可なしの聖職者課税を認めない態度を示した。これに対してフィリップ 4 世はフランス国内の聖職者にローマ教皇庁に対する納税・献上を禁止した。

フランス王フィリップ 4 世は 1302 年 4 月にパリ、ノートルダムで聖職者・貴族・平民からなる三部会を開催し、国内の諸身分から支持を集め、フランス国内の聖職者への課税を

<sup>63</sup>クラウス・ベルクドルト著 宮原啓子/渡邊芳子訳 ヨーロッパの黒死病 国文社 1997年

<sup>64</sup>村上陽一郎『ペスト大流行——中世の崩壊』岩波書店参照

承認させ、教皇を非難した。

対抗してローマ教皇ボニファティウス 8 世は、同年 11 月にローマで「ウナム・サンクタム」を発し、ローマ教皇権の至上性を主張した。「霊的な剣も現世的剣も、両方とも教会の権内にある。(中略)前者は祭司によって用いられ、後者は王や長たる人々によって用いられるが、しかし祭司の意志にしたがいその許可によって用いられるべきものである。そこで(中略)現世的権威は霊的権威にしたがうべきものである。(中略)すべての造られた人間にとって、ローマ教皇に従属することが救いのためにまったく必要であることを、われわれは宣言し、明記し、定義、発表する。」(バッテンソン p178)

フィリップ 4 世はフランス国内の聖職者をルーブルに招集し、ボニファティウス 8 世を異端と買官と奢侈的生活があると非難し、教皇としての資格に欠けると断じ、廃位を要求した。これに対して教皇は、フィリップの破門をもって応え、両者の関係は決定的になった。

フィリップの意を受けた宰相ギヨーム・ド・ノガレは、イタリアに軍を派遣した。ボニファティウスは生まれ故郷の山間の小都市アナーニに逃げ込んだが、捕らえられた。数日で教皇は解放されたが、68 歳の教皇は、この一連の事態に怒りと失望で傷心し、その 3 週間後に憤死した。

この事件の結果、教皇権力の衰退と王権の伸張を印象づけ、時代は近世の絶対王政に向かっている。次のローマ教皇はフランス王との和解を図り、事態はフランス王優位のまま收拾へとむかった。これにより、フランスではカトリックの枠内に留まりながら国家が教会を統制下におく独自の体制が形成されていくことになる。これをガリカリズムという。

## (2) 教皇庁のバビロン捕囚 (アヴィニョン捕囚)

ボニファティウス 8 世(1294-1303)が、フランス王フィリップ四世によるアナーニ事件の後、憤死してのち(1303)、次の教皇ベネディクトゥス 11 世はフランスとの和解を模索したがフィリップ四世は前教皇をさばくための教会会議開催を求めたことは拒否。悩みのうちに死ぬ。

次の教皇クレメンス五世は、フランスの道具に成り果ててしまう。彼の時代 25 人の枢機卿を任命したがそのうち 24 名はみなフランス人だった。テンプル騎士団は十字軍時代に創立された武装修道会だったが、その財力と権力はずば抜けており、絶対王政を目指すフィリップ 4 世にとっては目の上のたんこぶだった。フィリップ 4 世は彼らを異端者として告発し、教皇クレメンス 5 世に圧力をかけた。教皇は唯々諾々とテンプル騎士団を弾圧し、彼らは無抵抗のまま逮捕され激しい拷問にかけられた。多くのものは拷問に耐えたが、わずかな者は、自分たちはキリスト教信仰に反する秘密結社であり、偶像を礼拝し、男色を行ない、十字架につばをかけているという途方もない自白をさせられた。多くのテンプル騎士は終身刑に処され、全財産は没収される。テンプル騎士団の総長ジャック・ド・モレーは公衆の面前で罪の告白を要求されるが、この告発はすべて偽りであると言明し、ただちに火刑に処せられた。

フランス王フィリップ 4 世の道具と成り果てた教皇クレメンス 5 世は、1309 年から教皇

庁をフランスとの国境に位置する教皇の所有地アヴィニョンに移り住む。以後、70年ほど教皇はローマ司教としての名は持ちながらも、アヴィニョンに住む。この時期を「教会のバビロン捕囚」という。クレメンス5世は1314年アヴィニョンで没する。

このあとの教皇たちをざっと。ヨハネス22世(1316-34)、ベネディクトゥス12世(1334-42)、インノケンティウス6世(1352-1362)は霊的指導力なし。ウルバヌス5世(1362-70)は改革を目指すも断念。グレゴリウス11世(1370-78)は1377年1月17日ローマに帰った。

### (3) その影響と教皇庁の大分裂(シスマ)

このシスマの時代は、百年戦争が戦われていた時代である。教皇がフランスの道具となったので、フランスを敵として国々は教皇庁に敵対意識を持つようになった。

教皇ヨハネス22世は金儲けに奔走した。司教、大司教に叙任された者は、パウリム受領料として莫大な上納金を求められ、最初の年の聖職禄は教皇庁に上納させた。できるだけ頻繁に司教、大司教を転任させては初年度聖職禄をアヴィニョンの教皇庁のものとした。かつてグレゴリウス7世の改革で改めようとした聖職売買も横行した。

グレゴリウス11世は帰還後、まもなく死没。次に新教皇ウルバヌス6世(1378年一)が着任する。彼は身分の低い出身で、厳格な生活をしてきた人物。誰もが改革を望んでいたが、同時に、抵抗勢力も強かったので、用心深さと知恵が必要だった。しかし、ウルバヌス6世は用心深さはなく、強烈かつ急進的に事を進めようとした。不在司教制度廃止を宣言、贈物を受けた高位聖職者は聖職売買をしていると非難、枢機卿をフランスから取り戻すために多くのイタリア人を多数派としようとした。

かくて大多数の枢機卿が反ウルバヌスとなり、新教皇クレメンス7世(1378-1394)を選出してしまった。その名はアヴィニョン時代を継承する意思の現れである。フランス、スコットランドはこのアヴィニョン在住の新教皇を支持する。このローマ、アヴィニョンに大分裂した教皇庁は一代の争いに終わらず、コンスタンツ公会議(1415-1417)で解決するまで1417年まで続く。教皇庁の威信は地に落ちた。このため諸国は、ローマ教皇庁につくか、アヴィニョンの教皇庁につくかで分裂した。フランス、ナポリは当然アヴィニョンにつき、イングランド、ボヘミア、ドイツなどはローマを支持した。かくて中世ヨーロッパを結ぶべき教皇庁の分裂によって、中世世界も分裂してしまった。

教皇庁はもはや自浄能力を持たないものとして見放され、教会改革への渴望が出てくる。このようにして中世的秩序は崩壊する。

経済 気候

政治

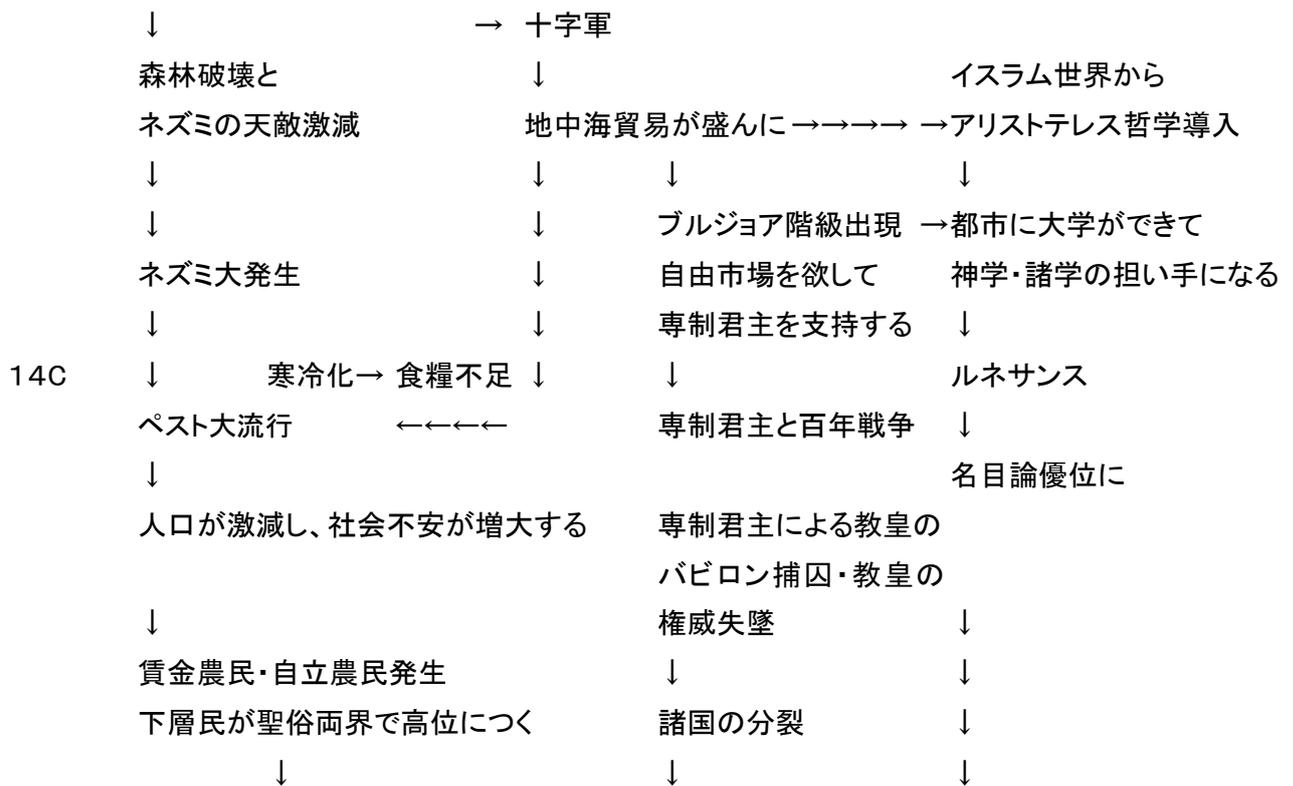
神学

温暖化

12C 後半 農業革命と大開墾 →人口増

↓

社会流動



## 中世的秩序の全面的崩壊

### XXIII. 宗教改革の先駆者——聖書に帰れ！

先に、唯名論が教皇と神聖ローマ皇帝の普遍的権威の根拠を否定し、各民族国語の独立を促し、教会会議を重視させたという神学的な動きを見た。そして、中世の崩壊について、経済的・政治的背景・ペストの大流行・教皇庁のアヴィニョン捕囚といったことを取り上げて話した。今回は宗教改革の先駆的存在として、ドイツ神秘主義、ルネサンス人文主義、そして先駆者ジョン・ウィクリフとヤン・フスについて見たい。

#### 1. ドイツ神秘主義

宗教改革者ルターが「聖書とアウグスティヌスを除けば、神、人間、キリスト、万物について、この書以上に教訓を受けたものはほかにない。」と言った書物がある。それはトマス・ア・ケンピスの著書とされる『キリストにならいて Imitatio Christi』である。トマス・ア・ケンピス（一三八〇—一四七一）は、ヘールト・デ・フローテの〈共同生活兄弟会〉というドイツ神秘主義の流れに属する、個人的な神への敬虔を重んじる「新しい敬虔」運動のグループに属した人だった。近年の写本調査により、実は、『イミタチオ・クリスチ』はフローテがオランダ語方言で書き直した原本のラテン語訳をトマス・ア・ケンピスたち

によって加筆編纂されたものであることがわかっている(出村 p 290-291)。

ルターは、ドイツ神秘主義の深く広い影響を受け、かつ、それを超えていった。そこでドイツ神秘主義について、簡潔にまとめておきたい。

### (1) マイスター・エックハルト Meister Eckhart 1260-1328

エックハルトは、トマス、ボナヴェントゥーラの活躍していた時代に、ドイツのチューリングゲンで生まれた。[パリ大学](#)でマイスターの称号を受け、[ドミニコ会](#)のザクセン地方管区長やボヘミア地方副司教等を歴任した。[1326年](#)ケルンで神学者として活動していたエックハルトはその教説のゆえに異端の告発を受け、これに対し「弁明書」を提出。当時教皇庁があった[アヴィニョン](#)で同じく異端告発を受けた[ウィリアム・オッカム](#)とともに審問を待つ間(もしくはケルンに戻った後)に、エックハルトは没した。その死後 1329年、エックハルトの命題は異端の宣告を受け、著作の刊行・配布が禁止された。これによって彼に関する記録はほとんどが失われたため、その生涯は上記の「弁明書」等から再構成されるのみであり、不明な部分が多く残されている。

<思想>

「名誉も利益も、内的敬虔も聖性も、報いも天国も、如何なるものをも求めず、それらすべてを放棄し、しかも自分自身に属するものを放棄する人、そのような人においてこそ神があがめられているのである。」(エックハルト異端審問第11条)

「すべて人間のたましいの中には神性の火花」が生得的に存在する。それが人間の本質であるが、この火花あるいはほぐちは神とのふれあいにおいて呼び覚まされ、燃え盛り、神性との合一に入ることを可能とする。これこそ人間の魂の中に神が誕生することにほかならない。この合一において、人間の個々の自我は神性の深遠の中にまったく吸収され尽くす。ここで人間が果たしうることはただ一つ、すべての欲望から自由になり、他の何者によっても動かされないようになる「放棄」のみである。」(出村 p 276)

「すべての人は自己放棄から始まるべきである。そうするならば、その他の全てを放棄したことになるだろう。仮に人が王国を、あるいは全世界をさえ放棄しても、なお自己中心的であるならば、何も放棄したことにはならない。しかし、もしも人が自分自身を放棄するならば、富にせよ、榮譽にせよ、その他の何にせよ、彼が所有するすべてから自由になる。・・・事物で充満していることは神を欠くことであり、事物を放棄し尽くすなら神が充満していることになる。・・・自己放棄した心の清い人は祈ることさえしない。祈るとは神から何かを祈願することにほかならぬからである。自己放棄した人は何物をも求めない。彼はただ神と合一することだけを祈願する。」(「教えの書」3節)

このような究極の神との合一という境地を表現するのに、「神化 vergottung」ということばさえ用いる。エックハルトに言わせれば「もしも神が人となられたのが事実だとすれば、人が神となったというのも事実である」(断片31)

エックハルトの体験と表現は、汎神論として断罪され、異端とされたのはもっともなことであった。スコラ学的な神学・哲学体系の枠の中にエックハルトはもはや収まらなかった。彼は当時、トマス・アクィナスとも比肩される著名な神学者だったが、この教えのゆ

えに教会から異端宣告をされ、著書は禁書とされその名声は奪い去られる。汎神論という問題とともに、教会という制度的な仲保者を必要とせず信徒が神と直接交わり得るという思想が、ローマ教会に危険と映ったのである。ローマ教会は、キリストになり代わるまでに神と人との仲保者と自任していたからなおのことである。

## (2) 「神の友」運動

ヨハンネス・タウラー Johannes Tauler, 1300-1361 とハインリヒ・ゾイゼ Heinrich Seuse 1295-1366)

ドミニコ修道会士としてエックハルトに学び、その影響を受ける。その教説は基本的にエックハルトを継承するが、倫理・道徳面における展開、実践に特徴を表す。エックハルトのような神化までとはいわないが、徹底的な自己放棄を語る。ヨーロッパを教父のどん底に陥れた1348年の黒死病の大流行においては、いささかも身の危険を顧みず病人たちの介護と牧会に献身し尽くしたので、多くの人々の尊敬を勝ち得たといわれる。

イザヤ9：5節の救い主降誕の預言からの説教。ここには三種類の御子の出生が語られているという。第一は聖三位一体の内側で御子のペルソナが区別されること、第二は処女マリヤのからだをかいしてこの世界に降誕されたこと、そして、第三は「神が信仰深い魂の中へ恵みと愛をもって日ごとに、絶えず霊的に生まれる」ことを意味するという。

「外的なわざがすべて完全に消滅し、神の思いが内的に増加するとき、さらに恩寵に補佐された人間の勤勉が最高点に到達するときでも、人は徹底的に自己をむなしくすべ消えある。人は決して完全には到達しえず、常に謙虚な畏れの中にとどまるべきである。」

ハインリヒ・ゾイゼもまたドミニコ会修道院にはいり、エックハルトのもとに学んだ。兄弟子タウラーとともに説教者。主著『永遠の知恵の書』はトマス・ア・ケンピスに深い影響を及ぼす。

タウラー、ゾイゼらドミニコ会修道士、アウグスティヌス会、シトー会、ベネディクトゥス会の人々も含んで「神の友」運動が展開された。このグループが生み出した書物に『ドイツ神学』がある。おそらくはタウラーの著作。ルターはこの『ドイツ神学』に深く感動し、序文をつけて公刊した。内容の中心は「キリストの生」であり、自己棄却、神への服従と従順、神との合一という三つの道が記されている。神化した人間とは、神の光に照らされ自己を放棄しきった人間の謙遜な姿にほかならぬとされる。キリストこそは神との合一であり、私の生の模範である。初期のルターは明らかに本書の影響を受けている。

## (3) 「新しい敬虔 devotio moderna」

14世紀終わりに近づくと、「神の友」運動は次第に力を失うが、これを継承し一般化したのがヤン・ヴァン・ロイスブルーク Jan van Ruysbroeck (一二九三—一三八一) である。彼はアウグスティヌス会の規則にのっとって瞑想修業をして、自ら修道参事会院長となり、多くの神秘主義的な著述をなした。

ロイスブルークは人間の霊魂は本来、神の像に造られているから、瞑想によって人間の

存在の根本的基盤である三位一体の神に帰るべきだと説いた。三位一体の神の瞑想をキリスト者の聖化の過程であるという主張には、アウグスティヌスの『三位一体論』の後半部が響いている。

「新しい敬虔」が後世に残した遺物は『イミタチオ・クリスチ』である。その著者はヘールト・デ・フローテ Geert de Groote (一三四〇ー八四)。フローテは15歳でパリに学び、ケルン、プラハにも遊学して神学・哲学・法学・医学・天文学などを修め、当時の碩学の一人とされた。また実際的な才能にも恵まれており、かつ、ケルン大学の哲学・神学教授も担当し、経済的にもユトレヒト、アーヘンの聖職禄を得た。しかし、三十歳ころにケルンのカルトジオ会修道院長ハインリヒとの出会いを通じて「回心」すなわち「内面性への帰還」を経験し、ホイゼン修道院で三年間修業し、当時のキリスト教に欠けているのはエックハルト、ロイスブルークの実践してきた内面的な敬虔、キリストに倣う純粹さだと確信する。その後、神秘家ロイスブルーク(レイズブルーク)の勧めがあって伝道説教者となった。彼は悔い改めを求め、聖書を読むことを勧め、聖書の筆写運動を始めた。これが近代的敬虔の始まりとなる。

ルターが「聖書とアウグスティヌスを除けば、神、人間、キリスト、万物について、この書以上に教訓を受けたものはほかにない。」と言ったことは、最初に述べたとおり。

## 2. ルネサンス・フマニズム(人文主義)

### (1) ルネサンスと宗教改革

ルネサンスと宗教改革との関係をどう見るかについては、見方がいろいろある。ヤコブ・ブルクハルトは、中世の本質をその画一性・統一性に見て、ルネサンスの本質を「個の発見」であると見る。たとえば中世に造られた礼拝堂や絵画について作者名はいっさい知られないが、ルネサンスにはもろもろの天才が出現し個性的な作品をのこしたというふうに。この観点からすると、一人教皇庁に立ち向かった強烈な個性ルターもルネサンスの子とみなされる。しかし、これは近代個人主義という観点からの後代の空想である。

エルンスト・トレルチはルネサンスの本質を此岸性とする。つまり、中世は彼岸性をその特質として次の世への関心が高い時代であったが、ルネサンスは現世肯定的な価値観に立つものであった。この変化は絵画などに顕著に現われている。この観点からすると、ルターは中世人であってルネサンス人ではないことになる。

それぞれ一理あるが、我々聖書主義に立つプロテスタントの歴史観からすれば、むしろ次のように見るべきであろう。そもそも中世というのは、ギリシャ・ローマの異教的古代と、古代キリスト教の綜合であった。アテネとエルサレムの綜合、ヘレニズムとヘブライズムの綜合といってもよい。ではルネサンスとは何かといえば、異教的古典古代(ヘレニズム)の再生を目指すものであり、他方、宗教改革は古代の本来のキリスト教(ヘブライズム)の再生を目指すものであった。そういう意味で、ルネサンスと宗教改革は両者とも「源泉への回帰」を目指すという点で類似しているけれども、本質的に異なるものである。ルターとエラスムスは表面上、ともにローマ教会への批判をしている点で似ているけれども、

目指すところは異なっている。

## (2) フマニズムと宗教改革

ルネサンスにおいて重んじられたのが古典の文献学的研究であり、フマニズム（人文主義）と呼ばれた。フマニズムは人道主義 humanitarianism という意味ではない。訳語として人文主義というように「文」の字をはさむかという、彼らがギリシャ・ローマの古典文芸の原典研究にきわめて熱心であったからである。人間の人間たるゆえんの一つは、理性をもって言葉を用いることであるから<sup>65</sup>、古典の言葉の研究によって、人間の「再生（ルネサンス）」を目指したのである。

十字軍と東方貿易によってイスラム世界や東ローマから古典古代の学問が入ってきてフマニズムは盛んになるが、特に 1453 年、オスマン・トルコ軍 10 万に包囲されて東ローマ帝国の都コンスタンティノポリスが陥落したとき、多くの学者たちが西欧とくにイタリアに避難して多くの古典文献を持ち込んだことにより、西欧に古典古代の新知識がもたらされた。聖書についていえば西欧の人たちはラテン語ウルガタと、ギリシャ語原文を比較できるようになったのである。

ルネサンス最大のフマニストはエラスムス (Desiderius Erasmus [1467 年?](#) - [1536 年](#)) であった。「エラスムスが卵を生み、ルターがそれをかえした。」といわれる。

人文主義者たちが古典に見いだしたのは、中世ローマ教会の支配下に置かれる前の現世肯定的な人間性だった。なにしろギリシャ・ローマの古典の世界では神々までも浮気をしたり酔っ払ったり死んだり露骨に人間的なのである。人文主義のなにが宗教改革にとっての「卵」になったのか。一つには天国の光を指さして、この世を仮の薄暗い世界とする 中世の教会を彼らが批判したからである。中世ゴシックの絵画に見える聖母像が、およそ人間的でなくて天的なものとして様式化されて来たのに対して、ルネサンスの画家たちが描く聖母像はまさに生身の人間そのものとして描かれているのは、現世肯定的なフマニズムの現れである。また、エラスムスは『痴愚神礼賛』という文学的スタイルで教会と修道院の腐敗を徹底的にあざ笑った。宗教改革者たちが教皇庁を批判したのは、現世肯定的な意識からではなく神のことばである聖書からの逸脱という点だったから、中身はちがうのだが、表面上、批判する相手は共通していた。

人文主義が宗教改革のために生んだもう一つの卵は、古典文献の原典研究ということである。それは聖書の原典を求める写本研究をも促した。ルターたち宗教改革者の神学論争における最大の武器とは、エラスムスが校訂し一五一六年に出版したギリシャ語新約聖書だった。中世教会はヒエロニムスが翻訳したウルガタと呼ばれるラテン訳を権威としてきたものを、改革者たちは原典主義に立つことによって確信をもって覆すことができた。神学論争において、フマニズムの原典研究の力をもった改革者たちはウルガタではなく、ギリシャ語本文・ヘブル語本文をもって答えよと、ローマ教会の対論者に言っている。今日、多くの神学校でギリシャ語・ヘブル語を重んじる伝統はここから来ている。

---

<sup>65</sup>人間の脳をほかの動物の脳と比べたとき、極端に発達しているのは、大脳皮質の言語中枢。

しかし、ルネサンスと宗教改革の類似性はあくまでも表面上のことであって、本質は異なっている。ルネサンスは楽観的人間観に立ち、現世主義的・合理主義的だが、しかし、ルターをはじめ宗教改革者たちは聖書のいうとおり深刻な罪深い悲観的人間観に立ち、希望をキリストに置いていた。

### 3. 宗教改革の先駆者――ウィクリフとフス――

十四世紀になると「教皇のバビロン捕囚」という事件が起こる。フランス国王フィリップ四世はアヴィニョンに教皇庁を移させ、以後七十年間、教皇庁はアヴィニョンに置かれた。この七十年間の教皇はすべてフランス人だったから、教皇庁はフランス国王によって私物化された。教皇庁は墮落をきわめた。これに対立教皇がローマに立てられ、彼らを廃するために第三の教皇が擁立されたが、前二者が辞任をこぼんだために三人の教皇が並び立つという異常事態もあった。当時のアヴィニョンの様子を詩人ペトラルカは「不敬虔なバビロン、地上の地獄、悪徳の巣窟、この世の下水道。そこには信仰、愛、宗教、神への恐れのない片鱗もない。」と激しく非難している。

ちなみにヨハネス23世は史上最悪の教皇として有名。「ボローニャの枢機卿として200人の処女、尼僧、既婚夫人を毒牙にかけ、教皇となって兄嫁と通じ、男色その他非道な罪に浸った。教皇の位を買い、富裕な家族の指定に枢機卿を売り、来世の存在を公然と否定した。」(H. Hurley, Bible Handbook, p733)とも。コンスタンツ会議で廃位の後、終身刑に処せられる。

ローマ教皇	アヴィニョン教皇	ピサ選出教皇
<a href="#">ウルバヌス 6 世</a> (1378-89)	<a href="#">クレメンス 7 世</a> (1378-94)	
<a href="#">ボニファティウス 9 世</a> (1389-1404)		—
<a href="#">インノケンティウス 7 世</a> (1404-06)	<a href="#">ベネディクトゥス 13 世</a> (1394-1417)	<a href="#">アレクサンデル 5 世</a> (1409-10)
<a href="#">グレゴリウス 12 世</a> (1406-15)		<a href="#">ヨハネス 23 世</a> (1410-15)

しかも、かつて教会の内的改革力であった修道院も、この時代には霊的な活力を失っていた。人々は改革の叫びをあげ始めた。その代表的人物として最も急進的な改革を提唱した英国オックスフォード大学のジョン・ウィクリフとボヘミアのヤン・フスである。

#### (1) ジョン・ウィクリフ John Wycliff (1324-1384)

ジョン・ウィクリフが、ヨークシャ北部にあるティーズ川の河岸に生まれたのは、およそ1324年頃、彼が死んだのは、1384年、リチャード二世の治下。彼が生まれたのは、少な

くとも印刷術発明の百年以上前であり、彼が死んだのは、マルチン・ルターが生まれる約百年前であった。

ウィクリフはアウグスティヌス主義と聖書の権威への確信から教会の改革を主張した。J.C. ライル<sup>66</sup>はウィクリフの業績として次の四点を挙げている。

①**聖書の十全性と至高の地位とを主張した最初の英国人のひとりであった**、ということである。このことの証明は、彼の著作の中にあまりに頻繁に見てとることができるため、私はあえてその引用をしようとは思わない。聖書が、彼の遺稿のすべてにおいて、その前面に打ち出されている。

②**ローマの教会の過誤を攻撃し、非難した最初の英国人のひとりであった**。

ミサと実体変化によるいけにえや、司祭職の無知と不道德さ、教皇庁の横暴さ、キリスト以外の仲保者に頼ることの無益さ、懺悔に伴う危険な傾向、---彼の著作を見れば、こうした、またこれに類する教義が、舌鋒鋭く暴き出されているであろう。こうした点のすべてにおいて彼は、宗教改革の始まる一世紀半も前から、徹底的にプロテスタント的な改革者であった。

聖書に照らした当時のローマ教会は、ウィクリフにとってもはや教会と呼べる代物ではなかった。ウィクリフが当時の教会と封建制社会に向けた大胆な非難をいくつか挙げてみよう。1332年、ロンドンで、1415年にコンスタンツ会議において排斥されたウィクリフの提案。ベッテンソン pp 254-256

1-3、5 キリストはミサ聖餐を定めていない。ミサの教理は魔術的だ。(ミサでは、パンと葡萄酒そのものがキリストに変化したとして、これを拝み、また、パンと葡萄酒の姿をしたキリストを司祭が罪のためのいけにえとして神に捧げる。)

4. 大罪を犯している聖職者による洗礼式や聖職任命の儀式は無効である。

7. 信徒が司祭に罪を告白し司祭が罪を赦すという告解制度は無用。

15. 大罪を犯している間はだれも領主、高位聖職者、司教ではない。

17. 人民は自分たちの意のままに、罪を犯している領主たちを正す権利がある。

42. 教皇と主教による免償制度を信じることはおろかだ。

20-24. 修道院制度もキリスト教的ではなく異端であると非難し、修道士たちは托鉢ではなく自分の手で働いて糧を得るべきだと主張した。

35. ローマ教会はサタンの集団であり、教皇はキリストたちにつぐ直接の代理者ではない。

要するに、ウィクリフは当時の墮落したローマ教会を全面的に否定し、社会改革も主張した。ウィクリフ主義に立つ人々をロラード派という。

③**説教をよみがえらせた最初の英国人のひとり**である。彼が国中に送り出した、当時のいわゆる「貧しい説教者たち」が民衆を教えて回ったことは、彼がその世代に施した最大

---

<sup>66</sup> J.C.Ryle, *Light from Old Times* 葡萄の実 HP より <http://homepage2.nifty.com/grapes/>

の恩恵の1つであった。彼らが蒔いた思想の種は、決して完全に忘れ去られることはなく、私の信ずるところ、宗教改革への道を開いたのである。

④ウィクリフ最大の業績は、聖書をはじめて母国語 *mother tongue* である英語に翻訳したこと。Mother tongue という表現を用いた最初の人でもある。当時の教会では、公認聖書はラテン訳ウルガタ聖書のみだったから、一般庶民にとって聖書は理解不能だった。しかし、ウィクリフは聖書のみが教会にとっての最高の規範であると主張し、誰でもわかることを目指して弟子とともに旧新約聖書の翻訳を完成した。

何の印刷技術もなかった当時あっては、聖書全巻の内容を、惨憺たる苦心を払って稿本に書き記し、それを人手で筆写していくしかなかった。数百部の聖書が配布された。この翻訳書を発禁しようとするあらゆる努力が払われたにもかかわらず、また、時の経過や、火災や、反対者たちによって失われた冊本があったにもかかわらず、四十年ほど前にオックスフォードでこの聖書が復刻されたときには、完全に揃った 170 部のウィクリフ版聖書が失われずに残っていることが確認され、疑いもなく、それ以上の部数が今も存在しているに違いない。

## (2) ヤン・フス

十五世紀には、ボヘミアにヤン・フスが登場する。フスはウィクリフの主張をそのままボヘミアの教会改革に適用しようとした。彼はボヘミアの貧しい農家に生まれ、後にプラハ大学総長となり、ベツレヘム教会の説教者として聖書に基づく教会改革を主張した。彼はローマからの破門にも屈せず、ついにコンスタンツ会議で異端の宣告を受けて、火刑台に殉教する。一四一五年七月六日のことだった。「七月六日、司祭の服装をつけられたフスは大聖堂に連れて行かれ、ここで祭服を引き裂かれ、聖職者のしるしである剃髪を取り消すために髪の毛がそり上げられ、代わりに、頭の上に悪魔の絵を描いた紙の冠をかぶらせられた。火刑の杭までの沿道では、彼の著作が火にくべられた。杭に縛られた後、最後にもう一度、教えを撤回する機会が与えられたが、彼はこれを拒否した。その後、彼は大きな声で、「主イエスよ。わたしはあなたのために、この残忍な死を堪え忍びます。どうかわたしの敵対者に、あなたのあわれみがありますように。」と祈り、詩篇が朗読される中で息を引き取った。<sup>67</sup>」

コンスタンツ公会議の結果を受けて、ウィクリフの遺骸は教会墓地から掘り起こされて焼かれ、灰はスウィフト川に投げ捨てられた。

後に、宗教改革者ルターはライプチヒ討論において、彼の主張はボヘミアのフスの異端に属すると非難されたとき、「私は知らずしてフスの弟子であった。」と認めた。

フスの信仰はボヘミア兄弟団、モラビア兄弟団へと流れて行く。彼らは聖書のみに基づく信仰と実践の共同体を形成した。十八世紀の英国メソジスト運動の指導者ジョン・ウェ

---

<sup>67</sup> J. ゴンサレス 上巻 p 376

スレーは彼らの靈的感化を強く受けることになる。

「彼は死にましたが、その信仰によって、今もなお語っています。」(ヘブル十一：四)

宗教改革の先駆者たちが語る信仰とはなにか。それは聖書こそ教会の最高權威であるという確信である。

### 第三部 宗教改革から現代までの概観

\*この講義では宗教改革から現代までを簡潔に扱う。近世の宗教改革については宗教改革史の講義において、また近代については、世界宣教史・日本基督教史でていねいに扱われる。

#### XXIV. 宗教改革

推薦図書：『原典宗教改革史』ヨルダン社、R.ペイントン『我ここに立つ』聖文舎

##### 1. ルター：聖書のみ sola scriptura、信仰のみ sola fide

プロテスタント教会の歴史はマルチン・ルター（1483－1546）の宗教改革に始まる。宗教改革から近代プロテスタントの四つの主要な流れが流れ出る。すなわち、ルター派、改革派、アナバプテスト派、そして英国のプロテスタントである。

宗教改革について語り出すには、どうしてもマルチン・ルターその人について語らなければならない。それは神がマルチン・ルターという強烈な個性の靈的経験を通して、聖書に啓示されながら千年間も曇らされていた信仰義認の教理を再発見させたからである。そして、この信仰義認の教理こそプロテスタント教会の根本教理である。

##### (1) 生涯

###### a. きまじめな修道士として

1483年1月10日、ザクセンのアイスレーベンで、マルチン・ルターは父ハンス・ルターの次男として生まれた。父ハンスの教育方針は峻厳なものであって、ルターはこの厳格な父親に神の姿を二重写しにして見たと言われる。鉱山夫から身を起こして小さな坑山の所有者となっていた厳格な父ハンスは、自分の息子には学問と名誉を手に入れさせるべく、エルフルト大学文学部（現在の教養課程にあたる）に進ませた。ルターは卒業間近に、同級生が試験中に急性肋膜炎で急死するという経験をする。ルターは死の恐怖におののいた。

文学部を終えて彼は父の命令にしたがって法学部に入る。当時、身分制度社会のなかで法律家になることは庶民の出世のための登竜門であった。王政が強くなっていく時代の中で、法律を操る官僚たちは法服貴族となっていたからである。ところが、神にはルターについて別の計画があった。法学部にはいった直後、ルターは落雷のなかで死の恐怖におののき、修道士として自分の身を捧げる誓いを立て、アウグスティヌス会の修道院に入ってしまうのである。死の恐怖が当時のルターにつきまとっていたことをうかがわせるも

う一つの事件だった。

ルターはきわめて謹厳な修道士となった。ルター自身が後年、述懐するところによれば、「ほんとうのところ、私は敬虔な修道士であった。私は非常に厳格に修道会の戒律を守ったので、次のように言うことができる。『もしこれまでひとりの修道士でも修道士生活によって天国に入ったのなら、私もそこに入れるだろう。』と。私を知っているすべての修道士仲間は、そのことを証言してくれるだろう。なぜなら、もっと長く続いていたなら、私は徹夜、祈り、朗読、その他の務めで自らを苦しめさいなみ、そのため死んでしまっていたことだろうから。」(『原典宗教改革史』)

彼が修道に徹して知ったことは、いかに苦行を重ねても靈魂の汚れがきよめられることはできないという事実だった。そこでルターは痛悔をしようとした。痛悔とは洗礼後に犯した罪が赦されるために設けられたローマ教会の秘蹟である。完全な痛悔とは、「父である神と救い主イエス・キリストを愛する心から、その愛に背き、その恩を無視したという理由から、犯した罪を悔やみ、忌み嫌う」ことであり、完全痛悔する者のみが神に罪を赦していただける。他方、不完全な痛悔とは「罪を罰する神の正義を考え、地獄、煉獄、この世における神の罰を恐れて、犯した罪を悔やみ、忌み嫌うこと」である(『カトリック要理』)。不完全な痛悔では神と和解することはできない、とされる。

さてルターは完全な痛悔をしようとしたが、彼は不完全な痛悔に陥ってにっちもさっちもいなくなってしまう。ルターは神の正義と神の下す罰にふるえおののいていたのである。また彼にとっては神を愛することは、地獄の罰から救われたいということが動機にすぎないことをルターは知った。その愛は自己追求という罪によって汚れており、この自己追求こそ罪の根源であることをルターは認識する。そして、どう苦行して完全痛悔を求めても自己追求という罪から逃れることができない醜い自己に絶望したのである。

## b. 塔の経験——「神の義」の理解

ルターはいかなる意味でも、自力救済の道は閉ざされていることを認めた。悩むルターは、人に勧められてヴィッテンベルク大学の一角の塔の一室で聖書の研究を始める。特に彼はローマ書の一章十七節に苦しめられた。「神の義は、その福音のなかに啓示されている。」ルターはこの「神の義」とは、神が正義であり、その義によって罪人を罰する義であると考えていた。神は、律法を行うことができずにうちひしがれている罪人を、福音のうちに啓示される義によってさらに苦しめていると彼は誤解していたのである。ルターは後年、次のように言っている「私は義にして罪人を罰する神を愛さず、むしろ神を憎んでいた。なぜならば、私は非の打ち所のない修道士として生きて来たにもかかわらず、神の前で自分が良心の不安におののく罪人であると感じ、私の償罪の行いによって神と和解していると信じるができなかったからである。」

しかし、やがて聖霊はルターに福音の真理を明らかにされた。すなわち、ローマ書にいう「神の義」とは、神が罪人にお与えになる贈り物としての義であると悟ったのである。「神の義は、この方が義である義ではなく、われわれがこの方により義とされる義と解されねばならない。」(「ローマ書」) 神は、罪人がいかに修業しようと自分を義とできないので、

キリストの義を贈与としてくださったのである。これが、人は行い（協働）によらず「信仰のみ」によって義とされるという使徒パウロの福音の発見、信仰義認の発見であった。この「信仰のみ sola fide」が一般に宗教改革の実質原理と呼ばれる。

さらにルターはアウグスティヌスの著書『霊と文字』のなかに「神がわれわれを義とするとき、神はわれわれにその義をあてがうのである」ということばを見いだして確信を深めている。教理史的にいえば、ルターの救済論は、アウグスティヌスがかつてペラギウス論争を通じて明らかにした恩寵救済主義の復興でもある。だから sola fide は sola gratia と言い換えることができる。

### c. 宗教改革へ——「聖書のみ」 sola scriptura

当時、ローマ教会は聖ペテロ寺院改築のために免償状（贖宥状）を売り出していた。免償制度とはなにか。

ローマ教会では、信者は司祭に罪を告白すれば、教会の司祭を通して、罪が赦され永遠の罰は除かれるものの、有限な罰は残るとされ、現世か来世で、教会の定める善業を行なって、有限な罰を償わねばならないとされ教えられる。その償いの期間を免除・短縮するために教会が取り成すことを誓うことを免償という。

ローマ教会においては、教会は一般信者から成る「聞き学び信じる教会」と教皇以下全聖職者から成る「教える教会」とに区別され、一般信者は俗なるものでキリストに直接近づくことができない。信者は地上の「教える教会」と、聖母マリヤを筆頭とする諸聖人からなる天の教会とを仲保者として、キリストに近づくことができる。信者は諸聖人の大量の「功德の宝庫」のおこぼれに与かることによって、罪の償いを免じてもらい、キリストに至り救われるというのです。恩寵プラス諸聖人の功德というわけである。

この「功德の宝庫」の教えと煉獄の教えが十五世紀に合体することによって、免償状（免罪符）が登場する。ローマ教会によれば、聖人でもない大多数の信者はストレートで天国には入れず、天国の予備校である煉獄 purgatorium に落ちて、煉獄で清めの試練を受けて償いを果たして後、天国に入るとされる。しかし、現世にある信者が死者のために教会から免償状を買ってやるならば、死者はその試練の期間を免除・短縮されて天国へと移されるという。この免償状に対する抗議がルターによる改革の発端となる。

免償状説教者ヨハン・テッツェルは、「免償状を購入してコインが箱にチャリンと音を立てて入ると靈魂が天国へ飛び上がる」（ルター95 箇条 27 番目 [ベッテンソン p272](#)）と宣伝したので、多くの民衆が彼のまわりに群がった。さらに煉獄で苦しんでいるその人の親も罪赦されて天国へと移されると説いていた。

ルターはこれに抗議して、「九十五か条の提題」を発表した。[ベッテンソン pp269-276](#)。ルターとしては宗教改革など起こすつもりはなく、ただ神の御前における罪が免償状を買うという安易な行ないによって赦されるという教えは、魂を永遠の滅びに陥れる危険なものであるとして、抗議をしたのである。ルターが言いたかったのは、人は免償状を買って神に罪赦された、平安だと思った瞬間、滅びてしまう。逆に、人は自らは神の御前に滅ぶべき罪人であると恐怖しておののくときにこそ、ただキリストのうちに贈与としての義を

見いだす道が開かれるのだということだった。

ルターは、聖書の教師として教会の教えを正したいと思ったにすぎない。ところが、事態はこの後、ルターにとって思いがけない方向へと展開してゆく。ローマ教会当局は、ルターにその見解を取り消さなければ異端として破門すると通告して来た。1519年のライプツィヒ論争では、ルターはペテロの首位制を否定し、教父たちも誤りえるとし、教会会議も誤りえるとし、煉獄の存在は聖書から立証されないとし、キリストのみが教会の土台であると主張した。しかし、それは、コンスタンツ会議で火刑に処せられたヤン・フスと同意見の異端であると断じられた（ベッテンソン pp 277-278）。

しかし、さらにルターは文筆活動をもって教皇制度の批判を展開していく。ローマ教皇レオ10世は1520年6月教皇勅書において、ルターを「ぶどう園を荒らす騒々しい野猪」と呼び、破門する。しかし、ルターは同年12月10日、これを他の教令類とともに、ヴィッテンベルクの全学生の前で公然と焼却してしまう。「おまえたちは主の聖徒たちを苦しめたがゆえに、いま永劫の火によって滅ぼされるのだ。」と言いながら（原典宗教改革史 p83）。

さらにルターは1521年にはヴォルムス帝国議会に召喚され、その著書を取り消すことを求められた（ベッテンソン pp287-290）。拒否すれば火刑が待っているという状況であった。時にルターは言った。その末尾、結論部分。P290

「皇帝陛下ならびに領主が単純な答えを求めておられますので、私は両刀論法を使わずに、次のように答えたいと思います。即ち、聖書の証しによって、あるいは明白な理由と根拠によって――なぜなら、私は、教皇も公会議もそれだけでは信用していません。というのも彼らがしばしば過ちを犯し、矛盾したことをいつてきたのは明白なのですから――克服され、納得させられないかぎり、私はすでに述べたように、聖書に信服し、私の良心は神のみ言葉にとらわれているのですから、私は取り消すことはできないし、また取り消そうとも思いません。（後略）」これぞ宗教改革の形式原理「聖書のみ sola scriptura」の宣言であった。

## （2）神学

### a. 「sola scriptura 聖書のみ」：形式原理

ルターの足取りから宗教改革の二大原理があきらかになってきた。宗教改革の形式原理は、「聖書のみ」が教会における第一の権威であるということである。ローマ教会は今日に至るまで聖書とともに「聖伝」というものを教会の権威としている。『カトリック要理』によれば、「聖伝とは古代教会の信仰宣言、公会議、教導職の証言、古代教会の記録、教父たちの著作、古代からの礼典などによって示されている」もので、これらは「使徒たちがキリストと聖霊から受け、教会に伝えた」とされている。ルターは「聖伝」も過ちを犯し矛盾したことを言っており、ただ聖書のみが教会の上に立つ権威であると主張した。公会議は自体は信仰を拘束する権威を持つものではなく、ただ聖書と一致するかぎり承認されるものである（『公会議と教会について』）。

他方、ローマ教会は一五四五年、宗教改革に対抗してトリエント公会議を開くが、ここでは教会の権威を改めて規定し、教会は聖書と教義の誤らない解釈者であると決議する。

さらに一八七〇年の第一バチカン公会議ではローマ教皇が公的に発言したことは誤ることがないという決定をした。こういうわけで、ローマ教会においては結局、聖書とともに聖伝、教会、教皇が最高権威として並び立つということになる。だからローマ教会では、聖書に明らかに反している母マリヤについての教えなども教会に混入している。

プロテスタント宗教改革は「聖書のみ」が教会にとっての最高権威であると宣言した。近代の聖書批判に走った自由主義神学は別として、本来プロテスタント教会においては、教理上の論争の至高の審判者は聖書で語り給う聖霊にほかならない<sup>68</sup>。

#### b. 「信仰のみ sola fide」「恵みのみ sola gratia」: 実質原理

では、形式原理たる聖書が宣言する真理の中核つまり実質原理はなにか。それは、「信仰のみ」ということである。新約聖書のパウロ書簡は、人が神の前に義とされるのは律法の行いによるのではなく、神の恩寵を受けとる信仰によることを示している。

「なぜなら、律法を行うことによって、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。」(ローマ三：二十一-二二)

アウグスティヌスは自力救済主義者ペラギウスとの論争を通じて、人が救われるのは、神の恵みによることを明らかにしたが、中世に入ると徐々に救いには神の恵みのみではなく、人の行いも必要であると説かれるようになっていた。表向きはアウグスティヌス主義という名で呼ばれながら、その中身は半ペラギウス主義の神人協働説となっていたのである。中世教会千年の土台をすえた大グレゴリウスは、アウグスティヌスの影響を強く受けたが、救済論においては、半ペラギウス主義だった。アウグスティヌスは人間は墮落して自由意志までも正しく機能しなくなったと言ったが、グレゴリウスは、人はアダムにあって墮落したが、自由をすべて失ったわけではなく、ただ意志の善性を失ったのみだとして、神の「先行の恩恵」が人間を動かして善を願うように導き、新たにされた自由意志は「後続の恩恵」と共に働いて善を行い功德を積むのだとした。

要するに、人は救いを得るためには、神の恵みだけでなく人の功德が必要とされ、教会が定めた徳を積むことが奨励され、教会は神と人との間を取り持つ仲保者となる。

しかし、神はルターの深刻な罪認識をともなう霊的危機の体験を通して、もう一度徹底的な恵みによる救済をあきらかにされた。ルターは人間の原罪は本源的罪であり、本性の墮落であり、生来のパン種であるとした。人間本性は常に悪に傾き、格別それは不信仰という形で現れる。したがって、罪人は自由意志をもって自らを救いへと導くことはできない。人間には奴隸的意志があるのみであり、すべてはただ神の意志にかかっている。

神は罪人に律法と福音によって働きかけられる。律法は人間が何をなすべきかを教え、

---

<sup>68</sup> WCF1:10「それによってすべての宗教論争が決裁され、すべての会議・古代の著者たちの意見・人々の教義・個人の精神が検討されなければならないところの、またその宣告にわたしたちがいこわなければならないところの至高の審判者は、聖書の中に語っておられる聖霊以外の何者でもありえない。」

かつそれをなし得ない罪の病の現実をあらわしに、福音はこれを癒す薬を与える。福音のうちには神が罪人に与える贈り物としての義が啓示されていて、人はこれをただ信仰によってのみ受け取る。「信仰のみ」がキリストにおける神の義を受け取るための器官なのである。しかも、その信仰は、聖霊によって引き起こされる再生の最初の要素である。したがって、罪人の救いのすべては神の恵みにかかっている。

ペラギウス論争でも見たように、ここでも罪論は神学のアルクメデス点として働いている。徹底的な罪認識は徹底的な恩寵救済へと必然的につながるのである。ただルターがアウグスティヌス以上に福音の真理を明白にした点は、神の御前では罪人が義人になってから義と認められるのでなく、罪人が罪人であるままで義人と認定されると主張したこと、罪人は神の義を「信仰のみ」によって受け取るとしたこととすべきであろう。「われわれは実際は罪人であるが、しかし憐れみたまう神の認定のゆえに義人であり・・・、現実においては罪人であるが、しかし他方、希望においては義人である。」（「ローマ書」）罪人はここにこそ救いの確かさと平安を得ることができるのである。Simul iustus et peccator. と言い習わされるところである。

### c. 教会観

#### ①「信徒皆祭司」——聖徒の交わりとしての教会

ルターといえは「信徒皆祭司」ということが常識的に言われる。そして、それは誤っていない。「ドイツ貴族への言葉」Luther's Werke xi405-415 ベッテンツ pp278-280

「われわれはみな、バプテスマによって祭司として聖別されているのであり、聖ペテロが『あなたがたは、祭司の国、聖なる国民である。』（I ペテロ 2:9）といい、また黙示録には『わたしたちの神のために（あなたの血によって）わたしたちを御国の民とし、祭司となさいました』（黙示録 5:10）とあるとおりである。」

「司祭は、キリスト教界にあっては、機能上の身分以外のものであってはならない。彼がそお職にある間は、彼は上位に立つが、その職を失うなら、他の人々と同じように百姓あるいは一市民であるにすぎない。であるから、司祭はその職を退いた後は、たしかにもう司祭ではない。・・・そこで、信徒と司祭、君主と司教、あるいは、彼らのいう『靈的』と『世的』な人々の間の、唯一の真の相違は、身分ではなく職務と機能であるということになる。」

#### ②「母なる教会」

しかし、それは近代人たちが空想するように、ルターが個人主義的な信仰を唱導して、教会は不必要であるという「無教会主義」めいたことを言ったかということ、実際は正反対である。ルターは教会をきわめて重視した。1530年フィリップ・メランヒトンが起草し、ルター自身深くかかわったアウグスブルク信仰告白においては、次のように告白されている。

「彼らはこう教える。ただ一つの、聖なる教会は、永遠に存続するものである。この教会は、聖徒の集りであって、そこにおいて福音が正しく教えられ、聖礼典が正しくとり行な

われる。」(アウグスブルク信仰告白Ⅶ教会について ベッテンゾン p302)

「彼らはこう教える。正規に召されたものでないかぎり、誰も教会内で公に教えたり、聖礼典を執行したりすべきではない。」(同上 XIV 職制について)

すなわち、説教と礼典の執行権は、教職者に厳密に限られている。

J. ゴンサレスによれば「彼の神学は、神との個人的・直接的な交わりの神学ではなく、むしろ、信仰者の共同体で生きるキリスト教徒とそてに生活の神学であり、彼はしばしばこの共同体を『母なる教会』と呼んだ。すべてのキリスト教徒は、自ら受けた洗礼の故に祭司とされていることは確かだが、それは、後世のある解釈者たちが言ったような、自分だけで十分に神に近づくことができるという意味ではない。もちろん、すべてのキリスト教徒は神との直接的な交わりを持つことができる。しかし、同時に神とのあらゆる交わりが実現する有機的な現実が存在するのであり、それこそが教会である。

祭司であるということの第一の意味は、わたしたちが自分の個人的祭司だということではなく、むしろ、わたしたちが信仰共同体全体のための祭司であり、共同体の一人一人がわたしたちのための祭司であるということの意味している。信仰者の万人祭司の教理は、教会という共同体の必要性を無視するどころか、その必要性を強化するのである。」<sup>69</sup>

### ③ルターの「二王国論」

ごく常識的なルターの国家観を紹介しておく。

中世においてはローマ教皇が絶大な権力を西ヨーロッパ全体に及ぼしていたが、フランス、イングランドを始めそれぞれの地域における王権が徐々に成長してきて、教皇庁の影響を脱したいという空気になってきていた。ルターのいたドイツでは、皇帝カール 5 世はルターが帝国を解体させてしまうのではないかと恐れ、ルターをヴォルムス帝国議会に引き出して、彼を有罪として法律の保護外に置いてしまうが、フリードリヒをはじめとするローマの影響力を脱しようという領主たちがおり、ルターをヴァルトブルク城にかくまったのである。このように、ルターの改革は俗権の協力を得て進めることができた。

とはいえ、ルターは教会が王国の道具になればよいとはまったく考えていなかったし、教会が俗権を支配するのも不適切を考えていた。むしろ、教会と国家の相互不可侵という原則がたいせつだと考えた。いわゆる「二王国論」と呼ばれる。だが、この二王国論にも長短がある。長所は、実際に双方が相互不可侵を守りながら支えあうならばよいのであるが、短所はたとえば俗権が教会の支配に乗り出してきた場合、教会は政治向きの発言はしないという態度を取り続けるならば、結局、俗権のいいなりになってしまう結果になるからである。

#### [参考]

原克博「ルターによる〈信仰による義認〉の発見は、信仰を〈内面的良心の領域〉として独立させる。それは同時に〈政治や世俗的権力の担当領域〉を〈外的なものに限〉ることであり、こう

---

<sup>69</sup> ゴンサレス『キリスト教史』下 p41

して〈宗教と政治との相互不可侵の関係、相互独立の関係〉が明確にされた。いわゆる〈二王国論〉だが、この原則は、キリスト者が国家の悪と直面した時、プラスにもマイナスにも作用したのではないか。」

朝岡勝「ルターの考え方は通常「二王国論」と称され、神のこの世に対する支配統治は霊的領域の統治と世俗的領域の統治とに分けられて、世俗の統治もまた神的な権威を帯びると理解されたのです。ルター自身は必ずしもそのような二元論的な理解を主張したわけではなく、むしろキリストの全領域にわたる支配の下での統治様式の違いを主張したのですが、後の時代には国家は創造の秩序に基づいて立てられた権威ゆえに、教会はこれに干渉しないという風潮を生み出す結果となったのです。そしてそのもっとも先鋭的かつ醜悪なかたちでの表れが、ヒトラー時代のナチ政権だったのです。そしてヒトラー率いるドイツ国家を神的な権威として崇め、これに進んで服従する教会も次々に生まれていったのです。」

#### d.宗教改革者の職業召命観

##### ①ルターと職業召命観のプロテスタント圏へのひろがり

ローマ教会では、司祭職・修道士は聖なる職務につくものであり、その他の労働は俗なる卑しいものと見做された。聖書に立ち返った宗教改革者は中世ローマカトリックの聖俗二元論を批判した。そこに職業召命説が出現する。

M.ヴェーバー「ルターの職業観」によれば、「使命としての職業」にあたる語は近世以降、プロテスタンティズムが優勢な民族の間でのみ見出される。これは宗教改革における聖書翻訳たちの「成果」といえる。その始まりは宗教改革者ルターである。ルターは、1533年に旧約外典『シラ』11: 20, 21のギリシャ語エルゴンとポノスを *beruff*(現代表記 *Beruf*)と訳したが、この翻訳以前、*beruff* ということばは「聖職への招聘」を意味する場合にのみ用いられていたのである。従来、ヨーロッパの言語の労働に当たる語には、「使命としての職業」という意味はなかった。ルター後、ドイツ語の「聖職への招聘 *Beruf*」に相当する語は、すみやかにあらゆるプロテスタント諸民族の通俗語のなかで、職業を意味することばとして用いられるようになり、職業は「使命としての職業」という意味をもつようになり、現在にいたっている。

ルターの職業召命観は、アウグスブルク信仰告白に簡潔にまとめられている。第二部第26条はキリスト教生活を儀式遵守として祭司・修道士の生活のみを聖なるものとして、家父、母、君主の働きを世俗的・非宗教的と見なしてきたことを批判している。同27条は修道士のみが完全の状態にあるとされてきたカトリックの間違いをただし、すべてのキリスト者がその「召し *vocatio*」に従って「使命としての職業 *vocatio*」に仕えて生きることの大切さを説いている。すなわち、各人が召し *vocatio* にしたがって家父、母、君主の働きをすることの宗教的意義を主張しているというのである。ラテン語 *vocatio* は *voco* (召す) の名詞形で、ドイツ語の *Beruf* にあたる。

## ②カルヴァン『キリスト教綱要』では

カルヴァンは『キリスト教綱要』で「召し」についてどのように教えているだろうか。渡辺信夫の索引によれば、第一は「救いへの召し」であり、これが節にして26箇所ある。第二は教職への召しについてで、12箇所。そして、職業や社会的立場を召しとして主題的に述べているのは、ただ一箇所、第三篇10章6節と、意外に少ない。カルヴァンの職業召命が有名になったのは、M・ヴェーバーの所論によるところが大なのだろう。とはいえ、カルヴァンが件の箇所において次のように述べていることは重要である。その要点を抜粋しておく。

「主がわれわれひとりびとりに、生のあらゆる行為において、その『召命』を注視せよと命じたもうことである。」「それぞれが別の暮らし方をするようにめいめいの義務を定め たもうたのである。そして、誰もがその限度を踏み越えないように、そのような暮らしか たのことを『召命』と呼びたもうたのである。したがって、ひとりびとりの暮らしは、い わば、主によって配置された持ち場のようなものであって、これによって生涯の全行程を 無思慮にさまよわなくてよいようにされているのである。」このあと、それぞれの身分をわ きまえて下剋上はすべきでないことが語られ、最後に「主からの召命が万事において正し く行為する原理であり・基礎であることを知れば十分である。・・・どんなにいやがら れる・いやしい仕事であっても（あなたがそこであなたの『召命』に従いさえすれば）神の 前で輝き、もっとも尊いものとならぬものはないのである。」（渡辺 信夫訳。括弧内はラテ ン原典のもの）

カルヴァンはここで「召し」ということばを、職業という意味だけでなく、社会的身分 という意味でも用いている。カルヴァンが当時のキリスト教社会に、次のローマ書12章3 節-5節のことばを適用して述べていることは明らかだろう。「私は、自分に与えられた恵 みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い 上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量り に応じて、慎み深い考え方をしなさい。一つのからだには多くの器官があって、すべての 器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つの からだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」

## ③聖書の労働観

ルターやカルヴァンがカトリックの聖俗二元論を批判して、その意図をもって一般の職 業もまた神の前に宗教的な意義があると考えたことは正しかった。なぜなら、ローマ書12 章冒頭にあるように、神は、すべてのキリスト者に対してそのからだを神に受け入れられ る生きた供え物としてささげ、全生活をもって神を礼拝することを求めているからである。 それゆえ、キリスト者は労働をもって神をあがめるべきである。

しかし、そのためにルターが聖書の翻訳において、労働にあたるギリシャ語に、もともと 「聖職への招聘」を意味したベルーフということばを意図的にあてたのは、当時の聖俗 二元論に陥っていた教会と社会の改革には有意義であったとはいえ、問題がある。それは、 職業一般について召命ベルーフということばを用いることによって、聖書が語る伝道職へ

の召しは何であるかを見失わせるという結果を生み、後に社会が世俗化し一般の職業観が世俗化したとき、伝道職の世俗化を引き起こすことになるからである。特に国教会においては伝道職は国家公務員であるから、なおのことである。

聖書の労働観は、召命ではなく、むしろ創世記 1 章 2 章に記された文化命令にその土台を置くべきである。労働は、人が墮落する以前に、神が人間にお与えになった祝福された義務であった。ところが、アダムが墮落してのち、労働には呪いが入ってきた（創世記第 3 章）。ゆえに、現状において労働には、神から託された祝福ある任務という側面と、呪われた苦役という二つの側面がある。実際、我々は労働に携わるとき、この二つの側面を、実感しているであろう。キリスト者としては、雇う立場であれ、雇われる立場であれ、本来の祝福ある義務としての労働となるように、神を畏れて労働態度・労働環境の改善をはかっていくことが求められている。

職種については、消極的には十戒にそむかないかぎり、文化命令に資するすべての労働は、文化命令への応答、すなわち神の祝福ある義務であると捕らえることができる。さらに積極的には、神を愛し、隣人を愛するという目的にかなって労働をするならば、いかなる職種であれ、その働きを通して神の栄光をあらわすことができる。聖書的なキリスト者の労働観とは、「文化命令に対する礼拝的応答」と表現することができよう。

しかし、新約聖書における用語法では、神からの召しによって就く職務は、伝道職のみである。その特殊性をも見落としてはなるまい。

まとめ

1. 労働とは神の文化命令に対する応答であるが、墮落後、労働には呪いの苦役としての側面も入ってきた。この両面の現実を把握することがたいせつである。
2. キリスト者すべては献身者であることが求められており、したがって、それぞれの職業を通して、神の栄光をあらわすべきであり、現すことができる。聖書的な労働観とは「文化命令に対する礼拝的応答」である。
3. 聖書は、召しという用語を、職業については伝道職への召しという場合にのみ用いている。それは伝道職の召しには特殊性があることを意味する。（特殊性については <http://d.hatena.ne.jp/koumichristchurch/20090604/1244121325>)

## 2. 改革派教会 Soli Deo gloria

「聖書のみ」「信仰のみ」「恩寵のみ」を旗印としてドイツのルターに始まったプロテスタント宗教改革であるが、同じ根本原理に立ちつつも別の展開を見せたのが、ツヴィングリを先駆者としてカルヴァンに継承され発展したスイス宗教改革運動に発する改革派教会である。改革派はカルヴァンの影響が大であるのでカルヴァン派とも呼ばれ、その教会の統治形態の特徴から長老派とも呼ばれる。

### (1) スイスから世界へ

a. フルドライヒ・ツヴィングリ Huldrych Zwingli, 1484年1月1日—1531年10月11日

### ①改革者の形成

ツヴィングリ（1484—1531）は、1506年バーゼル大学で修士の学位をとり、グラールスの司祭となった。彼は従軍司祭としてイタリア戦争の悲惨を経験する。また1513年からエラスムスを代表とする人文主義運動に参加し、ギリシャ語で聖書を研究し説教をすることを通して聖書中心的な思想を固めていく。だが当時の彼の思想は人文主義的なものであって、後の信仰認識とは違っており、ローマ教会を批判しつつも、そこから離脱するつもりはなかった。

1519年、転機が訪れる。チューリヒの司祭となっていた一五一九年にペストにかかって死線をさまよう経験をしてのち癒され、神が自分を教会改革に召しておられることを確信し、立ち上がった。改革者としての形成には、ルターにおけると同様に、一つの神との直面、自我の挫折にあたる経験があったことに注意すべきである。改革者たちは確かにフマニズムの方法をもって、聖書に取り組むことから改革を始めたのだが、フマニズムの単純な延長線上に宗教改革者たちはいない。彼らは神の御前で己の罪と死の問題に直面して、砕かれてから、改革者として立っていくのである。

ペストの詩<sup>70</sup>（病の始まりのとき）

助けたまえ、主なる神よ、助けたまえ、この苦しみから。

死は間近に迫っております。

私のそばにお留まりください、基督さま、あなたは死を克服されたのですから。

（中略）

けれども、あなたの命令で人生の最盛期に、死がやってくるのであれば、

ただただそれに従います。あなたの望まれるようになさってください、委細構わずに。

私はあなたの器であり、作るも壊すも自由になさってください。

私の魂をこの世界から奪うのであれば、世界がこれ以上悪くならないように、

他の人々の敬虔で明るい生活が汚されることがないようになさってください。

### ②信仰と政治

ツヴィングリによる改革は修道院解散、ミサの廃止とプロテスタント化、教会堂内の聖像・聖画の追放、さらに貧民救済・教育機関の設置など実際的なことに及び、チューリヒ市の政治的問題にも積極的に発言した。ツヴィングリにとって、信仰生活と政治や日常生活は不可分のものであり、生活の全領域を神の主権の下に置こうとしたのである。

ただ、ツヴィングリの場合、単純に一元的に神の言葉の下に政治をも置こうとしたために、教会と政治とが不分明で癒着する傾向があった。牧師であるツヴィングリの死が、自ら剣を握っての戦死であったことは彼の改革の特徴と問題性を物語っている。

<sup>70</sup> 原典宗教改革史 pp 235—236

b. ジャン・カルヴァン Jean Calvin、1509年7月10日—1564年5月27日

### ①改革者の形成

カルヴァンはフランスのピカデリのノワイヨンに生まれた。父の意志で最初は神学を学び、後に、法律を学んだ。絶対王政が成長し官僚制度が整備されていく時代にあつては、法律の学びが富と栄誉を約束したからである。明治時代の日本に官僚養成機関として東大が誕生したのと同じである。まもなくカルヴァンは法律の学びにおいて、驚くべき進歩を遂げ、教授たちの代行を務めるようになり、彼が去るときには教授たちは彼に博士号を贈った。やがてカルヴァンは人文主義的方法を身に付けにつけ、1532年パリで『セネカの「寛容について」の注解』を自費出版し、そのなみなみならぬ力量が世に認められた。

しかし、ある日、神はカルヴァンを捕らえて回心させてしまう。パリにいたカルヴァンは聖書の研究を始めると、一年もたたないうちに純粋な聖書の教えを求める人々がカルヴァンの住みかに秘密裏に集うようになる。秘密裏にというのはすでにローマ教会からのプロテスタントへの弾圧が始まっていたからである。

ところが、パリではローマ教会からの弾圧が激しくなり、多くの敬虔な人々が火刑に処せられるようになったので、カルヴァンはパリを去り、バーゼルに逃れて『キリスト教綱要』の第一版を著した。その著述の目的は、信仰のゆえにパリで殉教している人々を不正な恥辱から解放することであり、同じような罪によって脅かされている人々を励ますためである。<sup>71</sup>

その後、カルヴァンがストラスブールへの旅の途上、ジュネーブに滞在した折、この地の改革運動の指導者ギョーム・ファレルがカルヴァンに協力を求めて宿を訪ねて来た。カルヴァンは自分は人文学者として平和に暮らすことを望んでいるから、とファレルの申し出を断ろうとした。するとファレルはカルヴァンに呪いのことばを投げかけた。

「君は自分の願望を優先させている。万能の神の御名において君にいいたい。もし君がわれわれとともにこの神のお仕事をこなさないとすれば、主は君を罰せられるだろう。君はキリストのことより自分の利益を求めているのだ。」<sup>72</sup>「こんな重大な時にたすけを拒むならば、神よカルヴァンの平和をのろい給え」<sup>73</sup>

カルヴァンはファレルの言葉に神の御声を聞いて恐れおののき、ついにジュネーブの改革に乗り出すことになる。当時ファレル四十九歳、カルヴァンは弱冠二十九歳であった。

### ②ジュネーブでの働き

ひとたびジュネーブの宗教改革に立ち上がるや、カルヴァンは鉄の意志をもってこの改革を徹底的に遂行しようとする。ジュネーブは市を挙げて改革を志したのであり、市全体がひとつの教会だった。カルヴァンの改革は、やはり俗権と関係の深い改革であった。だが、まもなくジュネーブ市当局はカルヴァンの徹底した改革を嫌って、彼を追放した。カルヴァンはこの騒擾から追放されて、かえって平穏な生活を送ることができることを喜ん

<sup>71</sup> カルヴァン『詩篇注解』序文を参照。

<sup>72</sup> ベーズ『カルヴァンの生涯』を参照。

<sup>73</sup> カルヴァン『詩篇注解』序文

だという<sup>74</sup>。彼が、説教職の束縛から解放されて、ストラスブールに隠退して静かに暮らそうと思っていた矢先、マルチン・ブツアーが、かつてのファレルと同じようなやりかたで、ヨナの話を用いて、ふたたびカルヴァンをストラスブールの説教壇に立たせた<sup>75</sup>。

カルヴァンを追放した後、遅々として改革の進まないジュネーブは、カルヴァンを再び呼び戻すことになった。カルヴァンが再び以前の地位と職務につくように求めてきたのである。

「われらが兄弟にして類なき友なる貴殿に心からご挨拶申し上げます。貴殿がひたすら神と聖なる御言葉の栄光と名誉とを増し進めんと欲せられていることを、われわれはよく存じあげていますので、われわれに即座になすよう要求した大小議会ならびに市民総会の命により、貴殿がわれわれのところにおいてになり、ふたたび以前の地位と職務に就かれるよう切にお願い申し上げます。そしてそれは神の御助けにより福音を広めるにあたって、はなはだよいことであり効果的なことだ、と期待しております。わが民が切に貴殿を求めていることを御承知ください。われわれは貴殿にご満足いただけるようお取り計らい致す所存でございます。

1540年10月22日

貴殿のよき友たる ジュネーブの市長ならびに小議会  
福音の教役者、わが兄弟にして類なき友カルヴァン博士へ<sup>76</sup>

このときカルヴァンはファレルに次のような手紙を書いている。

「印刷屋のミシェルは、私のジュネーブ帰還は実現されるだろうというプレシュレの言葉を知らせてきました。しかし毎日あの十字架に千回かけられるよりも、むしろ百回も死んだほうがましです。」<sup>77</sup>

再招聘の後、カルヴァンはジュネーブの教会改革を遂行する。

ジュネーブ改革のために、なされたことの第一は聖書の連続講解説教である。説教とは講話ではない。説教とは神のことばの説き明かしである。神のことばが教会を建設する。カルヴァンがジュネーブに来た時、福音の説教はすでになされていたが、教会は無秩序の極みのなかにあった。

そこで第一に、カルヴァンは神のことばの支配が具体化するために、「教会規則」を作る。その要点は、信徒の中から信仰の模範となる長老を選び、この人々に教会の規律を守らせること。

第二に、詩篇歌を礼拝における会衆の讚美歌として用いること。ローマ教会では会衆は司祭たちの歌う意味不明のラテン語典礼歌の聞き手にすぎなかった。

第三に教理問答書による信仰教育。

---

<sup>74</sup> 同上

<sup>75</sup> 『原典宗教改革史』p372

<sup>76</sup> 『原典宗教改革史』p370

<sup>77</sup> 1540年3月29日ファレルへの手紙

そして第四に正しい結婚についての規則である。

またカルヴァンは著述をもって改革を推進した。一つには黙示録を除く聖書全巻の注解を書いたことである。カルヴァンは今日に至るまで「聖書注解の王」と呼ばれる。もう一つは「プロテスタントの兵器庫」と称される『基督教綱要』である。

ジュネーブの宗教改革はスイスの諸都市に及んだばかりか、ヨーロッパ各地からカルヴァンのもとに神学と教会改革を学びに多くの人々が訪れ、オランダ、スコットランド、イングランド、ハンガリー、ポーランド、ルーマニア、ドイツなど各地に改革派信仰が広がることになる。十七世紀イングランドではピューリタンが改革派信仰による国教会改革を志したが達し得なかったが、その余波が米国に及び米国の主流派教会となった。

明治に日本に来たS. R. ブラウン、フルベッキ、ヘボンら宣教師たちの多くは、米国の改革派系教会の出身であったので、日本のプロテスタント教会の制度や思想は、米国の改革派系教会の伝統から多くの影響を受けている。

## (2) 神の主権を・・・改革派教会の教理的特徴

### a. 常に改革を *semper reformanda*

宗教改革によって誕生した教会という意味では、ルター派教会も改革派教会であり、事実、ルター派「和協信条」にも自らを「改革された教会」と呼んでいる。しかし、ルター派教会と区別して改革派教会というばあいには、ルターが信仰義認の教理を宣明したことは高く評価し同意しつつも、ルター派教会が十分には聖書による教会改革を進めなかったという批判をもって、さらに徹底的な聖書による教会改革を進める教会という意味を持っている。「Ecclesia reformata semper reformanda. 改革された教会は、(聖書にしたがって)常に改革され続けなければならぬ」という理念が改革派教会の一つの特徴である。

具体例をあげよう。改革派から見てルター派教会の改革が不徹底であるといわれるのは、たとえば礼拝形式においてルターが「福音に反していないかぎりには」伝統的な典礼的な要素を保持しようとした姿勢にルター派教会が倣っているということである<sup>78</sup>。だから多くの人々はルター派教会の礼拝に出ると、儀式的・カトリック的だなという印象を受けるであろう。他方、改革派教会の礼拝に関する原理は、まことの神を礼拝する正しい方法は神ご自

---

<sup>78</sup> アウグスブルク信仰告白第十五条 「教会の儀式について人間によって考案せられた教会の儀式について、われらの諸教会はかく教える。罪なくして守り得られ、また教会内の平穏とよい秩序とに益となるもの、すなわち特定の祝日、祭日、またそれに類するものは守られるべきである。しかしながら、この種の事柄については、このようなことを厳守することが、救に必要であるかのように考えて、良心が重荷をおわされるべきでない。神をなだめ、恩恵に値し、罪に対して償いの行為をするために設定せられた、人間的伝承は、福音とキリストの信仰の教理とに反していることを、ひとびとに注意すべきである。故に、恩恵に値し、罪の償いをするために設定せられた、食物や暦日に関する伝承その他この類のものは、無用であって、福音に反している。」

身が聖書によって制限されているとして、「聖書において命じられていることだけを」行うということである<sup>79</sup>。したがって、改革派教会では聖像・聖画に類するものは排除される。偶像礼拝・異教的習慣の徹底的排除は今日も改革派教会の特色の一つである。

#### b. 神の主権の高調と予定の強調

偶像礼拝の徹底的排除は、「ただ神にのみ栄光を！」と改革派信仰において神の主権が高調されることの裏面である。改革派神学の特質は、神の主権を高調して、全体として首尾一貫した体系を築くことにあるといわれる。改革派の信仰問答書の傑作『ウェストミンスター小教理問答』の第一問答「人の主な目的はなんであるか。」「人の主な目的は、神の栄光を現わし、神を永遠に喜ぶことである。」はあまりにも有名である。

また、神の主権の高調との関連で予定（選び）が改革派神学体系では重要な位置を占めている。とはいえ、予定の教理は改革派神学の専売特許ではない。予定の教理は、神が使徒パウロを通してローマ書八章や九章、エペソ書一章に啓示されたことである。

「神は予め定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」ローマ八：三十

「すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとしてされました。」エペソ一：四

アウグスティヌス、ルターもそれぞれ『信仰・希望・愛』と『奴隷意志論』で予定について述べている。

つまるところ、予定とは恩寵救済の福音の究極的表現なのである。人の救いは、その人の行いにはよらず神の恵みによるということは、言い換えると、人が救われるのは、その人が善も悪も行わない前に、神が自由な主権的意志をもってその人を選んでいからであるということになる。この予定の真理は己の罪深さを自覚するまじめな信徒にとってはこの上ない慰めとなり、神への賛美となる。

しかし、予定の真理は扱いの難しさがあって、その扱いを誤ると、まじめな求道や信仰的努力や伝道意欲を損なう危険性があるのは事実であろう。しかし、それは扱いを誤ればの話である。ジョナサン・エドワーズ、ジョージ・ホイットフィールドといった十八世紀の信仰覚醒運動の強力な指導者たちも、十九世紀の大説教者チャールズ・スポルジョンも厳格なカルヴァン主義者であった。ともかく、予定の強調は神の主権の現れとして改革派神学の特質の一つであることは確かである。

#### c. カルヴァンの「教会と国家」観

---

<sup>79</sup> WCF21:11 「万物に対して統治権と主権を持ち、善にして万物に善を行なわれる、それゆえに心をつくし思いをつくし力をつくして恐れ、愛し、ほめたたえ、呼ばわり、信頼し、仕えるのが当然である神が存在されることを、自然の光は示している(1)。しかし、このまことの神を礼拝する正しい方法は、神ご自身によって制定され、またご自身が啓示したみ心によって制限されているので、人間の想像や工夫、またはサタンの示唆にしたがって、何か可視的な表現によって、または聖書に規定されていない何か他の方法で、神を礼拝すべきでない。」

カルヴァンは「教会と国家」の関係をどのように見たか？ルターの「二王国論」とどうちがうのか。彼はジュネーブでなにをしようとしたのか。カルヴァンがジュネーブで改革に携わるようになったのは、ジュネーブ市からの要請があったからであり、カルヴァンはジュネーブ当局の協力を得なければ改革の進めようがなかったことは事実である。やはりカルヴァンの改革も、俗権とのかかわりが深い。

一般にカルヴァンがジュネーブで行なったことは、「神政政治」と呼ばれ、ルターの二王国論に比べると、教会の国家に対する発言力が大きい、それは教会が国家の働きを侵害するということではない。カルヴァン的な「教会と国家」観とは、聖書が教会のみならず国家をも支配しているという構造であると丸山忠孝師は教えた。そのモデルは、旧約の王国時代、神のことばの下に祭司だけでなく、王も位置させられていたことにあるといえよう。申命記 17:18-20「彼がその王国の王座に着くようになったなら、レビ人の祭司たちの前のものから、自分のために、このみおしえを書き写して、自分の手もとに置き、一生の間、これを読まなければならない。それは、彼の神、【主】を恐れ、このみおしえのすべてのことばとこれらのおきてとを守り行くことを学ぶためである。それは、王の心が自分の同胞の上に高ぶることがないため、また命令から、右にも左にもそれることがなく、彼とその子孫とがイスラエルのうちで、長くその王国を治めることができるためである。」

教会と俗権とはそれぞれ神から託された領域は異なっているが、いずれも神のことばの支配の下にあるという考え方である。

前提は、やはりコルプス・クリスチアーヌム（キリスト教社会）である。この場合、教会の任務のひとつは、国家が暴走せず、その分を果たすように警告をすることである。

### 3. アナバプテスト（再洗礼派）――聖く傷なき教会を求めて

#### a. 沿革

再洗礼派はツヴィングリの宗教改革に対して不満を抱いた人々によって始まった。彼らがツヴィングリと違っていたのは、「キリスト者の信仰は霊的な覚醒によって体験され、その聖い生活によって表現されるものだ」ということだった。ツヴィングリは宗教上の統一が国家の政治的統一の基本だというコンスタンティヌス帝以来の伝統的な考え方に立っていたが、再洗礼派アナバプテストは国家イコール教会という体制に組み込まれることを拒否し、むしろ、自由な礼拝共同体として自分たちだけの集会の形成を希望したのである。教会史において、「教会と国家の分離」を主張した最初の運動がこの再洗礼派の運動といえる。再洗礼派としてはメノナイト、フッタライト、スイス兄弟団があり、米国のアーミッシュはこの流れのなかにある。

しかし、再洗礼派の主張はコンスタンティヌス大帝以来、教会＝国家体制を常識とする教会から受け入れられず、新旧両教会から激しい迫害に遭い、あまたの殉教者を出すことになった。

#### b. 聖く傷なき栄光の教会を

再洗礼派の理想は「聖く傷なき栄光の教会」を地上に実現させることにあった。彼らに

は、理想実現にとって一番の障害は幼児洗礼であった。自覚的に信仰告白もしないうちに授けられる幼児洗礼が、名ばかりのクリスチャンを大量生産していると見たのである。再洗礼派の解釈によれば、新約聖書には幼児洗礼の根拠がなく、教会の伝統にすぎない。そこで、自覚的信仰告白者に授けられた洗礼だけを有効とし、幼児洗礼を受けた者に再び洗礼を施したので、再洗礼派とあだ名されたのである。もっとも彼らにとって幼児洗礼は無意味だったから、「再び」洗礼を授けているという意識はない。

彼らが「きよく傷なき栄光の教会」を実現させるために重視したもう一つのことは、教会戒規であった。スイス再洗礼派の「シュライトハイム信仰告白」では、第一条項は洗礼であり、第二条項の「放逐」と第三条項の「聖餐」は戒規にかんすることで、それぞれ除名、陪餐停止について述べている。また、「シュライトハイム信仰告白」は第四条項では墮落した「世との分離」を述べ、第六条項には教会は剣に象徴される権力・武力との分離すべきことを述べて、キリスト者は官職についてはならず、剣に対しては無抵抗絶対平和主義を貫くべしとした。また、第七条項では国家が要求する宣誓も拒否するとした。

以上のように、聖さを熱望する再洗礼派は「山上の垂訓」の実践を志し、そのために名ばかりの信徒の排除・この世からの分離をした。しかし、幼児洗礼否定・宣誓拒否・官職拒否はキリスト教国家の意義そのものを否定するものとも見られたので、アナバプテストは新旧両教から激しい迫害を受けたが、彼らの多くは無抵抗絶対平和を貫いた。現代ではこの精神は、「良心的兵役拒否」の実践につながり、欧米では「良心的兵役拒否」はアナバプテストの人々の正当な権利とみなされるに至っている。

## 4. イングランドにおける宗教改革

### (1) ヘンリー8世 (1490-1547) と首長令 (1534)

イングランド国王ヘンリー8世はもともと教皇から「信仰の擁護者」という称号を与えられるほど熱心なカトリックだった。しかし、自ら望む王位継承者を得ることと、アン・ブーリンへの恋心から、妻キャサリンとの結婚の無効の宣言をローマ教皇から得ることを希望したが容れられなかった。そこで、ローマから断絶する政策を次々に打ち出し、最終的に1534年、イングランド議会は王の指示にしたがって、聖職録初年度上納金、その他のローマへの献納を禁止し、キャサリンとの結婚を無効と宣言し、王が英国教会の再考の首長であると宣言した。このとき、「王の忠実なしもべ、しかし何よりも神の忠実なしもべ」であるトマス・モアは信徒にすぎない王が教会の首長になることはできないとして、首長令に反対して、処刑された。

このあと、ヘンリーはすでに内縁関係にあったアン・ブーリンとの結婚を合法化したが、生まれたのはエリザベス一人だった。その後、アン・ブーリンは姦通罪で死刑、その後、ヘンリーは政略結婚を繰り返し通算6度の結婚をし、多くの血を流して、シャルル・ペローの「青髭」のモデルにも擬せられる<sup>80</sup>。

ヘンリー8世の時代、トマス・克蘭マー Thomas Cranmer (1489—1556) は、国王ヘンリ

<sup>80</sup> 「青髭公と六人の妻たち」のモデルはジャンヌ・ダルクの戦友ジル・ド・レイとも言われる。

ー8世の離婚問題では王のために有利な発言をし、1533年初代大司教に就任、王とキャサリンとの結婚の無効、アン・ブーリンとの結婚の合法性を宣言した。だがもう一面、克蘭マーはその立場をもちいて、聖書の翻訳を命じて王の勅令によってすべての教会に大きな英語訳聖書を備え付けて、だれでも読むことの出来る場所にそれを置かせた。これは宗教改革を目指す者の強力な武器となった。

克蘭マーは次のエドワード6世の治下では改革の推進に中心的役割を演じ、「一般祈祷書」を出版した。これによって初めてイングランドの人々は母国語で典礼にあずかることになった。

### (2) 「血塗られたメアリ」 Mary I, Mary Tudor 1516-1558

エドワード6世死後、メアリー1世が即位する。彼女は強烈的なカトリックであり、王権が確立するや否やプロテスタントを大弾圧。プロテスタントの指導者300人を火刑に処した。このとき、カンタベリー大司教トマス・克蘭マーも処刑された。

彼は盟友の処刑を牢獄から見るように強制され、恐れをいだいて転向声明書に署名してしまう。ところが公衆の面前で転向を表明する機会が与えられたとき、克蘭マーはこの場で転向表明を撤回した。

「それらは、わたしが心に抱いている真理に反して、死の恐れから、もしできるなら自分の命を救いたいという思いから書かれたものです。・・・わたしが書いたことのすべては、わたしが心に信じていることに反しているのですから、まず最初にわたしの手が罰せられるべきです。ですから、わたしが火のところに来たら、まず手から焼きましょう。教皇に関しては、わたしは教皇はキリストの敵、反キリストとして、そのすべての偽りの教理とともに否定します。」ゴンサレス pp81-82

### (3) エリザベス1世

英国の歴史上、最大の名君とされ、彼女の時代に英国は黄金期を迎えた。アン・ブーリンの娘である彼女はプロテスタント。教会の首長が教皇であれば、自分は姦通の子となってしまうという立場。とはいえ、極端なプロテスタントではなく、国教会の礼拝形式の一致を目指す。1563年の『39か条』は中庸の道をめざした成果。信仰形式統一令 1559 ベッテンソン p331 参照。

メアリ・スチュアートはエリザベスを殺して、自ら英国女王となってカトリック復興を遂げるべく画策するが、処刑される。

## XXV. 正統主義の時代 17世紀

ヨーロッパ大陸は、フランス、イギリスを始めとした地域に中央集権化が進んで行き、国王は教会をも王権の下に収め、教会を国民統合の手段としようとする。自らを絶対化する専制君主たちの権力意志は、お互いに衝突することになり、絶え間ない戦争が起こる。

この時代、プロテスタントはローマ教会と他派に対して自派の神学体系の正統性を主張するために、改革者たちの成果をより精緻に体系化することに力が注いだ。これに対して、ローマ教会も対抗宗教改革によってカトリック正統主義を体系化することになる。

この当時の、自派のみを正統とするようなメンタリティをもつ神学と教会と、我こそは絶対だと思っている専制君主の国家とが結びついていた。それゆえ、国家が戦争に明け暮れるとき、それは悲惨な宗教戦争となる。

## 1. ドイツ：宗教戦争から宗教寛容政策へ

### (1) シュマルカルデン戦争 (Schmalkaldischer Krieg) 1546-1555 年

1546 年に神聖ローマ帝国内において勃発した戦争である。カトリック教会を支持する皇帝カール 5 世とプロテスタント勢力シュマルカルデン同盟の間で争われた。

背景

1531 年に反ローマ・反皇帝・反カトリックを掲げた諸侯の同盟がシュマルカルデン同盟である。神聖ローマ帝国では当時対オスマン帝国の戦費を集めることに躍起になっており、帝国内情は放置されていた。

先立つドイツ農民戦争でも皇帝は鎮圧しようせず、諸侯自らこれらを鎮圧した。これらの不満から同盟は結成され、反カトリックを掲げた宗教戦争となった。無論、皇帝が帝国の内情に疎いことや弱体化が明白であったからということもある。オスマン帝国やフランス王国のカトリック支援なども理由の一つといえる。

1542 年にはフランスが対神聖ローマ帝国戦争を開始し、皇帝が手薄になった事で同盟は蜂起した。これらの問題に直面した神聖ローマ帝国の皇帝カール 5 世は 1544 年に対フランス戦争を中止し、内乱の鎮圧に着手した。これにより 1546 年に皇帝と同盟の間ではっきりとしたシュマルカルデン戦争が始まった。

1555 年にカール 5 世のアウグスブルクの和議により一応終幕。これによりプロテスタントが帝国内で許されることになった。

### (2) 三十年戦争 (dreißigjähriger Krieg) 1618-1648

16 世紀にドイツで起きた宗教戦争はアウグスブルクの和議で一応の停戦にこぎつけたが、この和議には、アウグスブルク信仰告白に署名したルター派しか含まれていなかったから、改革派とその他のプロテスタントはなお異端とみなされていた。アウグスブルクの和議では信仰の形態を選択する自由は領主・支配者にしか認められていなかったから、その領民たちは不幸な状況に置かれた。

「プラハの窓外放出事件」をきっかけに、ボヘミアにおけるプロテスタントの反乱が起こり、神聖ローマ帝国を舞台とした国際戦争。「最後の宗教戦争」、「最初の国際戦争」などと形容されるが、スウェーデンが参戦した 1630 年以降は、ハプスブルク家、ブルボン家、ヴァーサ家による大国間のパワーゲームと捉える向きもある。

### (3) ウェストファリア条約 (1648 年)・・・宗教的寛容政策へ

すべての人が戦争とそれをもたらす荒廃に疲れ果ててしまった。国土が戦場とされたドイツ人たちは焦土と化したわが国土を憂えていた。スウェーデンもフランスも領土を拡張する目算が立って、兵を引く準備ができて、1648年ウェストファリア条約が調印された。宗教に関しては領主だけでなく、領民もふくめてすべての人々がカトリック、ルター派、改革派である場合にかぎって、自らの信仰に従う自由を認められた。アナバプテストは含まれない。

宗教的なことがらを軍事力によって決着させようとするのが、いかに悲惨な結果を生むかということを知った結果である。そして、お互いに自分こそ正統であると争う、正統主義的なあり方、信仰のありかたに対する失望感、不信感が近代人の心を支配するようになる。

十六世紀はプロテスタント宗教改革時代であり、十七世紀は宗教改革の成果を体系化して確立したプロテスタント正統主義時代とされる。しかし、ヨーロッパは宗教をめぐって戦争で荒廃してしまう。

## 2. フランスで：「荒野の教会」プロテスタント弾圧

### (1) ユグノー戦争 (1562-1598年)

[ジャン・カルヴァン](#)の思想が[フランス](#)で勢力を持ち、[改革派](#)はカトリック側から蔑みを込めてユグノー (huguenot) と呼ばれた。ユグノーはドイツ語の Eidgenosse(アイドゲノッセ、盟友の意味)から生まれた蔑称。

プロテスタントには一部貴族が加わり、弾圧にもかかわらず勢力を広げていった。1560年、プロテスタントは弾圧側の中心であった[ギーズ公フランソワ](#)を襲い、王族らを奪取しようとしたが、計画は事前に漏れていたため、実行者は捕らえられ残酷な処刑が行われた([アンボワーズの陰謀](#))。これは摂政[カトリーヌ・ド・メディシス](#)が、ギーズ公の勢力を殺ぐためプロテスタントを利用しようとして失敗したものとされる。

1562年、カトリーヌと[シャルル9世](#)は宰相ミシェル・ド・ロピタルとともに両派の融和を図り、プロテスタントの集会や私邸内での礼拝を認める1月勅令(フランス初の信教の自由に関わる法令)を出したが、宗教上の対立を止めることができず、まもなく内乱が勃発した。

1562年、ヴァシーでプロテスタントの虐殺事件が起こった。これは当時政界で力のあったギーズ家の兄弟二人が200人の武装した貴族たちとともに、ヴァシー村の納屋で礼拝中のユグノーを包囲して、大量虐殺したのである。これ以降ナントの勅令(1598年)までの内乱状態を一般にユグノー戦争と呼んでいる。およそ36年にわたって断続的に戦闘が行われた。

特に1572年8月24日の「[聖バテルミーの虐殺](#)」が有名である。ギーズ公爵は、パリ治安維持部隊と合流して、ユグノーを襲撃し、2000人のユグノーが虐殺された。さらに、ギーズ侯尺が虐殺を国の隅々にまで拡大せよとの命令を発したので、パリの虐殺は地方に広がり、犠牲者の数は数万人に上った。

## (2) 荒野の教会・・・・・・・・・・ゴンサレス p 149

1610年5月14日、ナントの勅令でプロテスタントの信教の自由を保障したアンリ4世が暗殺された。1624年には枢機卿リシュリユーが宮廷の実権を握った。リシュリユーは宗教的信念よりも政治を優先する男だったから、三十年戦争ではブルボン王朝の最大の敵ハプスブルク家をたたくためにプロテスタントに味方した。しかし、フランス国内ではプロテスタントは中央集権化の道を突き進む国家を分裂させる者として弾圧し、アンリ4世がユグノーの安全のために与えた城塞都市を攻撃し虐殺を行なった。城塞都市がなくなった後は、宗教的寛容政策がとられた。リシュリユー死後、枢機卿マザランがその政策を継承する。

マザランが死んだとき、23歳で王となったルイ14世は「ガリア教会の自由」を主張し、ローマ教皇と対立し、かつ、フランス国内のユグノーに圧力をかけた。プロテスタントに対して軍隊を動員してカトリックへの再帰を強制した。

1685年、ルイ14世はナントの勅令を廃止し、フォンテンブローの勅令を出し、プロテスタントを非合法と定めた。その結果、フランスの多くのプロテスタントは外国に亡命した。彼らは職人や商人であったためフランス経済は打撃を受け、これは後のフランス革命の遠因となった。

フォンテンブローの勅令の後にも、表面上カトリックに再帰したが実際にはプロテスタントの信仰を持つ人々はプロテスタント的礼拝を維持し続けた。野原や森や空き地で秘密の礼拝がささげられた。発見されることはまれであったが、発見されると逮捕され、男はガレー船の強制労働へ、女は終身刑に、牧師は死刑にされ、子どもたちはカトリック教育をするために里親に出された。

こうした弾圧に対して反乱をおこした黙示主義的なプロテスタントはカミザールと呼ばれ、国王軍は長年にわたって手を焼いたものの、17世紀末にはほぼ一掃された。

1715年、フランス改革派教会の教会会議が組織された。神のことばに矛盾することを要求されたとき以外はすべて法的権威に従うことを改革派教会の基本方針とした。1726年、スイスのローザンヌに亡命地での神学校が設立され、フランスの改革派教会の熟達した隠れ説教者たちはここで養成されることになった。こうして改革派プロテスタントはフランスに根を下ろしていく。国家からの弾圧がやむのはルイ16世が1787年に寛容令が出されて後のことである。

### 3 イギリス：ピューリタン革命と名誉革命<sup>81</sup>

小笠原正敏（東北学院大学）による説明 YAHOO 百科事典

「ピューリタン（ぴゅーりたん） Puritans

清教徒。エリザベス1世の宗教改革を不徹底とし、聖書に従ってさらに徹底した改革を進めようとしたイギリス・プロテスタント。その思想的背景はカルビニズムで、その改革

---

<sup>81</sup>中央公論社『世界の歴史8』参照

運動は16世紀から17世紀に及ぶ。

国教会（イングランド教会）にとどまり内部からの改革を志向するもの、それからの分離こそ改革の第一歩とするもの、ピルグリム・ファーザーズのように国外に脱出して理想を実現しようとするものがいたが、カルバン主義的改革を目ざした長老派を中心に、独立派、バプテリスト派、クェーカー派、水平派、ディガーズ、第五王国主義者などの諸派に分かれる。

彼らの改革運動は、礼拝改革から教会政治改革に移り、さらに政治的改革へと向かった。国教会の弾圧のなかにも説教運動やクラシス運動などによって共鳴者を増やし、ジェームズ1世時代には、彼らの要求によって『欽定（きんてい）訳聖書』（1611）が現れる。

ついにチャールズ1世のとき革命が起り、ピューリタンはクロムウェルのもとに王政を倒し、共和政を樹立した。『失樂園』の詩人ジョン・ミルトンはその秘書であった。

しかし共和政は11年で終結し、王政復古、国教会の復活となり、ピューリタンはやがて非国教会派となる。

聖書主義、簡素な霊的礼拝の強調、神への強烈な責任意識、聖なる共同体の建設などがピューリタンの中心的主張であった。また政治的、経済的にも、近代社会の形成に果たした役割は大きいとされている。」

## [2] ピューリタン革命とウェストミンスター会議

ヘンリー7世に始まるイギリスのテューダー王朝は、1603年独身の女王エリザベス1世で断絶した。そこでエリザベスの叔母の曾孫にあたるスコットランド王ジェームズ6世がイギリス王ジェームズ1世として王位を継承した。これがステュアート朝の始まりである。ジェームズ1世は、「王権神授説」をふりかざして、イギリスの伝統である議会を無視した政治を行なおうとしたため、国王と議会の対立が深まった。そしてこの対立がジェームズ1世の子チャールズ1世の時代になって、内乱となる。

チャールズ1世はイギリス国教会を自身の権力の支柱とし、スコットランドにも国教会の信仰を強制しようとした。スコットランド教会は長老派であったので、信仰の自由を守るため反乱を起こして抵抗した。1640年、チャールズはその鎮圧の費用を調達するため議会を召集したが、議会は経費の調達に反対したためわずか3週間で解散させられた。その後議員の選挙が行なわれて再び議 会が開かれたが、議会はわずかの差で議会派が王党派を上回り、チャールズに非難を決議した。

こうした混乱のなかでウェストミンスター会議（1643年－1649年）が開催された。「ウェストミンスター会議（The Westminster Assembly of Divines）は、1643年、長期議会によって、イングランド国教会を再編するように命じられた神学者たちの会議である。議会のピューリタンは、5回も会議の招集を要求したが、チャールズ王は、毎回サインを拒んだ。そして下院の条例として準備されて、やっと5回目に可決された。これは、貴族院によって1643年6月、王の同意なしで有効になった。会議は、30人の信徒（10人の貴族と20人の一般人）と、121人の神学者と牧師から成った。

聖職者は、四つの派の代表から選ばれた。

監督制主義者。

長老制主義者。

会衆制主義者。

エラストス主義者

最初の会議は、1643年7月1日に開かれ、1643年から1649年の間、1163回におよんだ。会議が最初与えられた仕事は国教会39箇条の改定であった。

アイルランドのローマ・カトリックが、王の側について反乱に加わる危険があったので、議会はスコットランドの助けを要請した。そして厳粛同盟契約が結ばれた。スコットランドは、「スコットランドの信仰を守り、神のことばによって、イングランドとアイルランドの宗教改革をし、最もよく改革派教会を表すために」、カトリック的な監督制の根絶を要求した。そして、6人のスコットランドの委員がウェストミンスター会議に参加した。

1643年10月12日に、ウェストミンスター会議は議会から、「神の聖なる言葉にかない、教会と家庭を守り、スコットランド教会と他の改革派教会に一致した、戒規と教会政治」の勧告を求められた。会議はそれを受けて、39箇条の修正をやめ、新しい信仰基準の作成にとりかかった。そして4年の間にウェストミンスター信仰告白、ウェストミンスター大教理問答、ウェストミンスター小教理問答を生み出した。下院はこれに根拠聖句を要求した。教会政治について4派は決して合意に達することがなかった。」<sup>82</sup>

他方、革命の動向である。1642年、チャールズは議会派の議員を逮捕しようとしたが失敗し、これを契機として王党派と議会派の内乱が勃発した。

戦争のはじめは王党派が優勢であったが、その後オリヴァー・クロムウェルの組織した「鉄騎隊」の活躍によって議会派が優勢となった。議会派の軍隊はこの「鉄騎隊」になって能力本位の組織に改組された。1645年のネーズビーの戦いで王党派は完敗し、チャールズ1世はスコットランドに逃走したが、1647年、スコットランドから議会軍に引きわたされた。

内乱は一旦議会派の勝利で終結したものの、今度は議会派の内部で対立がおこった。独立派と長老派の対立である。独立派とは各教会の独立と横の連合を主張した宗派であり、長老派とは長老会による全国の教会の一元的指導を主張した宗派である。王党派に対しては独立派の方が非妥協的であり、長老派の方が妥協的であった。チャールズはこの状況を見て脱走し、スコットランド軍と連合し、王党派の軍を率いてふたたび内乱を起こした。しかし、チャールズはまたも議会軍に敗北し、第二次内乱は終結した。

その後、議会では長老派が追放あるいは逮捕され、独立派が権力を掌握した。 1649

---

<sup>82</sup> Wikipedia

年議会はチャールズを裁判にかけ、裁判はチャールズを死刑にすると判決した。処刑は判決の3日後に実行された。議会は君主制の廃止と共和政の開始を宣言した。

革命の結果、独立派の指導者であるクロムウェルが実権を掌握したが、彼はチャールズの処刑後、アイルランド征服に乗り出した。クロムウェルはアイルランドの一般市民多数を虐殺し、アイルランド人の土地を没収し、耕地の3分の2がイギリス人のものとなった。アイルランド人の多数が餓死し人口は半分近く減少した。

1653年、クロムウェルは護国卿の地位につき、立法・行政の最高権限をにぎり、軍人に地方行政を担当させて、軍事独裁の体制を築いた。クロムウェルは58年病死し、息子が護国卿の地位を継いだ。軍は彼を無視したため力はなく、翌年引退した。1660年、議会在軍をその統制下に置こうとして軍と対立し、内乱となったが、議会の勝利でおわった。議会は国王の復位を決定したため、チャールズ2世がオランダからイギリスに戻った。これを「王政復古」という。

### [3] 名誉革命

チャールズ2世の時代に、議会では国王を支持するトーリー党、国王に対立するホイッグ党という2大党派が形成された。国王はトーリー党を利用してホイッグ党を弾圧した。1685年、チャールズ2世が死去し、王弟がジェームズ2世として即位した。彼はカトリック教徒であって、イギリスにカトリックの信仰を復活しようとはかり、国教会と対立したため、トーリー党の支持も失ってしまった。1688年、カトリックの王妃に王子が生まれると、ホイッグ党、トーリー党は共同でジェームズ2世の廃位を計画し、ジェームズ2世の長女メアリーの婿で、オランダ総督であったウィリアムにイギリス国王に就任するよう要請した。ウィリアムがこれにこたえてイギリスに上陸すると、ジェームズ2世はフランスに亡命した。

1689年、ウィリアムはメアリーとともに、イギリスの共同統治者として国王に即位した。ウィリアムはイギリス国王にしてオランダ共和国の総督であった。

議会は国王に「権利宣言」を承認させ、これを「権利章典」として発布した。これによって、国王は議会の同意にもとづいてのみ統治することとなり、イギリスの立憲君主制がここに成立した。この革命は流血をとまなわなかったとして、イギリス人はこれを「名誉革命」と言っている。

### 大木英夫『ピューリタン』に対する松岡正剛の解説抄…未整理。

キリスト教社会には中世このかた「コルプス・クリスチアヌム」というものが覆ってきた。「キリスト教的社会有機体」といった意味をあらわす。

各個人に先行し、社会にいわばア・プリオリに存在する全体性めいたものをいう。

この「コルプス・クリスチアヌム」はやがて教会と国家の分離によって分断される。それがキリスト教西欧社会における「近代化」である。近代社会はそれまでの神との契約とは別に、国家や会社との契約を発進させた。これによって個々の人間像がキリストの体や教会の壁にくっついた「浮彫的人間」から、社会の囲いの中に立ち往生する「立像的人間」

へと転換されることになった。

結果的にこの転換は強行されたのではあるが、当然ながらそこには容易に埋めがたい溝や矛盾があった。

そこで、この転換にはそれなりの宗教的な確信が必要だった。その溝を生めるために、中世から近代に向かう転換期に登場したのがピューリタニズムである。

ピューリタニズムはルターの宗教改革から50年たったケンブリッジ大学トリニティ・カレッジに発祥した。**世はエリザベス女王時代**。最初の中心人物はトーマス・カートライトである。

当時、エリザベス女王はカンタベリー大主教パーカーにアングリカニズム（英国国教会）による国民的礼拝様式の統一と強化を依頼していた。アングリカニズムはヘンリー8世のイギリスの宗教改革によって生まれたもので、カトリシズムがユニヴァーサリズム（普遍主義）だとすれば、ナショナリズム（愛国主義）と結合した。

ヘンリー8世がアングリカニズムを主張したのは、ルターのプロテスタンティズムによってカトリシズムが脅かされたことに対する反発が動機になっているのだが、一方では、このままローマ教皇庁によるカトリシズムを守るだけではイギリスの宗教政治はやっていけないという現実判断にももつづいていた。

だからヘンリー8世のアングリカニズムは次の3つの柱でできていた。ナショナリズム、国王絶対主義、そして受動的服従主義である。

これをエリザベス女王が引き継いだ。

ところが、カートライトはこの3本柱をことごとく批判した。それはアングリカニズムが体制の思想であるとすれば、まさに反体制の思想であった。

カートライトの反体制思想は、もともとはカルヴァンのプロテスタントな宗教思想から出ている。

カルヴィニズムとは一言でいえば「ソラ・スクリプトラ」、すなわち「聖書のみ主義」である。ピューリタニズムは聖書が適用できないような「間隙」をけっして認めない。どんな隙間も聖書に書いてあるとする。逆に、ヘンリー8世のアングリカニズムはこの「間隙」を生かした国教だった。

これに対して同じプロテスタンティズムでも、ルターのばあいは「ソラ・フィデ」（信仰のみ主義）である。

しかし、これらの差異はまだ思想上のことであって、社会的にはそこにアン女王時代（1550年代）に迫害されてジュネーブやオランダに逃れた「エミグレ」がイギリスから帰ってきた事情が直結していた。

エミグレはもともと移住者とか亡命者を意味するが、ピューリタニズムの生きた本質があるとすれば、まさにこの「移住すること」にある。その後の歴史上のピューリタニズムが、ついに「移住しつづける者の思想」となったからである。なんといってもカートライト自身が大学から追放され、エミグレとなったのだ。

ピューリタニズムはそもそもが外来的な思想なのである。エミグレの移住宗教なのである。もうすこし正確に言えば、人間をエミグレにする宗教思想なのである。

キリスト教の教父思想はもともと宇宙論的な世界存在思想をもっていた。それが教皇と国王がいならぶにつれ、各地に都市国家ができあがるにつれ、しだいに歴史思想に転化していった。歴史の変化をうけいれるようになったのである。それがダンテの『神曲』からミルトンの『失樂園』への変化というものである。

しかしそこにはまだ、樹木のように自然の中に育っているような人間を想定しているところがあった。

それに対してピューリタニズムはそのような樹木のように植わっている人間を、近代社会に向けて脱出させる。そういう強烈な方針をもっていた。ピューリタン文学の代表作であるバニヤンの『天路歷程』にはそういう人間像が描かれていた。だからピューリタンたちは「新しいエルサレム」への移住をどこかで希求する。

こんな宗教思想がエリザベス時代の社会体制に受け入れられるはずがない。

そこでエリザベス女王はかれらに、表面上だけでも「コンフォーム」（服従）させるようにした。コンフォーミズムとよばれる。しかしピューリタンたちがこれで満足できるわけではない。かれらはそこで3つの活動に転進していった。ひとつは地下説教運動へ、ひとつは国外脱出へ、ひとつは革命へ。

第1の地下説教運動の指導者となったのがカートライトである。クラシス運動という。第2の国外脱出（エクソダス）をやったのが有名なピルグリム・ファーザーズ（旅人なる父祖たち）である。最初は1620年にサザンプトンを出港したメイフラワー号で旅立ち、1630年には大挙して新大陸に移って、かれらこそが「新しいエルサレムとしてのアメリカ」をつくることになる。

そして第3の道がピューリタン革命（清教徒革命）になる。

ピューリタン革命の経緯は省略したい。オリバー・クロムウェルの革命だ。

本書ではそのクロムウェルに先行したジョン・リルバーンという興味深い自由人に宿ったクリスチャン・ソルジャーの感覚や、なぜ「王」（チャールズ1世）を殺すことがピューリタン革命の頂点にならざるをえなかったかということを、端的な調子で描き出している。ぜひ読まれたい。

ここではその頂点を説明する代わりに、この時期にピューリタニズムが派生させた決定的な価値観を、3つだけあげておきたいとおもう。

第1には、多様な「Congregationalism」が生まれたことである。日本では「会衆派」と訳され、その活動は独立派とか組合教会となって、それが日本では新島襄の同志社系になっているなどと理解されている活動形態だが、ここにはもうすこし重要な意味が隠れている。

かつてのカトリシズムが「回勅の宗教」であるとすると、Congregationalismは

新たに「会議の宗教」をつくったということなのだ。いまでも“the sence of meeting”とよばれて、アメリカ人やイギリス人と仕事をするとその思想が前面に躍り出る。日本人が欧米の真似をしてミーティングのルールやディベートのルールをおぼえようとしたのは、ほとんど Congrigo ーションナリズムにもとづいている。

第2に、この Congrigo ーションナリズム（会衆派）の波及から、社会における“人間向上のプログラム”の変質が実質的に起こっていったことがあげられる。

それを簡潔に言えば、さしずめ「コンヴァージョン」（回心）から「エデュケーション」（教育）へという転換だ。

これでだいたいこのことの見当がつくだろうが、「信仰と会議と教育」はピューリタン精神のなかでは、ひとつながりのものなのであり、このひとつながりの途中でそれぞれ介入してくるのが「ディシジョン」というものなのだ。

第3に、ピューリタン革命がまさにそうだったのであるが、ピューリタンたちがコモン・ロイヤーと結び、ピューリタニズムの社会のなかに契約社会をつくっていったことが特筆される。すでにメイフラワー契約にもそれはあらわれていたが、クロムウエルの革命そのものが契約革命の推進だったのである。このモデルをプロテスタンティズムに拡張し、さらにそれが資本主義の起源になっていると指摘したのがマックス・ウェーバーだった。

ピューリタニズムはたいへん妙な思想であり、運動である。その起源には王を殺した宗教運動があり、その後は、つねに父を喪失した状態の宗教思想でありつづけている。

つねに移住先を求めるし、どこかに定着したらしたで、移住者の再編成を課題にせざるをえなくなっていく。ノーマッドな思想に似ていて、まったくノーマッドではない。脱出する地点が必要な旅立ちなのである。しかも旅先には目的地があって、そこに“建国”と“会議”が待っている。

しかし、これがヨーロッパのキリスト教社会が「近代」を生むにあたって作りあげた最も合理的な実験装置だったのである。その合理装置からは思いがけないほどの副産物をもたらされた。たとえば、ピューリタニズムこそが「霊的」（スピリチュアル）という言葉に対して、初めて「肉的」（カーナル）という言葉を持ち出したのだったし、「自由」と「デモクラシー」と「信仰」とを矛盾なき状態で実践する前提を拵えたのだった。

## (2) 会衆派教会（独立派・組合派教会）

宗教改革の影響は英国にも及んだ。英国には、十四世紀にすでにウィクリフという急進的な反ローマの主張者が出ていたが、十六世紀になって国王ヘンリー八世の離婚問題をきっかけとして英国教会は、ローマ教皇の支配権を拒否して国王を首長とすることになる。英国教会（聖公会）は大陸の宗教改革とローマ教会からと左右両方から批判や影響を受けながら中道（via media）の歩みをして行くが、特にジュネーブの宗教改革の影響を受けた人々が国教会の中途半端な改革を批判して、ピューリタン運動を展開する。このピューリ

タン運動のなかに長老派・会衆派・バプテストが含まれる。会衆派は別名、独立派また組合教会とも呼ばれる。

長老派は国民全体を包括する教会の改革をめざす。だから「改革された国民教会」が宗教改革の目標となる。それは英国のアングリカンの国教会を長老式に変えることを意味する。だが、会衆派は教会契約によって形成されるような「聖徒の交わり」としての教会をつくるのが目標になる<sup>83</sup>。自覚的な信者の集りが会衆である。

会衆派の祖ロバート・ブラウン(1550-1633)は、真の教会は自覚的に信仰告白をし、きよい生活を営むキリスト者によって構成されること、会衆は神と人々との契約によって結ばれること、教会は国家から独立していること、各個教会はそれぞれ独立した自治権を持つことなど、会衆派の原則を明らかにした。これらの原則は国教会の存在を根本的に批判・攻撃するものであったから、国教会側からの激しい迫害を受けることになり、多くの殉教者がでる。こうした迫害のなかで、会衆派教会は信仰の自由を求めて、オランダへ、また新大陸へと移住を決行し、それぞれの地に会衆派の教会を設立することになる。一六二〇年十二月に新大陸プリマスに上陸したピルグリム・ファーザーズの名はあまりにも有名である。新大陸にわたった会衆派はニューイングランドに多くの教会を設立し、国内・国外伝道に熱心であり、また、一般教育でもハーバード、エール、アモスト、オベリンなどの大学を設立した。他方、英国に残った会衆派は十七世紀に清教徒革命の中核勢力となって、一時期、英国に共和制を実現した。

日本では米国からの宣教師によって日本組合基督教会が明治一十九年（一八八六年）に立し、昭和一六（一九四一）年の日本基督教団成立以後、これに含まれることになった。一般的にいて、教職たちの多くは同志社大学神学部出身で自由主義的傾向が強い。

### (3)バプテスト教会

#### a. 沿革

ジョン・スミス（一五五四―一六一二）がバプテスト教会の創始者とされる。スミスは最初、英国国教会の牧師であったが、後に会衆派の牧師となって迫害を受け、その中でオランダに移住する。会衆派の教会観はアナバプテストに通じる所が多い。教会観は彼はオランダ亡命中にアナバプテストのメノナイトの影響を受けた。やがて彼は幼児洗礼を否定し、自己バプテスマを行い、最初の現代バプテスト教会を設立した（一六〇九）。しかし、スミスはメノナイトに移ったので、一六一二年にはヘルウィスはアルミニウスの立場の一般バプテスト教会を設立し、一六三三年にはカルヴィニズム的立場による特定バプテスト教会も設立され、バプテストは熱心な宣教によって英国各地にひろがり、長老派・会衆派とともにプロテスタントの三大教派の一つとなった。

米国のバプテスト教会の歴史は、英国から移り住んだR. ウィリアムズの設立による（一六三九）。米国でのバプテストの発展は、英国におけるよりもさらに急速であり、後述するような伝道者たちを輩出して、米国における最大教派を形成することになった。

---

<sup>83</sup> 大木英夫『ピューリタン』p94

## b. 再生的信仰－簡易信条－宣教の情熱－会衆政治

バプテストの特徴の根本は、再生した信徒はキリストと直接にリアルに結びついているという信仰である。それは聖書と伝統との峻別として現れる。バプテスト教会は神学的には正統的で三位一体やキリストの二性一人格を告白した古カトリック信条を認めている。しかし、バプテスト教会はことばによって定式化された伝統・教理というものは、キリストにあってなされた啓示に対する生き生きした信仰を形骸化させるのではないかという警戒心を持っている。そこでルター派や改革派が持つような整備された本格的な信条をあえて持とうとはせず、簡易な信条を持つに止める。

この姿勢はバプテスト派に対する肯定的な見方からいえば神学的な穏健さ、否定的な立場から見れば中途半端さとして現れる。バプテスト教会の中にはアルミニウスの（半ペラギウスの）立場とカルヴィニズム的（アウグスティヌスの）立場が混在している。カルヴィニズム的というのは神の予定を強調する立場であり、アルミニウスのというのは神の予定の教理をゆるくして人間の主体性を強調する立場である。邦訳されているH. シーセン『組織神学』は穏健カルヴィニズムに立って書かれている。

神は、むしろバプテスト教会に神学的厳密さへの熱心よりも、宣教への熱心という賜物を授けられたとあってよいだろう。明確な回心を強調するバプテストのなかから、救霊への情熱にあふれた者が出てくるのは当然であった。英国に十七世紀に現れた『天路歷程』の著者ジョン・バンヤンの宣教への不屈の闘志にせよ、十八世紀米国の信仰覚醒運動の指導者ジョナサン・エドワーズの宣教にせよ、十九世紀のドワイト・ムーディにせよ、また英国のスポルジョンにせよみなバプテストの伝道者たちである。また、「近世海外宣教の父」と呼ばれインド宣教に立ち上がったウィリアム・ケアリ（一七六一―一八三四）も、ビルマ宣教に挺身したアドニラム・ジャドソン（一七八八―一八五〇）もバプテストの信仰者であった。

バプテストの救霊への情熱の根本には、その自覚的信仰告白の強調・再生者洗礼の実践があるといって良い。宣教の歴史を振り返るとき明らかなことは、福音宣教に時には組織も必要かもしれないが、福音宣教にとってははるかに重要なのは人だということである。キリストにある救いに感激し命を惜しむことなく捧げた御霊に満たされた人、これこそ福音宣教の力であった。

バプテストは、信徒は直接にキリストに結び付いていると固く信じている。キリストと信徒の間に教職者や組織や儀式が入り込むことを極度に嫌う。これは、ルターが新約聖書に発見した「信徒皆祭司」という原理である。ルターは信徒皆祭司主義を提唱はしたが、ルター派教会においては教職制や儀式がかなり強調されているので、「信徒皆祭司」という原理はかなり観念的なものに止まっているといわざるをえないだろう。また改革派では信徒皆祭司の原理はもっと実を持っている。たとえば信徒から選挙で選ばれた治会長老とよばれる役員が、必要に応じて説教をすることも認容される。しかし、改革派は神学的厳密さを重んじるので、みことばの教師の資格には相当の訓練と知識が必要とされるので、一般信徒が直接宣教に携わることには障害がある。やはり宣教は教職者がすることだという

空気が一般的には強い。しかし、バプテスト教会は、神学的厳密さよりも聖書を介してキリストと直接結び付く回心が重んじられるので、信徒がかなり自由に宣教に携わることができる風土、御霊の賜物が自由に用いられるという素地がある。

信徒がキリストに直接結び付いているという信仰は、バプテスト教会の教会政治のありかたに決定的な影響を及ぼしている。バプテスト教会は会衆制をとり、牧師は各教会の会衆が招聘するのである。教会における主権者はもちろんキリストであるが、キリストから教会の統治のために主権を委託されているのは会衆なのである。また、各教会は独立しており、監督制のように、各教会を超える上部機構からの制約を受けることに対して、強い抵抗感を持っている。

#### 4. ルター派正統主義

##### (1) フィリップ主義とルター派厳格主義

ルターの宗教改革は、単に実践的なだけでなく、教理の改革を伴っていた。教会にとって決定的に重要なものは正しい教理であるということはこの確信であり、信仰義認の教理は、それによって教会が立ちもし、倒れもする教理であると信じていた。

ルターは、神学的天才であったが、諸教理を体系化することについては賜物ではなかった。彼は最も親しい友人フィリップ・メランヒトンに、その仕事を委ねた。ルター亡き後、メランヒトンはルター派神学の中心的解釈者として跡を継ぐ。彼の『神学総論（ロキ・テオロギキ）』はルター派の標準的教科書となる。メランヒトンは人文主義的傾向が強く、この点でルターと異なっていた。彼は、ルターと同じく信仰義認の教理を強調するが、救い的手段としてでなく、救いの実としての善きわざをも強調する。

ルターとメランヒトンの違いは、ルター死後、フィリップ主義とルター派厳格主義との対立となっていく。メランヒトンは福音の中心的要素と、周辺のことがらを区別し、周辺のことがらをアディアフォラと名づけた。本質的な事柄はいかなる死守すべきだが、福音の本質を語り続ける権利を確保するために、アディアフォラに固執すべきでないとした。しかし、ルター派厳格主義者は、「福音に本質的な要素と周辺の要素があることは真実であろうが、信仰の明白は告白が要求される状況は存在するはずだ」とした。たとえ周辺のと見なされるような要素であっても、場合によってはそれが信仰そのものの象徴となることがあり、それを放棄することは信仰を否定することに他ならないということがある<sup>84</sup>。

また、聖餐式における主の現存について、フィリップ主義者はカルヴァン主義に似ているとして非難した。

最終的に 1577 年『和協信条』において、論争のほとんどについてこの信条は中間的立場を採用した。

ルター派教会の信条については、<http://www.remus.dti.ne.jp/~hiromi-y/sinzyou.html> 参照。「アウグスブルグ信仰告白」「アウグスブルグ信仰告白弁証」「小教理問答」「大教理

<sup>84</sup> 踏絵、日の丸、君が代に対する態度において、この両者の対立は繰り返されている。聖書の時代においては、偶像にささげられた肉の問題である。

問答「シュマルカルデン条項」「和協信条」

## (2) プロテスタント・スコラ主義

和協信条のあと、ルターの主張とメランヒトンの主張の調和をはかり、他のプロテスタント、カトリックとの違いを強調して、ルター派正統主義がいかに正しいかを示す体系を構築した。この時代の神学をプロテスタント・スコラ主義と呼ぶ。その3つの特徴は、

第一にその巨大な体系。トマスの神学大全に匹敵する。ヨハン・ゲルハルトの第二版で23巻に及ぶ。

第二の特徴は、アリストテレスを用いた。内容的にはカトリックと違うが、論調と方法はカトリックと類似している。

第三は神学が教会生活・魂への配慮のためでなく、大学の学者のものとなった。

それぞれの信仰の正統派神学者は、自らの神学的立場の防備を固め、あらゆる教理において同意するものだけがキリスト教徒と呼ばれるにふさわしいとみなす教条主義に陥っていった。絶対王政という時代の空気というものがあるのだろう。このような自派の教理体系を絶対化するメンタリティをもつ教条主義の教会が、剣の権能をもつ国家と結びついたものであると、その国家同士の争いは悲惨な宗教戦争とならざるを得なかった。

その結果は、キリスト教会の信用の失墜であり、多くの知識人たちは教理を大切にするキリスト教に対する嫌悪感を抱くようになっていく。こうして世俗化が進んでいく。次の時代の啓蒙主義運動の一因は、正統主義時代のキリスト教会の教条主義にあると言わねばならないであろう。

## 5. 改革派正統主義の予定論論争

改革派圏内において起こり、今日のプロテスタント教会にまでずっと尾を引いている重要な神学論争に、アルミニウス論争（予定論論争）がある。

オランダの神学者アルミニウス（一五六〇ー一六〇九）は、もともとカルヴァン主義者であったが、カルヴァン主義の予定説に疑念を抱くようになり、ここに予定論論争が巻き起こった。アルミニウスは論争のさなかに逝去するが、彼の教説を支持する人々は「抗議書（レモンストラント）」を提出した。彼らが否定したカルヴァン主義予定説の五点は、英語ではしばしば頭文字を取ってT U L I P（チューリップ）と呼ばれる。

### (1) 聖書における予定説

「神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」ローマ8：30

このみことばは人の救いの順序について、あきらかにしている。それは、〈予定－召し－義認－栄光付与〉という順序である。予定とは、「すなわち、神は私たちが世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようと定めておられた」

(エペソ 1 : 4) ということにほかならない。世界の基の置かれる前、つまり、万物が創造される前に、神はすでにキリストの民となる者を見こころのうちに定めておられたというのである。

パウロ以後では、まずアウグスティヌスが予定の教理をあきらかにした人物である。アウグスティヌスはペラギウス論争において予定の教理を明らかにした。ペラギウスはひとことではれば人は自力救済主義・功績救済主義者であり、これに対してアウグスティヌスは恩寵救済を徹底的に論じたのであった。その恩寵救済論の究極的な主張こそ、予定の教理であったのである。

功績救済主義は、人はその善い行いによって神に認められて救われるという。そこで、恩寵救済主義はパウロがそうであったように、「その子どもたち（エサウもヤコブ）はまだ生まれておらず、善も悪も行わないうちに、神の選びの計画の確かさが、行いにはよらず、召してくださる方によるようにと、『兄は弟に仕える』と彼女に告げられたのです。」という。つまり、善悪の功績がその人が神に救われる基準でなく、ただ神の主権的な選びが人の救いの根拠だというわけだ。

## (2) TULIP 論争 (予定論論争)

第一点は Total Depravity (全的堕落、全的無能力) である。アダムにあって人間は全的に堕落しているので、救いにともなう善を意志することも、回心のために備えることもできないというのがカルヴァン派の主張である。これに対してアルミニウス主義では、アダムにあって堕落した人間は神の怒りの下にあるものの、人間は自ら意志して神のわざに協力して神に立ち返る能力を持っているという。

第二点は Unconditional Election (無条件的選び) である。カルヴァン主義では神は人間が何を思い、何を言い、何をするかという条件によらず、その主権によって選びたまうという。アルミニウス主義では、神はあらかじめだれがキリストを信じるかを見ておられ、その予知に基づいて信じる者を救いへと選ぶという。

第三点は Limited Atonement (限定的贖罪) である。カルヴァン主義では、キリストは救いへと選ばれた者のためにのみ贖罪のわざをなさったという。アルミニウス主義では、キリストの贖罪のわざはキリストを拒む者のためにもなされたという。

第四点は Irresistible Grace (不可抗的恩寵) である。カルヴァン主義では、神が選んだ人々を救うために聖霊を送られると、その人は神に抵抗することができずかならず回心するという。他方、アルミニウス主義は、人間は救おうとする神の恵みに抵抗することができるという。

第五点は Perseverance of Saints (聖徒の堅忍) である。カルヴァン主義は聖徒は一度信じて救われれば、最後まで確実に信仰を保持して永遠の救いにいたるという。アルミニウス主義は、一度救われた者が堕落し滅びることもあるという。

要するに、カルヴァン主義は救いにおいて神の主権と恵みを徹底的に強調し、他方、アルミニウス主義は救いにおいて人間の主体性をある程度認めようという立場である。とは

いえ、アルミニウスはペラギウスのように人間の原罪の事実まで否定はしない。

神学には三つの体系がある。第一は人間の全的堕落と百パーセントの神の主権的恩寵を主張するパウロ－アウグスティヌス－ルター－カルヴァンの体系であり、第二はその対極に当たる人間の原罪を否定し、自力救済を主張するペラギウス－ソツツィーニー－リベラリズムの体系であり、第三は両者の中間、つまり、原罪を部分的に認め、神と人が協力して救いが達成されるとする半アウグスティヌス（半ペラギウス）－アルミニウスの体系である。

予定論論争それ自体はカルヴァン主義の勝利としておわり、アルミニウス主義の牧師たちは多数追放され、上述五つの点を明確にしたドルト信条が出される（一六一九年）。ドルト信条は「死せる正統主義」の産物という偏見をもって見られがちなのだが、実際にドルト信条自体を読んでみると、実に、首尾一貫して論理は周到であるばかりでなく深い敬虔を感じさせるものである。しかし、ドルト信条によって明確にされた厳格な予定の立場は自派を強固にすると同時に、他派との協力を難しくするという結果をも生むことになったのも事実である。

他方、アルミニウス主義の神学的主張も生き続けて、近代プロテスタント諸派に影響を与えて行くことになる。英国国教会のカンタベリー大主教という国教会の最高権威の座にあったウィリアム・ロード（一五七三－一六四五年）は、アルミニウス主義を国教会の立場として採用した。そして、後に英国国教会から独立したメソジスト教会は、アルミニウス主義を継承し、メソジスト派から生まれてきたホーリネス、ナザレン、アライアンスなどもアルミニウス主義を継承していくことになる。バプテスト教会も、一般バプテストはアルミニウス主義を、特定バプテストはカルヴァン主義を採用することになるのである。このように、近代プロテスタントの歴史において、カルヴァン主義とアルミニウス主義の予定論論争は、教会・教派の分裂をも招き、今日もなお決着がつかない。厳格なカルヴァン主義に立ったバプテストの説教者スポルジョンが、その主張のゆえに、教会を二分することになったというのは有名な話である。

今日でも日本の福音派内で改革派系ときよめ派系の協力にはむずかしいことがある。予定論の五点に関して、きよめ派系の諸教団は五点ともアルミニウス主義に立ち、改革派系の諸教団は五点ともカルヴァン主義に立ち、バプテスト系は両者の中間に位置しているというぐあいである。

### （3）＜評価＞死せる正統主義か黄金時代か？

ルター、カルヴァンを初めとする改革者たちが次々に登場した時代の後には、当然のごとく、この宗教改革の成果を復元再生し、歴史上の重要文書資料を網羅し、驚くべき熱心さをもって聖書の教えを系統立てる神学運動が始まった。論敵として想定されたのは、一つにはローマ教会であり、また、他派のプロテスタントであった。この時代の神学は、その後のプロテスタントの規範となっていくので、プロテスタント正統主義（オーソドックス）という。

#### a. 自由主義からの批判

この正統主義神学運動は、ルター派教会と改革派教会において展開されて、それぞれ大部のプロテスタント組織神学の体系が形成された。ところが、自由主義神学の立場からする教理史や教会史の見方では、一般に正統主義神学はすこぶる評価が低い。

その理由の一つは、先に述べたように正統主義神学のあり方が、絶対王政の時代の宗教戦争をとどめるよりも推進する役割を果たしたことにある。

神学の内容に関する正統主義を軽く見る理由の一つは、自由主義神学が人間の生命感とか個性を重んじるのに対して、正統主義は前世紀のオリジナルである宗教改革者の体系化による拡大コピーにすぎないと見られるからである。第二は、自由主義神学は十八・十九世紀の啓蒙主義の認識論・哲学に基づく歴史学や文献批評学を前提として用いているのに対して、正統主義神学はこれらを知らない時代の産物にすぎないとされるからである。

#### b. 福音主義に立つ我々としての評価

しかし、正統主義時代に完備された神学的弁証は、事実上、福音主義神学の直接的なルーツであるからである。例えば改革派神学の代表的テキストであるC. ホッジ（一七九七—一八七八）の『組織神学』はスイスの正統主義の代表的神学者の一人トゥレティーニ（一六七—一七三七）の『組織神学』を土台としている。またホッジの『組織神学』をもとにバプテストのA. ストロング（一八三六—一九二一）の『組織神学』は書かれ、邦訳もあるH. シーセンの『組織神学』はホッジやストロングをもとにして書かれている。福音派の事実上の頭（mind）のルーツは、正統主義神学にあるといてよい。福音派は大ざっぱな言い方をすれば、正統主義のマインドと、次回に学ぶ敬虔主義運動のハートから成っている。

我々が正統主義神学を高く評価すべき、第二の理由は、自由主義神学が前提とするところの啓蒙主義哲学の認識論に問題があるからである。啓蒙主義の哲学は理神論的なものであって、本来のキリスト教的なものではない。理神論とは「神による創造は認めるが、それ以後、超越的な神は世界に関与せず世界は自動機械として動いているので、奇蹟も啓示もありえない」という世界観である。自由主義神学は、この理神論に基づく文献批評学・歴史学を、超越的な神からの啓示である聖書の本文研究に適用するという論理的矛盾を犯しているのである。正統主義神学は改革者たちと同様、聖書的な神観と世界観に基づいて神学と構築している。すなわち生ける神が万物を造り、この神は世界を保持し御旨にしたがって奇蹟や啓示をなさるという世界観である。こちらの方が、自由主義の二元論よりもよほど筋が通っているのである。

評価すべき第三の理由は、宗教改革時代から正統主義時代に、多くの信仰告白が生み出されたという点である。教会史上、多くの信条が次々に生み出された時代というのは、二つの時代に限られている。第一は、古カトリック教会の時代であり、第二はプロテスタント宗教改革とその直後の時代である。信条は、教会が自らを他者（異端・異説）と区別するために機能するものである。古カトリック時代には、使徒信条はグノーシス主義と区別してなされた信仰告白であり、ニカイア信条はアレイオス派と区別して、カルケドン信条はキリスト論に関する両極端から区別してなされた信仰告白であった。

プロテスタント正統主義の諸信条は、カトリック教会と他派プロテスタントとの区別するための信仰告白であった。特に、カトリックに対してより明確に教会のことばとして語るという意識が働いていた。マイナス面としては、聖書が今も語りかける生ける神のことばとしてではなく、信条の証拠テキストの集成というような読み方がされるようになってしまったくらいがあるということである。特にルター派においては神学論争そのものが激しくなり、正統教理のみを強調し、正統実践を軽んじる嫌いがあったので、生き生きとした敬虔が失われたと言われる。改革派圏内では正統教理と正統実践はふたつながら常に強調されたといわれる。

ここに代表的なプロテスタント信条を名前だけ掲げておきたい。詳細は信条学講義に譲る。

ルター派では、大教理問答書 1529 年、小教理問答書 1529 年、アウグスブルク信仰告白 1530 年、シュマルカント条項 1537 年、和協信条 1576 年。  
<http://www.remus.dti.ne.jp/~hiromi-y/sinzyou.html> 参照。

改革派では、第一スイス信条 1536 年、フランス信条 1559 年、スコットランド信条 1560 年、ベルギー信条 1561 年、ハイデルベルク信仰問答 1563 年、第二スイス信条 1566 年、アルミニウス主義条項 1610 年、ドルト信仰基準 1619 年、ウェストミンスター信仰告白 1646 年・・・  
<http://www.ogaki-ch.com/WCF/text/index.htm>

ローマ教会では、これに対抗して、トリエント会議の教規および教義に関する教令 1564 年、トリエント信仰告白 1564 年。

## XXVI. 啓蒙主義・敬虔主義・世界宣教 18 世紀、19 世紀

### 1. 啓蒙主義とフランス革命ー迷信からの解放から理性崇拜へ

#### (1) 「啓蒙とはなにか」

インマヌエル・カント (1724-1804) は「啓蒙とはなにか」という問いに答えて、それが、「未成年状態からの脱却」つまり他者に指導されることなしに自身の悟性を使用できる状態に到達することであると述べ、そのために必要なのは「理性の公的な使用の自由」であると説いた。<sup>85</sup>

十八世紀は思想史的には啓蒙主義思想の時代である。「啓蒙」とは暗闇に光をあてるという意味である。暗闇とは中世的・封建的なものを意味し、光とは人間理性を意味している。啓蒙主義者たちは人間理性を絶対の基準として、旧来の権威・制度・習慣・思想などはことごとく批判し、これからの解放を目指した。批判の対象には、教会制度、そして聖書までも含まれることになる。

---

<sup>85</sup> カント『啓蒙とは何か』岩波文庫

一面では啓蒙主義にはキリスト教社会を中世的迷信から解放したという功績がある。たとえば、この時代以前、カトリックもプロテスタントも精神病者や変人をすべて悪霊つきや魔女と考えて、多くの人々を異端審問にかけて焚刑に処した。しかも、魔女狩については密告制度があったから、事実無根で魔女に仕立て上げられて、火あぶりにされてしまう者も多く、一つの町や村が人口激減してしまう例もあったという。啓蒙主義は、こうした迷信をことごとく消し去ってしまう。聖書によれば、精神病者の一部分は悪霊によるものであるが、彼らは焚殺されるべき人々でなく、むしろ主の御名によって救われ、解放されるべき人々である。

しかし、他面、啓蒙主義思想は反キリスト教的・反超自然主義思想である。啓蒙主義的歴史観のお得意はガリレイ裁判であり、キリスト教会こそは理性の光を妨げてきた迷蒙そのもののように教えられる。実際には、ガリレイのみならずケプラー、パスカルなど十七世紀の天才科学者たちが、聖書とならぶ「もう一冊の書物」としての自然を探究していたことが、今日ではホワイトヘッドやバタフィールドの研究によって実証的に明らかにされているのであるが。

## (2) 理性崇拜とフランス革命

残念なことに啓蒙主義は理性を神格化することによって、迷信だけでなく、まことの生ける神と神のことばまでも否定してしまう。

啓蒙主義的理性は、フランス革命において暴走した。フランス革命の実態は血なまぐさい内ゲバに満ちたものであった。フランス革命中、1789年から1794年の間に、ギロチンで粛清された者は十万人、革命の行き方に反対した自国民弾圧戦争で四十万人の血が流されたのである。

フランス革命は伝統を非合理という名のもとに根こそぎ否定し、王や僧侶、貴族の特権や教会制度を旧体制として破壊した。中世の荘園・教会・ギルドなどの組織が破壊されると、従来これらの組織に属していた民はばらばらになり、国民として政府に直結される。国民は、独裁的権力を持つ中央政府の下で、平等に国民教育を受け、平等に国税を払い、平等に国民軍兵士として徴用される近代の全体主義国家ができあがったのである。従来、教育は教会や貴族が私的に行なっているものであったし、軍人は各王や領主たちの傭兵であった。

革命家らが崇めるのは「理性」であった。彼らは革命が勃発した一七八九年以後、聖職追放と教会破壊を進めてきたが、九三年十一月には全国的に礼拝の禁止と教会閉鎖を実施し、十一月十日にはノートルダム大聖堂で「理性」の神を祭る宗教儀式を行ない、九四年六月八日には、ルソーを崇拝する独裁者ロベスピエールは新フランスの大司祭として「最高存在と自然」をまつる祭典を挙行了た。

フランス革命の熱情が頂点に達したロベスピエール支配の「恐怖政治」の時期は、テサロニケ後書に預言される「不法の人」の国家体制を彷彿とさせる。そして、これは百年後のロシア革命以降、中国、北朝鮮、カンボジアのポルポトなどの大量粛清の共産主義による全体主義革命の祖型である。「彼はすべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗

し、その上に自分を高く挙げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。」  
(2テモク 2:4)

いったいフランス革命の指導思想とはどういうものだったのか。

### デカルトの合理主義とルソーの全体主義

革命家らが伝統的諸価値を大胆にも否定できたのは、近代哲学の祖デカルト (*René Descartes*, 1596–1650) の合理主義精神による。デカルト的理性とは、善悪・美醜・歴史など微妙な次元までを判断する広い知性の働きではなく、「三角形の内角の和は百八十度」というような幾何学的・論理的に明らかなことだけを真理だとするような、ごく狭い意味の知性の働きである。デカルトは論理的明証性を与えない経験には価値がないと考えたから、歴史や伝統を無謀にも無価値だとすることができた。

デカルトは『方法序説』で「犯罪や闘争のもたらす不都合に迫られて、やむをえずおいおいに法律を作ってきた民族は、寄り集まった最初から思慮の深い立法者の憲法を守り通した民族ほど立派に開けて行けぬだろう。」と『方法叙説』で言っている。このことばは、時代は隔たるが、あたかもマグナ・カルタ以来、歴史的経験を重ね試行錯誤しつつ徐々に国民の権利を獲得してきた英国の立憲君主制に対して、伝統的諸価値をことごとく不合理だと破壊し、かつ、理性の計画にしたがって新国家を建築しようとしたフランス革命が優越していると主張しているように読める。

フランス革命の指導的思想は直接には、ジャン・ジャック・ルソー (*Jean-Jacques Rousseau*, 1712–78) の思想である。革命でバイブルの位置を占めていたのは、ルソー『社会契約論』であった。ルソーは革命勃発の前年に死んだ予言者であった。彼は、ジュネーブで生まれたが早く父母を失い、孤児としてあちこち転々として育てられた。成人して後の女癖の悪さ、自分の五人の子どもを次々と遺棄した事実と悔恨と非現実的な子ども礼賛、そして体制に対する激しい憎悪は、不幸な幼少期の経験が影響していると思われる。彼はデカルト、ライプニッツ、ロック、パスカルなどを研究してのち、パリに行き、『学問芸術論』、『人間不平等起源論』、『社会契約論』、『エミール』などを書く。ルソーの筆致は情熱的かつ魅力的なのだが、その思想内容は恐ろしい。彼の思想をまとめてみる。

第一。人間は自然状態においては平等で善で幸福であった。

第二。ところが、所有制度と政治体制が生じたことによって、不平等が生じ、現在の人間は悪くなり不幸になっている。だから人間が幸福になるためには、現在の政治制度を破壊すべきである (以上、『人間不平等起源論』)

第三。旧体制破壊後、民の一般意志を体現する神的立法者 (『社会契約論』 1 : 7) が定めた法と国家体制のもとで、国民すべてが平等となる。国民は立法者を通して自分の主権を行使しているから完全な民主主義である。

第四。国民は能力・財産・自由・生命にいたるまで自発的に祖国にささげるべきである。しかも、国民は自分の意志と祖国の意志とが一致するから、自由である (『社会契約論』 1 : 6)。

第五。理想的国民を作り出すためには、理神論的な「市民宗教」を創設する (『社会契約論』 4 : 8)。

黙示録十三章の全体主義国家の姿を髣髴とさせる。この思想的系譜は、ロシアのボルシェビキによる革命、中国の共産主義革命、カンボジアのポルポトによる革命に連なる。

### (3) 啓蒙主義キリスト教

啓蒙主義者の中には、急進的なフランスのサド侯爵のような無神論者もいるが、多くは理神論者であった。フランスではヴォルテール、英国ではシャフツベリー卿やジョン・ロックや、その影響下にある米国建国の父ジェファソンやフランクリン、またドイツの哲学者カントたちは理神論者である。ロック『キリスト教の合理性』(1695)、トーランド『非神秘的キリスト教』といった先駆的著作に加え、ヒュームは『奇跡論』(1748)においてキリスト教の本質は奇跡と無関係だと主張した。また、カントは晩年『単なる理性の限界内の宗教』(1793)を記している。ここで彼は啓示・祈り・メシアなどのユダヤ教的要素を排除した理性宗教を主張している。

啓蒙主義者がいう「神」とは人間の理性で納得できる枠内に閉じ込められた理神論(デイズム deism)の「神」にすぎない。理神論の神とは、時計にとっての時計屋のようなものである。時計屋がいったん時計を作ったら、時計はそれ自体の法則にしたがって機能しているように、啓蒙主義者の神はいったん世界を造った後は引退して世界に手を出すことができず、世界はそれ自体の法則にしたがって運行しているという。したがって事実上、人間は理性をもって世界を自由に支配できるということになる。当然、理神論においては奇蹟も啓示もない。啓蒙主義者とはいわばサドカイ派である。主イエスは理神論者たちであろう。「あなたがたは聖書も神の力も知らない。」と。

## 2. 大陸の敬虔主義運動と英米の信仰覚醒運動

### a, シュペーナー

改革派正統主義においては常に正統教理とともに正統実践が強調されたのであるが、ルター派正統主義においては教理的知識のみを重んじる傾向が強かった。そこで、ルター派正統主義の形骸化に対するアンチテーゼが、その内部から生じることになる。フィリップ・ヤコブ・シュペーナー(1635-1705)に始まる敬虔主義運動である。正統主義神学が今日の福音主義信仰の頭をなしているとするれば、敬虔主義運動は、現代の福音主義信仰の直接的な意味で心のルーツと言える。

シュペーナーが『敬虔なる願望 Pia Desideria』という書物において主張しているのは、聖書を教義の証拠本文の集成として読むのではなく、生活に密着したものとして読むべきだということである。正統主義は逐語的靈感を主張しているが、その靈感された聖書を事実上、まるで教義学的体系構築の手段のように扱っていた。シュペーナーもまた聖書の逐語的靈感を信じていたが、聖書を生活に密着したものとして受容することを目指したのである。

また、彼は正統主義ではたぶんに単なる題目に終っていた万人祭司主義を実践に移した。万人祭司主義は、すでにルターが新約聖書ペテロ前書に再発見して主張していたことだったが、ルター派教会では実際的には聖職者組織は特権的な位置を占めていた。これに対

してシュペーナーは信徒が家庭において信仰教育や祈りに携わり、教会運営にも参加することを励ましたのである。

また、シュペーナーは正統主義の頭だけの信仰を批判し、「心の宗教」「内なるキリスト」、再生・聖化を強調して信仰生活における感情の機能も積極的に評価した。

さらに、彼は教理の純粋性は神学論争によってのみならず、敬虔な生活によって保たれるとした。正統主義が論争に明け暮れて悲惨な結果を残したことへの反省である。神学上の問題をあつかうにあたっては、「根本的必然的なことがらにおいては真理と一致を、根本的必然的でないことがらにおいては自由を、そしてすべてのことにおいて愛をもって当たらなければならない。」この原則は、今日でも重要な点であろう。

最後に、正統主義では説教壇が学識やレトリックの開陳の場のようにになっているきらいがあったが、シュペーナーは、説教は主のみことばを素朴かつ力強く語り告げ、滅び行く魂を救い、眠れる魂を目覚めさせるものとした。説教の改革。

## b. ジョン・ウェスレー (1703-1791) と福音主義運動

### \*スタート

大陸で敬虔主義が盛んだったこのとき、英米では福音主義の信仰覚醒運動が起こった。ジョン・ウェスレーはオクスフォード大学の学生だったとき、ホーリークラブを作り、友人たちと規律(メソッド)ある生活をした。このことから、メソジストとあだ名される。1735年、彼は、その熱心から新大陸の原住民伝道を志して渡米するが、成果を得られないまま失意のうちに帰途につく。そのとき嵐に揉まれる船の中で、不安にふるえていたとき、フス派モラビア兄弟団の人々の持つ揺るがぬ平安と喜びに触れる。ただウェスレーの敬虔がモラビア派とちがうのは、モラビア派は静寂主義的だったが、ウェスレーの敬虔はダイナミックなものであった。1738年5月24日午後9時15分ころ、アダスゲイト街で弟チャールズの朗読する、ルターの『ローマ書序文』を聞いていて福音的回心を経験する。それまで彼は戒律主義的であったが、罪の深い自覚のなかで信仰による義を得た瞬間、信仰義認すなわち恩寵救済への目覚めである。

以後、ウェスレーはその人生を「できるかぎり、生きた実践的なキリスト教を広め、できるかぎり多くの人々の魂の中に神のいのちを生み出し、それを保ち増し加える」ためにささげることを決心した。

### \*メソジストと社会奉仕

理性の力を信じる哲学は古代ギリシャの時代からあり、もっと言えば、アダムが善悪の知識の木の実を取って食べたときから、人間は神をないがしろにして理性の力で自律しようとしてきたのであるが、それが工業力と巨大な資本力をともなって世界を動かし始めたのは産業革命が起こってからである。産業革命ということばを初めて用いたのは、1837年ルイ・オーギュスト・ブランキが初めてである。産業革命は1760年から1830年にイギリスで起こった現象であるが、次々にベルギー、フランス、アメリカ、日本で同じように起こった。イギリスにおいて最初に産業革命が起こったのは、海外に広大な植民地を持って

いたからである。

産業革命（第一次 1760－1830）によって生産力が爆発的に伸び、農村地帯では羊毛生産が金になるということで地主がそれまで小作民が入り合い地として自由に利用・耕作していたところを囲い込んでしまったので、小作民たちは生活の糧を得ることができなくなって、仕事と糧を求めてロンドンをはじめとする都市に移動した。都市では生活困窮者によって人口が爆発的にふえ、スラム化が起り、治安が悪化した。救世軍のブースによって「最暗黒のイギリス」と呼ばれたことである。

伝統的国教会はこうした状況に対して手をこまねいており、激増する人口に対して教会の座席はまったく不足していた。1739年ウェスレーはブリストルで野外説教を始めて、人々の必要に答え、さらに福音を伝えると同時に、回心した人々の生活の改善のためにソサエティと名づけたいくつかのグループに弟子たちをわけた。やがてソサエティは大きくなりすぎたので、これを11人の構成員と1人の指導者からなる「組会」に分けた。組会は毎週集って聖書を読み、祈り、信仰のことがらについて語り合い、基金を集めた。この運動がメソジスト運動と呼ばれる。メソジスト運動は急速にイングランドに広がった。ブリストルの司教がウェスレーの巡回説教が各地の教区を混乱に陥れていると批判したとき、彼は「世界がわたしの教区である I look upon the whole world as my parish.」と答えたという。ただしウェスレーは生涯英国国教会の聖職であり、新しい派を立てようとはしなかった。

米国ではジョナサン・エドワーズ、ホイットフィールドがカルヴァン主義に立ち、かつ人間の感情や意志を重んじる実践的なキリスト教を新大陸に広げた。

ジョン・ウェスレーは個人の回心と信仰を強調しつつ、再生した者の実践として社会奉仕が結び付けられた。貧者や社会的弱者の救済、少年労働の禁止、牢獄の改革、奴隷制廃止、教育改革といったことが、福音主義の流れからでてきた。しかも、これらは最終目標ではなく全人的な救済の一環なのである。日曜学校協会、聖書協会、トラクト協会、YMCA, YWCA, 救世軍などの内国伝道団体が誕生していった。<sup>86</sup>

#### \* 共産主義の出現

19世紀中葉から、こうしたキリスト教会の社会奉仕を欺瞞であり、「宗教はアヘンである」と非難して、共産主義革命によって社会は抜本的に改められるべきであると主張したのがK.マルクス（1818－1883）であった。共産主義運動の急速な広がりに警戒して、福音主義は、社会奉仕・社会的責任から撤退して狭い意味での伝道に自らの働きを限定するようになっていく。

### 3. 敬虔主義と世界宣教運動

敬虔主義のもう一つの重要な功績は世界宣教である。再生の恵みに感激したキリスト者

---

<sup>86</sup> 丸山忠孝『2000年』pp214－215

たちは、この福音を世界に伝えないで入れられない。シュペーターの影響で敬虔主義者となったフランケは、教育方面で活躍したばかりでなく、ハルレ・デンマーク・ミッションを創立して多くの宣教師を送り出し、ツィンツェンドルフはヘルンフートに外国宣教に熱心なモラビア兄弟団を組織した。

このモラビア兄弟団の影響を受けて再生的信仰を得たのが、英国におけるメソジスト運動の創始者ジョン・ウェスレーであった。ウェスレーは形骸化した国教会がうち捨てていた産業革命時代の疲弊した英国社会を福音宣教とそれにとまなう社会運動によって再生した。ウェスレーの感化を受けたG・ホイットフィールドは渡米して、J・エドワーズとともに米国の大覚醒運動を推進した。そして、十八世紀半ばから十九世紀にかけて次々と伝道団体が誕生して世界宣教が推進されていくことになる。

「近代海外宣教がそれ以前の宣教活動と最も大きく異なる点は、政府も教会も宣教のために資金を提供しなかったことである<sup>87</sup>。」とゴンサレスは指摘する。国家や教会の支援無しに宣教活動をするフェイスミッションの場合、宣教師になろうとする人は広く一般信徒に呼びかけた。

ウィリアム・ケアリは近代海外宣教の父と呼ばれる。ケアリ(1761-1834)は、国教会信徒だったが決定的回心後、非国教会に転じる。ケアリは「若い、見習い靴職人であった時、ラテン語、ギリシャ語、ヘブル語、フランス語、オランダ語を学び、十代のうちに、六か国語で聖書を学ぶ事が出来た。彼は、近代海外宣教の新時代を築いた器であった。彼は、聖書を、そのほとんどの部分を(六か国語では、完全に)調べ、東洋の40の国語・方言に翻訳した。その外にも、数多くの国語で、たくさんのトラクトや信仰書を著し、文法所や辞書も編纂した。彼は、その国の農業を発展させ、医療救援を行い、学校や大学を建て、蒸気機関・印刷機械を発達させた。彼は、聖ガンジス河に乳児を捨てることをやめさせ、夫の火葬の薪の上で、未亡人を焼き殺すこともやめさせた。

「新・使徒行伝」の中で、A. T. ピアソンは、「十年間、彼は、冷笑とあざけり、遅鈍で無関心という最悪の敵意の矢面に立った；また、シドニー・スミスのウィットに痛めつけられ、ジョン・ライランドの超カルビン主義の厳しい叱責を受けた。しかし、聖徒がひざまずき、きらめく神の信号を見続ける時、大水も、炎も、彼の前進をとどめることは出来ない。無感動のスキュラ(ギ神；巨岩に住む6頭12足の海の女怪)と反感のカリュブティス(ギ神；海の渦巻きの擬人化された女怪)の間で、ケアリは、大胆にもインドに向けて舵を取った。他の人々が眠っている間も、彼は、つまずいたり、遅れたりすることは出来なかった。たとい、彼一人であっても、彼は出発しなければならなかった。」と書いている。R. H. グローバーは、「世界宣教の発展」という著書の中で、ケアリは、「より高度な奉仕のために、自分自身を整えようと決心し、あらゆる時間を、古典の勉強と、幅広い読書のために利用した。恐らく、その才気の縦横さよりも、その不撓不屈の忍耐によって」、彼は、前述の五ヶ国語を習得し、「植物学と動物学に関する優れた知識を獲得した。クック著の『航海』という本の複写が手に入った時、彼は、非常に感動を受け、

---

87 ゴンサレス第二巻 p294

遠い国々へと、その思想や同情が向けられ、異教世界へ福音を伝えるという教会の大いなる責任と仕事を深く確信する事になった。彼の靴屋の店舗には、彼の前に大きな世界地図が掛けられていた…」これは有名な話で、しばしば、語り継がれてきた。バプテスト派の人々はもちろん、同じバプテスト派である彼を誇りに思うだろうが、バプテスト派の人々ばかりでなく、他のグループの多くの人々が（前述のグローバーのように）、ケアリに最高の賛辞を送り、恩義がある事を認めている。さらに何人かの人々の言葉に注目しよう。

（中略）

インドにおける初期の働きにおいて、ケアリがどのような状況に直面していたかを如実に語る次のような報告がある。（A. C. バウアーズ著「宣教師実録」F. H. レヴェル Co., 1937 より）：

「ある日、ケアリが、ボートで帰宅途中、群衆が、水辺近くの材木を積み上げた周りに集まっているのを見た。更に注意深く見ると、その木の上に、死体がのせられているのがわかった。そして、そばを通りかかると、その死んだ人の間だ生きていた妻が、死人と一緒に、焼かれるところであった。彼は、このサティと呼ばれる風習を知ってはいたが、実際に見た事はなかった。

ケアリが、彼らに、恐ろしい残酷な罪を犯させまいと、真剣に懇願するにもかかわらず、彼らは、見たくなければ、向こうへ行けと言った。ケアリは、その若い未亡人に、自殺行為を思いとどまるように訴えた。しかし、彼女は、それに答えて、踊ると、彼女の死んだ夫の傍らに身を横たえた。彼女が、死んだ夫の首に腕を巻き付けると、その親戚達が、彼らの上に、枯葉や枝を積み上げ、その上から、たくさんの解かしたバターを注いだ。そして、下にあるものをつるす二本の大きな竹を上挙げた。そして、死んだ男の息子が、薪の山に火をつけた。ケアリは、たとい燃える炎の中で、何か音がしたとしても、群衆の叫び声や歌でかき消されてしまったであろうと記している。その時以来、ケアリの生涯の大きな目的のひとつは、サティという残酷な習慣を根絶することになった…33年の間、このひとつの改革をすることが、彼に求められた。少なくとも、7万人のベンガル女性が、生きてまま焼き殺されてきた。」

（中略）

A. T. ピアソンの言葉をもって結論としよう。「少ししか教えられなかったが、彼は学識のある人になった；彼自身は貧しかったが、彼は多くの人を富む者とした；無名の人として生まれたが、他に見出せないほど高貴な人になった；主の導きに従うことをのみ求め、彼自身、主の軍勢を率いた。ケアリは魂への熱情を持ち、それゆえ、宣教に情熱的だった。自己犠牲は、彼の習慣であり、インドにおける彼の生活の全ては、神のために捧げられた。」

88

## XVII. 自由主義神学……………19世紀

<sup>88</sup> <http://www.eva.hi-ho.ne.jp/kidakei/Carey.txt> "40 FASCINATING Conversion STORIES" compiled by SAMUEL FISK (Kregel Publications)木田恵嗣牧師訳

## 1. 頭は科学、心は信仰

### (1) 自由主義神学—カント、シュライエルマッハー、リッチェル

十八世紀の啓蒙主義は自然も人間も自動機械と見なした。十九世紀、その無味乾燥な合理主義に対してロマン主義が起こる。その神学版が自由主義神学である。そういうわけで、ロマン主義には汎神論的雰囲気強いが、かといって、ロマン主義者は決して啓蒙主義の理性を捨てたわけではない。むしろ、頭で科学を用い、心でロマンを語ろうというのである。これを哲学の分野で行ったのがカントである。カントは科学的な認識は感覚を通して得られる経験の世界においてのみ可能であるが、神・魂・自由は感覚的に経験できないので、科学的理性は現象界にのみ有効で、道徳や宗教は扱えないとした（『純粹理性批判』）。

カントは、神の存在は科学的には証明できないとするが、道徳的な要請として神の存在を肯定する。神が存在せずさばきもないとすれば、人は善行にはげむ気持ちになれないから、神が存在することにしようというわけだ。カントの宗教とは道徳宗教であり、彼の理想は倫理的な目的の王国だった（『実践理性批判』）。

カントの科学と信仰の二元論は、敬虔主義的な雰囲気のある家庭に育ったことが背景にある。敬虔主義は、ルター派正統主義の客観的教理主義への反動として始まった。敬虔主義は、信仰の本質を学問的なものではなく、主観的で生き生きとした神との交わり・体験を重んじた。カントにとっては、もともと学と信仰は別世界のものだったのである。

自由主義神学の父シュライエルマッハー（Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher, 1768–1834）はカントの科学と信仰の二元論を枠組みとした。彼もまた敬虔主義のヘルンフート兄弟団の学校を卒業し、敬虔主義のハルレ大学に学んだという敬虔主義の子であるが、長じてカントの影響を強く受け、さらにギリシャ古典に深く親しむ。彼は、「宗教の本質は思惟でも行為でもなく、直観と感情である<sup>89</sup>」とした。特に「絶対依存の感情」といいならわされる。「絶対依存の感情」によって人は「宇宙」「無限」「一者」という超越的実在を直観し、自分自身もそれに含まれていることを知るという。信仰者は、直観によって無限者に合一する神秘的体験をする。

また、彼は、キリストの十字架の死がわれわれの罪のために神の怒りを受けられた刑罰死であったことを否定し、キリストの血による贖いを魔術的であるとして否定する。こうしてみると、自由主義神学の父シュライエルマッハーの宗教とは、「すべては神」という新プラトン哲学やスピノザの哲学的宗教のような汎神論・神秘主義の系譜に属するものであって、聖書がいう本来の意味でのキリスト教とは異質の宗教である。

アルブレヒト・リッチェル（Albrecht Ritschl）はカントの哲学を神学の土台とする。彼は科学と信仰の二元論を聖書研究に適用し、聖書を超自然的啓示の書としてでなく単なる歴史資料として扱う。すなわち、福音書は神話的に書かれたものだとし、ここから「史的イエス」を抽出し、イエスの倫理的な人格を神の愛の歴史的な啓示であるという。リッチ

<sup>89</sup> シュライエルマッハー『宗教論』p49

ユルにとってイエスは罪と死からの救い主でなく、人類にとっての最高の倫理の教師にすぎない。イエスの述べた神の国とはカントのいう倫理的な目的の王国と同一視されてしまう。「人間イエスにおいて神の子たるキリストの神性の働きの効果を見ようとする。そして、周知のように人間イエスの崇高な道德性と、イエスの教えた隣人愛に基づいた人類共同体としての神の国こそが、リッチェルにとっては神へ至る唯一の道となったのである。」(野呂芳男)

みな人間イエスをモデルとして倫理的に完成された立派な人になり、隣人愛を実践することによって倫理的な社会が実現する。それが、すなわち神の国だという。自力でイエスのまねができるという楽観的人間観、楽観的歴史観が自由主義神学の特徴である。

## (2) 哲学と聖書高層批評

自由主義神学の聖書高層批評に影響をおよぼしたのは、ヘーゲルの哲学の弁証法の論理である。弁証法というのは「正→反→合」の論理であり、ヘーゲルはこの弁証法の論理によって自然と歴史と精神の生成・運動・発展が起こると主張した。たとえば、中世は神秘主義の時代だったが、これを「正」とする。やがて、近世は「反」として合理主義の時代が来る。が、やがて、次に反動として神秘主義的なロマン主義の時代が来るが、ロマン主義は単なる中世的神秘主義でなく合理主義をも含んだより高度な神秘主義である。これが「合」である。このロマン主義の次にはまた、より高次の合理主義の時代・・・と無限に発展していくというわけだ。弁証法の論理で一切が生成発展するという哲学は、多くの知識人の魂を魅了した。神学者も例外ではなかった。

原始キリスト教の形成を、弁証法の論理で解釈し聖書批評学に応用したのが、チュービンゲン大学のバウルである。彼はまず、初代キリスト教会にはナザレのイエスから直接の教えを受けた律法的なペテロが「正」としてあったが、これに「反」として反律法・恩恵主義のパウロが対立し、やがて、両者の対立がアウフヘーベンされる(乗り越えられ、融合される)ことで恩恵と律法を説くキリスト教が成立したという。つまり、「合」である。しかも、バウルは聖書の各文書の成立年代をこの弁証法の枠から推断した。つまり、その文書の思想内容からその手紙の古さを測定したのである。

弁証法の論理から、恩恵救済を力説するガラテヤ書、ロマ書、コリント書はパウロ自身の真筆だが、他の恩恵救済を強調していない「パウロ書簡」はパウロの真筆ではなく、ペテロ党とパウロ党の対立が破棄・融合されて成立した原始キリスト教会がパウロの名を用いて作った偽作だと断じてしまう。弁証法の論理が、聖書本文よりも上に位置づけられているのである。

## (3) カントの認識論の枠組みの問題性

科学的理性は現象世界を扱い、神や魂や自由にかんすることは心の問題である。そういわれると、なるほどと納得してしまうのが多くの現代人ではないだろうか。つまり、多く

の人は知らずしてカントの影響を受けてしまっているのである。聖書の高層批評にも、カントの科学と信仰の二元論が働いている。つまり、聖書というテキスト自体は現象世界の現象なので、聖書は科学的方法をもって取扱うべきであり、信仰の世界は別に確保するという構造である。しかし、彼らのいう「科学的」というのは、実は「自然主義的」ということなのだ。アルカホリズム（アルコール中毒）患者にとって、アルコールがすべてであるように、自然主義の信奉者にとっては自然がすべてである。自然はその創造主である神さえも介入できない閉鎖した系なのである。だから自然主義者から見れば、神が自然に介入して起こる奇蹟も啓示などはありえないのだから、聖書の奇蹟はみな架空の神話的表現と見なされるし、預言といったこともありえないとされる。

カントの神は、信仰・宗教の世界に閉じ込められていて、自然つまり現象界に介入して奇蹟を起こすことも啓示することもできない、死んだ神なのである。彼の枠組みによれば、現象世界に起こることがらはすべて自然現象であり文化現象なのである。したがって、カントの認識論の枠組みにしたがう聖書学者たちは、聖書も現象世界に生じたひとつの文化現象・歴史文書としてあつかうわけである。たとえば、多神教は森林が豊かな風土に生まれたが、唯一神という観念は砂漠のような過酷な砂漠の環境が唯一神という観念を生み出したのだなどという俗説は、その典型である。なんとなく、もっともらしいと思う人が多いかもしれないが、実際にはムハンマドがイスラムの教えを説き始めるまでアラビアの過酷な砂漠地帯では多神教が広く行なわれていたし、エジプトでも古来多神教が行なわれていたのだから、ただ旧約聖書に唯一神が啓示されたのである。

それはさておき、主イエスは合理主義のサドカイ人たちが対することばを、啓蒙主義キリスト教を唱えた哲学者や自由主義神学者に向かっておっしゃるだろう。「そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではありませんか。」（マルコ十二：二四）

#### （４）「自由」とは

ここで自由の問題を取りあげておきたい。先に「信教の自由」に関連して、自由は「何からの自由」と「何への自由」によって、内容がはっきりすると述べた。

啓蒙主義者のいう自由と、国家教会主義に反対した自由教会主義者のいう自由とには、表面的類似性と本質的相違がある。表面的類似性は、双方ともに権力の束縛からの思想信条の自由を目指しているという点である。他方、両者の本質的相違とは、啓蒙主義者は理性の自律への自由を目指し、自由教会主義者は神のことばへの服従を目指しているということである。啓蒙主義者は中世的旧体制のもろもろの偶像に代えて、理性という偶像を持ち出した。他方、自由教会主義のキリスト者は国家であれ理性であれ、いかなる偶像も拒んで、神のことばに従うことを目指しているのである。

自由教会とは、ヨーロッパにおいてローマ教会の束縛や、絶対王政の下の国教会の束縛からの自由を求めた教会である。つまり、政教分離の立場を堅持している教会という意味である。イングランドから米国にわたったピューリタンたちは、本来そのような意味でもともと自由ということばを用いていた。

けれども、米国における自由教会は教会を抑圧する国教会がそもそも存在しないので、

伝統や規則が緩やかなという意味で用いたり、有料座席制度に反対するという意味で、つまり free つまり無料であるという意味で用いたりされている。自由メソジスト教会の「自由」は、無料メソジスト教会の意味である<sup>90</sup>。福音自由教会における「自由」とは個々の地域教会の国家権力や教団組織の権力からの独立 local autonomy を意味している。

自由主義神学における「自由 liberal」は、何からの自由を意味しているのか。それは歴史的・組織的な教理体系から自由という意味である。また、聖書の啓示からも自由であるということである<sup>91</sup>。

## XIIX. 自由主義神学のつまずき………20 世紀

自由主義神学は西洋文明によって、世界は進歩していくという楽観的な時代の空気の下に生まれた。リッチェルの教えた「神の国」は、その典型である。彼らは人間の当面の不完全性も道徳の教師イエスを模範とすることによって克服され、地上には神の国が到来すると信じたのである。

ところが、二十世紀になり二つの世界大戦によって、人間と文明に対する楽観主義は決定的な打撃を受けた。思想界においてもシュペングラーの『西洋の没落』というような本が登場する。近代と現代の世界ではともに科学的合理主義が支配的であるが、近代人と現代人には違いがある。それは、近代人においては科学が人類と世界を幸福にすると信じられたが、現代人はもはや科学が人類と世界を破滅に導くであろうという予感を持っていながら、科学にしがみつ、神秘的な世界へ逃避しているのである。

### (1) 実存主義

#### a. 既製品の時代に

現代の状況について、リルケ (1875-1927) は言っている。「自分自身の死を持ちたいという願望は、ますます稀有になりつつある。いましばらくすれば、そういう死は、自分自身にふさわしい生と同様、ほとんど見当たらなくなってしまうだろう。そもそもなんでもが目の前に並んでいる世の中だ。生まれてくる。なんなりとひとつの生き方を見つける。できあいの生だ。」(『マルテの手記』)

二つの革命が近代を造った。一つに産業革命が大量生産を可能にして大衆社会を来たさせた。かつて服は主婦や仕立て屋が一人一人にあつらえて作るものだったが、皆が既製服を着るようになる。靴もかばんも家具も食物も住まいもみな既製品で、それに違和感さえ

<sup>90</sup>自由メソジスト教会は、B.T.ロバーツが当時の北米メソジスト監督教会における自由主義神学的傾向にとりなす聖会（聖霊によるきよめをもとめるために行う集会）の軽視、教会の有料座席制度、秘密結社との関わりなどについて批判し、同教会ジュネシー年会において除名され、総会への上告が認められなかったため同志とともに独立し、聖書主義、福音的アルミニアンプロテスタント主義とともに座席の完全無料化、あらゆる差別からの自由を訴えた。信徒の誓約事項に、盟約により自由を拘束される結社に加入しないことが含まれている。「フリー」には自由のほか、「無料」の意味もこめられている。(Wiki)

<sup>91</sup>自由主義神学（じゆうしゅぎしんがく）は、キリスト教の、主にプロテスタントの神学的立場の一つ。その発生以来、プロテスタント教会の主流派、エキュメニカル派の多くが採用する立場。「自由主義」の語は社会学・政治学用語からの仮借であり、神学分野では「歴史的・組織的な教理体系から自由に、個人の理性的判断に従って再解釈する」の意である。Wikipedia2009年8月26日

おぼえなくなっている。違和感どころか、今や人はブランド服に身を固め、ブランド会社に所属していれば安心、所属しなければ不安になる。

もう一つの革命とはフランス革命。ここに国民教育が始まる。国民教育の目的は、富国強兵にある。「富国」には、産業に必要な大量の均質な労働力を確保するために、国民に一定の教育をする必要があった。また「強兵」のためには、従来の王侯の傭兵に代えて国民をみな兵士とし、その兵士たちに一定の教育を授ける必要があった。

かくて、既製の服を着、既製のアクセサリを付け、既製の食品を食べ、既製の教育を受けて、既製の会社に入り、既製の子育てをして、既製の葬式をし、既製の墓にはいるというぐあいに、既製品としての生と死を営むのが現代人である。この既製品の全体のなかに「私」は埋没してしまう。既製品の生を営む「私」が「私」でなければならぬ理由はどこにもない。「私」のスペアなど掃いて捨てるほどいるのである。

思想的には進化論的科学的合理主義が、産業社会を後押ししてきた。科学的合理主義は思想としては深みも重要性もないが、時代への影響力は他の全ての哲学を圧倒している。科学的合理主義は、素朴に唯物的な自然主義に立ち、自然科学による認識を絶対視する。科学的合理主義においては、物質という全体のなかに、いっさいの個はのみ込まれてしまう。人の死も獣の死も細菌の死も本質的に同一視され、さらには、生命現象もすべて物質の化学的・物理的現象に還元される。

結局、産業革命と市民革命によって大衆社会が出現し、それを後押しする唯物的・進化論的な科学的合理主義とが近現代の最大の流れであり、この全体のなかに「私」が没して無意味になって行くのが近現代思想の悲劇的過程である。実存主義者たちとは、このように全体のなかに私が埋没することを拒んだ人々である。

#### b. 主体性が真理である――実存主義

実存主義者たちはしばしば実存主義者と呼ばれることを拒む。「実存主義」という既製のレッテルを嫌うからであるが、そこがいかにも実存主義的だ。とはいえ、一般的に実存主義者と言われるのは、哲学者としてはハイデガー、サルトル、マルセル、ヤスパースなど。作家としては Rilke、Camus など。神学者としては K. Barth だ。彼らが共通して依拠するのは、デンマークのキリスト教哲学者キルケゴール（1813－55）であるから、キルケゴールの紹介をもって実存主義についての理解の助けとしたい。

キルケゴールは、ヘーゲル流の進歩と体系の夢に人々が酔いしれている十九世紀にあつて、すでにヨーロッパ精神の絶望を感じとって膨大な著述をした。が、百年ほど早く生まれ過ぎた彼は、生前、誰にも理解されなかった。ヨーロッパ思想界がキルケゴールを理解し始めたのは二十世紀を迎え第一次大戦の危機迫る時代であり、日本でキルケゴールがブームとなったのは第二次大戦後の危機の時代である。

キルケゴールが生涯を通じてひたすらに追求したのは、人間の実存とその主体性をあきらかにすることである。彼は言う「私にとって真理であるような真理を見いだすこと、私があるために生き、かつ死ぬことをねがうような理念を見いだすことである。いわゆる客観的真理を私が発見したとしても、それが私になんの役に立つというのか。」（『ギレライエ

の日記』)。当時支配的であったヘーゲル主義哲学者たちは先行する諸哲学を研究し尽くし、おのが体系にすべて取り込んで説明し尽くすことを営みとしていた。しかし、キルケゴールはその客観的な「真理」は「私」という主体の生と死には何の役にも立たないとした。彼にとって、主体性が真理なのであった。

キルケゴールが用いた意味での実存 (existencia) ということばは、現実的存在としての人間を意味している。理想主義的な哲学では、「本質が実存に優先する」とされてきた。まず人間はこういう者であるという本質があり、その本質の現れが私やあなたという個々の人間であるというふうに。言い換えれば既製品としての人生があって、私はその既製品の人生のルールに乗っかって過ごすというふうに。実存とは、誰かが用意してくれた、抽象的・普遍的な人間かくあるべしということに安易に満足せず、私が主体的に己が使命を自覚してその使命を選び取って生きていく人間のあり方を意味している。

戦前、ほとんどの日本人は「天皇の臣民としての日本人」というお上からあてがわれたレッテルに満足して生きていた。その時代には、田辺や西田のいわば理想主義的な哲学が流行していた。しかし、敗戦とともにその天皇の臣民という既製のレッテルは破棄されてしまった。そこで、改めて人は自分は何者なのか、何のために生きるのかと自問せざるを得なくなった。敗戦後の日本にキルケゴールのブームが起こったゆえんである。

### C. 聖書的観点からの批評

キルケゴールの文体は難解でありながらも魅力的で、読む者は己の生き方が揺さぶられるような経験をする。私たちがキルケゴールに学ぶべきことは、私たちは人生の傍観者であることは許されず、主体的に生きなければならないということであろう。

けれども、キルケゴールについて残念な点は、その実存的思考が、主体性を追求するあまり、真理の客観性というものを余りにも軽んじることである。キルケゴールの「主体性が真理である」という命題は、言い換えれば、＜イワシの頭も信心である。客観的にはイワシの頭であっても、一向、構わない。私にとってそれが神であれば、それは真理である。＞という非合理的な飛躍である。実際、先にも述べたように、実存主義者にはキルケゴールやマルセルのように神を信じる者もいれば、サルトルやカミュのように神を否定し去る者もいる。実存主義という立場からいえば、有神論であれ、無神論であれ、主体的に生きていけばよいのである。有神論が真理であろうと、無神論が真理であろうとかまわないのである。実存主義にとっては、主体性が真理なのであるから。主体的真理と客観的真理の分離という危うさが、実存主義の問題性である。

この客観的真理と主体的真理の分離の構図は、現代思想に共通する。多くの現代人にとっての「客観的真理」は、進化論的科学的合理主義が提供する「真理」つまり、人間は単なる高等なサルかロボットにすぎないということである。ならば、人間の尊厳や生きる意味はどこにありえよう。客観的真理があまりにもむなしなので、現代人は非合理的な飛躍としての覚醒剤や過剰な刺激やカルト的瞑想に走る。彼らは生きる意味を探そうとしているのか、生きる意味など考える必要がないようにと努めているかいずれかであろう。キルケゴールの影響を強く受けたK. バルトの啓示観も客観的真理と主体的真理の分離構造をな

している。バルトによれば、聖書は客観的には神を体験した者たちの誤りも含まれる証言であって、神のことばであるわけではない。しかし、聖書を前に神に主体的に応答せんとするとき、聖書は主体にとって<神のことばになる>という。

聖書主義の立場からいえば、聖書は客観的にも神のことばである。聖書は私が信じようが信じまいが神のことばなのである。聖書は、信じる者には祝福がもたらし、信じない者には呪いがもたらす神の力あることばである。神が我々に求めていらっしゃるのは、非合理的な飛躍ではない。神が我々に求めたまうのは、聖霊によって啓示された客観的真理である神のことばを、聖霊の照らしによって主体的に信じて従うことなのである。

#### d. 弁証法神学の登場

こうした時代思潮の変化とともに、イエスを道德の模範とあおぐような自由主義神学は没落する。その没落を告げ、キルケゴールの思想を手がかりとして新しい神学の道を開いた神学者がカール・バルトであった。彼は『ロマ書』によって、みことばの神学への回帰を告げた。わずかな紙数でバルトを論じるのは乱暴きわまりないし、能力的にも不可能だが、ただ聖書信仰の立場から言っておけば、バルトはなおカントによる科学と信仰の二元論の枠のなかにおいてしか思考できなかつたという限界を持つと思われる。新正統主義者は聖書の高層批評学という「科学」の自律を許し、聖書信仰者にとって聖書が「紙の教皇」となってしまうと揶揄した。しかし、そう言いつつもバルト自身は聖書に密着して釈義し神学を論じるので、彼の主張はたいてい伝統的神学と重なるのだが、その客観的土台がない。彼にとって聖書は客観的に神のことばであるわけではなく、聖書を神のことばとするのは信仰者の主体的決断なのである。

聖書における文書啓示という客観的基盤がないから、バルトとともに弁証法神学というグループに入れられるブルンナー、ブルトマン、ティリッヒといった神学者たちは、主張することがまるでバラバラである。筆者のきわめて大ざっぱな印象でいえば、バルトはずいぶん保守的であり、ブルンナーはかなり保守的で参考にはなる。しかし、「非神話化」を主張するブルトマンは非常にリベラルで、論外だなと感じる。またティリッヒになると、キリスト教的というよりグノーシス主義哲学宗教である。聖書を前にして、神学者がそれぞれの主体的決断によって信じたいことを信じるという原理が、このような状況をもたらすのではないだろうか。

聖書は神のことばであるという信仰告白。我々はこれを土台にしたい。

「草は枯れ、花はしぼむ。だが私たちの神のことばは永遠に立つ。」イザヤ四十：八

## 5. その後のエキュメニズム派の動向

——「神の死」の神学、宗教多元主義、解放の神学——

### (1) 「神の死」の神学

佐世保教会牧師 深澤 奨の紹介

「60年代の半ばから、キリスト教神学の世界に、『神の死の神学』という思想が現れた。

H・コックスは中世以来、支配の道具として機能してきてしまったキリスト教を省み、神が不正に満ちた現状を維持するために神が用いられていることを嘆く。神の名によって社会正義が実現され、人が互いに尊重し会って平和に生きるようになるのではなく、反対に戦争が正当化され、差別や抑圧が固定化される。もしそのような神が「神」と呼ばれているならば、そのような神はむしろ死ぬべきであると、そして現代人は神について語るのをやめるべきだと彼は語る。

W・ハミルトン、T・オールタイザーの二人は共著で『神の死の神学』という本を著した。そこで彼らはまず、現代の世界に起こっている多くの事柄は、神の存在を否定するかのよう、悲惨を極めていると指摘する。アウシュビッツや広島・長崎という悲劇は、神などいないと思わせるに足る出来事ではないかと。そして彼らは、このような現実の中では、教会に行っても、聖書を読んでも、神学書を開いても、神とか信仰とか教会といったものから疎外感を感じさせられ、空々しさを募らせるばかりだと、まことに正直なことを言う。そしてそういうキリスト教においては、信仰というものが世俗の問題と切り離されて、世俗の世界がどんなに悲惨であっても、心が平安に満たされ、聖なる領域に高められることこそが救いであるなどと説かれるようになる。

一般的に宗教というものは、俗なるこの世、俗なる人間が聖の領域に引き上げられ高められることを救いとする。ところがキリスト教は本来そうではないはずだ。逆に聖が俗になること、聖なる神が俗の中に人間として宿り、死にたもうたことを福音として主張するのがキリスト教ではないか。イエスの苦しみと死は、その意味で、神が自らその超越性を否定して、徹底的に世俗世界に内在化したことに他ならないのだと、この『神の死の神学』の提唱者たちは主張した。キリストの神は、十字架の死によって聖の領域を捨て、この世俗的世界の直中に入ってきてくださった。そしてこの世俗の暗さ、痛み、苦しみの中に生き続けておられる。それゆえにキリスト者は自らも世俗的人間となって、この世界に自分を与える者とならねばならない。これが『神の死の神学』の主張である。」

その提言には耳を傾けるべきことがある。今日、米国のキリスト教会が戦争を好む国家の道具となっている体たらくはなんたることか。それはコンスタンティヌス帝のミラノ勅令以来の問題なのである。ただ、その土台を聖書に求めずヒューマニズムに求めるところに問題あり。

## (2) 宗教的多元主義

ジョン・ヒック、ポール・ニッター、八木誠一

背景：世界に頻発する戦争、特に宗教戦争が人類と地球を滅ぼそうとしているという認識。また、産業革命以来の環境破壊で地球は危機的状況にあるという認識。世界の諸国諸民族がたがいに融和するためにこそ、宗教は奉仕すべきであると考え。

包括主義から多元主義へ：包括主義では、どんな宗教でも信じていれば、それなりにキリスト教の神に近づけるとした。多元主義は、キリスト教の神にこだわらず、仏教でもイスラム教でもなんでもよい。信じれば、真実在に至りうるとした。「分け登るふもとの道は多けれど、同じ高嶺の雪を見るかな」というのである。

宗教的多元主義というのは、汎神論的な異教であって、キリスト教ではない。

### (3) 解放の神学・フェミニズム神学

第2 ヴァティカン公会議以降にグスタボ・グティエレスら主に中南米のカトリック司祭により実践として興った神学の運動。キリスト教社会主義の一形態とされ、民衆の中で実践することが福音そのものであるというような立場を取り、多くの実践がなされている。中南米のプエブラ司教会議でも支持されたが、階級的視点などにおいて「マルクス主義方法論をベースにした共産主義」と意図的にも無知からも混同されて中傷される事も多く、各国で政府側からも反政府側からも司祭やシスターなどが暗殺される事が多い。一方でフィリピンやインドネシア、東ティモール、ハイチなどでは実践が重ねられている。その神学論理の一部については同じ立場を取るプロテスタントの新正統主義神学、フェミニスト神学、プロセス神学などと同様にバチカンからは拒絶されている。

#### <政治的背景>

米国が南アメリカを食い物にしてきた。1954年グアテマラ大統領アルペンスが追放された。アルペンスもまた憲法に基づいて民主的な手続きを経て選ばれた大統領だったが、アルペンスがすべての政党を合法化し、弱小な共産党をも認知したことと、農地改革を始めると米国がCIAが動いた。当時グアテマラでは3パーセント未満の地主が70パーセント以上の農地を所有していた。そこで彼は自分の身内の土地を含む150万エーカーの土地を国有にして小作人に与えた。ところが大地主であった米国の大企業ユニティド・フルーツは、グアテマラをずっとバナナ王国にしておきたかった。そこで、米国大統領はアルペンス大統領政権打倒指令を出す。CIAは首都を爆撃しアルペンスは国外に逃亡。その後に登場したのは米国の操り人形アルマス大佐。以後、グアテマラ国民は軍事独裁政権の下に苦しみ、10万人が弾圧されて殺害された。

1963年ドミニカ、1964年ブラジル、ボリビア、これらの政権の転覆の企てはすべてCIAによる。また、1973年チリにアジェンデ大統領が合法的な選挙で立った時、ニクソン大統領は言った。「チリ国民が選んだアジェンデ大統領を米国は認めない」。そして、CIAはクーデターを起こさせ、ピノチェト軍事政権を傀儡政権として立てた。

1989年に父ブッシュ大統領は、パナマのノリエガ将軍を逮捕した。ノリエガはもともと米国にある暗殺者学校 The School of the Americans で訓練された。この学校の目的は、米国の傀儡政権に民衆運動の弾圧のノウハウを伝授することにある。軍諜報本部長で1960年以来CIAから給料を受け取り、父ブッシュがCIA長官になったときノリエガを工作員として引き継ぎました。麻薬関与の証拠があったにも拘らず、ブッシュは彼を引き渡さず年俸を10万ドルに引き上げました。CIA長官だった父ブッシュはノリエガの中南米攪乱協力の見返りに、コロンビア産コカインの密輸入を秘密裏に容認していた。ところが、1984年ノリエガが中南米の首脳を集めてコンタドラ平和会議をし、米国のラテンアメリカへの介入の終結を呼びかけ、当時のレーガン政権を怒らせる。ノリエガを散々利用してきた父ブッシュは、自ら大統領になるや手のひらを返して「ノリエガは麻薬取引容疑で起訴中のパナマの独裁者だ。ノリエガを公正にさばき、追放し、民主主義をパナマに復活させたい。」といました。1989年12月20日、父ブッシュ大統領の命令で2万6千人の軍隊をもって500人の守備隊しかいないパナマを侵略しました。しかも、人口密集地域の武器を

持たない貧しい一般市民の住宅地を爆撃し 2 万人のパナマ人が家を失い、女性や赤ん坊までも含む 4000 人以上を虐殺し、大きな墓穴を 15 個掘ってこれを埋めて隠した。しかも、父ブッシュ大統領はこれらの情報を厳しく統制して隠し、議会で言った。「独裁者は逮捕され、パナマに民主主義が回復した。」議場は、大統領を称えるスタンディング・オベーションだった。侵略が終えて一カ月後、パナマ人は大きな遺体捨て場となった例の 15 の穴を発見した。掘り返された穴は、おびただしい死体の山で、まだ新しいものですから着衣が残っていた。泥にまみれた小さな幼児服に包まれた遺体は見るもいたましいものだった。今日では、ベネズエラのチャベス大統領は米国の介入に対して懸命に抵抗している。

### <概要>

解放の神学は特に[社会正義](#)、[貧困](#)、[人権](#)などにおいてキリスト教神学（概ねカトリック）と貧困の視点から神学するというその神学（例えば神の語りかけ）にある。[ジョン・ソブリノ S.J.](#)によれば、貧困は神の恵みへの特権的な通路である。[フィリップ・ベリマン](#)によれば解放の神学は「貧苦と闘い希望を持つ者のキリスト教信仰の解釈であり、社会とカトリック信仰、キリスト教への貧者からの批判」である。

解放の神学では解放者としての[イエズス](#)に焦点をあてる。[聖書](#)の中でも解放者、正義をもたらす者としてのイエズスの使命について書かれた記述を強調する。これは（時折文字通り）この正義の使命のための出動命令と解される場合がある。さらに多くの解放の神学者は[マルクス主義](#)から[階級闘争](#)などといった概念を借用する例がある。

解放の神学は今日では通常カトリックの大学や神学校では教えられることはなく、プロテスタント起源の学校でしばしば教えられるものとなっている。彼らは貧困層とより関係を持つ傾向があり、聖書の解釈も彼らの実践をどう位置づけるかという文脈で行われることがある。（参照ウィキペディア）

聖書的観点からどう評価すべきか？キリスト教がコンスタンティヌスのミラノ勅令以来、体制擁護のための御用宗教になってきたことへの批判を受け止めるべきである。聖書はローマ書 13 章で国家の積極的意義を告げると同時に、黙示録 13 章では国家権力の悪魔性を語るし、またヤコブ 4 章では金持ちの食欲の罪を戒めている。

しかし、解放の神学の問題点は、「社会的解放イコール福音」という非聖書的な考えにある。

## XIX. 福音派

### 1. エキュメニズム派と区別して

福音的とか福音派あるいは福音主義ということばは、いろいろな意味で用いられる。宗教改革時代においては、信仰による義認の教理と、聖書を教会における唯一の権威とする立場、つまり、プロテスタント教会が福音主義の教会と呼ばれた。今日でもヨーロッパや

ラテン・アメリカで福音主義教会といえば、ローマ教会と区別してプロテスタント教会のことを意味する。日本では日本基督教団を始めとする「主流派」の中では、福音主義といえばバルト神学のようなキリスト理解を意味する。バルトが自由主義神学に反旗を翻して、聖書釈義を強調し、神の主権を高調し、救いは神から人に向かって垂直に来ると主張した、あの信仰である。

本稿で「福音派 Evangelicals」という呼ぶのは、一般に、エキュメニズム派に対する区別に用いられていると理解してよい。エキュメニズムというのは、教会の再一致をめざす世界教会運動を展開している立場のことで、具体的には世界教会協議会(WCC)がそれを実践している。日本基督教団や日本聖公会やバプテスト連盟などがそのメンバーである。教会の再一致というとき、彼らが、当面、念頭に置かれているのはプロテスタント教会とローマ教会であるが、東方正教会も視野に入っている。『新共同訳聖書』はプロテスタントとローマ教会の学者による共同訳業の成果である。戦後、プロテスタントの「主流派」を自認してきたのは、このエキュメニズム派の教会である。エキュメニズム派は、聖書の逐語靈感説や米国の宗教原理主義と結びつけて、軽蔑をこめて福音派のことをファンダメンタリスト fundamentalist と呼ぶことが多いようである。

主イエスは弟子たちが一つであることを望み、また、そのように祈られたのだから、教会が組織としても一致することはもちろん、望ましいことである。それにもかかわらず、福音派はエキュメニズム派とは一線を画してきた。それで福音派は「分離主義者」であると非難されることもあった。しかし、福音派が彼らと一線を画さざるをえなかったのは、エキュメニズム派が聖書の根本的真理から逸脱している自由主義神学の立場の人々をも多く含んでいるからである。

教会が一致することは重要なことであるが、イエスの神性などの根本的真理を犠牲にしてまで一つの組織となることを、福音派の諸教会はよしとしなかった。たしかに聖書は「平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。」と言っている。しかし、その後、「からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。」と続き、さらに「ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し」(エペソ4:3-13)とある。福音派は、信仰の一致、神の御子に関する知識の一致がないままに、組織を一致させることを望まなかった。二千年を経たキリスト教会のうちには、信仰のタイプの多様性があることは当然であろうが、根本的な教理の一致がないとすれば、その組織の一致は意味のないことである。自由主義神学の教師のうちには、イエスが処女から生まれたことも、神の御子キリストであることも信じておらず、罪の赦しや天国の実在などどうでもいいと公言してはばからない牧師までいるありさまである。

## 2. 福音派の多様性と一致

福音派のなかには多様性がある。たとえば、ホィートン大学のロバート・ウェーバーは福音派に含まれる十四の系統を挙げている。ファンダメンタリスト的福音主義・ディスペ

ンセーション的福音主義（ダラス神学校、ムーディ聖書学院）、保守的福音主義（ホィートン大学、トリニティ神学校、ゴードンコンウェル神学校、ビリーグラハム）、無教派的福音主義、改革派系の福音主義（カルビン神学校、ウェストミンスター神学校など）、アナバプテスト系福音主義、ウェスレアン系福音主義（アズベリー神学校など）、ホーリネス系の福音主義（ナザレン教会）、ペンテコステ系福音主義（神の教会、アッセンブリー）、カリスマ系福音主義、黒人福音主義、進歩的福音主義、急進的福音主義、主流派教会内の福音主義である（宇田進『福音主義キリスト教とは何か』）。

しかし、こうした多様性にもかかわらず、福音派を「派」と呼ぶ以上、共通点があるわけである。泉田昭は「われわれが今日福音主義とか福音派というとき、信仰的自由主義に対して福音主義、エキュメニカルなグループに対して福音派という表現を使っている。つまり、聖書は誤りのない神のことばであると信じ、基本的教理を保持し、救霊と伝道に励んでいる者たちのことである。」（『はばたく日本の福音派』）簡にして要を得た説明である。福音派は神学的には自由主義に対して保守主義、教派的にはエキュメニズムとは組しないのである。そして、福音派の実践的特徴は伝道熱心である。

ここにいう基本的教理とは一九一〇年に米国の北長老教会の総会が福音的キリスト教にとってファンダメンタルなものとして挙げた五点と一致すると考えてよいだろう。それは以下のとおり。

1. 聖書の靈感と無謬性
2. キリストの処女降誕
3. キリストの身代わりの贖罪
4. キリストのからだの復活
5. 奇蹟の真実性

また福音派のメンタリティ的・実践的な面での一致点は、「義認を強調し、かつ経験した者、そして聖書の権威を強く奉じる者である。すなわち、人格的・個人的な回心と厳格な道徳生活、そして聖書にのみ信仰と行動の導きを求めることの二つの特徴が強く見られ、そうした特徴を持つ限りでのキリスト教信仰を広め伝えようとする熱意をもっている。」と言われるとおりである（Gabriel Fackre）。

### 3. 福音派のルーツ

福音派の神学的ルーツと実践的霊的なルーツは、宗教改革と敬虔主義運動にありと見るのが適当であると思う。

宗教改革者たちの根本的主張はなんだったか。「聖書のみ」「信仰のみ」つまり、聖書が教会の拠って立つ唯一絶対の権威であるという信仰と、信仰によって義とされるという教理である。そういう意味では、聖書の権威を否定し、イエスを道徳の教師とする行為主義の自由主義神学は、宗教改革の神学からは大きく逸脱してしまっている。正反対の方向にむかっていると言ってもよい。そんな自由主義神学を背景とするエキュメニズム派が「主流」を名乗るとするのは、よく考えると珍妙な現象ではある。実際は、聖書信仰と信仰義

認を主張する福音派こそ宗教改革の流れをまともに引いている主流なのである。

教会の歴史を見てくると、どの時代にあっても「我こそは主流なり正統派なり」と傲慢になったとき、教会はしばしば過ちを犯してきた。主イエスがペテロを戒めたように、後の者が先になり、先の者が後になるのだから、旗色の悪いエキュメニズム派を尻目に、今度は福音派が「我こそは主流なり」などと誇ることは、控える方がよい。主イエスご自身、当時の主流派であったユダヤ教の大祭司以下の人々に排斥され、殺されたのである。教会はこの世に主流と呼ばれようと、傍流と呼ばれようとかわまない。要は、主イエスに従うことである。

福音派のもうひとつのルーツは、敬虔主義運動である。宗教改革時代にはまだ、印刷技術上の問題も識字率の低さもあって、万人祭司という理念はともかく、実際に一般信徒が一人一人聖書を読むというわけにはいかなかった。しかし、敬虔主義運動において、信徒一人一人が聖書を読み、祈祷書によらず自分のことばで祈りをすることができるようになった。いわゆるディボーションである。また、週に一度は祈祷会に参加するということもなされるようになった。敬虔主義運動を学んだ時にも言ったように、今日の福音派の聖書通読や、個人的・人格的な神体験という信仰のありかたのルーツは敬虔主義運動にあると言ってよい。ここでいう敬虔主義とは、狭くドイツ敬虔主義のみを意味するのではなく、英国のピューリタニズムやウェスレー主義、あるいは、米国の信仰覚醒運動をも含めて言っている。

福音派の伝道への熱心も、敬虔主義から受けた遺産である。宗教改革の神学と、その集大成を志した十七世紀のプロテスタント正統主義の体系には、伝道の神学も救霊の情熱も見られない。あのプロテスタント諸信条中、最も完備された『ウェストミンスター信仰告白』にさえ、伝道・世界宣教は主題的に取り上げられていないのだ。福音派は、ドイツから北欧にかけての敬虔主義運動、英国のジョン・ウェスレーのメソジスト運動、米国の信仰覚醒運動などから、その救霊の情熱を受けたのである。

#### 4. 福音派の課題

かつて教会の中に「社会派」と、「教会派（あるいは伝道派）」という呼び名があった。社会派というのは、自由主義者が社会的救済運動に励んでいたことを指している。社会派は、社会改革を神の国の福音の宣教と同一視した。社会派にとってのイエスは愛の教師であり、社会革命家なのである。それに対して教会派（伝道派）は、政治とか社会的なことは教会のかかわるべきことではないとした。福音派は、教会派・伝道派であった。

けれども、福音派のルーツは必ずしも社会的責任を無視して伝道のみにも励んだわけではなかった。たとえば、産業革命と資本主義による貧富の差のはなはだしかった英国の社会を、もっとも有効に改革したのはジョン・ウェスレーのメソジスト運動にほかならなかった。彼は、イエス・キリストの十字架の福音を語ると同時に、キリストを受け入れた人々の間に生活共同体を作らせることを進めることによって、救霊とともに社会的救済をも行ったのである。

福音派が社会改革から手を引くことになったのは、共産主義の勃興が背景にあるといわれる。ここ十年ほどの間に共産主義国家が解体するまでは、社会を改革する現実的理論は共産主義の専売特許のように見られていた。社会改革になど手を出すと、共産主義者になってしまうという懸念が、教会のなかにいだかれていたのである。共産主義国家がつぎつぎに崩壊した後の現代でも、南米などの第三諸国における社会的不正・不平等に対する教会の闘争は、「解放の神学」の名のもとになされているが、本質的にはかつての自由主義神学の社会福音と通じるものである。

しかし、1974年のローザンヌ世界伝道会議に採択された『ローザンヌ誓約』以来、福音派教会は公的に、教会には伝道と社会的責任のふたつの責任があることを確認した。「われわれは、神がすべての人の創造者であるとともに、審判者でもあられることを表明する。それゆえに、われわれは、人間社会全体における正義と和解のための、また、あらゆる種類の抑圧から人間解放のための、主の御旨に責任を持って関与すべきである。(中略)われわれは、これらの点をなおざりにしたり、時には伝道と社会的責任とを互いに相容れないものとみなしてきたことに対し、ざんげの意を表明する。たしかに人間同志の和解即伝道ではない。政治的解放即救いではない。しかしながら、われわれは、伝道と社会的政治的参与の両方が、ともにキリスト者の務めであることを表明する。(中略)行いのない信仰は死んだものである。」

福音派は社会的参与と福音宣教を区別し、福音宣教の優先性を確認しつつも、神がキリスト者に社会的責任をもお与えになっていることを確認したのである。近年の日本で特筆すべきこととしては、天皇の代替わりの儀式、大嘗祭において、従来、天皇問題をタブー視していた福音派諸教会もその本質が偶像崇拜問題であることから、立ち上がって、これに反対声明を出したことであった。

福音派の、今日のもうひとつの課題は、ペンテコステ、カリスマそして第三の波という聖霊主義運動である。欧米の神学者たちは、これを福音派内の動きとして観察しており、大局的には福音派内の多様性として見ているのであるが、日本では福音派と聖霊派とが分裂傾向にある。聖書を揺るがぬ土台として、相互理解と一致協力の道をさぐるべきではないだろうか。

<付録1>

## 世界教会信条

### 使徒信条

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリス

トを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり、かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体のよみがえり、永遠の生命を信ず。アーメン。

## ニカイア信条 325年

我らは、唯一の全能の父なる神、すべて見えるものと見えざるものの創造者を信ずる。

また我らは、主イエス・キリスト、神の御子、御父よりただ独り、御父の本質から生まれたるもの、神より出でたる神、光より出でたる光、真の神より出でたる真の神、造られず、聖父と同質なる御方を信ずる。その主によって、万物、すなわち天にあるもの地にあるものは成り、また主は、我ら人間のため我らの救いのために降り、肉をとり、人となり、苦しみ、三日目に復活し、天に昇り、生きている者と死んでいる者とを審くために来たり給うのである。

我らは聖霊を信ずる。

主の在し給わなかった時があると言ひ、生まれ給う前には主は在し給わなかったと言っている者たち、または、無きものから造られた、または異なった存在、または本質から出でたもの（被造物）と言ひ、変質し異質となり得る御方であると語る者を、公同かつ使徒的なる教会は呪うものである。

## ニカイア・コンスタンティノポリス信条 381年

我らは、全能の父なる唯一の神、天と地、すべて見えるものと見えざるものとの創造者を信ずる。

また我らは、唯一の主イエス・キリスト、あらゆる代のさきに御父より生まれ給える、神の生み給える独りの御子、光より出でたる光、真の神より出でたる真の神、生まれ給いて造られず、御父と同質なる御方を信ずる。万物は、主によりて成り、主は我ら人間のため、また我らの救いのために、天より降り、聖霊と処女マリヤとによって肉をとって人と成り、ポンテオ・ピラトの時、我らのために十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書にあるとおり三日目に復活し、天に昇り、御父の右に座し、生きている者と死んだ者をさばくために、栄光をともなって、再び来たり給うのである。その御国は終わることがないのである。

また我らは、聖霊、主にして命を与え、御父と御子とより出で、御父と御子と共に礼拝され、崇められ、

預言者たちを通して語り給う御方を信ずる。

我らは、ひとつであって聖き公同なる使徒的教会を信ずる。我らは、罪の赦しのためのひとつのバプテスマに同意を告白する。我らは、死人の復活と来たるべき代の生命とを待ち望むのである。

## カルケドン信条 451年

この故に、我らは、聖なる教父たちにならい、すべての者が声をひとつにして、ただ独りのこの御子、我らの主イエス・キリストの、実に完全に神性をとり、完全に人性をとり給うことを、告白するように、十分に教えるものである。主は、真に神であり、真に人であり給い、人間の魂と肉をとり、神性によれば御父と同質、人性によれば主は我らと同質、罪をほかにしてすべてにおいて我らと等しくあり給い、神性によれば代々の前に聖父より生まれ、人性によれば、この終わりの時代には、主は我らのために、また我らの救いのために

神の母であるマリヤより生まれ給うた。この唯一のキリスト、御子、主、独り子は、ふたつの性より（ふたつの性において）混ざることなく、欠けることなく、分けられることもできず、離すこともできない御方として

認められなければならないのである。合一によって両性の区別が取り除かれるのではなく、かえって各々の性の特徴は救われ、ひとつの人格、ひとつの本質に共に入り、ふたつの人格に分かたれ裂かれることなく、ただ独りの御子、独り子、御言葉なる神、主イエス・キリストである。これは、はじめから、預言者たち、また主イエス・キリスト御自身がねんごろに教え、教父たちの信条が我らに伝えた通りである。

## アタナシオス信条 420~450年

- 1 すべて救われたいと願う者は、何よりも公同の信仰を保つことが必要である。
- 2 その信仰を、何人も、完全にしまも汚されることなく守るのでなければ、疑いもなく永遠に滅びるであろう。
- 3 公同の信仰とはこれである。我らが1つなる神を三位において、三位を一体において、礼拝することである。
- 4 しかも、位格を混同することなく、本質を分離することなく。
- 5 御父の位格あり、御子の位格あり、聖霊の位格がある。
- 6 しかし、御父と御子と聖霊との神性は1つであり、み栄えは等しく、権能も等しく永遠である。
- 7 御父のあり給うごとく、御子もそのようであり、聖霊もそのようである。
- 8 御父が造られていないように、御子も造られていない、聖霊も造られていない。
- 9 御父が量りがたいように、御子も量りがたく、聖霊も量りがたい。
- 10 御父の永遠であるように、御子も永遠であり、聖霊も永遠である。

- 1 1 しかも、3つの永遠なるものではなく、1つの永遠なるものである。
- 1 2 また、3つの造られたるものではないように、3つの量りがたいものではなく、1つの造られざるもの、1つの量りがたいものである。
- 1 3 同じように御父は全能である。御子も全能である。聖霊も全能である。
- 1 4 しかも、3つの全能なるものではなくて、1つの全能なるものである。
- 1 5 かくのごとく、御父は神であり、御子も神であり、聖霊も神である。
- 1 6 しかも、3つの神ではなくて、1つの神である。
- 1 7 かくのごとく、御父は主であり、御子も主であり、聖霊も主である。
- 1 8 しかも、3つの主ではなく、1つの主である。
- 1 9 なぜならば、我らが、キリスト教の真理によって、各位が個々に神であり、主であると告白せざるを得ないようにされるために。
- 2 0 そのように、3つの神、3つの主ということは、共同の宗教によって、我らに禁じられているのである。
- 2 1 御父は、何物からも形成されたものではない、すなわち、造られたのではなく、生まれたのでもない。
- 2 2 御子は、御父からのみ出でたもので、形成されたものではなく、創造されたものでもなく、生まれたのである。
- 2 3 聖霊は、御父と御子とより出で、形成されたものではなく、創造されたものでもなく、生まれたのでもなく、発生したのである。
- 2 4 それ故に、1つの御父であって、3つの御父ではなく、1つの御子であって、3つの御子ではなく、1つの聖霊であって、3つの聖霊ではない。
- 2 5 しかして、この三位においては、なにものも、より先であるものはなく、より後であるものもない。より大いなるものもなく、より小さいものもないのである。
- 2 6 三位が全部そのまま、同様に永遠であり、同様にあい等しい。
- 2 7 かくて、既に上に述べたごとく、あらゆることを通じて、三位において一体が、一体において三位が礼拝されるべきである。
- 2 8 それ故に、救われたいと願う者は、三位一体をこのように考えなければならない。
- 2 9 しかし、永遠の救いのために必要なことは、我らの主イエス・キリストの受肉についてもまた正しく信ずることである。
- 3 0 なぜならば、正しい信仰とは、神の御子なる我らの主イエス・キリストは、神にして人なることを信じ、告白することであるからである。
- 3 1 神とは、御父の本質より出で、代々の先より生まれ給えること、人とは、御母の本質より出で、この世に生まれ給えることである。
- 3 2 完全なる神であって、人間の魂と人間の肉をとって生き給うのである。
- 3 3 神性においては、御父と等しく、人性においては、御父より小さくあり給う。
- 3 4 神にして人であり給うにもかかわらず、しかも2つではなく、1つのキリストである。
- 3 5 しかも、神性が肉に変わったために、1つであるのではなく、神のうちに人性をと

り給うことによるのである。

36 全く1つである、しかも本質の混同のためではなく、位格の1つであるためである。

37 なぜならば、人間の魂と肉とが1つの人間であるように、神と人が1つのキリストなのである。

38 また我らの罪のために苦しみを受け、陰府に降り、三日目に死人の中から復活し給うたのである。

39 天に昇り、全能の御父の右に座し給う。

40 そこより、生きている者と死んでいる者とを審くために来たり給うのである。

41 その来たり給う時に、すべての人間は、その身体をもって復活する。

42 各々自らの行為について、理由を述べるであろう。

43 そして、善いことをなした者は永遠の生命に入り、悪いことをした者は永遠の火に入る。

44 これが公同の信仰である。これを忠実に確実に信ずる者でなければ、救われることはできないのである。

注>訳文は新教出版社『信条集』によるが、P.Schaff, The Creeds of Christendom のテキストに基づき、あきらかな誤訳・訳し落としの部分で訂正している。

<付録2>

## キリスト教史の重要な出来事 (ウィキペディア版に水草が手直し)

### 前1世紀

- 63 共和制ローマの将軍のポンペイウスがエルサレムに入城する。ユダヤ地方 (イスラエルまたはパレスチナともいう) はローマの支配下に入る。
- 34 ヘロデ大王、ローマからユダヤ人の王に任命される。
- 29 オクタ비아ヌス、ローマ初代皇帝アウグストゥスとなり、ここに帝政ローマが始まる。
- 4頃 イエスがユダヤ地方 (パレスチナ) のベツレヘムに降誕する。

### 1世紀

- 27 この頃、洗礼者ヨハネが活動を開始。イエスはヨハネより洗礼を受け、福音宣教活動を開始する。
- 29 または 30 イエスがエルサレムのゴルゴタの丘で磔刑になり、三日後に復活する。

- 35 または 36 ステファノが石打ちの刑で死にキリスト教の最初の殉教者となる。迫害者パウロ（本名サウロ）がイエスの幻を見て回心する。
- 46 サウロがバルナバとともに第1回伝道旅行（キプロス・小アジア）に出発し、途中で名をパウロと改める。
- 47 宣教方針をめぐってエルサレム使徒会議が開かれ、異邦人への宣教が認められる。
- 48 パウロが第2回伝道旅行（小アジア・ギリシャ）に出発し、途上でテサロニケ人への第1・第2の手紙が書かれる。（～51）。
- 52 パウロが第3回伝道旅行（小アジア・ギリシャ）に出発し、途上でコリント人への第1・第2の手紙が書かれる。
- 54 この頃、マルコによる福音書が書かれる。
- 57 パウロはユダヤ人に訴えられて逮捕されるが、ローマ市民であるとして皇帝に上訴する。
- 60 パウロはローマに到着し、以降数年を過す。ピリピ人・コロサイ人・ピレモンなどへの手紙を書く。この頃、ルカによる福音書が書かれる。続いて同じ著者によって、使徒言行録が書かれる。マタイによる福音書もこのころ成立。
- 61 エルサレムの教会を指導していたイエスの兄弟ヤコブが殉教する。
- 64 ローマの大火を理由として皇帝ネロがキリスト教徒を迫害する。
- 66 ユダヤ地方のユダヤ人達がローマ帝国に反旗を翻し、第1次ユダヤ戦争が起る。
- 70 ローマ軍がエルサレムを陥落させ、ユダヤ教のエルサレム神殿が廃墟となる。
- 90頃 ヤムニア会議で旧約正典 39 巻を確定。ギリシャ語で書かれた外典が区別される。
- 100 この頃までにヨハネによる福音書・ヨハネの黙示録が完成する。

## 2 世紀

- 135 第2次ユダヤ戦争（バル・コクバの乱）終結し、ローマ軍によってエルサレムは廃墟とされる。

## 3 世紀

- 250 皇帝デキウスによる大迫害が始まる。
- 293 ローマ帝国、四分割される

## 4 世紀

- 301 アルメニア王国がキリスト教を国教とする。当時のアルメニアは、ローマ帝国の属国だが、国家の国教としては世界初。
- 303 皇帝ディオクレティアヌスがキリスト教禁圧令を出し迫害する。
- 306 この頃、コーモンのアントニウスがエジプトで隠修士を集め、キリスト教最初の修道院を始める。

- 311 司教フェリクスはカエキリアヌスをカルタゴ司教に任職した。ドナティスト論争の火種に。
- 312 コンスタンティヌス 1 世、十字架を旗印にしてミルヴィウス橋の戦いに勝利する
- 313 ローマ皇帝コンスタンティヌス 1 世がミラノ寛容令を発しキリスト教を公認する。
- 318 父と子の同質性を認めるアタナシウス派と、これを認めないアリウス派の間で論争が起る。
- 325 コンスタンティヌス 1 世によって第 1 ニカイア公会議が開かれ、父と子の同一性を確認し、アリウス派が異端とされる。
- 350 頃 エチオピアがキリスト教を国教とする（コプト教）。
- 361 皇帝ユリアヌス（背教者ユリアヌス）がローマ古来の宗教の復活を企てる。
- 375 ゲルマン民族の大移動が開始される
- 381 第 1 コンスタンティノポリス公会議が開かれ、ニカイア公会議を補則する。
- 386 アウグスティヌスがマニ教からキリスト教に回心する。
- 388 キリスト教とユダヤ教の異宗婚が禁止される
- 391 皇帝テオドシウスがキリスト教を国教に定める
- 395 ヒッポ司教アウグスティヌスが『告白』を書く。
- 397 カルタゴ会議で新約聖書正典 27 巻を確定。

## 5 世紀

- 409 サーサーン朝ペルシア帝国が、キリスト教寛容令を出す。
- 410 ヒエロニムスがエルサレムで聖書をラテン語に翻訳する。（ヴルガータ訳聖書）
- 411 ペラギウス論争起る。
- 431 エフェソス公会議でペラギウスとネストリウスを異端とする。
- 440 ローマ司教レオ 1 世が、ローマ司教の首位権（教皇権）を主張する。
- 451 カルケドン公会議でキリスト二性一人格が確定し、単性論の立場のコプト教会、アルメニア教会などが離反する。
- 452 ローマ教皇レオ 1 世がフン族の長アッティラをローマから撤退させる。
- 476 ゲルマン人の度重なる侵攻に耐えてきた西ローマ帝国がついに滅亡する。
- 486 クローヴィスがフランク王国を建設する。
- 496 フランク王クローヴィス、部下 3 千人と共に洗礼を受ける。

---

<sup>i</sup> 歴史「18 世紀には自然科学の影響を受けて、19 世紀に歴史学は事実のみに基づいて構築されるべきものとされた。しかし、20 世紀哲学が客観性の虚構性を明らかにしてからは、歴史には主観しかない、とする意見も産まれた。

しかし、そこまで極論すれば、最終的には個人個人が勝手に自分の歴史「物語」を紡い

---

でしまい、コミュニケーションが成り立たない状態に陥ってしまう。また合理的に考える  
と実際に起きた出来事まで「所詮は主観だから」と勝手に修正してしまえば、歴史修正主  
義という独我論に陥ってしまう。

そのため、現在の歴史学では一定程度の客観性が保たれるものとして研究を進めることが  
一般的である。その客観性とは合理性に基づくものである。例えば徳川家康が存在したと  
我々が決めることができるのは、様々な文献や遺物・遺跡から、家康という人物が存在し  
たと仮定するほうが、しないよりも合理的にこれらの証拠を辻褃つけられるからである。」  
(Wikipedia2007年4月「歴史」)

## ii 明治から十五年戦争時の日本の教会概観

### (1) 神道非宗教論と神社参拝・国民儀礼…明治から現代まで

#### ①明治から敗戦までの神道国教化政策

明治維新から昭和の敗戦までの国家宗教政策。維新政府は「王政復古」「祭政一致」を掲  
げて 1968年(慶応4年)神祇官を復興。天下の諸神社を管轄する。江戸時代の国教的地位  
にあった仏教を否定。廃仏毀釈運動。全国の神社を官幣社、府県社、郷社、村社として  
序列化。

神社は宗教にあらず (神社非宗教論) として 国民道徳の根源とし、万世一系の血統の  
天皇への信仰の場とされた。日露戦争後は、一村一社をめざす神社整理を強行し、国家  
非常事態下にあつては神社中心の生活が求められ、キリスト者にも神社参拝を強要する。  
また海外植民地にも神社を立てて現地の諸民族に参拝を強制した。

このとき、美濃ミッション、上智大学などで神社参拝拒否事件が起こる。朝鮮半島で  
は日本基督教会大会議長富田満が1938年6月に神社参拝を勧め9月の第二十七回朝鮮耶  
蘇長老会総会はこれを強行採決、政府はこれに反対する2000名を投獄、50名は獄死。

逢坂元吉郎は神社問題に厳しい論評をして34年3月暴漢に襲われる。

同志社神棚事件で摘発されるも、35年6月に、結局、社は軍部に屈す。

高山教会には神社参拝の記録が残っていた。「戦争責任フォーラム」参照。p 49

#### ②政府の担当部局

神社神道(国民道徳担当)と公認宗教との二本立てで支配。

神社神道は神祇官 (m 1) が担当、公認宗教は民部省社寺掛 (m 3) が担当。

m 5 には教部省が両方を兼ねる。

m 1 0 には内務省社寺局 (s 1 5 に神祇院) が担当、敗戦で廃止。

m 3 3 には内務省神社局が神社担当、内務省宗教局(後に文部省宗教局)が公認宗教担当。  
戦後文部省社会宗教局が担当。

いずれにせよ、神社は国民道徳の淵源として、神社非宗教論があり、宗教担当部署と分  
けていたが、これは敗戦によって廃止された。

ちなみに「三教会同」のとき1912年(明治45年)2月25日、教派神道13名、仏教諸派  
51名、キリスト教7名が集ったが、神社は宗教ではないという建前から、これに加わら  
なかった。

---

③靖国神社だけは、一般神社と違い、陸・海軍省の管轄下に置かれ、幕末の国事殉難者や明治以降の天皇のために死んだ戦没者のみを護国の英霊として合祀した。西南戦争で死んだ西郷隆盛、広島・長崎・東京・沖縄での戦争犠牲者は対象外。

国家神道の中心であり、象徴。その目的は戦没者の追悼ではなく、「天皇のために戦死した軍人を、国家の英雄として祭祀することにより、兵士の志気を高め国家による戦争を推進すること」である。外国では War Shrine と呼ばれる。

#### ④国家神道の経典・偶像・儀式

ア. 経典・・・教育勅語・軍人勅諭

イ. 偶像・神体・・・天皇とその御真影、靖国の英霊

ウ. 儀式・・・国民儀礼(神社参拝)、15年戦争下には国旗掲揚、皇居神宮遥拝、  
ては家庭で大麻奉祀強制

#### ⑤戦後の神道国教化政策

GHQ が神道指令(45.12)を発して国家神道は廃止され、神社本庁は宗教法人となる。

しかし、元号法制定(1979年昭和五十四年六月十二日)、国旗国歌法制定(1999年平成11年8月13日)はすでになしとげ、今後、伊勢神宮国営化、靖国神社国家護持運動をもって国民の精神的統合を目指す。

「天皇陛下を中心に立派な日本をつくっていこうという大きな使命」(靖国神社 HP より)

#### b. 宗教団体法(1939年、昭和14年)

宗教法案は1899年(明治32年)、1927年(昭和2年)、1929年(昭和4年)不成立に終わり、宗教団体法案は1935年(昭和10年)に提出されるも、不成立。しかし、1931年(s6)満州事変が起こって、37年に盧溝橋事件で日中戦争泥沼化、39年ノモンハン事件にはソ連とも戦争、そして41年に太平洋戦争突入という時局のなかで、国民精神そのものが軍国化していった。日中戦争が始まった1937年には「挙国一致・尽忠報国・堅忍持久」という国民精神総動員運動が第一次近衛内閣によって始められている。

**宗教団体法** 1939年(昭和14年)3月23日成立、4月8日公布。その内容は、

第三条 教団の設立は文部大臣の認可を必要とする

第十六条 その宗教行為が安寧秩序を妨げ、または臣民たる義務にそむくときは認可を取り消されることがある。

しかし、神社はこの法の外にあり、神社参拝を拒む者は取り締まる。

\* これに対して議会の批判的質問もなく、議会外の反対運動もなかった。キリスト教界にはこの法律に宗教団体として「基督教」の文字が初めて入ったことを喜ぶむきさえあった。

\* 1940年1月に宗教団体法施行細則が発令され、6月には宗教局長は教会数50信徒数5000名以上でなければ教団として認められないと言明。これが各派合同の契機となった。

同盟教団は、1940年(昭和15年)「日本聖化教団」にはいり、1941年(昭和16)6月には、日本基督教団、第八部に入れられる。

---

(2) 教会は偽預言者に堕した

「また、私は見た。もう一匹の獣が地から上って来た。それには小羊のような二本の角があり、竜のようにものを言った。この獣は、最初の獣が持っているすべての権威をその獣の前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷の直った最初の獣を拝ませた。」

(黙示録 13:11、12)

① 教会の自律性の放棄

1930年(s5)「神社問題に関する進言」資料

② 偶像礼拝

- ・ 皇紀二千六百年奉祝全国基督教徒信徒大会での幹部の靖国神社参拝 1940年
- ・ 教団統理による伊勢神宮参拝 1942年1月11日
- ・ 礼拝への「国民儀礼」の導入・・・宮城遥拝、君が代・海ゆかば斉唱、戦勝祈念など

③ 偽預言者として神の言葉に混ぜものをし、神の民を誘惑迫害する

- ・ 説教も国策協力の内容に。高山教会 s 17. 12. 6の説教「皇道精神と基督教」
- ・ 教会学校教案「教師の友」引用 「神の宮仕え」「承詔必謹」「献身」
- ・ 日本基督教団新報 s 19. 8. 10「基督教の死生観に徹せよ」など

1938年(昭和11) 富田満牧師は日本基督教会議長としてピョンヤンを訪れて、神社は宗教ではないと説得。第二十七回長老教会総会は日本官憲の圧力下で神社参拝を決議。あくまで参拝に反対した二千人を投獄。うち五十名余は獄死。